



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成28年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書

第2年次

— 平成30年 3月 —

学校法人 創価学園



創価高等学校



平成29年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書・第2年次

平成30年3月

学校法人 創価学園



内容

1. 総論	1
A) はじめに	1
B) 完了報告書	2
2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)	10
A) 概要	10
B) SDGsを学ぶ(1年生)	12
C) 貿易ゲーム(1年生)	16
D) 「環境問題」のつながりを知る(1年生)	19
E) 世界がもし100人の村だったら(1年生)	22
F) 模擬教育援助会議(1年生)	25
G) 核兵器廃絶に向けて(2年生)	28
H) レイテ島決戦から戦争とは何かを知る(2年生)	30
I) 異文化理解(2年生)	33
J) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)	36
K) 人権すごろく(2年生)	39
L) 模擬国連① COP21 (3年生)	44
M) 模擬国連 ②核兵器禁止条約 (3年生)	46
N) ファイナル・プロジェクト (3年生)	49
O) SDGs カードゲーム(3年生)	54
3. グローバル・リーダーズ・プログラム(GLP)	55
A) 概要・年間スケジュール	55
B) クリティカル・イシューズ・フォーラム(CIF)	58
C) CTBTO サイエンスアンドテクノロジーカンファレンス(SnT)	60
D) G20 高校生向け国際会議	61
E) ゲスト講義および都内フィールドワーク	62
F) プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション・英語プレゼン)	64
G) 英字新聞の取り組み	66
H) 映像制作の取り組み	67
I) 評価と分析	68
4. 言語技術	70
A) 概要・年間スケジュール	70
B) 学習・トレーニング内容	72
C) 評価	86
D) 成果および今後の課題	89
5. フィールドワーク	93
A) カリフォルニア	93
B) 岩手	96

C) 広島	98
D) 沖縄	100
E) JICA 地球ひろば(市ヶ谷)	103
F) 国立ハンセン病資料館(東村山)	104
6. グローバルセミナー	106
7. 語学活動	109
A) 英字新聞(GCP)	109
B) イングリッシュキャンプ	110
C) スカ이프英会話	112
D) クリティカル・ライティング・センター	113
8. 時間管理手帳	117
9. 評価と分析	119
A) アンケートと分析	119
B) 中間報告会・活動報告会・評価(声)	124
C) 運営指導委員会	128
10. 関係資料	136
① 2017年度カリキュラム表	136
② 目標設定シート	137
③ 英字新聞(GLP)	139
④ 英字新聞(GCP)	143

1. 総論

A) はじめに

創価高等学校 校長 木下清一

本校は、1968年に「日本の未来を担い、世界の文化に貢献する有為の人材を輩出すること」を目指し、「健康な英才主義」「人間性豊かな実力主義」の教育方針のもと中学高校の男子校として開校し、小中高の一貫教育が整った1982年より男女共学となり、そして昨年11月には学園創立50周年を迎え、現在に至っています。これまで半世紀にわたって、日本はもとより世界で活躍する幾多の人材を輩出してきました。

2014年には、創価学園のミッション「創造性豊かな世界市民の育成」を策定し、「世界の平和と文化に貢献する実力ある人間主義のリーダーの育成」(東京・創価学園の目指す教育)を実現すべく、SGHへの挑戦を開始しました。翌年SGHAの認定を受け、『『世界を知る 私を知る ～世界の平和のために私は何ができるか～』との課題を設定し、全校生徒対象のGCP(Global Citizenship Project)と希望者の中から選抜された生徒で研究に取り組むGLP(Global Leaders Program)を二つの柱にした探究型学習に取り組みました。これらの取り組みとその成果をもとに2016年度の構想調書を作成・提出し、最後の認定の年となった一昨年の3月、114校の申請のなかからわずか11校の認定という厳しい状況のなか、認定を勝ち取ることができました。

本校は、そのグローバル人材像を「創価の精神の根本である『生命尊厳の思想』をもって、世界平和に貢献する『地球規模課題の解決』に寄与できる人材」と定め、「言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム」とのSGH研究開発構想のもと、①「コミュニケーション能力を備えた人材の育成」をはかる全校生徒を対象にした「言語技術」教育 ②全校生徒を対象にした探究型学習プログラム「GCP」(Global Citizenship Project) ③希望者の中から選抜された生徒対象に行い、全校の取り組みのパイロットケースとしている「GLP」(Global Leaders Program)を3本の柱として進めてまいりました。2年目となる2017年度は、11月25日には、生徒代表によるGCPとGLPの活動報告、ポスターセッションによる国内外のフィールドワークの報告、そして卒業生による高大接続と3年生で実施したファイナル・プロジェクトの報告を中心とした「中間報告会」を、2月17日には全校生徒のマイマネジメントの取り組みで、「手帳甲子園 2017・手帳活用部門」で最優秀賞を受賞した生徒による成果報告、3本柱の「言語技術」「GCP」「GLP」それぞれの活動報告を中心とした「第2年次活動報告会」を実施しました。本報告書は、この1年間の取り組みをまとめたものです。ご一読頂いた皆様よりご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、ご指導いただいている運営指導委員の無藤隆先生(白梅学園大学大学院特任教授・文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程副部会長)、遠藤誠治先生(成蹊大学教授・日本国際政治学会 理事)、村上清先生(岩手大学学長当別補佐・陸前高田市参与)をはじめ、提携いただいているカリフォルニア大学アーバイン校・アメリカ創価大学をはじめとする国内外の大学、国際連合大学・ミドルベリー国際大学院モンレー校ジェームズ マーティン不拡散研究所などの国際機関、研究機関や各企業、さらに交流いただいている那覇国際高校、関西創価高校などのSGH校や各学校の皆様には深く感謝申し上げますとともに、引き続きのご指導をよろしくお願いいたします。

B) 完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都小平市たかの台2番1号
管理機関名 学校法人 創価学園
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成29年 6月 1日（契約締結日）～平成30年 3月30日

2 指定校名

学校名 創価高等学校

学校長名 木下 清一

3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

4 研究開発概要

○【言語技術】

日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成

○【グローバル・リーダーズ・プロジェクト(GCP)】

全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成

○【グローバル・リーダーズ・プログラム(GLP)】

選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			○				○				○	

(2) 実績の説明

- 「言語技術」は、年次進行でカリキュラムに組み込み、本年は1、2年生を対象に実施した。
1年生は週1時間全員を対象に行い、2年生は総合クラス（8クラス中の6クラス）を対象に

具体的にする」等の質問・応答・反論・交渉の効果的な方法。

②「作文」の技術…パラグラフの書き方。接続語を工夫し文と文のつながりを持たせる書き方。事実と意見を立て分け論理的で説得力のある文章の書き方。

③「情報伝達」の技術…「情報を整理分類する」「ラベリングする」「空間的・時間的秩序の原則」等、分かりやすく情報を伝える方法。

※1年間GCPで学んだ内容をもとに、1000字の小論文作成のための指導を行った。

※高校生活のキャリアデザインを文章化する「パーソナル・エッセイ」作成の指導を行った。

※課題作文に関しては、1年間で日本語が15本ほど、英語で5本ほど書かせ、教員が一人ひとり丁寧に添削・コメントし、フィードバックした。

〈2年生〉

以下の3つの技術を日本語と英語でトレーニングした。

①「情報分析」の技術…対象物としての絵やテキストに書かれた情報を証拠として取り上げ、それらを総合して解釈を示す方法。彼我の間に潜む暗黙知(warrant)の確認。

②「認知」の技術…絵・テキストを用い、1つの対象物に対して複数の視点に立つ方法。

③「議論」の技術…論理の組み立て方・立論の立て方・反論の方法・ディベートの実践。

※「議論」の技術をもとに、GCP企画「人権ディベート」を3学期に行った。

※校内の進路指導部と連携し、大学の志望理由書作成の指導を行った。

※修学旅行先の青森県について研究し、ポスターセッションを行った。

〈その他〉

①生徒に毎時間、授業で学んだことを記入・ファイリングさせ、ポートフォリオを作成させた。

②担任教員が言語技術の授業に毎回一緒に参加し、教員自身の言語運用能力の向上に努めた。

③創価中学校、東京創価小学校において「言語技術」の内容を取り込んだ授業を実施した。

④創価大学で論文作成指導をしている教員に授業を見てもらい、指導・助言をいただいた。

⑤学園祭のメイン展示会場、校外の方を対象とした教育公開講座、オープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。

○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト (GCP)】(全校生徒対象のSGHプロジェクト)

①1年生は「SDGs、環境、貧困」を、2年生は「戦争、冷戦後の紛争、人権」を、3年生は「国際パートナーシップ(模擬国連)」をテーマに設定し、地球規模課題に対する探求学習を進めた。

②学期に2回(5月、6月、10月、11月、1月、2月)、GCP企画の時間を設け、運営は各クラスの希望者で構成されたGCPリーダーによって実施された。

③3年生は、GCP企画の総括として各自がSDGsからテーマを設定して課題研究を行う「ファイナル・プロジェクト(Final Project)」に取り組んだ。また、その成果を日本語・英語の二言語のポスターと論文にまとめ、ポスターセッションを実施した。

④2年生の3学期企画「人権ディベート」は活動報告会にて公開した。

⑤7月のオープンキャンパスでGCP企画「貿易ゲーム」を、学外の来校者対象に実施した。

○【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】(選抜生徒16人対象のSGHプログラム)

毎火金の18時~19時30分に、SDGsのテーマと関連づけながら、各グループが設定した仮説をもとに、地球規模課題に関する探究型学習を行った。

①地球規模課題に関する議論と講義に加え、アクティブラーニングやプレゼンスキルを活用した探

究型学習を実施し、問題の理解と論理的な議論を展開した。

- ②沖縄とカリフォルニアで実施されたフィールドワークでは事前に仮説を設定し、論証のために必要なアンケート調査を実施し、論理的・批判的思考を高めた。
- ③報告会は英語での実施を基本とし、Skype や YouTube などの SNS を利用して海外との交流や情報発信を行った。
- ④GLP を通じて学んだことをメッセージとした映像作品を制作し、英語化した上で YouTube を通じて、世界に発信した。
- ⑤研究成果をまとめて英字新聞を作成し、SGH校はじめ、関係各所に配布した。

○【その他】

- ①国内外フィールドワーク（全校生徒より希望者）：GCP、GLP で定めた各テーマに則り、カリフォルニア、沖縄、広島、岩手、東京（国連大学、国立ハンセン病資料館、JICA 等）で行った。そこで学んだ内容を、10月に行われた学園祭等において、ポスターセッションにて発表した。また、長崎で行われた CIF（Critical Issues Forum）に参加した。
- ②グローバルセミナー（全校生徒対象のセミナー）：国内外から著名な識者を招聘し希望者を対象としたセミナーを開催した。4月1回、6月1回、12月1回、2月2回と5回行った。
- ③イングリッシュ・キャンプ（全校生徒より希望者）：創価大学にて1泊2日で実施した。留学生と3、4人ずつのグループを構成し、日本文化に関する英語によるポスターセッションを行った。

7 目標の進捗状況、成果、評価

【言語技術】

- ①年度末に1、2年生全員にアンケートをとった。対話・作文・情報伝達の各技術を学んだ1年生は、90%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感している。情報分析・認知・議論の各技術を学んだ2年生は、80%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感している。また、同アンケートにおいて「日本語で学んだ言語技術を英語の授業で活用できた」と回答した生徒は1年生で79%、2年生で82%いた。さらに「全体の構造や、つながりの言葉を意識しながら、英語のパラグラフを書けるようになった」と回答した生徒は1年生で73%、2年生で83%いた。いずれも1年生より2年生の割合の方が高くなっており、2年間の「言語技術」のトレーニングの成果が出ていると言える。
- ②生徒には毎回の授業で「学んだこと」と「それらをどのような場面で活用できるか」ということを記録・ファイリングさせた。これにより生徒は学びの履歴をいつでも振り返ることができ、他の授業や行事において、ファイルを見返しながら身につけた技術を活かそうとする生徒の姿も見られた。実生活に活かせるポートフォリオの作成ができた。
- ③言語技術の成果は、英作文にも表れている。第3回英検2級合格者のCSEスコアにおいて、リーディングでは1年生よりも3年生の方が高い得点であったが、ライティングにおいては1年生の方が高い得点となった(3年532、1年557)。
- ④言語技術の授業に担任教員が毎回参加するようになり、「言語技術」教育の取り組みが全校的なものになった。各担任教員が担当する教科やLHRで「言語技術」を活用する流れもできた。一例を挙げると、英語の授業では、視点を変更して教材の文章を書き換える取り組みや、教科書に書かれている客観的な事実をもとに、自分の意見をパラグラフで書く取り組みを行った。地歴公民の授業では、教科書や資料集に掲載されている図表や風刺画を分析する取り組み（分析の技術）や、

立場が対立する事件について視点を変えて考察する取り組み（認知の技術）を行った。理科の授業では、実験の意図を説明（説明の技術）させたり、実験手順を経過型パラグラフで書かせたり（作文の技術）した。

- ⑤創価中学校・東京創価小学校においても「言語技術」の取り組みが始まったことにより、小中高12年間の「言語技術」教育のカリキュラムを検討・作成する委員会が立ち上がった。
- ⑥創価大学の初年次必修科目である「学術論文作法」を担当する教員と授業参観の交流が開始し、言語能力を育成するための高大連携がさらに強化された。
- ⑦つくば言語技術教育研究所（三森ゆりか所長）の研修に教員を派遣し、指導教員の増強を図ることができた。また、その言語技術の内容をもとに、小中高の教員対象に研修を開催した。
- ⑧高校生活のキャリアデザインを文章化する「パーソナルエッセイ」の作成は、本校で10年以上前から取り組んでいるが、「自分の意見が明確で、そのような意見をもつに至る理由もよくわかり、読みやすい」との評価が各教員から寄せられた。
- ⑨各教科の授業やクラスでの話し合いの場面では、生徒たちが結論・理由の順番で発言し、ナンバーリングを用いることにより、議論の進行がスムーズになり内容も濃いものになっている。
- ⑩英会話の授業や英作文の課題において、発言する際や文章を書く際の「型」を学んだ結果、これまでの生徒たちに比べ、より積極的に話し書いている姿が見られる。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①SGHの2年目となった本年は、昨年度の取り組みをベースに各学年の企画を、より発展・充実させることができた。1年生の企画においては、全ての企画でSDGsのどのゴールが本日の企画のターゲットであるかを企画の開始前と終了後に確認して意識付けさせることで、SDGs達成への問題意識を高めることができた。3年生の企画では、模擬国連を2つのテーマ（COP21、核兵器禁止条約）で実施し、生徒の交渉力や論理的思考力を更に育成することができた。
- ②言語技術の授業との連動が進展した。1年生は言語技術で学んだ「作文の技術」をもとに、1年間のGCP企画を通して学んだことを事実と意見のパラグラフに分けて1000文字でまとめた。2年生は「議論の技術」をもとに、3学期の企画である「人権ディベート」を実施し、言語技術がGCP企画を支えるという本校の取り組みが最大にいかされる形となった。
- ③学年行事との相関性を高めることができた。2年生の企画においては、毎年行っている横浜研修のテーマにGCPで学んだ「核兵器廃絶」と「人権」を取り入れ、これらに関する施設を訪れることで実感を持ってテーマに関して深めることができた。また3年次に行われる修学旅行の事前学習としてSDGsからテーマを設定しグループごとにポスターセッションを実施した。
- ④先行実施している高校3年生の課題研究「ファイナル・プロジェクト」についても、より充実させることができた。日本語でのレポート作成からスタートし、成果をポスターとしてまとめ、最終的に日本語・英語の二言語でのポスターセッションを実施した。1、2年生への公開も行い、1、2年生が来年度への意欲を高める機会ともなった。最後には2000字以上の最終レポートにまとめた。英語においては、クリティカルライティングセンターの教員による添削指導を実施した。また、ファイナル・プロジェクトの準備として、「現代社会」と「英語表現Ⅱ」の授業において、プレゼンテーションスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも実施した。
- ⑤アンケートの結果にも、GCP企画を通して生徒の関心や協調的問題解決能力の向上が見られる。「地球的問題・課題（紛争・人権・環境・貧困等）についてのニュースに興味がありますか」との問いに対して、GCP企画に初めて取り組んだ1年生は、5月のアンケートで「あてはまる」「ど

ちらかといえはあてはまる」と答えた生徒が 55%だったのに対して、1月に実施したアンケートでは、73%に大きく向上した。2年間の GCP 企画を経験した3年生にいたっては、80%を超える結果となり、地球規模課題に関する生徒の意識は大きく向上した。

⑥GCPの運営を担った GCP リーダー（生徒の希望者で構成）は半年交代制をとり、前期は 150 名、後期は 146 名の生徒（全校生徒の約 15%）が活動した。GCP リーダーに実施したアンケートでは、GCP リーダーの活動を通してチームワークが身についたという生徒が 63%、リーダーシップが身についたと答える生徒が 51%と多く、生徒主体に運営を行う体制が一定の成果をあげていることがわかる。

【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

- ①グーグルクラスルームをはじめ、ICT の使用方法について徹底して事前指導を行った。これにより昨年度よりも課題探求が深まった。
- ②課題研究方法を指導するために、「中学生の SNS 使用」をテーマにした課題探求学習を行い、意見文を書かせた。これにより使用教材である「学びの技」（玉川学園出版）の活用を、強く意識しながら研究することができた。
- ③フィールドワークに向けて、SDGs と関わりのある小テーマ「平和的な都市計画」「地球温暖化」「貧困」「環境と開発」の 4 つを設定し、テーマごとに 4 人 1 組のグループワークを行わせた。仮説を立てて進めることで、論理的かつ分析的な探究型学習を実施することができた。
- ④オープンキャンパスや、学園祭など、公開された空間でのポスターセッションの機会を多く持つことができた。また中間報告会および活動報告会において、英語のプレゼンテーションを実施した。横浜での SGH 全国高校生フォーラムにおいても発表を行った。3 月には SGH 甲子園にも出場予定であり、英語によるポスタープレゼンテーションおよび、ラウンドテーブルディスカッションへの参加に向けて、継続して準備を行っている。
- ⑤ジャパンニュースの監修のもと、フィールドワークまでの研究成果をまとめて英字新聞を作成した。完成した英字新聞は、第 2 回全国中学高校生英字新聞コンテストに出品された。
- ⑥2018 年 3 月に実施される核廃絶に関する高校生による国際会議・クリティカル・イシューズ・フォーラム（カリフォルニア・ミドルベリー国際問題研究所主催）に向けて、全員で英語によるプロジェクト作品を製作した。完成作品は活動報告会において、英語で発表した。
- ⑦アメリカの核廃絶問題の専門家と、カリフォルニア＝東京間をオンラインで結んで、レクチャーを行うことができた。あわせて 2017 年のノーベル平和賞受賞者・ベアトリクス・フィン ICAN 事務局長による講演会にも参加し、解決困難な地球規模課題の最前線に触れることができた。
- ⑧映像制作会社の専門家を招聘して、映像のクリティカルリーディングを行った。その上で、自分たちが GLP を通じて学んだことをメッセージとした 90 秒の映像作品を制作し、英語化した上で YouTube を通じて、世界に発信した。
- ⑨GLP で学習した生徒が、オーストリア・ウィーンで開催された国際会議「CTBTO SnT」に、日本の高校生代表として招聘された。
- ⑩GLP で学習した生徒が、ドイツ・ハンブルクで開催された G20 「Global Classroom in the G20 Finance Track」に日本代表として招待された。
- ⑪評価方法として、年に 3 回「あなたにとっての地球市民とはなにか」を記述させ、各人が自分自身の意識の変容を確認しながら、1 年間に及ぶプログラムを終わらせることができた。また資質・能力の基準について、事前に提示しており、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の

資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させることで、変容を測ることができた。

【その他】

上記に加えて、SGHの活動を通して、本年度は以下のような成果が見られた。

○生徒の活動： 第22回全国中学・高校ディベート選手権（ディベート甲子園）ベスト8、「日本高校生模擬国連大会」出場、第12回「全国高校生英語ディベート大会」出場、第6回手帳甲子園最優秀賞受賞。

○教員の活動： クリティカル・ライティングセンターの取り組みを、第10回 Symposium on Writing Centers in Asia（2018年3月9日・東洋大学白山キャンパス開催）にて報告。

第9回 World Environment Education Congress（9月9日～15日、カナダ・バンクーバー）にて報告。

<添付資料>目標設定シート

8 次年度以降の課題及び改善点

【言語技術】

- ①「言語技術」の授業で行っている内容を、校外にも広く知ってもらうため、公開授業を定期的実施する。また、ホームページやSNSでの発信を強化する。
- ②3年次のGCPで行うファイナル・プロジェクトにおいて、最終レポート作成指導を国語科・英語科・地歴公民科と連携し、合教科型のモデルとなるプロジェクトを推進する。最終レポートの内容充実のために、2年間トレーニングしてきた言語技術を総復習する。
- ③生徒の論理的思考力・批判的思考力の伸長を評価するために、客観的に測るアセスメントテストの導入を模索する。
- ④生徒は、言語技術の重要性は理解している（90%以上）ものの、活用できているかどうかの質問に対しては、昨年度同様70～80%前後と評価は比較的低い。昨年度に比べ、「言語技術」を授業外で活用しようとする意識は大きく高まったが、さらに学校生活のあらゆる場面で「言語技術」が活用される体制を強化し、学校全体で言語運用能力の向上を図る。例えば、「言語技術」に基づいた、校内のあらゆる活動で意識すべき言葉の使い方ルールを作成する。また、「言語技術」の授業に参加した教員が取り組んだ実践事例を蓄積していく。
- ⑤東京創価小学校・創価中学校と連携し、「言語技術」教育の年次配列をよく考えて、効果的な12年間の「言語技術」教育カリキュラムを作成する。
- ⑥作文の添削・評価にかかる時間は膨大である。持続可能な取り組みにするためにも、評価のためのルーブリックや、自己・相互による評価法の開発を推進する。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①都内のフィールドワークは、各学年のGCP企画と、より連動した内容になるようにする。具体的には、「JICA地球ひろば」は1年生、「国立ハンセン病資料館」は2年生、「国連大学」は3年生対象へと組み換える。対象学年と実施時期もそれぞれ設定することで学習段階に応じたより深い学びを提供できる場とする。また海外フィールドワークは時期を夏季より秋季に変更し、現地高校生との意見交換および識者との交流、プレゼンテーションを行う。

- ②来年度のファイナル・プロジェクトは、2年間「言語技術」の授業を履修した生徒が初めて取り組むことになる。言語技術で身につけた「作文の技術」などを基礎に、より論理的な最終レポートを作成できるように、さらなる合教科型のプログラムを組み立てていきたい。また、テーマの設定やレポートの添削など、より細かな指導が行き届くために人員の増強を図りたい。今年度は地歴公民科の教員、英語科の教員でファイナル・プロジェクトの指導に取り組んだが、来年度は各クラスの担任が関わっていけるように、指導や評価のポイントをさらに確立させたい。
- ③ファイナル・プロジェクトの一環として、自ら設定した研究課題に関わるフィールドワークを夏期休業中の課題として推進する。
- ④ファイナル・プロジェクトの日本語・英語でのポスターセッションを、外部公開とする。
- ⑤GCP 企画で行っている内容を、校外にも広く知ってもらうため、定期的に公開する。本校の GCP の取り組みを、近隣の小中学校を対象に行い、さらなる普及につとめる。
- ⑥生徒の学びをポートフォリオとして残して、個人の探求学習の成果として保管させる。Japan e ポートフォリオと連動させていく。

【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】

- ①フィールドワークに向けて、SDGs と関わりのある小テーマ「平和的な都市計画」「地球温暖化」「貧困」「環境と開発」の4つを設定し、テーマごとに4人1組のグループワークを行わせることで、生徒の取り組みに多様性が生まれた。しかし、テーマがバラバラになってしまい、全体としての講義や学びの課題設定が曖昧になってしまった。また3学期中心に取り組んだ核廃絶問題は英語で行い、普遍性があり、内容が文系・理系を跨ぐものであったにもかかわらず、実際の授業時間が非常に短くなってしまった。これらをふまえ、2018年度は全体としての学習事項を核廃絶問題に設定し、このテーマが SDGs にどのように波及していくのかをグループごとに研究調査に取り組む。年間テーマの設定に合わせて、夏季フィールドワークを「広島」と「長崎」に設定する。また日本の核監視施設の現状を知るために、茨城県東海村の日本原子力機構の見学を行う。
- ②これまでの2年間、教材として玉川学園の「学びの技」を使用してきた。シンプルで、プレゼンテーションを中心とした発表力を高めるのに優れた教材ではあったが、言語技術の導入により論理的に課題設定ができ、文章を書く力の備わった生徒が揃う2018年度は、より分析的で高度な取り組みをサポートするために、啓林館の「課題研究メソッド」をテキストとして導入する。
- ③資質・能力についての客観的な評価アセスメントを取り入れていくことを検討する。
- ④SNSを活用して、日常の活動を発信すると共に、海外の高校生との意見交換や交流を活性化させる。

【担当者】

担当課	経理募金課	T E L	042-342-2611 (代)
氏 名	山下 英一	F A X	042-342-2617
職 名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp

2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)

A) 概要

■ 概要

グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)は、全校生徒対象のSGH企画です。国連が提示する地球規模課題や「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の17のゴール(SDGs)からテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れることで、現代社会に対する幅広い教養と協調的問題解決能力の育成を目指します。

企画は学期に2回ずつ実施しました。1年生は「環境」をテーマに環境リンクマップの作成や、「格差」をテーマに「貿易ゲーム」や「模擬教育援助会議」などを行い、学びを深めてきました。2年生は、「戦争」や「現代の紛争」をテーマに、日米両国の核兵器をめぐる考え方の比較や、ルワンダ内戦の歴史的背景などについて学びました。3年生は、「国際パートナーシップ」をテーマとして、「COP21」と「核兵器禁止条約」を舞台に模擬国連を実施し、全員が一国の大使となって交渉を重ねることで、国際協調の重要さと難しさを学びました。また3年生は、GCP企画の総括として課題研究「ファイナル・プロジェクト(Final Project)」に取り組みました。これは各自がSDGsからテーマを設定して課題研究を行い、その成果をポスターセッションの形で日本語・英語の2言語で発表するもので、最後には2000字以上の論文にまとめました。また、Final Projectの準備として、「現代社会」と「英語表現Ⅱ」の授業において、プレゼンテーションスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも実施しました。

その他、2年生の3学期企画「人権ディベート」は活動報告会にて公開したり、7月のオープンキャンパスで「貿易ゲーム」を、学外の来校者対象に実施したりと普及にも取り組みました。

■ GCPリーダー

GCP企画の運営は、教員ではなく希望生徒で構成されたGCPリーダーが担っています。本年度は4月(前期)と10月(後期)に各クラスの希望者から選出しました。GCPリーダーは、各企画の前にリーダーズミーティングを行い、テーマについての学習や当日の企画のリハーサルをします。当日は試行錯誤しながらクラスでの企画を運営し、その中で、企画力やリーダーシップなどの育成を図っています。

■ 昨年度との相違点

①SGHの2年目となった本年は、昨年度の取り組みをベースに各学年の企画を、より発展・充実させることができました。1年生の企画においては、全ての企画でSDGsのどのゴールが本日の企画のターゲットであるかを企画の開始前と終了後に確認して意識付けさせることで、SDGs達成への問題意識を高めることができました。3年生の企画では、模擬国連を2つのテーマ(COP21、核兵器禁止条約)で実施し、生徒の交渉力や論理的思考力を更に育成することができました。

②言語技術の授業との連動が進展しました。1年生は言語技術で学んだ「作文の技術」をもとに、1年間のGCP企画を通して学んだことを事実と意見のパラグラフに分けて1000文字でまとめました。また、2年生は「議論の技術」をもとに、3学期の企画である「人権ディベート」を実施し、言語技術がGCP企画を支えるという本校の取り組みが最大にいかさ

れる形となりました。

③学年行事との相関性を高めることができました。2年生の企画においては、毎年行っている横浜研修のテーマに GCP で学んだ「核兵器廃絶」と「人権」を取り入れ、これらに関する施設を訪れることで実感を持ってテーマに関して深めることができました。また3年次に行われる修学旅行の事前学習として SDGs からテーマを設定しグループごとにポスターセッションを実施しました。

④GCP の運営を担った GCP リーダーは半年交代制をとり、前期は 150 名、後期は 146 名の生徒（全校生徒の約 15%）が活動しました。GCP リーダーに実施したアンケートでは、GCP リーダーの活動を通してチームワークが身についたという生徒が 63%、リーダーシップが身についたと答える生徒が 51%と多く、生徒主体に運営を行う体制が一定の成果をあげていることがわかります。

■ 年間スケジュール

		1年生	2年生	3年生
1 学 期	5月13日	【SDGsを学ぶ】 リンクマップの作成	【核兵器廃絶】 VTR学習 ジグソー法	【国際パートナーシップ】 模擬国連①(COP21)
	6月17日	【格差・貧困】 貿易ゲーム	【戦争】 グループディスカッション (レイテ島決戦)	【国際パートナーシップ】 模擬国連①(COP21)
2 学 期	10月18日	【地球環境問題】 VTR学習 ジグソー法	【異文化理解】 ロールプレイ	【国際パートナーシップ】 模擬国連② (核兵器禁止条約)
	11月25日	【地球環境問題】 ジグソー法 リンクマップ作成	【現代の紛争】 フィッシュボーン ワールドカフェ	【国際パートナーシップ】 模擬国連② (核兵器禁止条約)
3 学 期	1月20日	【国際理解】 ロールプレイ「世界がもし100人の村だったら」	【人権】 人権スゴロク	【Final Project】 課題探求の ポスターセッション
	2月17日	【教育格差】 模擬教育援助会議	【人権】 人権ディベート	【SDGsを学ぶ】 SDGsカードゲーム

◆ 生徒感想

「僕は、GCP 企画の回数を重ねるうちに世界の諸問題は、一見、別々のようにみえても全てが繋がっているということに気づきました。また、その繋がりは自分たちの日々の生活にも深く根付いていることもあり、「Think globally, act locally.」という視点は本当に大切だと実感しました。また、GCP 企画では、知識を身につけていくことが多く、現地の真のニーズに伝えていける力を養うには、現場で実際にその問題に向き合い携わっている方々の話を聞くことが大切だと感じました。そんな中で、SGH のもう一つの活動であるグローバルセミナーはとても実り多いものになりました。実際にその分野の実情を知っている方から話しを聞くことで知識と現地のニーズとのギャップを埋めることができました。その感動を胸に、今後も GCP の活動とともにグローバルセミナーなどにも積極的に参加していきます」

「私は一年間 GCP リーダーズとして活動しました。初めは“SDGs”という言葉すら聞いたことが無かったのですが一年間の活動を通して、様々な国際問題は自身の近くにあることを学びました。また運営に携わる中で、最初は苦戦することも多く、スムーズに進められないこともありましたが、回を重ねるうちに、だんだん力がついてきていることを自覚することができました。また、クラスの皆の関心も高まっていることを実感しました。来年度も必ずリーダーズに挑戦したいと思います」



B) SDGsを学ぶ(1年生)

■ 概要

5月13日に行われた第1回目は、1年生の最初の企画となるので「SDGsを学ぶ」をテーマに、3年間のGCP企画を貫く「SDGs」について学びました。世界が抱える諸問題についての関心を高め、2030年を目指して国連が採択した「2030アジェンダ」の概要と「SDGs」の17のゴールについて、その意義や内容を理解することを目標として行いました。

導入として、「平和とは？」や「世界が抱える課題」など、生徒が中学卒業までに得てきたイメージや知識を確認するためにブレインストーミングを行いました。その後、SDGsについての資料をもとにグループごとに学習し、関心をより高めるために17のアイコンを線で結ぶアクティビティを行いました。更に、国連広報センターが作成した4分程度のSDGsの広報映像を視聴し理解を深めました。

続いて、ジグソー法を用いてSDGsに関する世界の現状を学びました。まず、エキスパート班に分かれ、担当するゴールを選択し、iPadと資料を用いて「A:ゴールに対する世界の現状」「B:どの地域で特に課題となっているか」をポイントに理解を深めました。その際に用いた資料は、国連広報センターが発表している「SDGs進捗状況報告」をもとに作成したものです。エキスパート班で学習を進めた後、エキスパート班から一人ずつが集まったジグソー班に分かれ、各エキスパート班で得た情報を持ち寄り、それぞれのゴールがどのように関係し合っているのかリンクマップを作成しながら探っていきました。環境問題、貧困問題、教育格差など、それぞれ別の問題のように見えていたものが、リンクマップを作成することで、関係し合っていること、また特にサハラ以南アフリカなどで共通して課題になっていることなどがはっきりと浮き彫りになりました。最後に、SDGsの中から自身が最も関心のあるテーマを選ぶとともに、「2030アジェンダ」の前文を読み合わせし、「貧困が最大の課題である」とされていること、また「誰一人取り残さないこと」が理念であることを確認しました。

◆ 生徒感想

「ジグソー班になったときに、“貧困が改善”されれば→“水道が普及”し→“衛生状態が改善”し→“健康な生活を送る”ことができる、と全てが繋がっていることを実感しました。そして、2030アジェ

ンダの前文の中で、貧困こそが最大の課題であると学びましたが、どの課題の背景にも“貧困”という最大の課題があることを、リンクマップを作成する中で実感することができました。また、特にアフリカに多くの課題があることも浮かび上がったので、さらに学びたいです」

「17のゴールのどの課題にも“サハラ以南アフリカ”という言葉が出てきて、その深刻な状況を知ることができました。また、女性や子どもへの差別など、社会の中で未だに受け入れられていない層があり、解決の困難さを感じました。“貧困”という共通の課題も浮き彫りになったので、SDGsの達成に向けて、まずはもっと学びたいと思いました」



Work③SDGs(エスディーズ)とは？

- ① グループで以下を読み合わせよう。(大事だと思ふ箇所には線を引きなから読もう。)
- 2015年9月、ニューヨーク国連本部において「国連持続可能な開発サミット」が開催されました。ここで、193の加盟国によって「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ(2030アジェンダ)」が全会一致で採択されました。(※アジェンダ=行動計画。つまり、「2030年に向けた世界の行動計画」という意味。)
- 2030アジェンダは、「誰一人取り残さない-No one will be left behind」ことを理念として、国際社会が2030年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な指針として、17の目標(ゴール)を設定しました。これを、**SDGs** (Sustainable Development Goals (=持続可能な開発目標) と言います。
- 国連は、2000年～2015年の目標としてミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals : MDGs) を定めて取り組んできましたが、これを更に推し進めるため、その後継として2016年からの目標であるSDGsを定めました。MDGsは、貧困の半減や安全な水の確保といった達成できた目標も多かった反面、実際には各国や地域によって達成状況に大きな差がありました。東南アジア諸国は、貧困削減や他の目標達成を果たして飛躍的に開発が進んだのに対し、サブサハラ・アフリカやアジアのように、思うように目標達成が叶わなかった国々も存在し、世界は大きく二極化し、格差が拡大しています。2030アジェンダでは、MDGsの残された課題である、気候変動や格差などの課題の解決を目指し、「貧困の撲滅」「再生可能なエネルギーの開発」など17の目標(SDGs)が定められました。



- ② グループの中でペアを作り、ペアでじゃんけんをして、以下の項目を説明しよう。
(負けた人…MDGsとは何か説明しなさい。 勝った人…SDGsとは何か説明しなさい。)
- ③ グループで協力して「持続可能な開発目標SDGs」の17の目標と、それを表したアイコンを線で結んでみよう！
※例として、「安全な水とトイレを世界中に」の水色のアイコンと結んであります。

Work④世界の現状を知ろう

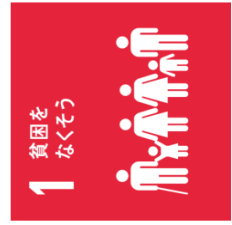
◇ エキスパート班のメンバー

担当するゴールは **1** 番の **貧困をなくそう**

- ◇ エキスパート班Workの手順
- ① 資料を皆で読み、検索キーワードやヒントをもとに、担当するゴールの現状について理解しよう。ゴールの説明ではありません。理解・説明するポイントは、A: ゴールに対する世界の現状、B: その地域で特に課題となっているのが、です。
- ② ジョブソー班に分かれた時、説明の時間は一人1分半です。1分半でまとめるように、情報を絞りましょう。また、一人で説明できるようにしっかりと理解＆メモをしましょう。その中で、自分なりのキーワードをプリント下の欄に書き出しておきましょう。
- ③ 最後に、班員で共通のキーワードを8つ決め、付箋に書きまわす。そのキーワードをもとにジョブソー班で説明します。説明は、相手に伝わるように、簡潔にポイントを押さえて、目を見て説明しましょう！

◇ × モ

エキスパート班で話したり調べたりした内容をアイコンの周囲にメモしよう



◇ キーワード (8個以上記入しよう)

(企画書)

GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2017年5月13日(土) ①8:55~9:45 ②10:00~10:50		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	SDGs	本時の題目	SDGs とは何かを知る	
本時の目標	第一回目の GCP 企画となる本時では、現在世界が抱える諸問題についての関心を高め、2030 年を目指して国連が定めた「2030 アジェンダ」と、その中で示された SDGs について学ぶ。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導入	①今日の目標を確認。 ※配布物あり	ファイル等を配布する。 GCP ファイル・表紙・「Work①」	3	開始前に、8 グループに分かれ、机を移動。
展開	②個人 Work	「Work①平和とは？」に取り組む。	1.5	グループ活動を始める前に進行と書記を必ず決めさせる
	③グループ Work	「Work①」に記入したことを共有し、3 人以上が同じものには○をつける。	3	
	④個人 Work	「Work②世界が抱える課題」に取り組む。	1.5	
	⑤グループ Work	「Work②」に記入したことを共有し、3 人以上が同じものには○をつける。	3	
	※配布物あり	「Work③」を配布		
	⑥SDGs について説明	PPT を使い、SDGs とは何かを説明する。	10	
	⑦グループ Work	「Work③SDGs とは？」①-③グループで取り組む。		
	※配布物あり	「Work③ (③の答え)」を配布	3	
	⑧答え合わせ	PPT でもアイコンを表示する。		
	⑨VTR 視聴	国連広報センターの SDGs の VTR を観る それぞれのゴールについて理解を深める。	4	
⑩マップ作成までの流れ説明 ※配布物あり	エキスパート班とジグソー班の説明。 グループの代表者を呼び、担当するゴールを選ぶ。 封筒(Work④、資料、付箋)、iPad	4		
⑪エキスパート班 Work	資料と iPad を活用し、キーワードの抽出を進める	25		
10 分休憩 (10:10~後半スタート)				
	⑫ジグソー班 Work ※配布物あり	⑫ジグソー班に分かれる A2 の用紙、のり、各アイコン、中心アイコン 各ゴール 1 分半で説明する。説明後、マップを作成。	30	
まとめ	※配布物あり ⑬学んだことを Work に記入	Work⑤感想・まとめ 各自、「関心のあるテーマ」、感想を Work⑤に記入	5	10:40 までには必ずスタートする
	⑭「2030 アジェンダ」前文を読みあわせ	「貧困が最大の課題であること」、また「誰一人取り残さないこと」が世界の目的であることを確認する。	5	※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りの SHR 等を活用してください
	⑮ワークシートの回収と GCP の年間予告と次回予告	GCP リーダーズがワークシートを回収し、50 期生の一年間の企画について簡単に説明をする。また次回(6 月 17 日)の GCP 企画の予告を行なう	3	
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ GCP リーダーは事前のミーティングで企画内容を理解しておく。 ・ グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・ 担任には、初めての GCP 企画のため GCP リーダーズの進行のサポートをしていただく。 			

C) 貿易ゲーム(1年生)

■ 概要

6月17日に2時間にわたって実施された貿易ゲームでは、「格差」や「貧困」について体験的に学ぶために「貿易ゲーム」を行いました。この貿易ゲームは、5～6人の班で1つの国になり、紙やハサミなどの与えられた材料を用いて、力を合わせて、“マーケット”で売ることができる製品を作り、できるだけたくさんの「お金を稼ぐこと」を競うゲームです。「暴力以外は何でもしてよい」というルールの下、生徒の自発的な発想を大事にしました。このゲームの最大のポイントは、各国に与えられる道具と材料には大きな格差があり、それが、先進工業国・開発途上国・発展途上国の格差を表しているということです。生徒は、他の国がどれだけの道具と材料を与えられているか、お互い知らない状態で始め、徐々に理解していきます。作った製品をいつどのタイミングでお金と交換するのも全て各国に任せられており、突然に製品の値段が変わるという「市場価格の変化」を起こすことで、世界で起きている理不尽な貿易の現状も体験的に理解することができました。最後に、このゲームの終了も突然、司会から言われます。そして、最終集計を行い、どこの国が一番お金を儲けたのか発表します。同じルールの下でも、あらかじめ不平等な条件を設定しておくことで、豊かな国はより豊かに、貧しい国はより貧しくなるというように、経済格差が拡大していく仕組みを、現実の自由貿易システムと対比しつつ体験的、共感的に理解することができました。



◆ 生徒感想

「これはゲームであって笑って済ませることが出来たが、この状態が世界で本当に起こっていることを考えると世界がどれだけ悲惨な状態かを知った」

「同じ世界でも利益を出せる国と、出しにくい国がどうして発生してしまうのか、ということを考える良いゲームだったなと思いました。いくらお金を持っているか、どのくらい資源があるか、もしどちらも無ければどうすべきなのか、考える良い機会になりました」

「このゲームは地球全体の縮図であったと思いました。私たちのグループは現実での日本であると思い、資源の入手をどうするかという視点で動きました。これを通して、国ごとにこのような大きな格差が起こっていることを実感しました。人と人との協力が貧困の改善に必要なことではないかなとも思いました」

「世界の現状を身でもって実感することが出来ました。世界で協力しないと、さらに格差が増えていくんだなと思いました。だから、私たちが出来ることをもっと考え、何回も何回も挑戦していく使命があるんだなと思ったのと同時に、何度も何度も挑戦を実行していきたいです」

Work 振り返り

1年 組 ()	国
国民	

- 渡された袋の中には、何が入っていましたか？
- ゲーム終了時、いくらの儲けがありましたか？ () ドル
- 次のものは、それぞれ何を表していると思いますか？
鉛筆、定規、ハサミ、コンパスなど→
紙→
- このゲームの勝因・敗因はなんでしたか？

④ ゲームで起こった出来事を選んで○をつけましょう。

出来事	起こった	現実の国際社会
A : 袋の中が国によって違った		
B : ゲームのルールは全ての国で同じだった		
C : 製品の規格 (形) は全ての国で同じだった		
D : 途中で製品の価格が変わった		
E : 他の国と協力して製品を作った		
F : 他の国に働きに行き、賃金をもらった		
G : 正当な賃金ではなく、強い国によって働かされた		
H : 紙の切れ端がたくさん出た		
I : 他の国や国連から資金や道具を支援してもらった		

- ④で○をつけた項目は、現実の国際社会の何を表わしているのか、次の中から選び、④の表の「現実の国際社会」の欄に書き込みましょう。説明をよく読んで考えよう。

グローバルスタンダード	電化製品は国際的に規格を統一され、人々の服装や食生活なども地域的な特色がなくなってきました。
環境問題	過剰な生産と消費の繰り返しが、資源の無駄遣いや環境破壊につながっています。
援助(国際協力)	国際協力には、国が行う政府開発援助 (ODA) や国連が行うもの、多国籍で行われる支援以外にも、さまざまな組織、団体、機関、そして市民が関わっています。
国際分業	貿易を通じて国際間で行われる分業。台湾、韓国、タイなどの国々から供給された部品を組み合わせてつくるパソコンなどはこれにあたります。
植民地化	分業とは異なり、力のある国が弱い国を支配する関係は、植民地化を意味します。かつての日本のアジア植民地化も、資源や労働力の確保という側面を持っていました。
移住労働者(外国人労働者)	他の国へ出稼ぎに行く「移住労働者」。現実では、現地人の労働条件との違いや、生活習慣の違いからくるストレスなど、さまざまな問題を含んでいます。
市場価格の変化	先進国は新たな技術の特許などで守り、商品の価値を維持します。その中で、途上国の工業生産は、先進国の新製品によって経済発展が困難です。
自由貿易	自由に製品をつくり、売ることができると自由貿易は、開発途上国を不利な立場に追いやり、南北格差を助長する構造的問題を抱えています。
南北格差	1960年代に入って顕著になった先進資本国と発展途上国の経済格差。豊かな国が世界地図上の北側に、貧しい国が南側に偏っていることに由来します。近年では、発展途上国の中でも、エネルギーなどの資源保有国と非資源国との間には大きな経済格差が生じており、これを南南問題という。

⑥ ゲームを終えて、感じたこと、考えたことを書きましょう。

(企画書)

GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2017年6月17日(土) 10:05~11:55 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	格差・貧困	本時の題目	貿易ゲームの実施	
本時の目標	「貿易」を中心とした世界経済の基本的な仕組みを理解するとともに、自由貿易や経済のグローバル化が引き起こす諸問題に気づく。また、南北格差や環境問題の解決に向けて、国際協力や一人一人の行動について考える。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
開始前	①グループ分け	座席を班の形にし、グループごとに着席		前日までにグループ分けをし、グループを発表しておく
	②GCP ファイルの配布	全員に GCP ファイルを配布する		
導入	①本日の GCP 企画の説明	前回の振り返り (SDGs の復習) と本時の内容について説明する	5	パワーポイント使用
	②ルール説明	貿易ゲームの進め方などをリーダーズが説明し、道具を配布する	7	道具の入った袋 (紙、はさみなど)
展開	③ゲーム開始 ※4人1グループ	与えられた道具などで製品を作成する	20	司会は巡回し、各Gの相談に乗ってもよい。
	④貿易の状況変化1	長方形の値段が暴落。	5	司会からマーケットの変化をアナウンスする。
	⑤支援	途上国(E ~H)班に追加の道具を配布する	5	国連から5分と時間を限定して貸し出す。
	⑥新資源の発見	途上国G・H班に追加の紙を渡す	5	
	⑦貿易の状況変化2	正三角形の値段が暴落。新たな製品(正六角形)の規格を加える	15	司会からマーケットの変化をアナウンスする。
	⑧ゲーム終了 集計・結果発表	ゲームの終了を伝える 金額を数え、順位を決める ゲームの感想を優勝班、最下位班のリーダーが発表する	10	スタート時の中身、金額が何倍に増えたか共有
	10分休み	各クラスで10分間の休憩をとる		休憩終了時間をホワイトボードに記入する。
まとめ	⑨振り返り1	班ごとに振り返りを行う Workの①~⑤に班ごとに取り組む	15	ワークシート配布
	⑩振り返り2	パワーポイントを用いて「南北格差・南南問題」について、解説を加える	5	
	⑪ワークシートの回収	次回の予告	2	ワークシート回収
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先に貿易ゲームを体験し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 			
講評				

D) 「環境問題」のつながりを知る(1年生)

■ 概要

11月25日に行われた第3回目の企画では、「環境問題のつながりを知る」をテーマに、環境問題リンクマップ作成を通して、環境問題の相互関係を学びました。

まず事前課題として、アメリカ、中国、ツバルの三点を、同時に捉えたVTRを、事前に視聴してきてもらいました。VTRでは、環境問題が複雑に関係し合っていることを学びました。また、8つの環境問題(「地球温暖化」「大気汚染」「酸性雨被害」「人口爆発」「砂漠化」「森林伐採」「水質汚濁」)の写真に対するリサーチを各自で進めて持ち寄りました。

この事前課題をもとに、企画当日は、エキスパート班でリサーチ内容を共有した後、リサーチ内容からキーワードを10個ずつ抽出しました。その後、種類の異なる8枚の写真をもつジグソー班に分かれて、10個のキーワードをもとに、「環境問題」をテーマとしたリンクマップを作成しました。

最後に、班ごとに話し合いリンクマップにタイトルを付けました。「産業革命がもたらしたもの」や「Cancer of the earth(地球の癌)」「人から始まる環境問題」「革命が引き起こした悲劇」など様々なタイトルでその本質に迫ることができました。また、作成されたリンクマップの特徴を、班ごとに発表する中で、環境問題がいかに繋がりが合っていて、克服への手立てを考える際に何が一番の問題なのかを考える機会となりました。

◆ 生徒感想

「全ての問題に共通項があり、まとめてみると別々の問題を調べていたのに、それぞれが深く関係し合っていることに驚きました。砂漠化は、過耕作などの利益優先の農業で起きてしまうので、まずはフェアトレード商品を買うようにしてはどうかと考えました」

「みんなで共有したそれぞれの問題は全て地球温暖化につながっていて、人間が原因だと言うことがわかりました。人間次第で問題は解決できると思うので、自分から意識していこうと思いました」

「全ての問題の始まりは先進国が無理をしてきたせいだと言うことが分った。度重なる戦争や、奴隷制度などのひずみが今来ていると思うと、悪いことは出来ないと思う。過去は変えることが出来ないで、今から私たちが環境問題に向き合わないといけない」



テーマ名

酸性雨被害



(例) 西ドイツの森「緑のペスト(黒死病)」

内容に関する説明メモ

キーワード

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10		

ワークシート(例)

Work①ジグソー班で問題を共有しよう

ジグソー班で付箋の説明を通して発表された内容のポイントをそれぞれメモしよう

- 大気汚染
- 砂漠化
- 人口爆発
- 水質汚染
- 地球温暖化
- 熱帯雨林の消失
- 酸性雨
- 生物種の絶滅

Work②リンクマップを見て…メモしよう

- ① 気づいたこと (環境問題の本当の理由 自らのマップを見ての感想 等)



- ② 各チーム間のつながり…マップ内に皆で相談して記入した「小見出し」

◎ 貼った付箋の位置をまともなから、問題点や気づいた事を「小見出し」としてマップ内に書き込んでいく。その内容を書き出す。

Work③リンクマップに「タイトル」をつけよう

ジグソー班のメンバーが考えたタイトル例をメモしよう

私が考えた、マップのタイトル

(企画書)

GCP 企画(1年)

教 科	GCP		担当教員		各担任	
実施年月日	2017年11月25日(土) 100分間		生徒在籍数		各クラス在籍数	
単 元 名	地球環境問題	本時の題目	環境問題リンクマップ作成(後半)			
本時の目標	第四回目の GCP 企画となる本時では、地球環境問題をテーマに、環境問題の相互関係を学ぶためにジグソー法で調べた内容をグループで共有し環境問題リンクマップを作成します。さらに、マップから見えてくる環境問題の本質(見出し)と自分たちとしての解決法(処方箋)を考え発表する。					
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)			時間(分)	留意点・準備・その他
事前課題	ジグソー法で担当した環境問題について調べてくる(課題)	8つのテーマ「地球温暖化」「大気汚染」「酸性雨被害」「人口爆発」「砂漠化」「森林伐採・熱帯雨林の消失」「水質汚染・水資源枯渇」「生物種の絶滅」から、自分が担当した課題についてネット等を利用して調べ、3分程度で説明できるようにメモを作成する。				企画当日より前に、各クラスの GCP リーダーが回収しておく。
開始前	① グループ分け ② GCP ファイルと事前課題・付箋の配布	① 座席を班の形にし、グループごとに着席(5人一組のエキスパート班) ② 全員に GCP ファイルと事前課題を配布する ③ 環境問題に関する「写真」と付箋をエキスパート班それぞれに配布する				前回分けたグループを前日までに確認できるように掲示し、発表しておく
導 入	本日の GCP 企画の説明	エキスパート班で知識の共有・キーワード 10 個程度作成			5	パワーポイント使用
展 開	① グループ Work①	自分の調べてきた内容を各自3分以内で解説する。グループで、キーワード 10 個程度を用いて行う、共通の説明内容を検討する。付箋に、10 程度のキーワードを記入する。課題用紙の裏など使用して、グループとして3分程度でキーワードを用いて発表する原稿(メモ)を作成する			15	10 程度の付箋に記入したキーワードの作成
	② ジグソー班設営 ③ リンクマップ用紙とプレゼンボード・筆記用のサインペンを配布	8人一組のジグソー班が座れるように、設営をする リンクマップ用の A1 用紙と、リンクマッププレゼン用ボードを配布する。 ジグソー班でそれぞれが、エキスパート班でまとめた内容を、リンクマップ用の用紙の上に写真を置き、その周囲に付箋を貼りながら説明する。(1人2~3分)			5 2 20 25	
展 開	④ ジグソー班 Work① 調べた内容の共有 ⑤ ジグソー班 Work② リンクマップ作成 ⑥ ジグソー班 Work③ 感想記入	作成されたマップの写真と付箋を意見を出し合いながら動かし、リンクマップを作成する。 写真の地図上の位置が決まったら、写真の裏の両面テープを用いて貼り付ける。 矢印や、コメント・小見だし等を配布したサインペンで記入する。 マップを見て ① 気付いたこと・感想 ② 各テーマ間のつながり・環境問題の処方箋 ③ マップにタイトルをつけるとしたら? をジグソー班内で意見交換しながら、「マップタイトル」と、マップの特徴を発表できるようにまとめる。			15	
ま と め	発表 次回 GCP 内容の発表	プレゼンボードにマップを挟み込み、マップのタイトルと特徴、自分たちで考えた「処方箋」等を発表する。			15	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> 今回のリンクマップに関しては、冬休みまたは3学期に「言語技術」とコラボして「環境問題解決に向けての自分の処方箋」(仮称)として文章を作成して貰う予定です。 担任の先生は、班ごとのリンクマップ写真を iPad で取っておいってください。 11月20日に GCP リーダーズミーティング。24日に直前ミーティング。当日朝に物品の配布をする予定です。 					

E) 世界がもし 100 人の村だったら(1 年生)

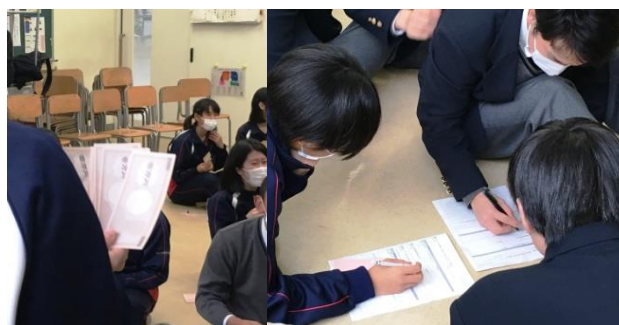
■ 概要

11/26(土)に合計 70 分をつかって実施した「世界がもし100人の村だったら」は、人口 72 億人の世界を「100 人の村」に見立てて、世界の現状を分かりやすく描いた「世界がもし 100 人の村だったら」を題材に、世界の現実をシミュレーション(疑似体験)という参加型の方法で体験する企画です。目的は、世界の現状を理解し、自分との関係に気づくことなので、問題の原因追及や、解決は深く掘り下げず、生徒自身の興味・関心を高めることを目標としました。

「人口」「性別」「年齢」「大陸」「言語」「識字」「格差」の 7 つのテーマでワークショップを行いました。

まず始めに、役割カードを全員に配布し、一人一人の役割を決めます。この時に、他人に自分の役割カードを見せないことを徹底させ、これから行うシミュレーションに対して、新鮮な驚きを得られるように配慮しました。

「人口」では、世界の人口をクイズ形式で学び、なぜ人口増加が起きているのを班で話し合いながら考えました。「性別」では、男性と女性、どちらが多いのか、役割カードに従って窓側と廊下側に分かれ、男女が同じ割合であることを確認しました。同様に、「年齢」では、世界は今、高齢化なのか若年化なのか、「大陸」では、大陸別の人口分布、「言語」では少数言語について、「識字」では文字が読めないということ、「格差」では所得が多いのは誰か、をそれぞれ役割カードに従って体験的に学びました。実際に体を動かしながらの学びであったこと、クラスを世界に見立てたため、身近に感じる事ができたことなど、生徒の理解を深めることができました。



◆ 生徒感想

「とても分かりやすく、世界の現状について知ることができました。そしてとても楽しかったです！一番印象に残ったのは、『文字が読めない』人のことを教わった時です。私は、文字が読めない人役で、薬を選びましたが、一歩間違えると死に至ることに驚きました。」

「私の印象に残ったものは、言語、文字が読めない不便さです。文字が読めないと、何もかも正しいものが分からないと知りました。また、世界では、自分が想像している何倍もの問題があり、更にそれに向けた改善は最近始まったばかりなことを知り、人間同士の格差を縮めることが世界平和のために必要だと感じました。」

「一番心に残ったのは、オセアニアの人数が非常に少ないということです。また、貧困が原因で人口爆発が起こるのではなく、貧困は人口爆発の『結果』ということを知り、人口増加は様々な問題を起こす因になっているのだと感じました。」



「世界の現状の課題について学ぶことができ、貧富の格差や人口増加に伴う問題についても、グループで学び合うことができたので、理解が深まった。100人(クラス44人)で世界人口を表すことで、現状がよく分かった。そうすることで、今までは勘違いしていた人口や貧困の事実も分かりやすく学べた。」

ワークシート(例)

20K.L.20 SOJKA Senior High School GCP	
Work 1】世界の人口	解説&メモ
①日本では、人口増加が起きているか？ (Yes No)	
②世界の人口増加の原因は何だろうか？ 自分たちの考え	解説&メモ
③世界の人口増加の結果、どんなことが起こるだろうか？ 自分たちの考え	解説&メモ
【Work 2】女性と男性、どちらが多い？ 世界の国で、インドでは4000万人、中国では5000万人、女性の人口が男性よりも少ないと言われていますが、なぜだと思いますか？ 自分たちの考え	解説&メモ
【Work 3】世界は今、高齢化？若年化？ なぜ、アフリカでは子どもの割合が高く、日本では大人の割合が高いのか考えてみよう。 自分たちの考え	解説&メモ
【Work 4】大陸の人口 () で人口密度が高いとどのような問題があるのか考えてみよう。 自分たちの考え	解説&メモ
【Work 5】世界の言葉で(みんなに)は	
① 1位 () 語、2位 () 語、3位 () 語、4位 () 語	
【振り返り】 今日のGCP企画で最も印象に残ったものは何でしょうか？学んだこと、考えたことを記入しよう。	
<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>	
高校1年 組 番 氏名	

20K.L.20 SOJKA Senior High School GCP	
Work 6】	解説&メモ
①なぜ1位～4位の言語は、言語人口が多いのだろうか？ 自分たちの考え	
【Work 6】 文字が読めないということ	
①文字が読めない、どんな不便さがあるだろうか？ 自分たちの考え	解説&メモ
②どのような国で識字率が低いのか？ 自分たちの考え	解説&メモ
③②について、それはなぜなのか？ 自分たちの考え	解説&メモ
【Work 7】 所得が多いのは誰？ なぜ、世界にはこのような不公平があるのか？ 自分たちの考え	解説&メモ

(企画書)

GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年1月20日(土) 8:55~10:45 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	世界がもし 100人の村だったら	
本時の目標	世界の多様性と格差の現状について、体験型ワークショップを通して体感的に理解する			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
17日(水) 放課後	生徒リハーサル	GCPリーダーズでリハーサルを行う。	60	
導入	① 企画の説明	本日の内容について説明する。	3	司会生徒あり
展開 ①	②世界の人口	役割カードを配布 3人1グループになる クイズ。「Work1」に取り組む。	5	他の人に見せないように伝える。偶数にする。 スライドに映す
	③女性と男性、どっちが多い?	役割カードの情報に従って、男性と女性に分かれる。それぞれの人数を数え、同じであることを確認する。「Work2」に取り組む。	5	
	④世界は今、高齢化? 若年化?	役割カードの指示に従って動いてもらう。 日本の場合もやってみる。 世界と日本の違いについて考えてみる。 「Work3」に取り組む。	10	
	⑤大陸ごとの人口	大陸ごとにグループに分かれ、ひもを使って床に大陸の形を作り、グループごとに、ひもで作った大陸の中に入る。「Work4」に取り組む。	10	
展開 ②	⑥世界の言葉で「こんにちは」	役割カードに書いてある挨拶の言葉を、声を出して言いながら、同じ挨拶をしている人を探す。「Work5」に取り組む。	10	挨拶の言葉が同じでも言語が異なることを説明する。
	⑦文字が読めないということ	ネパール語で書いた紙を全員に見せる。文字が読めなかった人に、司会から指示を出し、透明のペットボトルから「薬」を一つ選んで持ってくるというシミュレーションを行う。 「Work6」に取り組む。	15	病人役の人には、飲んだ後に態度で示してもらう。 (臨場感が出る)
	⑧所得が多いのは誰?	役割カードの記号△、□、○、☆、▽に従って、グループに分かれる。各グループにお札を配布し感想を聞く。「Work7」に取り組む。	15	お札は事前に紙を切って%ごとに枚数を数えて準備しておく。
まとめ	⑨振り返り	「世界がもし 100人の村だったら」を読む 今回行ったシミュレーションの中から最も印象に残ったものは何か。感想などを記入。	10	
	⑩(時間があれば)共有		5	
	⑪ワークシートの回収と次回予告		2	

F) 模擬教育援助会議(1年生)

■ 概要

今回行った模擬教育援助会議は、①導入②会議③質疑応答④被援助国の主張⑤班での振り返り⑥全体のまとめ、以上の6段階で構成されています。最初の導入部分では、マララ・ユスフザイさんの映像を視聴し、さらに世界を取り巻く教育の現状について図から読み取る作業等を通して学習をし、先進国と発展途上国には圧倒的な教育各差があることを生徒全員で確認しました。

会議開始前に進行役のGCPリーダーズの指示もと、事前に指定された、会議参加者の役(6名)、被援助国の市民役(8名)、オブザーバー(そのほかの会議を見守る生徒)にそれぞれ分かれて着席しました。会議は教育援助をするA国・B国の政府役と市民役、援助される側のC国政府役とその小学校長役、NGO職員役の計6名で行われます。事前に用意された台本に沿ってロールプレイ形式で会議を行い、質疑応答を行った後、援助をするA国・B国側の「したい援助」と援助をされる側C国の「してほしい援助」は必ずしも一致していないことを全員で学びました。

次に、被援助国であるC国市民役の8名の生徒が、役割カードに沿ってそれぞれの主張を展開し、教育各差に悩む声を発信しました。生徒は、C国の現地のニーズが援助会議に直接反映されることは難しいことを学びました。

続いて各班に分かれ、ワークシートに沿って振り返りをおこないました。

最後にまとめとして、国連広報センターが作成した「持続可能な開発は教育から」を視聴しました。



◆ 生徒感想

「必要とされているのは教育援助の規模を大きくするというだけでなく、支援される側が必要としている事は何かを、支援する側が正しく認識した上で教育援助を行っていくことも重要だということを知ることができました。」

「GCPの最初の企画から貧困が一番の問題だとされてきました。しかし、正直違和感があり、貧困が起きるのは個人の能力を引き出すための基礎知識がないからと思っていたことが、今回でつながりました。その上でSDGsの中で一番重要な課題は、質の高い教育をということだと思います。その上で、発展国でも教育の転換を図っていく必要があるのだと思います。」

「今回のGCP企画で知ったことは二つあります。一つ目は、教育援助といっても分野に分かれていて、支援する国とされる国でのニーズが違うことです。支援する国に利益があることは必要だけれど、基礎から教育していかないと全員に広まっていけないと感じました。二つ目は、学校の先生自体が教育されていないということです。このままだと、いつまでもたっても負の連鎖から抜け出せないなど感じ、私は教員の育成が一番必要だと感じました。今、私たちにできることは、しっかりと勉強し世界の現状を知ろうとすることだと感じました。」

ロールプレイ資料 (抜粋)

役割カード B-① ㊟

役割カード① 援助する側・A国の政府の担当者

【自己紹介】
 ●あなたが最初に発言してください。
 ●文中の指示にしたがって、**援助カード①**を提示してください。
 ●太字の部分はあなたの主張したい部分なので、強く発言してください。

ごほん。みなさん、はじめまして。A国の政府を代表して来ました〇〇(あなたの名前)です。
 我が国は、戦後の工業発展を遂げて急成長し、先進国の仲間入りを果たした国です。発展した私たちA国はODAというお金を使って開発途上国に多大な支援をしてきました。今年からはC国へも教育分野の援助を行うことになりました。内容としては、**高等教育***を特に重視した援助を行いたいと計画しております。そのため予算を用意しているのです。(→援助カード①「高等教育」を机の上に提示してください)
 具体的な援助内容に関しては、後で質問があればお答えします。私たちの援助でより多くの若者が我が国の大学で学べるようになるでしょう！

●後に質問する時間があるので、以下の質問例を参考に質問してください。

【質問例】 ほかの質問をしてもかまいません
 ㊟ B国政府へ：これまでC国へは、どのような教育援助をしてきたのですか？

【A国の情報】
 質問に回答する時などに参照してください。答えられない時は「調べておきます」と回答してください。
 文中の指示にしたがって、**援助カード②**を提示してください。
 ✓ A国の市民のODAに対する意識や関心は低い。
 ✓ これまで、低所得国ではなく、主に中所得国に高等教育分野で援助をしてきた。
 ✓ 昨年はアフリカの基礎教育に25億円、東アジア・太平洋の高等教育に400億円の教育援助を行った。
 ✓ C国への具体的な援助内容：C国から留学生を毎年100人大学に受け入れる。奨学金と渡航費、生活費などの学生が留学に必要な費用を賄う。
 (→援助カード②「留学生100人受け入れ」を机の上に提示してください)
 *高等教育とは、大学・大学院、海外からの留学生への奨学金などのことをいいます。

【援助カード (したい援助)】

援助カード① 高等教育	援助カード② 留学生100人受け入れ
----------------	-----------------------

<p>役割カード⑦ C国の市民 父親</p> <p>子どもには教育を受けさせる必要はないと思っていますよ。だって女の子2人だしね。どうせ何年かしたら嫁に出すので。息子が生まれたら学校に通わせるつもりなんですけどね。</p>	<p>役割カード⑧ C国の市民 母親</p> <p>私自身は学校に行っていない。3人の子どもたちは、読み書きができるように学校に通わせたいと思っていますが、家畜の世話や家事、きょうだいの子守りを手伝ってもらわなくては行けないので、子どもたち全員を学校に通わせる余裕はありません。</p>
<p>役割カード⑨ C国の市民 教師</p> <p>私は〇〇校長先生(前出)の学校で働いています。実は、私は、教員訓練を受けたことはありません。それどころか高校卒業資格もありません。いつも、どうやって生徒に教えるのか分からず悩んでいます。C国の政府にはもっと教育分野へ予算を割いてもらい、教員養成や給料に充ててもらいたいです。(→援助カード⑨を机の上に提示してください)</p>	<p>役割カード⑩ C国の市民 15歳男子</p> <p>僕がもっと小さかった頃、村に小学校ができました。もちろん毎日通いました。友だちもできたし、何より楽しかった。でも、勉強は得意じゃなくて、さっぱり先生の言っていたことが分からなくて、結局、簡単な文章を理解することすらできなかった。「先生の教え方がもっとよくなれば…」って外国の人たちが言っていた。もう15歳だけど、中学校へは通ってません。(→援助カード⑩を机の上に提示してください)</p>
<p>役割カード⑪ C国の市民 13歳女子</p> <p>家は貧乏で、おばあちゃんも病気で私が働いて家計を助けないといけない。通っていた学校を中途退学して、今は工場毎日洋服をミシンで縫ってます。働いてるときは私は17歳って嘘をついています。だって、「児童労働」になっちゃうから。私の作った洋服はどこ誰が着るんだろう？(→援助カード⑪を机の上に提示してください)</p>	<p>役割カード⑫ C国の市民 11歳男子</p> <p>学校は楽しい。字が読めるようになったし、計算だってできる。将来の夢はお医者さんになること。けど今は、紛争で軍が校舎をつかち取って、学校へ行けなくなってしまったんだ。友だちから軍に入らないうちに誘われてるんだけど、どうしよう…。(→援助カード⑫を机の上に提示してください)</p>
<p>役割カード⑬ C国の市民 9歳女子</p> <p>私の村は学校から遠くて、毎日歩いて2時間かかるんです。学校には女子用トイレがなく、生徒の数が多くて教室はいつもぎゅうぎゅう。座るところも足りないし、黒板も小さくて、よく見えない。せつかく学校に着いても、先生が来ない日もあるから悲しい。先生が増えたらもっと質問できるし、勉強できるのにな。(→援助カード⑬を机の上に提示してください)</p>	<p>役割カード⑭ C国の市民 8歳男子</p> <p>僕は歩くのが生まれつき苦手。椅子に車輪が付いていたら学校へもいけるのになあ。学校には一度も行ったことがないけど、僕は頭が良いからクラスで一番になれるはずだよ！でも、近所の小学校には入学を断られて…。(→援助カード⑭を机の上に提示してください)</p>

ワークシート (例)

2018.2.17
SOKA Senior High School GCP

Work③ 振り返り・まとめ

【振り返り①-1】
 留さんは、教育援助会議をみてどのような気持ちになりましたか？ また、気がついたことを書き出してみよう。
 気持ち 気がついたこと

【振り返り①-2】
 会議の中で話し合われた援助内容とその援助を受ける側のニーズは合っていましたか？ どちらかに○をつけ、合っていなかった場合は具体例を記入してください。
 合っている 合っていない 合っていなかった具体例を書いてみよう

【振り返り①-3】
 援助国Aはこの国の政府を象徴していると思いますか？
 ※ヒント「我が国は、戦後の工業発展を遂げて急成長し、先進国の仲間入りを果たした国です…」

【振り返り①-4】
 どうしたら本当に必要とされる教育援助が実現できると思いますか？ 会議を通して考えたことを記入してください。

1年組 番氏名

2018.2.17
SOKA Senior High School GCP

【振り返り②-1】
 日本の教育援助の特徴
 <図1>

 左の図1.2から読み取れることは何でしょうか？

<図2>

【振り返り②-2】
 C国(低所得国)の現状

【振り返り②-3】
 「全ての子どもが教育を受けるために」の中で大切なことをMEMOしよう。

【まとめ】 今日のGCP企画で学んだこと、私たちに何ができるか考えたことを記入しよう。

(企画書)

GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年2月17日(土) 10:00~11:55 (110分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	模擬教育援助会議	
本時の目標	教育に関して、援助する側と援助される側のニーズの違いやギャップに気づき、本当に必要とされる援助は何か考える。日本政府の教育援助の内容や傾向を知る。NGOの日本政府への提言を知る。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
15日(木) 放課後	生徒リハーサル	GCPリーダーズでリハーサルを行う。	90	13日(火)にリーダーズのリーダーを集め打合せ
はじめに	① SDGs について ② 企画の説明	1学期の振り返りを行う 本日の内容について説明する。	3	司会生徒あり
導 入	映像視聴	マララ・ユスフザイさんの映像を視聴する	3	班で話し合いながら行う メモを取りながら聞くように促す
	Work①を班で話し合いながら行う	世界で、小学校に通えない子どもの数やその要因について考える 図からの読み取り…サハラ以南のアフリカの現状を知る	7	
	Work1の答え合わせ	メモをしながら答え合わせ	3	
展 開 ①	模擬教育援助会議についての説明	C国の現状を説明	30	オーディエンスの生徒たちはWork②にメモを取りながら会議を見守る
	会議開始	事前に選ばれた6人と8人の市民に演じてもらう。セリフは全て決められている通り読む(アドリブあり:配役が大切) シナリオ通りに会議を進めていく		
	質疑応答	質疑応答を司会の進行で進めていく(質疑応答の内容もシナリオ通り)		
	C国校長の話	質疑応答が煮詰まった所で、司会の合図でC国の校長が発言をして会議は終了		
休 憩		トイレ休憩	10	
ま と め	机とイスを元に戻す	リーダーズの指示で、机とイスを班ごとに並べ直す	3	メモを取るように促す
	Work③を班で話し合いながら行う	振り返り①-1～①-4を行う	5	
	リーダーズが振り返り②～を行う	パワーポイントで振り返りを行いながら、随時メモを取っていく	7	
	まとめ	各自でまとめを記入	3	

G) 核兵器廃絶に向けて(2年生)

■ 概要

5月13日に行われた第1回目の企画は、「核兵器」をテーマに行いました。折しも、今年の5月27日には、オバマ大統領が広島を訪問し、日本にとっても世界にとっても歴史的な日となりました。また、今年も北朝鮮のミサイル開発に世界中から注目が集まっている中で企画を行いました。生徒にとっても核兵器への関心が高まっており、進行役の生徒に、核兵器を巡る世界の情勢について調べ学習をして冒頭にプレゼンをしてもらいました。この話題を軸に、ジグソー法を用い、日本とアメリカそれぞれの視点を示すA～Dのカードを分析しながら、核兵器に対する両国の意見や立場を、総合的に整理しました。

カードは、日本とアメリカの両者の立場が対比できるように構成し、例えば、オバマ大統領の広島演説に対して安倍総理の演説や、原爆投下を指示したトルーマン大統領の孫のインタビューに対して、広島で長らくボランティアガイドをしている人のインタビュー、あるいは、日米それぞれの核兵器に対するアンケート結果などを用意し、今までは日本人からの視点で捉えてきた核兵器に対して、敢えて両国の立場に分かれて考えることで、偏ることなく客観的に考えられるようにしました。日本とアメリカの核兵器へのスタンスを、付箋を使って整理しながら、共通点と相違点を導き出し、核兵器廃絶への可能性を探りました。

◆ 生徒感想

「アメリカと日本で根本的に核や戦争に対する考え方の違いがあることが分かりました。実は日本人が戦争や核兵器の被害者となっただけでなく、同時に加害者でもあったとの意識を、現代の人たちに芽生えさせ、本当の意味での核兵器の廃絶に前進していきたいと思いました。また、今回の企画を通して、実際にアメリカに行き、私たちと同世代の人達の意見を聞いてみたいと改めて感じました」

「今回の企画を通して、核兵器や戦争への意識の差は、国家間だけでなく、同じ国でも世代間で生じているということ強く感じました。同じ国でも世代間で意見が異なるのは、実際に体験することもなければ、意識も傾いていない世代が増加してきているからだと思います。戦争体験者の話を聞くことができる最後の世代である私たちが、しっかり戦争や核兵器について学び、語り継いでいけるようになりたいです」

「アメリカと日本で核兵器に対する考え方の共通点と相違点を出すことで、理解しやすい企画でした。日本人は、落とされた側なので核兵器に反対する一方で、アメリカの年配の人は核兵器を落としたことで戦争が早く終わったと核を使用したことに賛成していたことが衝撃的でした。このような相違点もありつつも、核なき世界を目指すという共通点もあることが興味深いと思いました」



GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任・副担任
実施年月日	2017年5月13日(土) 10:00~11:55(約100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	核 兵 器	本時の題目	核兵器と日米の思い	
本時の目標	原爆投下(広島)による被害の事実を知り、アメリカと日本の核兵器へのスタンスを整理しながら、核兵器廃絶への可能性を探る			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	備考
導 入	① GCP 企画の説明	昨年度やった内容を簡単に振り返る 本時の内容について説明する GCP ファイルの説明をする。	5	個人WS 配布 GCP ファイル&表紙 配布
	② クイズ	原爆に関するクイズ4問	5	
	③ ニュース紹介	GCP リーダーズの調べてきたニュースを紹介する	5	
展 開	④ 個人作業	【個人WS】に取り組む	3	ヒロシマ・ナガサキ資料 配付
	⑤ VTR 視聴	「学ぼう広島 DVD」ダイジェスト映像を視聴する	10	VTR 準備
	⑥ グループ作業説明	この後の流れを説明する。 机を動かしてもらおう。	5	
	休憩	少し早めの休憩	10	
	⑦ グループ作業1	A~Dで同じカードをもつ人で集まり、カード内容を分析。その際、大きな付箋にカードの要約を記入する(自分のグループ用と2枚)	15	ワーク用カード、 付箋配布 ※日米で色を分ける
	⑧ グループ作業2	日米の同じアルファベットのカードをもつ人が集まり、作業1で記入した付箋を交換し、両者の相違点と共通点を考える	10	
	⑨ グループ作業3	もとのグループに戻り日米8枚の付箋とカードを【グループWS】に整理しながら、日米のそれぞれの立場の相違点と共通点を整理する	20	グループWS 配布
ま と め	⑩ クラス発表	各グループでまとめたものをクラスに発表 発表内容は【個人WS】に各自でまとめる	10	
	⑪ 個人作業	今回のGCP企画の自己評価と感想を【個人WS】に記入する	3	S G I 提言配布
	⑫ ワークシートの回収	GCP リーダーズがワークシートを回収。	1	個人・グループWS 回収→担任へ GCP ファイル回収 →GCP ロッカーへ
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCP リーダーズは説明会の時に進行の仕方を確認し、企画内容を事前に理解しておく。 ・GCP リーダーズはニュース記事紹介の内容を事前にまとめておく。 			

H) レイテ島決戦から戦争とは何かを知る(2年生)

■ 概要

高校 2 年生の 1 学期は、「戦争」をテーマとし、特に第二次世界大戦を中心にその実像を見つめていきました。6 月 17 日に行われた第 2 回目は、フィリピン・レイテ島の決戦の戦争証言の映像を通して、戦争とは何かについて学び合いました。映像では、レイテ島決戦を戦った兵士のたちの証言映像を特別に編集し、その際に、日本兵、アメリカ兵、そして、現地のフィリピン人など、戦争に関与した全ての当事者の証言を順番に視聴することで、偏った見方をせず、戦争について客観的に考えることを目的としました。

レイテ島は第二次世界大戦中、日本軍とアメリカ軍が最も激しい地上戦を繰り広げた舞台の一つです。その地上戦の経験者の証言は、授業で学んだ机上のものとは異なり、生々しいものでした。そして、戦争の勝敗に関係なく、戦争に関わった全ての人が悲惨な思いをし、深く傷ついていることを知ることができました。生徒は大きな衝撃を受けると共に、二度と戦争を起こさない、起こさせないという不戦の誓いを新たにしました。

最後に、映像を通して学び合ったことを、「戦争とは」とのテーマでマインドマップを作成しました。「あなたが一番『かわいそう』『ひどい』と感じたのはどの国の人か」との質問を投げかけることで、より深く考えることができたのではないかと思います。そして、「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もいない」ということを一人一人が理解することができました。

◆ 生徒感想

「本日の企画を通して感じ、知ったことは 2 つあります。まず一つ目に、戦争の悲惨さを肌で感じました。VTR でレイテ島の戦いで実際にその場にいた日本兵やアメリカ兵、現地のフィリピン人の生の声を聞いてその時の様子や苦しみが伝わってきました。二つ目に、戦争は良いことを何も生み出さないことを改めて感じました。VTR でレイテ島に出てくる人々はみな苦しそうな顔をしていました。最後のフィリピンの方が言っていたように、皆が協調して平和な社会で暮らしていくことが望ましいと思いました」

「レイテ島の戦いの存在も知らず、恥ずかしくなった。戦争の無残さを改めて知った。今まで、少しは戦争の勝者には利益があるかもと思っていたが、証言を聞いて『誰も得しない、絶対ダメ』と気づけた。一番の被害者であるフィリピン人が『もう許している』と言っていたのは意外だった。嬉しかった。敵だって気持ちがある、家族がいる、同じ人間なんだということにはっとした。今も、対立している国のことや、近くの人のごとも、よく知ろうとして、尊重しようと思った」

「兵士の人々も、悲しい、苦しい気持ちで戦争をしていたんだと知りました。今は、フィリピンの人も含めて、その時の恨みを持ち続けているわけではなく、平和な生活を願っていると感じました。平和な世界をつかっていくために、今日のように、戦争を経験した人の話を聞いていくことが大事だと思いました」



ワークシート(例)

レイテ島の戦い とは…

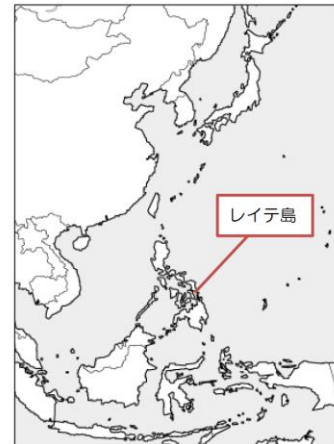
- ・フィリピンのレイテ島とは、日本軍が「太平洋の天王山」と呼び、米軍のマッカーサー元帥が「アイ・シャル・リターン（私は戻ってくる）」の約束を果たす地と決めた太平洋戦争の決戦場。
- ・太平洋戦争中の1942年、日本軍はフィリピンを占領。当時、米軍大将だったマッカーサーは「戻ってくる」と言い残してフィリピンを脱出。1944年10月20日、マッカーサー率いる米軍約20万人がフィリピン奪還のためにレイテ島に上陸。
- ・約2カ月に渡る日本軍とアメリカ軍の地上戦で、日本側はほぼ全滅した。
- ・同島の太平洋戦争中の死者（推計）は日本軍約8万人、米軍約3500人。
- ・日米両軍の間で翻弄され、レイテ島の島民約5万4千人も犠牲になった。
- ・また、米軍に協力したフィリピン人のゲリラ部隊と日本軍との戦闘も激化した。



〈レイテ島に上陸するアメリカ軍〉



〈米軍の猛烈な艦砲射撃で炎上する日本軍陣地〉



〈フィリピンと日本の戦後〉

太平洋戦争末期、日本軍が抗日ゲリラとの関係を疑って無実の人を虐殺する事件が相次ぎ、遺族らの反日感情はいまも強い。元従軍慰安婦が日本政府に補償を求めている問題や、米軍や住民の追及を恐れて日本人であることを証明する書類を捨てたために日本国籍が認められない残留日本人の問題も残る。

〈日米両軍による激しい戦闘で壁に無数の砲弾の穴が今も残る建物〉



(出展：朝日新聞 2010年9月18日朝刊)

GCP 企画【グループワークシート②】

「戦争」とは

である

～なぜなら～

班	メンバー：	進行	書記			
---	-------	----	----	--	--	--

(企画書)

GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任	
実施年月日	2017年6月17日(土) ②10:05~10:55 ③11:05~11:55		生徒在籍数	各クラス在籍数	
単元名	戦争	本時の題目	戦争証言を通して「戦争」とは何かを知る		
本時の目標	戦争証言を通して、「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もない」ということを一人一人が理解し、二度と戦争を起こさない・起こさせないという不戦の誓いを新たにす				
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他	
展 開	①今回の企画についての説明 ※配布物あり	今回の企画について簡単に説明をする GCPファイル・「個人WS①」「前回のWS」	2		
	②クイズ	全体で行う	3		
	③個人作業	「個人WS①」①に取り組む。	3		
	④グループディスカッションA ※配布物あり	グループで机を合わせ、 「個人WS①」①に記入したことを共有し、 「グループWS①」に書記が記入する 「グループWS①」	10	グループ活動を始める前に進行と書記を必ず決めさせる	
	⑤クイズ ※配布物あり	全体で行う 「レイテ島決戦解説プリント」「個人WS②」	1		
	⑥レイテ島の戦いの説明	これから上映する映像について説明する。	5	VTR鑑賞後にどのようなディスカッションをするのかを確認する	
	⑦VTR上映A 0:00~ (1.銃撃戦と消耗戦) →グループディスカッションB	NHK戦争証言アーカイブよりフィリピン・レイテ島での決戦を語った戦争証言をまとめたVTRを鑑賞する。 印象に残った人をグループで共有する	13		
	⑧VTR上映B 12:18~ (2.斬り込み隊) →グループディスカッションC	映像の続きを鑑賞する 印象に残った人をグループで共有する	3		
	10分休憩				
		⑨VTR上映C 22:52~ (3.フィリピン現地民との戦い 4.戦争とは?) ※配布物あり	映像の続きを鑑賞する VTR終了後、メモをまとめる時間をとる 「グループWS②」	12 3	
	⑩グループディスカッションD	感想をグループで共有し、「個人WS①」②、③の内容をディスカッション。「戦争」とは何かを「グループWS②」にまとめる	15~20	グループの様子をみながら弾力的に時間配分する	
ま と め	⑪クラス発表	各グループでまとめたものをクラスに発表	10	10:30までには必ずスタートする	
	⑫個人作業	今回のGCP企画を通して感じたことや学んだことを「個人WS①」④に記入する	3	※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りのSHR等を活用してください	
	⑬ワークシートの回収	GCPリーダーズがワークシートを回収し、担任の先生へ渡す	5		
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 				

1) 異文化理解(2年生)

■ 概要

10月18日に行われた第4回目は、「国際理解～世界の中の自分～」をテーマに、外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方途を学ぶことを目標に、「ドルジュバードプロジェクト」を行いました。これは、ドルジュバード王国という仮想の国と日本人がテレビ取材のための交渉を行うというロールプレイングゲームです。

各グループで日本人2名、ドルジュバード王国住人2名にわかれ、それぞれが自国のルールに従って交渉を行います。例えば、ドルジュバード王国の住人は、「Yes」の意思表示を「大地が笑うでしょう」という言葉で表現します。生徒は、お互いの国のルールを知らない状態で交渉を行うことで、実際に、言葉遣い・宗教・生活文化の全く違う人同士が交渉を進める上で、乗り越えなければいけない異文化の壁を体験することができました。また、実際に異文化間コミュニケーションで起きた具体的な事件をリーダーズが自ら調べ紹介する中で、違う文化を理解して受け入れ、共生していくことがいかに難しいことかを学び合いました。

◆ 生徒感想

「プロジェクトを通して、異文化コミュニケーションにおける表現の仕方の違いや物価の違い、交渉の難しさ、それぞれの価値観の違いなど、相手との様々な『壁』を実感しました。異文化ゆえにお互いの主張がぶつかり合ったりすることも当然生じてくると思います。しかし、人間対人間のやりとりであることを忘れずに、目の前の相手の意見を尊重していくことが大切だと思いました。普段の生活でも自分のものさしで図ることなく誠実さを忘れずに人と関わっていきたくて決意できました」

「異文化間コミュニケーションでは、相手の文化を知る心はもちろんですが、自分たちの文化を伝える努力もしていかなければならないと感じました。また、コミュニケーションの中には自分の価値観とは違う『当たり前』があることを普段から理解できるようになりたいと思いました」



ワークシート(例)

<h3 style="text-align: center;">日本取材クルー</h3> <p><基本情報></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アフリカ中部にある歴史の古い王国 ・「日本語」で会話することができる（特別です!!） ・相手は訪問する町の観光案内人を勤めている ・スポーツが盛んな国である <p><交渉のルール></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 今回がお互い初めての出会いである。 (2) 交渉のはじめには相手に敬意を払い「握手」を求めよ (3) 今回の交渉で決めるべきことは「撮影場所」「報酬額」の2つ (4) 「撮影場所」はスケジュールの都合上3カ所しかまわれない (5) 相手が要求した条件に対しては柔軟に対応し、相手が納得するまで説得しなければならない (6) 交渉がまとまったら契約書にサインをもらわなければならない <p><撮影場所について></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 視聴率を考えると現地の特別で派手な文化を取材したい。A・E・Gの3カ所の取材を希望している (2) 日本では認知度の低いドルジュバード王国について知ってほしいという思いをもっている <p><報酬額について></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) こうした取材の一般的な報酬額は日本円で50万円だが、ドルジュバード王国の物価は日本の5分の1程度である。つまり、日本円の1万円はドルジュバード王国では5万円の価値がある (2) 報酬額の予算については50万円を超えてはいけない。低予算で実施できた場合、あなたは昇進する可能性がある 	<h3 style="text-align: center;">ドルジュバード王国</h3> <p><基本情報></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アフリカ中部にある歴史の古い王国 ・「日本語」で会話することができる（特別です!!） ・あなたはこの町の観光案内人を勤めている ・国民的スポーツは「クリケット」「サッカー」である <p><交渉のルール></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 相手の意見を肯定・賛成(YESを意味)する場合は「大地が笑うでしょう」、否定・反対(NOを意味)する場合は「カラスが鳴くでしょう」と必ず答える。うなずいたり首を横に振ったりはしない。 (2) 握手をした後は必ず自分の手を拭く (3) いきなり本題に入ることはしない。場が和むまでは別の話をする。相手がいきなり本題に入ってきた場合「あなたと話すことはありません」と軽くあしらう (4) 識字率が低い国で、あなたは文字を書くことができない <p><撮影場所について></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) アフリカの生活について詳しく知ってほしいため、地味ではあるが、B・F・Hの3カ所の取材を希望している (2) 「ヤギ」は神聖な生き物なのでカメラで撮影することは厳禁とされる <p><報酬額について></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) ドルジュバード王国の物価は日本の5分の1程度である。つまり、日本円の1万円はドルジュバードでは5万円の価値がある (2) 日本人はお金をもっている。富めるものから多く支払わせることは決して悪いことではないと考えている
---	---



2017.10.11
GCPリーダーズミーティング資料

★リーダーズ皆さんへのお祝い★

今回は企画の最後（進行表の8のタイミング）で①文化の違いが原因で実際に起きた過去の事例②自分が考える「異文化交流をする上で大切だと思うこと」の2点を話しただきたいと思っております。

【考えるヒント】

- ・自分たちにとっては当たり前と思う“文化”は相手にとって当たり前なのだろうか？
- ・異なる文化をもった人と接する機会が私たちが何に気をつけるべきだろうか？

【参考資料】

<p>①牛表事件 http://www.fortune.net/social/history/nihon-edo/inamamugi.htm</p>	
<p>②メルボルン事件 http://culture0lang.blog49.fc2.com/blog-entry-7.html</p>	
<p>③日本人留学生引致事件 http://www.maroon.dti.ne.jp/knight999/nihonjin.htm</p>	
<p>④味の素追放事件(インドネシアの味の素事件) https://www.ica.go.jp/aboutoda/odajournalist/2000/21.html http://cilsien.info/factsheet/factpage</p>	

※ここに挙げていたのは一例です。
リーダーズで協力して他の事例も探してみてください。

(企画書)

GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2017年10月18日(水) 14:45~15:45 (60分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	世界の中のわたし	
本時の目標	外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方法を学ぶ			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導 入	① 企画の説明	本日の内容について説明する。	3	
展 開	②ドルジュバードプロジェクトの説明・作戦会議	ドルジュバードプロジェクトについて、ルールと目的を説明し、チームごとに作戦会議を行う。 教室：「SOKA テレビ側」 廊下：「ドルジュバード王国側」	13	グループになり、それぞれ「ドルジュバード王国側」と「SOKA テレビ側」にわかれる。
	③プロジェクト開始	「SOKA テレビ側」のグループは、ドルジュバード王国の独自文化の制約と限られた予算の中で、撮影交渉をする。	15	各グループ一枚ずつ、制約カードを持つ。
	④プロジェクト終了・種明かし	時間になったら、各クラスの GCP リーダーズの合図で終了する。 交渉を行ったグループ同士で、制約の内容について種明かしをする。	3	
ま と め	⑤クラス発表	どのような契約を結んだか(結ばなかったか)、どのような点で苦労したかをグループの代表者がクラスに発表する。	5	2~3 グループをGCPリーダーズが指名する。時間が足りない場合は行わない。
	⑥まとめ	ゲームのポイントを解説する。	3	
	⑦個人作業	個人ワークシートに本時の振り返りと感想を記入する	10	
	⑧事例紹介・御指導紹介	異文化交流の難しさを感じる具体的事例としてニュースなどを紹介する。	6	
	⑨ワークシートの記入と回収	再度個人ワークシートに本時の感想を記入する。書き終わり次第、回収	2	

J) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)

■ 概要

11月25日に行われた第4回目は「現代の紛争」をテーマに、1994年にアフリカのルワンダで起きたジェノサイドー大量虐殺について学びました。事前学習では、「NHK 海外ドキュメント『ルワンダ(1)』」を視聴しました。さらに、ルワンダ内戦と大量虐殺を深く学ぶために、増田弘著の『なぜ世界で紛争が無くならないのか』、虐殺被害者と加害者の証言を、ジャン・ハッツフェルド著の『隣人が殺人者になる時 ルワンダ・ジェノサイド生存者たちの証言』『隣人が殺人者になる時 加害者編 ルワンダ・ジェノサイド生存者たちの証言』から、国際社会の対応を、伊勢崎賢治著の『NHK 未来への提言 ロメオ・ダレール 戦禍なき時代を築く』から抜粋したものを学習冊子として用意したものを事前配布し、当日までに読了していただくことを課題にしました。

当日は、映像「NHK 海外ドキュメント『ルワンダ(2)』」の視聴や、ツチ族・フツ族・国連軍に分かれたロールプレイを通して、ルワンダ内戦がおきた原因について学びました。また、学習資料をもとに、①国内政治②植民地支配③現地民(フツ族・ツチ族)④国際社会の4点からみた内戦の原因を「フィッシュボーン」と呼ばれるチャートにまとめていきました。最後に“二度とこのようなジェノサイドを起こさないために必要なことは何か”をテーマに話し合ったことをワールドカフェ方式でグループごとに意見交換をしました。

◆ 生徒感想

「グループ作業を進める中で、相互理解の大切さ、自国の利益だけにとらわれないことの重要性を確認しました。二度とこのようなジェノサイドを起こさないためには、人格を尊重すること、国際規模で解決に尽力すること、そして、傍観・無関心をなくし、権力の集中を防ぐことが必要であると思います。そのためには私たちが理解し、伝え、行動することが不可欠であることを学ぶことができました」

「ルワンダ内戦・大虐殺では、本当にたくさんの人々が亡くなっているのにもかかわらず、今更その歴史を知ったことに恥ずかしさを感じました。また、このジェノサイドの事実は同じ地球に住む人として皆が知り、考えるべき過去だと思いました。偏った考えをもつ権力者によって何も悪いことをしていない人たちが犠牲になるのは絶対に間違っていると思いました」

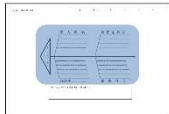
「今後ジェノサイドを起こさないために何が必要か班で話し合い、私たちの班では教育を大切にすべきだという結論をだしました。相手やその国を知らなければ、互いを思いやることはできないからです。今回の事件においても国の文化や歴史を正しく知らないことによって身勝手な解釈を起こしてしまったことが原因の一つにありました。正しい歴史は何か、世界中の人々が考え、意見を発信できる環境を作っていく、相手を理解するだけでなく受け入れることが大切だと考えます」



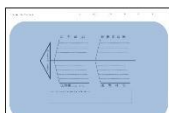
ワークシート(例)

GCP 企画 個人ワークシート


グループ内作業A
VTRと「事前学習資料Ⅱ」を通して、ルワンダ・ジェノサイドがおきた原因を①国内政治 ②植民地政策 ③現地住民(ツツ・ツチ族) ④国際社会の4つのトピックごとに整理しながら、各自のグループワークシートにまとめてください。



グループ内作業B
二度とこのようなジェノサイドを起さないために必要なことは何か、グループで話し合い、まとめる。「世界のどこでも、いつでもジェノサイドは起こりうる」との前提でグループで考え、グループワークシートにまとめてください。
※作業で出た意見や感想を自由に空欄に記入してください。



グループ別セッション
①テーブル一人限ります。
②それ以外のメンバーは他の机に自由に移動します。
③着ていたメンバーから発表します。
④メンバー全員で自由に話ります。
⑤4分を1回のセッションとして、10分のセッションを2回行います。
※作業で出た意見や感想を自由に空欄に記入してください。



他のグループの発表をメモしましょう。

本日の企画を振り返り、自己評価をしましょう。該当する項目に○をつけてください。

項目	自分の意見が相手に届いた	相手の意見を聞き取ることができた	チームで協力して作業することができた	ルワンダ・ジェノサイドの概要理解することができた	ルワンダ・ジェノサイドが起こる過程と原因を理解することができた	ジェノサイドを避けるための方法を考え、深めることができた
GCP 企画に主体的・積極的に参加することができた						
自分の意見を主張することが出来た						
相手の意見を聞き取ることが出来た						
チームで協力して作業することができた						
ルワンダ・ジェノサイドの概要理解することができた						
ルワンダ・ジェノサイドが起こる過程と原因を理解することができた						
ジェノサイドを避けるための方法を考え、深めることができた						

本日の企画を通しての感想を書きましょう。

2年 組 番 氏名: _____ 検印 _____

Global Citizenship Project ロールプレイ用 役割カード

役割カード② ツチ族の少女

【自己紹介】
人種：ツチ族
性別：女性
年齢：14歳
宗教：カトリック
好きなこと：マラソン

私は今学校に通っています。マラソンが好きで、走り方を先生に褒められたことが嬉しかったです。

インタビュー① 国内の状況

■フツ族との関係について
学校の前で行われているマラソンの練習をしていると、フツ族の男の子から「ゴキブリだ」といわれ、石を投げられました。
お父さんはフツ族は危ないから近づくなと言います。
ラジオでは「おまえたちフツ族のようなゴキブリはルワンダ人ではない、駆除されるべきだ」と言っています。
私にはなぜフツ族だからといっていじめられるのか、よくわかりません。
でも新しいマラソン選手の子たちには近づかないようになっています。

インタビュー② 大統領選挙その後

■大統領選挙その様子
今は家族と一緒に学校に通っています。
学校は良いのですが、近所でも、国連の軍隊の人が守ってくれているので今のところ安心しています。学校の空地の外には銃(なた)をもちた何十人もの人たちがたむろしています。お父さんはあの人たちをインテラハムエ (Interahamwe) と言っていました。学校の外からは「ゴキブリを駆除しろ!」と物陰な声が聞こえます。このまま私たちがどうなってしまうのか、少し心配ですが、ミサ(カトリックの儀式)に参加して、心が少し落ち着きました。

Global Citizenship Project ロールプレイ用 役割カード

役割カード④ SOKA TVの報道記者

【自己紹介】
人種：日本人
性別：男性
年齢：25歳
宗教：仏教

私は日本から取材に来ました。現在ルワンダでは内戦が起っており、街中では武装勢力が襲撃を行ったりしています。現地の様子をインタビューしてきたいと思っています。

インタビュー① 国内の状況

それでは皆さんにインタビューをしています。
■フツ族との関係について ①フツ族の少年へ
■フツ族との関係について ②ツチ族の少女へ
■フツ族、ツチ族の関係について ③国連軍の兵士へ
※好きな順番で、インタビューしてください。

インタビュー② 大統領選挙その後

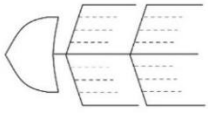
それでは皆さんにインタビューをしています。
■大統領選挙についてどう思うか ①フツ族の少年へ
■大統領選挙その様子 ②ツチ族の少女へ

※最後に③国連軍の兵士にインタビューしてください。
■大統領選挙その後の国内の状況 ④国連軍の兵士へ

※続けて、⑤国連軍の兵士に次のインタビューをしてください。
■民間人の争いを止めたいのですか? ⑤国連軍の兵士へ

(ロールプレイの終了)

GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2017年11月25日(土) 8:55~10:50 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	現代の紛争	本時の題目	現代紛争の実態と原因を探る	
本時の目標	ルワンダ内戦・大量虐殺(ジェノサイド)について国内政治・植民地支配・民族の違い・マスメディア・人権思想・国際社会等について着目しながら原因を整理し、二度とジェノサイドを起こさないために必要なことは何かを考える			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
20日(月) S H R	GCP 企画の説明	TV放送でGCPリーダーズより企画の概略と当日までの課題(『学習資料の読了』)の説明	3	『事前学習資料』の配布
22日(水) L H R	事前VTR学習	TV放送でルワンダの大虐殺(ジェノサイド)がおこるまでの過程についてVTR学習	30	『事前学習資料』持参 映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(1)」
1 時 限 目 (導入・展開Ⅰ)	①GCP 企画の説明	本時の内容について説明する	3	『事前学習資料』持参 映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(2)」 ※フィッシュボーン 
	②概略の説明 VTR 学習	ルワンダ内戦についてリーダーズが概略を説明し、その後、VTRを視聴する	10	
	③ロールプレイ	4人1班のグループに分かれ、1人1役のロールプレイを行い、ルワンダ内戦の様子を模擬体験する。	15	
	③グループ内作業A ※4人1グループ	『事前学習資料』を読み解きながら、内戦の「原因」を①国内政治②植民地化政策③現地民(ツチ族・フツ族)④国際社会の4つのトピックにグループで整理しながら、グループワークシート(フィッシュボーン)にまとめていく	20	
休憩 15分				
2 時 限 目 (展開Ⅱ)	④グループ内作業B ※4人1グループ	二度とこのようなジェノサイドをおこさないために必要なことは何か、グループで話し合いグループワークシートにまとめる。	10	発言や感想をフィッシュボーン周囲の余白に書いていく。
	⑤グループ間セッション ※4人1グループ	テーブルに残る人を1人決め、そのほかのメンバーは自由に他グループへ移動する。残っていたメンバーからグループ内作業ABの様子を発表し、共有する。適宜、質疑応答はさむ。	20	10分×2回行う。 ④の作業と同様、発言や感想をフィッシュボーン周囲の余白に書いていく。
	⑦まとめ	ルワンダ内戦以外のジェノサイドについて紹介	5	
	⑥個人作業	個人ワークシートに本時の感想を記入する。	10	
	⑧ワークシートの回収と次回予告		5	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 			

K) 人権すごろく(2年生)

■ 概要

1月20日に行われた第5回目は、「人権」をテーマに、人権というものが、人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解すると共に、身近な生活の中から人権尊重の必要性、重要性を感じることを目標として行いました。

導入として、オリジナル教材である“人権スゴロク”を使って、楽しみながら身近な自由が、「人権」として保障されているものであることを知りました。最初に、自身の出身国や性別といった人物像が設定され、設定によって異なる結果がでるようにし、理不尽な人権侵害を体感できるようにしました。各マスには、「突然逮捕される。2マス戻る」や「テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み」など、人権に関わる内容が書いてあり、それを読み上げながら進めることで、理解を深めていけるようにしました。

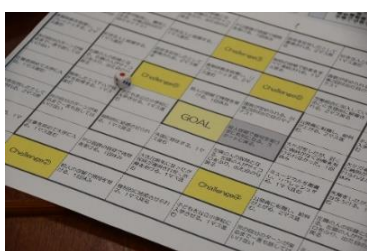
続いて、人権団体：ユース・フォー・ヒューマンライツが作成した映像『人権の歴史』を視聴しました。短時間で分かりやすく人権の歴史がまとめてあり、生徒の理解が進みました。次にグループごとに、世界で実際に起きている人権問題に関するニュースを配布し、それが世界人権宣言のどの項目に抵触するかを検討しながら学びを深めました。各グループには全て異なるニュースが配られ、最後に自分たちが担当したニュースの簡単な発表を行い、他グループの学習成果についても共有できるようにしました。

この企画を通して、平和な日常で暮らしていると意識できていなかった「人権」というものを少し身近に感じることができました。

◆ 生徒感想

「今回のテーマは「人権」ということで、改めて『人権』について考える良いきっかけとなりました。人権はこのようなものである、と一言で表すことができないような難しい問題であるので、人類は1000年以上もそのとらえ方で採ってきたのだなと感じました。だからこそ、さまざまな宗教、民族、性別の異なる立場の価値観を網羅するような世界人権宣言の制定は、人類史上とても意義深いものであると感じました。1000年以上も解決することができなかった人権をどう位置づけていくのかという問題を、すぐには解決することは出来ないと思います。しかし、だからこそ、まずは世界中の人が人権についてそれを考え、それを生活の中で意識することが大切だと思いました」

「今回、『人権』をテーマにしたGCPの授業を受けて、普段全く考えないことを深く考えることができました。私は、最初の方で見た10分間の動画が特に印象に残っています。『人権』ができるまでこんなに何度も同じ歴史を繰り返してきたのを知りませんでした。私は、今自分が世界の人々を目の前にして、起きている問題に対して宣言をするほどの勇気はありません。でも、今の世界で起きている人権問題の善悪を見極めることや、身の回りで起きている問題を向上させようと働きかけることができます。今、ここからさらに学び、行動に変えていきたいです」



ワークシート(例)

GCP企画【人権すごろくゲーム】								
START	紛争が勃発し、住居を失う。以後2回は出た目のマイナス1	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	好きな人と結婚する。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	
	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	紛争が勃発し、難民となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目のマイナス1	好きな人と結婚する。1マス進む	Challenge③	脱税の容疑で財産をすべて凍結される。1マス戻る	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む
	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	好きな人と結婚する。1マス進む	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	Challenge⑤	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。
	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	Challenge⑥	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	Challenge①
	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	開発したシステムで特許を取得する。1マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	GOAL	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み
	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	強制的に結婚させられる。1マス戻る	外国に移住する。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	失業をしたが、失業手当をうける。1マス進む	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る
	外国に移住する。1マス進む	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	大きな病気になったが保険が適用されなく治療を受ける。1マス進む	Challenge④	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む
	筆跡不審を理由に1ヶ月拘束される。1回休み	Challenge②	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	強制的に結婚させられる。1マス戻る	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る

(1) エジプト

デモ隊と治安部隊の衝突 撮影しようとして死刑の危機に

2013年夏、エジプト全土でモルシ前大統領の支持者と治安部隊の間で大規模な衝突があり、約1,000人が命を落とした。最多の犠牲者が出たのはカイロ近郊ナセルシデーのラバア広場でした。盛り込みでモルシ復権を訴える親モルシ派を排除しようと治安部隊が実弾や催涙ガスを使用し、数百人が亡くなったのです。

この事件では、デモ参加者が大勢逮捕されました。事件の様子をカメラに収めようとしていたフリーの報道カメラマン、マフムード・アブゼイドさんも、逮捕されてしまいました。現場にいたフランスと米国のカメラマンも同様の目に遭いました。

2人の外国人カメラマンはその日のうちに釈放されました。しかし、マフムードさんは拘束され続け、今に至ります。C型肝炎にかかっているのですが、治療を受けさせてもらえません。

2年半後ようやく始まった裁判

マフムードさんは他のデモ参加者など738人とともに起訴され、2016年3月、逮捕されてから2年半以上経って、ようやく裁判が始まりました。マフムードさんが問われたのは「暴徒団体（ムスリム同胞団）に所属」「殺人」「殺人未遂」「武力と暴力で体制転覆」など9つの罪でした。マフムードさんはすべてを否認。彼はただ、写真を撮るためにそこにいただけなのです。しかし、裁判で有罪になれば、死刑を科される恐れがあります。

エジプトでは2011年、30年以上続いた独裁政権が民主化運動によって倒れ、翌年、選挙でモルシ氏が大統領に選ばれました。ところが景気低迷と治安悪化で連綿を求め声が高まり、1年もたたないうちに、軍によって解任されます。治安部隊との衝突事件では、多くのモルシ派が死刑判決を受けています。

(2) イラン

クルド人女性のために活動して終身刑 拷問で失明の危機に

ゼイナブ・ジャラリアンさんは、イランでクルド人の権利、特にクルド人女性の地位向上に取り組んできました。ゼイナブさん自身もクルド人です。

2008年3月、彼女は露報機関によって突然、逮捕されてしまいました。弁護士や家族にも連絡をとらせてもらえず、8か月も独房に閉じ込められ、その間、壁に頭を何度も打ちつけられるなどの拷問を受けたと言います。そのせいで頭蓋骨にひびが入り、脳内出血を起こしました。拷問の後遺症で今も目に問題を抱え、家族の費用負担で刑務所外で手術を受けましたが、失明の危険性は消えていません。しかし治療は拒否されています。

武力闘争に関わったと疑われ

逮捕はクルディスタン自由生活党（PJAK）の武装派メンバーだと疑われたためでした。PJAKはイラン政府と戦闘を繰り返しており、イランや米国などではテロ組織に指定されています。ゼイナブさんはPJAKの政治部門と連携することはありましたが、武装派との関わりは否定し続けています。

わずか数分で終わった裁判では、神への敬意を持った罪で有罪になり、死刑を言い渡されました。その根拠は拷問で強要された自白で、PJAKの武力行動との関係を証明する証拠は示されませんでした。その後2011年12月に、最高指導者の指示により終身刑に減刑されています。

2016年4月、国連の恣意的拘禁に関する作業部会は、ゼイナブさんがクルド人の権利のために活動し、PJAKの非武装部門と関ったために拘束されたとする見解を採択しました。そして彼女を直ちに釈放し補償を受ける権利を法的に認めるよう、イラン当局に求めています。

(3) イタリア

ロマの家族が強制立ち退き 危険な場所からまた危険な場所へ

2016年6月21日、75家族、約300人のロマの人たちが、イタリア・ナポリ近郊にある居住キャンプから強制的に立ち退かされました。

このキャンプはジュリアーノ・イン・カンパニア市が2013年に設置したもので、それまで何度も強制退去を受けてきたロマの人たちは、このキャンプに移されて3年の間暮らしていました。キャンプは有毒廃棄物の埋積場の近くで、閉鎖は健康・安全上の理由による裁判所の命令でした。そもそも居住地にするには、危険な場所だったのです。

建物のない代替地

ジュリアーノ市は新たな居住地を作ることにはしましたが、完成まで住む場所として市が急ぎよう意した所は、ひどいものでした。テニスコート4面ほどの狭さの花火工場跡地で、周りは雑草だらけ。トイレは2つしかなく、一つはぼろぼろ。一つは壊れていました。排泄物を化学処理するトイレと貯水槽が設置される予定ですが、あまりに劣悪な環境です。

家屋もなく、住民たちはトレーラーを持ち込むことを許可されましたが、トレーラーを持っていない家族は外で寝泊まりするしかありません。がれきりやびた釘、「自然発火物」[粉]と書かれた怪しげな容器などが転がったままで、健康面でも安全面でも適切な場所とは言えません。

少数民族ロマの人たちの強制立ち退きは、イタリア各地で行われています。EUが社会統合に向けて資金援助をしているにもかかわらず、ロマに対する差別と偏見がまん延し、へんびな場所に居住区を作るなど、イタリア政府は隔離政策を改める様子はありません。

資料：アムネスティ・インターナショナルニュースレターより

GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年1月20日(土) 8:55~10:45 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	人 権	本時の題目	「世界人権宣言」を学ぶ	
本時の目標	「人権」とは何かを知り、人権が人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解する。また、『世界人権宣言』を通して、世界の人権問題を考える。			
項 目	項 目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
1 時 限 目	①GCP 企画の説明	本時の内容について説明する	3	時間になった時点で全グループ終了 ユース・フォー・ヒューマンライツ作成
	②人権すごろくゲーム →ゲーム振り返り	ルール説明 4人1組になり、A～Dを割り当てる ルールに従い、すごろくゲームを行う 個人ワークシート配布。①に取り組む	5 15 3	
	③VTR 学習	「人権の歴史(10分)」を視聴する	12	
	④世界人権宣言を学ぶ	世界人権宣言配布。個人で読み、ゲーム中に自分が制限された人権とは何かを考え、ワークシート②に取り組む。	10	
2 時 限 目	⑤世界の人権問題を学ぶ	ワークシート「世界の人権問題を知ろう」配布。グループごとに異なる人権に関するニュースを読み、世界人権宣言に照らしてどの人権が制限されているかを考える	20	
	⑥クラス発表	「世界の人権問題を知ろう(一覧)」を配布。グループを組み替え、新たな4人1グループで作業の内容を共有する。	15	
	⑧振り返り・まとめ	本時の振り返りとまとめを個人ワークシートに行う	10	
	⑨ワークシートの回収と次回予告		2	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・ グループ分けは前々日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・ 担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 			
講 評				

K) 人権ディベート(2年生)

■ 概要

1月の企画から引き続き「人権」への理解を深めることを目的として、2月14日、17日の2日間にわたり人権ディベートを実施しました。これは、ディベートの手法を用いて少年犯罪の実名報道について知り、そこから「個人の基本的な人権」と「公共の福祉」がぶつかる例について考え、さらに他者の人権を尊重するための方途を探るものです。

人権ディベートを行う「基礎体力」は、言語技術の授業でトレーニングしました。週1回行われるこの授業では、1月に「学校の図書館は漫画を置くべきである。是か非か」など、身近で、背景知識の必要でない論題でディベートを実施。本校創立者・池田大作先生がかつて「互いの討論を通し、問題の核心に迫り、より優れた解決法を見つけていく『創造的議論』がディベートなのである」と語られたことを、実感を持って学ぶ事ができました。

企画の1日目には10グループに分かれ、指定された肯定・否定の立場からブレインストーミングを行い、立論を作成。さらに資料を読み込んで迎えた2日目には、グループ毎のリハーサルの後、2試合を行いました。勝敗を決めずに実施したため、落ち着いて相手の議論をよく聞き、試合の後にも互いの論点を話し合い、その場で振り返りを行う姿が多く見られました。

少年犯罪をめぐる本番の論題は、生徒たちには少し難しく、その場で相手のアタックに切り返し、効果的にまとめを行うことができない部分もありましたが、言語技術の授業で学んだ技術を活かして、論題について、複眼的に考えることができました。

◆ 生徒感想

「今日のディベートを通して、各々の権利を主張するだけの議論ではなく、お互いの立場や人権を考えて話し合うことの大切さを感じました。これからの社会は自分たちが築いていくと自覚できた企画でした。また題材やテーマを変えて、深く議論したいです」

「僕ははじめ実名報道に対しては否定的な意見を持っていました。しかしディベートの後、実名報道による“犯罪に対する抑止効果”“報道の自由”などの視点も知り、自分の考えの狭さに気がつきました。ディベートは、普通に話し合っていると過熱してしまうところを、ルールに則って考えを共有できる良い競技だと思いました」

「言語技術の授業で何度かディベートを行いました。今日は本格的にチームで協力して取り組めたと思います。相手の話をしっかり聞き、認めた上で、自分の意見を伝える姿勢は、日常生活でも活かせると感じました」



L) 模擬国連① COP21 (3年生)

■ 概要

模擬国連とは、実際に国連で行われている国際会議をモデルにして、一人一人が世界各国の大使となって会議・交渉を行うものです。今回は、気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラスを15の国に分け模擬国連を実施しました。

2020年以降の新たな枠組みの創設を目指し、論点①「2020年以降の温室効果ガスの新しい削減目標」、論点②「先進国と途上国の扱いをどのように区別するのか」という二つの論点に沿って、それぞれの国の立場で交渉を重ねました。会議の最後には、決議案を全会一致で採択することを目指しました。

各クラスのGCPリーダーが、会議の議事進行、交渉の調整、決議案の採択等を行う、議長(Chairperson)、秘書官(Secretary)を務めました。その他の生徒は参加国(15カ国)の大使として、国ごとに独自に用意した決議案に基づき、他国との交渉を重ねました。

大使それぞれの1分間スピーチの後、事前に立案しておいた自国の政策をもとに、他国との自由交渉(アンモデ)を繰り返し、会議の意思決定の下地となる決議案(Draft Resolution)を作成していきます。自国の国益を追求しつつも、国際社会にとっても有益かつ問題解決に実効的な解決策・対策を盛り込んだ決議案を採択することができるか、活発な交渉が展開されます。投票はコンセンサス採択(全会一致)を採用し、投票の段階で1カ国でも反対する国があれば否決となります。否決する国がでないよう、署名をしない反対国とも交渉を進めて、決議案の採択を目指しました。

◆ 生徒感想

「国際政治を動かすことはこんなにも難しいことなのだと初めて知った。今回は模擬だったが、実際の政治ではこの議決に国民の命がかかっているのだと思うと、もっと責任があるし、なかなか妥協が許されない状況になるのだと思う。また、今回自国の利益を考えることと、外交関係を考慮することのあなばいが難しいことを知った。今回の私がやった交渉の進め方だと実際の国家間でやったとき問題が生じそうだと感じた」

「各国大使として、どの点で妥協するのか見極めるのが難しかった。国がよくなるためには他の皆さんの国の援助が必要だと感じた。それぞれ国の状況が異なる中で、一つの目標に向けてすべきことを決めるのは大変なことだと感じた」



論点①2020年以降の新枠組みにおける削減目標

論点①では、2020年以降の新しい枠組みのなかの温室効果ガス削減目標について、話し合います。具体的には、目標設定にあたって、「どのようなことを考慮するか」、「どのような削減するか」、「すべての国を目標設定の対象とするのか」、「目標達成を法的拘束力のあるものにするのか」の4つについて交渉してください。

アメリカの立場：気候変動枠組条約付属書I国のなかで唯一、京都議定書未批准(つまり、温室効果ガス削減義務を負わなかった) するために、京都議定書の有効性が大きく失われたという過去がある。現在、オバマ大統領は、米中がともに責任を果たすというビジョンを描いており、その達成に向け新興国を含めた排出量の多い国に、削減義務を課すことを主張。また、今後の再生可能エネルギー産業の活性化や省エネ製品技術の売り込みのために、目標達成を義務化させたい、という思いがある。

<アメリカの主張>

項目	主張
どのようなことを考慮するか	排出量を重要な基準として、設定すべき。
どのように削減するか	・非化石燃料エネルギーの割合を増やすこととを各国に課す。
対象は？	先進国・新興国
法的拘束力	先進国・新興国には法的拘束力あり、途上国のそれは自主的なもの

⇒したがって、アメリカは前文の**選択肢でa**を選択し、**主文1**の括弧内で、(技術のない国に技術のある国が援助しつつ、再生可能エネルギーの割合を2030年までに増やすことならびにエネルギー効率の改善を義務化する)などと主張すればよい。もちろん、この案は、他国との交渉次第で柔軟に変えて構いません。

主文2では、<能力のある国に><法的拘束力あり>の組み合わせが提案できる。国際世論を考えると、温暖化問題を真に解決するということを考えると、排出量の多い国は必ず削減目標の策定ならびに達成をすべき。<先進国には><法的拘束力あり>という、京都議定書のような、先進国のみが法的拘束力を持つような不平等かつ実効性のない内容は駄目なスタンス。<能力のある国に>に>にならなければ、先進国に不平等かつ温暖化問題は解決しないので、<法的拘束力なし>を主張する。

Draft Resolution (決議案)

Conference of the Parties
共同提案国 (自国含め9か国必要) :

COP21 は、

温室効果ガス削減目標の設定に際しては〔**選択肢**：a 排出量 b 経済力 c 能力 d 歴史的責任〕が重要な基準であることを強調し、

環境問題の解決に向けて努力する過程で、「共通だが差異ある責任」に留意し、

〔(1)従来の先進国/途上国の分類 (2)先進国/途上国の区別だけでなく排出量を考慮した分類 (3)先進国/新興国/途上国の分類)を採用することを強く望み、¹

1. 温室効果ガスを削減するためには、()² ことを最優先に推進することを決定し、
2. 削減目標をすべての国が設定し、その達成について〔先進国には・能力のある国には・すべての国に〕法的拘束力の〔ある・ない〕ものとすることを要請し、
3. 「共通だが差異ある責任及び各国の能力」を考慮し、〔(1)先進国がより強い責任を負うべき (2)先進国ならびに能力ある途上国が積極的に責任を負うべき (3)従来の先進国/途上国の二分法から脱却し柔軟な解釈・適用すべき〕ことを強調する。

¹ (1)~(3)の中で、該当する考え方に○を付けてください。

² 例として(1) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (2) 再生可能エネルギーの割合を拡大させるとともにエネルギー効率の改善目標も設定する (3) 非化石燃料エネルギーの割合を拡大させる (4) 非化石燃料エネルギーの割合を拡大させるとともに、技術のない国に技術のある国が援助する 等が挙げられる。削減に向けて具体的にとのようなことを重視していただくかを書いてください

GCP 企画(3年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2017年5月13日(土) 08:55~10:50 (90分) 2017年6月17日(土) 08:55~10:50 (90分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の開催(気候変動枠組み条約)	
本時の目標	気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラス15の国に分かれて模擬国連を実施し、地球環境問題を取り巻く各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
5月13日(土)	GCP 企画の説明(模擬国連とは何か)	TV放送で模擬国連の概略と議題の説明、当日までの課題(スピーチの作成)の説明	40	「模擬国連とは」のppt資料配布
	事前学習① 「COP21」とは何か	模擬国連のテーマとなる「COP21」とは何か、気候変動枠組み条約の基礎知識を学ぶ	10	「事前学習資料①」配布
	事前学習②、③ 国別に分かれて事前準備	会議での論点の確認と、国ごとにスタンスペーパーの読み込み、決議案の作成、スピーチの準備を行う	50	「事前準備資料②」「③」「決議案」「スタンスペーパー」の配布
6月12日(月) LHR後	事前学習④ 模擬国連の流れの説明	GCPリーダーズが、模擬国連の当日の流れを説明し、国別に最後の準備を行う	20	「模擬国連の流れ」のppt資料配付
6月17日(土) 準備	机、イスを配置し、国名プレートを設置	会議開始のための準備を整え、国別に最後の確認を行う	15	「ネームカード」配布
展 開	①開会宣言・出席国の確認	議長の開会宣言と出席国確認を行う ・「Yes/Yes present」と答える	1	「スタンス Memo」 1分をタイマー表示 30分をタイマー表示。 議長、秘書官は各国の調整に動く。 1分をタイマー表示 40分をタイマー表示 決議案を受け取ったら 秘書官は電子黒板に書き込む 反対する国はプレートを挙げる
	②スピーカーズリストの解放	スピーチをしたい国を募る ・希望する国はプレートを挙げる	1	
	③スピーチ(前半8カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	8	
	④アンモデ(自由交渉)	決議案に9カ国以上の署名を集めるために自由に歩き回って交渉を行う	30	
	⑤スピーチ(後半7カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	7	
	⑥アンモデ(自由交渉)	9カ国以上の署名を集めるために交渉を行い、署名が集まったら議長に提出する。採択の際に反対する国が出ないように、非署名国にも交渉を重ねる	40	
	⑦決議案の読み上げ	提出された決議案を議長が読み上げる	5	
	⑧投票	コンセンサス採択を採用し、反対が1カ国でもあれば否決とする	2	
	⑨閉会宣言	議長の閉会宣言と全員の拍手で閉会	1	
ま と め	⑩振り返りの記入	「Reflection Sheet」に振り返りを記入する	15	「Reflection Sheet」配布
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・5月11日までにグループ分けと国分けを行う。 ・5月末にGCPリーダーズで実際にプレ模擬国連を開催する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 			
講 評				

M) 模擬国連 ②核兵器禁止条約 (3年生)

■ 概要

模擬国連の第二弾として、今回は「核兵器」をテーマに「核軍縮会議」の模擬国連を実施しました。政治的にも大変難しいテーマのため、現実世界の国をモチーフにしながらか国(12カ国)の架空の国を設定し、核兵器の実験をめぐる「核実験禁止条約」、核保有国と非核保有国の定義を定める「核兵器拡散防止条約」の2つの条約案の採択を目指しました。

各クラスのGCPリーダーが、会議の議事進行、交渉の調整、決議案の採択等を行う、議長(Chairperson)、秘書官(Secretary)を務めました。その他の生徒は参加国(12カ国)の大使として、国家元首から受け取った「指令書」に基づいて、「絶対に譲れないこと(妥協できないこと)」と「成功のために譲ってもいいこと(妥協できること)」を踏まえて交渉にあたります。

「核実験禁止条約」では、地下核実験を残すことを主張する国との対立が表面化したり、「核兵器拡散防止条約」では、秘密裏に核兵器を開発している国の立ち位置が重要な鍵となったりしました。また、3回にわたって行われた企画の途中には核実験の被爆国による核廃絶へのスピーチや、核兵器を開発している国に対する追加の経済制裁などの出来事も加わり、常に情勢が変化する中で進行しました。

今回の条約案には、指定された国が1カ国でも反対あるいは棄権した場合には条約が採択できないという「発効要件国」の基準を設けたことで、条約の採択がこれまで以上に難しい側面もあり、生徒たちは核兵器のない世界を目指しながらも自国の利益を確保させながら難しい立場で交渉を行いました。

◆ 生徒感想

「3回の核軍縮会議を通して、条約を締結させることの難しさを知るとともに、核兵器の恐ろしさを改めて実感しました。様々な国の様々な考えや状況がある中で、『核兵器をゼロにしたい』という考えが少しでも広まればいいと思いました」

「自分が核保有国になってみて、自分自身とは全然違う考え方をしなくてはならなくて大変でした。模擬でこれだけ大変なので本当の国連で採決するのに時間がかかるのがよくわかりました。まともで観た映像を通して、私たちも関係ないのではなく、自覚をもって行動していくことが大事だと思いました」

「自分たちの意志一つで全世界が決まるという感覚に少しでも近づくことができた。クラス単位で達成できる核軍縮なら、世界でも達成できると強く思った」



Global Citizenship Project Model United Nations
核軍縮会議 Nuclear disarmament conference

ここは、とある惑星のとある世界。二度の世界大戦を経験した人々は、自国の防衛のために核兵器を開発した。当初、核兵器の開発・製造は技術力・経済力のある国のみで行われていたが、次第に他国は核の脅威にさらされることとなった。そこで、各国の代表が集まり、今後の核兵器の在り方について議論することとなった。すでに核兵器を保有する国は、これ以上の核保有国の増加を防ごうと、また、大国が核兵器の保有することを懸念する国は新たな核開発を推し進めた。それらの国の利害に挟まれ、多くの国が核兵器の脅威から逃れようと核廃絶を訴えた。

はたして、彼らの意見は一つにまとまるのか。これから、みなさんは各国の特命全權大使となり、自国の利益を確保しつつ、国際社会の調和をはかる難しい議論の場に足を踏み入れる。

- A 参加国**
 リオ合衆国 アリス連邦 バイシズ国 ジェミニ国 キャンサー王国
 ヴァーゴ国 リーブラ国 サジタリアス国 カプリコーン国 スコーピオ人民共和国
 アクエリアス国 トーラス共和国

B 決議内容

01 核実験禁止条約

成立条件：核兵器保有国 2ヶ国かつ非核兵器保有国 6ヶ国の参加
 内容：大気圏内(地上)の核実験・地下核実験・海中核実験・爆発を伴わない核実験(臨界前核実験・未臨界核実験)のいずれか、もしくはすべての核実験の禁止。

02 核兵器拡散防止条約

成立条件：核兵器保有国 2ヶ国を含む 9ヶ国以上の参加
 内容：核保有国・非核保有国の認定。核保有国の非核保有国への管理権を含む核兵器の販売・譲渡・勧誘・開発支援等の禁止、及び、非核保有国の管理権を含む核兵器の開発・製造・所持・受納等の禁止。



C 会議のルール

- 01** 各国の国家元首から受け取った「指令書」に基づいて、「絶対に譲れないこと(妥協できないこと)」と「成功のために譲ってもいいこと(妥協できること)」を踏まえて交渉にあたる。「指令書」は他国に見せてはならない。ただし、交渉の中で必要な情報は提示し、自国の利益に結びつくよう他国との交渉に臨んでよい。
- 02** 2つの条約をそれぞれ決議する。他の条約の提出は不可。しかし、条約のアレンジは可能。
- 03** 核兵器を 1000 発以上保有している国は、「核兵器を保有している」ということを必ず公表すること(保有数については、具体的に公表しなくてもよい)ただし、秘密裏に核兵器を開発している国や開発を進めている国については、交渉に応じて公表するかしないかを判断してよい。
- 04** 交渉中、**うその情報を流すことは禁止**。ただし、「指令書」に書かれている事実をすべて公表する必要はない。情報に含みを持たせつつ交渉を進めることは可能とする。

C 会議の流れ



D ポイント

すべての国が核廃絶を望んでいるわけではありません。各国が連携し、上手に交渉できれば条約が可決されることはないでしょう。関係国をよく整理しながら、どの国と連携し、どの国を説得しなければいけないのかを考えて交渉しましょう。核兵器不拡散条約で核保有国としてどの国を認めるのが議論の争点になるでしょう。



Global Citizenship Project Model United Nations

①核実験禁止条約 決議案 -Draft Resolution-

共同提出国

第一条
 1 締約国は、自国の管轄又は管理の下にある

いかなる場所 大気圏内(地上) 地下 海中

において、核兵器の実験的爆発及び他の核爆発を禁止し及び防止することを約束する。

2 核兵器の実験的爆発及び他の核爆発には爆発を伴わないもの(臨界前核実験あるいは未臨界核実験)を

含む 含まない

ものとす。

3 締約国は、更に、核兵器の実験的爆発又は他の核爆発の実施を実現させ、奨励し又はいかなる態様によるかを問わずこれに参加することを差し控えることを約束する。

4 ※必要であれば記入

成立条件：核兵器保有国 2 か国かつ非核兵器保有国 6 か国の参加

Global Citizenship Project Model United Nations

②核兵器拡散防止条約 決議案 -Draft Resolution-

共同提出国

第一条
 1 締約国である各核兵器国は、

核兵器と、その管理権をいかなる者に対しても譲渡しないこと、及び核兵器の製造・取得について、いかなる非核兵器国に対しても何ら援助、奨励又は勧誘を行わないことを約束する。

2 締約国である各非核兵器国は、

核兵器を開発・製造しないこと、及び核兵器とその管理権をいかなる者からも受領しないこと、及び核兵器の開発・製造についていかなる援助をも求めず又は受け取らないことを約束する。

3 締約国である各核兵器国は、核軍備競争の早期の停止及び核軍備の縮小に関する効果的な措置につき、法的な拘束力を有しかつ期限を伴う計画に従い、

- 核兵器の完全な廃絶を約束する。
- 核軍縮の誠実な履行を約束する。
- 核軍縮に関する条約の制定を目指し、誠実に交渉を行うことを約束する。

4 ※必要であれば記入

成立条件：核兵器保有国 2 か国を含む 9 か国以上の参加

GCP 企画(3年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2017年10月18日(水) 14:45~15:55 (70分) 2017年11月25日(土) 10:00~11:50 (90分) 2017年12月07日(木) 変則的時間割 (80分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	核軍縮	本時の題目	模擬国連の開催(核軍縮)	
本時の目標	「核軍縮」をテーマに、各クラスで架空の国 12カ国に分かれて模擬国連を実施し、核兵器をめぐる各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
10月18日(水)	GCP企画の説明(核兵器をめぐる昨今の国際事情)	TV放送で本企画の目的と、核兵器禁止条約採択の意義、戸田先生の原水爆禁止宣言60周年の意義を確認する。	5	TV放送準備 冊子配布
	VTR学習 核兵器開発競争の歴史 模擬国連のルール説明	映画『カウントダウンゼロ』より核兵器開発競争の様子を学ぶ 本企画の模擬国連の流れ、ルールを確認	10	
	①作戦会議	各国のグループにわかれ、「指令書」を読み、「関係図」を参照しながら交渉のための作戦を立て、交渉(情報収集)を行う	10	指令書配布 関係図配布
	②交渉		20	
	③作戦会議(振り返り)	交渉を通して得た情報を整理し、次回に向けて作戦を立てる	15	振り返りシート配布
11月25日(土)	企画の流れを確認		5	
	④作戦会議	前時の内容を確認し、情報を整理しながら作戦を立てる	10	スピーチメモ用紙配布 議長は必要に応じて決議案(未記入)を各国に配布
	⑤スピーチ	自国の状況や交渉条件等を提示し、交渉を有利に進められるようにする	8	
	⑥作戦会議	各国の状況や交渉条件を聞き、どのように交渉を進めるか作戦を立てる	10	
	⑦交渉	実際に交渉を行う	25	
	⑧作戦会議	交渉を得て再度作戦を立てる	5	
	⑨交渉	再び交渉を行う	25	
⑩作戦会議(振り返り)	2回の交渉を経て得た情報を整理し、次回に向けて作戦をたてる	10		
12月7日(木)	企画の流れを確認		3	
	⑪議長案の提示・スピーチ ※状況に変化あり ※議長案に対する立場表明	前回の内容を確認し、情報を整理しながら決議の採択に向けた作戦をたてる	16	議長は必要に応じて決議案(未記入)を各国に配布
	⑫交渉	決議の採択に向けて最終的な交渉を行い、決議案を議長に提出する	25	
	⑬決議	提出された決議案をもとに採決を行う	5	
	まとめ ・VTR学習 ・SGI提言について ・担任講評 ・総括シート	映画『カウントダウンゼロ』より核兵器廃絶の必要性を学ぶ GCPリーダーズより2017年SGI提言について研究発表 総括シートを使って本企画を振り返る	10 5 10	学習資料・振り返りシート配布
課 題	・10月18日(水)までにグループ分けと国分けを行う。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。			
講 評				

N) ファイナル・プロジェクト (3年生)

■ 概要

2016年度に、これまで各教科で個別に展開されてきた探求学習を統合し、教科横断型のプログラムを組めないかというアイデアが生まれ、全校対象企画のGCP＝Global Citizenship Projectで進めている探求学習の集大成として、現代社会と英語がコラボレーションした「Final Project」という企画が着想されました。

GCPでは、「2030アジェンダ・SDGs」を活動の中心に据え、環境・教育・人権・紛争解決・核軍縮などをテーマに、1年次より様々な企画に取り組んでいます。リンクマップ作りや貿易ゲーム、模擬国連や独自の教材などを用いて、地球規模課題やSDGsへの関心を高めてきました。

そして、3年次に「現代社会」の授業内容とも関連させ、これまで学んできたSDGsの17のゴールの中から、自分がかつとも興味をもった分野からテーマを設定し、日本語と英語の二言語でポスターセッションを行う「Final Project」を進めています。

■ 企画の流れ

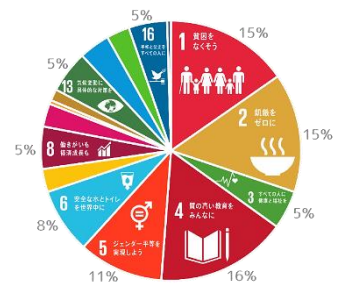
生徒たちは一学期の5月からテーマの選定に着手しました。SDGsの17の目標から大テーマを一つ選び、さらに自分が掘り進めたいと思う小テーマを設定します。テーマ設定においては玉川学園発刊の『学びの技』を使用し、調査対象が広すぎるテーマ、専門的すぎて狭すぎるテーマ、調べたらすぐに結論が得られてしまいそうなテーマなど、さまざまなケースを学び、検証させました。

設定したテーマの内容と内訳を見てみると、「1 貧困をなくそう」「2 飢餓をゼロに」「4 質の高い教育をみんなに」が特に関心の高い分野であることがわかります。

教員からもフィードバックを与え、一学期に確定させた小テーマをもとに、夏休みにはテーマレポートを書かせます。その際には、先ほどの『学びの技』より、レポート・論文の書き方についても簡単なレクチャーを行いました。

そして、2学期にテーマレポートを生徒同士でチェック項目をもとに、相互チェックさせブラッシュアップ。レポートをもとにポスター制作に入りました。

ポスターを作成する際には、「見せるポスター」「読ませるポスター」を意識させ、レイアウトや文字の大きさやフォント、色使いなどの最低限のデザインについて学習を進めました。



3-1 見せるポスター・読ませるポスター

ポスターのデザインは、見る人に情報を伝えるだけでなく、その内容を理解させる役割も果たします。そのためには、ポスターのデザインに工夫が必要です。

ポスターのデザインには、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

ポスターのデザインには、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

3-2 レイアウトの基本

ポスターのレイアウトは、見る人に情報を伝えるだけでなく、その内容を理解させる役割も果たします。そのためには、ポスターのレイアウトに工夫が必要です。

ポスターのレイアウトには、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

ポスターのレイアウトには、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

4-1 ポスターセッションの進め方

ポスターセッションは、見る人に情報を伝えるだけでなく、その内容を理解させる役割も果たします。そのためには、ポスターセッションの進め方に工夫が必要です。

ポスターセッションの進め方には、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

ポスターセッションの進め方には、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

4-2 わかりやすい説明の順序

ポスターセッションは、見る人に情報を伝えるだけでなく、その内容を理解させる役割も果たします。そのためには、ポスターセッションの進め方に工夫が必要です。

ポスターセッションの進め方には、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

ポスターセッションの進め方には、以下のポイントがあります。

- ① 見出しがわかりやすい
- ② 見出しが読める
- ③ 見出しが読める
- ④ 見出しが読める

11月ごろにポスターを完成させ、まずはクラスの中でポスターセッションを実施。発表の際の声や姿勢、アイコンタクト、ボディランゲージ、ナンバリングなどの基本的な方法についてもレクチャーを行い、生徒同士でポスターセッションを相互チェックさせることでブラッシュアップを行いました。



そして、冬休みにポスターの修正を行いクラスでも最終の調整を行いました。

発表自体は6分前後で組み立てていたため、本番では質疑応答も含めて10分という時間をどうデザインするのかを生徒たちに考えさせました。

いよいよ迎えた本番では、体育館全面を貸し切り、盛大にポスターセッションが行われました。1・2年生もオーディエンスとして参加し、前後半2回にわたった発表のうち、1回は決められた場所に、もう1回は自分の聞いてみたい先輩のところに行くという形をとりました。



大学受験の生徒や当日の体調不良などの欠席を除けば、200名以上の生徒全員が課題に取り組み、ポスターセッションをすることができました。

生徒たちの誰もが、今回のポスターセッションが学校側からの課題として与えられ、ただやられているという感じに取り組むのではなく、最初はそういう感覚だった生徒も含めて、この取り組みを通し、世界の諸問題やSDGsの取り組みについて調べていく中で、これは誰にかに知ってほしい！聞いてほしい！という思いに変わり、オーディエンスに対して情熱をもってポスターセッションをやってくれました。

インプット中心の探求学習は丁寧に進めていくうちに自然にアプトプットへのモチベーションに変容していきました。

また、昨年と大きく変わったことは、オーディエンスの様子です。

言語技術の授業を受けている1・2年生たちは、質問の仕方・インタビューについても普段から訓練を受けているだけあって、質疑応答の時間に活発な意見交換がなされていました。

来年度はいよいよ、そんな1年次から言語技術の授業を受けた生徒が3年生となり、このFinal Projectに取り組みます。

また、昨年度・今年度の課題として、レポートの作成方法のさらなる指導や情報リテラシーの

指導、また、発表する力に質問する力のさらなる指導があげられますが、今後はレポートについては国語科、ポスターは情報科、その他細かな指導は担任などと協力しながら、全校をあげての指導体制の構築を模索して参ります。また、2年間の言語技術で身についた基礎力を生かし、さらに充実の、そして生徒の成長につながるファイナル・プロジェクトを目指します。

◆ 生徒感想(3年生)

「準備期間は大変だと思ったこともあったが、最後のセッションを終えた時の達成感は何の自信になった。調べれば調べるほど、地球規模課題への関心が湧いてきて、大学での学びに繋がるといった」

「このプロジェクトを通して、話を要約してわかりやすく伝える力がついたと思う。さらに、他人の発表を聞き、今まで興味のなかった分野の問題やニュースに関心が湧くようになった。」

「情報を整理する力、まとめる力がついたと思う。夏にレポートを作った後、ポスターを制作するために重要な点をしぼることは難しかったが、伝えたいことを伝えるための方法を身に付けることができたと思う」

「人前で話すのが苦手だったが、意外とできる自分を発見できた。相手からどのような質問が来るかを予測する力がついたと思う」

「将来の夢とつながりのあるテーマを選んだため、ただ調べてまとめるだけでなく、自分の知識になったのでよかった」

「最初は面倒臭いなんて思っていた。それでも自分が決めたテーマを調べていったら面白くなってきてそこからは入り込んでしまった。テーマ決めが大切だと思う」

◆ 生徒感想(オーディエンス：1・2年生)

「ポスターの内容も話し方もわかりやすく、今まで知らなかったことがたくさん学ぶことができたよかった」

「原因や対策などを1つ1つ丁寧に説明していてとてもわかりやすかった。たくさん国を比較して分析していたのがとても説得力があった」

「最初のアイスブレイクやクイズなど工夫がたくさんあって聞いていて楽しかった。要因と解決策がナンバリングされて具体的かつ簡潔に難しい内容も知ることができた」

「ポスターをうまく活用して話していると感じた。順番も工夫されていてとても理解しやすく論理的に構成されていたと思う」

「来年のための素晴らしい見本になった！」

女子教育普及のために 私たちが今できること

小学校・中学校・高等学校における男女の割合

なぜここまで男女、地域に差があるんだろう？

世界とサハラ以南アフリカの女子の純就学率

要因

- ① 学校が遠い
- ② お金がない
- ③ 行く必要がない
- ④ 通える体調じゃない
- ⑤ 学校の設備がよくない

デメリット

- ① 注意書きが読めない
- ② 仕事が選べない
- ③ 計算ができない
- ④ 必要な知識が得られない
- ⑤ 社会から取り残される

女性が教育を受けると...

- ① HIVの感染率が半減!
- ② 栄養失調率43%低下!
- ③ GDPが上昇!
- ④ 将来産む子どもが5歳まで生き延びる率が40%UP!

負の連鎖

教育を受けなければ、教育を受けないことで起こる負の連鎖を止めることができる。

教育普及のための取り組み

組織	内容	私たちが今できるか
ユニセフ	・教育育成・教科書作成 ・女子トイレ設置 ・奨学金制度 ・教科書作成	△ 寄付
JICA	・「みんなの学校プロジェクト」	△ 寄付
NGO団体	・教員ボランティア	△ 寄付・参加 (お金を払って)

私たちが今できることは？(結論)

- 寄付をする (できるものから)
 - お金がないならお金を生み出すのみ(投資、古本をお金に変えて寄付をする団体があるので自分の支援したい団体を見つけたら私たちは行動を起こすことも可能！)
- 勉強する
 - 学校の勉強だけでなくサハラ以南アフリカの様々な教育の現状を学び若い世代が世界に広める必要がある!

【参考文献】 インターネット：学校にいけない子供たち (JICA) ・数字で見る女子の現状「世界中の子どもに教育を」 キャンペーン・女子教育厳しい現状 日本ユニセフ協会・池上彰と考える！ ビジネスパーソンの「国際貢献」入門topic 05

アフリカとアメリカの教育問題の違い

Developing countries vs Developed country

○教育を受けられない子供... **5900万人** アフリカ サハラ以南

- ・労働が優先
- ・少年兵に
- ・学校がない

○教育の力

- * 1年間長く教育を受けることで...
 - ⇒ 収入が約10%増加
 - ⇒ 国の貧困率が9%低下
- * 女子教育の効果
 - ⇒ 5歳未満児死亡率の低下

Africa

○歴史

1960年 独立 → エリート教育 → 財政問題 → 教育の質低下 → 悪循環

○ニジェール「みんなの学校プロジェクト」

良い循環: 教育の質向上 → 教員への支援 → 児童の質向上 → 学校運営改善 → 親にも教育の大切さを理解してもらう

America

○学校のレーティング

教育格差

- 世代を超えた問題
- 良い学区
 - ⇒ 不動産価値が高い
 - ⇒ 所得の低い人は手が届かない
 - ⇒ 貧富の差=教育の差
 - ⇒ 職業にも影響
- 支援の現状
- 識字率の向上
 - ⇒ 親も読み書きを覚える
 - ⇒ 子供の教育へ関心高まる
- 結論
 - ① 悪循環を良い循環へ
 - ② 地域のニーズに応えた支援

政府開発援助 (ODA) の割合

- 日本 ⇒ 0.5%
- イギリス ⇒ 4.8%
- 先進国平均 ⇒ 2.1%

必要な額 1兆6000億円

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS のアプローチ

全ての人が 質の高い教育を受けるためには...?

【参考文献】 「世界の教育の現状」教育の問題を上影と考える！ 「教育と子どもたち」アメリカの教育問題

乾燥地域において古くから行われている 伝統的農業は持続可能な農業といえるか

このテーマを選んだ理由

飢饉に終止符を打ちたい → 持続可能な農業が不可欠 → 持続可能な農業とは何か → 乾燥地域の伝統的農業は持続可能か

パキスタン

方法	伝統的農業 (カレーズ農業)	近代的農業 (井戸灌漑)
+	・一度建設すれば動力エネルギーが不要 ・水の蒸発が防げる	・カレーズより簡易 ・生産性が高い
-	・新建設や既存維持に手間と経費がかかる	・地下水の大量くみ上げによるカレーズ水量の枯渇
課題	・手間と経費を抑える技術開発	・地下水利用の法定

カレーズ農業の持続可能性

→ 乾燥地域の自然環境に適応して生み出され何千年も間接してきた伝統技術だから持続可能性は高い

→ 井戸灌漑とのバランスが課題。カレーズの人間と経費を抑える技術開発が必要

シリア

方法	伝統的農業 (天水農業)	近代的農業 (灌漑農業)
+	・降雨を利用	・人工的に水を土地に供給
-	・降雨依存のため生産量の変動が激しい	・水資源の枯渇 ・塩害の発生
課題	・生産性の安定	・水使用量の制限

天水農業の持続可能性

→ 降雨によるため水の枯渇の心配がなく持続可能性は高い

→ 大多数の農民が天水農業に従事しているため生産性の向上は課題である

→ 一つの場所ではなく常に複数の場所で行うことで多様性を確保する

結論

伝統的農業のデメリットを解決 → 近代的農業が発達 → 新たな問題が発生 → どちらかのみには絞るのは困難 → 伝統的農業と近代的農業のバランスに課題

【参考文献】 世界の農業と環境「食料と農業のための持続可能な水資源」 新緑の農業発展と都市の水資源 水資源の持続可能性を高めるための持続可能な農業政策に関する国際会議報告書

途上国の子どもたちと水

1-1. 現状把握

安全な飲料水を利用できない人口... 約8億人 (世界の9人に1人)

1-2. 汚水がもたらす悲劇

下痢 (幼児の死因 第2位)

- ・脱水症状
- ・寄生虫などによる病気
- ・感染症 (ex. メジナ虫症)

1-3. エチオピアに住む13歳の少女

6:00am 起床
7:00am 出発
11:00am 水汲み
3:00pm 到着
9:30pm 就寝

8時間 (1日に使う量はわずか5ℓ)

生きるためにかかせない水は 子どもの命と未来を奪う水。

- ・毎年180万人、毎日約3,800人の子どもの死
- ・教育を受ける時間がない

2. どうやって解決する？結果は？

SDGsの目標6.1: 2030年までに、すべての人々の安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスを達成する

① → ユニセフ募金 → 井戸の設置、浄水剤、ORS (経口補水塩) → 教育への扉が開く → 安全な水を使い、病気にかけられなくなる → 衛生習慣身につく

② 石けんを使った手洗い → 死亡率44%改善

3月22日「世界水の日」 10月15日「世界手洗いの日」

3. 自分の考察

大事なことは、現地の人とのコミュニケーション (心の声を聴く)

私達にも身近にできることがある

こどもたちの夢と希望を重視し、寄り添って解決していく → 輝かしい未来

~参考文献~

<https://www.unicef.or.jp/special/water/life.html>

<https://www.jica.go.jp/about/oda/kegami/01/>

https://www.unicef.or.jp/special/1250m/201m_source/vah-ed&utm_medium=spe&utm_campaign=1250m

0) SDGs カードゲーム(3年生)

■ 概要

2015年に国連で採択された「2030アジェンダ・持続可能な開発目標=SDGs」を体験的に学ぶために、担当教員とGCPリーダーで企画立案し、新たにカードゲームを開発しました。3~4人グループで9カ国にわかれ、各国が抱える課題がSDGsのターゲットとしてカードにしたものを配布。各国はそれらの課題を「アイテム」を使って解決していきます。解決することで「ポイント」を得ることができ、最終的に一番ポイントを獲得した国の勝利となります。

教室前方の画面には、SDGsの世界全体の達成状況がわかるバロメーターが表示されており、自国の課題解決とともに、自国がすべてクリアしても、他国がクリアできなかった場合はポイントが減点されてしまうため、世界でSDGsの達成を目指し、道具の貸し借りや、融資など、互いに協力しあって交渉を進めていきます。

「アイテム」には「お金」と「アイデア」があり、「お金」は貿易ゲームの要領で、道具と紙をつかって製品をつくり、マーケットで換金することで得られます。「アイデア」は自国の教育水準や知的活動の指数をあらわしており、さまざまな課題を解決していく中で得ることができます。各国の課題やそれを解決するための経済力や教育力の必要性、国際社会における援助のあり方、協力関係の構築など様々なことを、カードゲームを通して体験的に学びました。

◆ 生徒感想

「技術力やお金がないと国際社会の中で影響力をもてないと感じた。自分の担当国は技術も資源も少なかったため、開発銀行からお金を借りるしかなかったが、そのために借金の返済に苦しんだ。現実社会においてもどのように途上国を支援すべきなのか考えてみたいと思った」

「労働生産性が高いとやはり国が豊かになるのだと思った。しかし、お金があることと幸せに暮らすことはまた別の問題であるとも感じた」

「自分の国のことで精一杯になってしまい、困っている国を助ける余裕がなかった。現実の世界もこうなのだろうかとしみじみ思った」

「カードゲームだとついつい目先の利益にこだわってしまうが、現実社会では、ただ目の前の課題にがむしゃらになるのではなく、長期的に、視野を広くもって計画をたてるのが大切だと感じた」



3. グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)

A) 概要・年間スケジュール

■ 概要

グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP) はその成果を、GCP はじめ全校のSGHの取り組みに還元していく事が最大の使命であります。これまでに全校対象で行われているGCP 広島フィールドワークは、GLP フィールドワークがベースとなっております。またフィリピン講師とのスカイプ英会話は、現在全校生徒が取り組んでおり、英語の4技能の中でも課題となっているリスニング・スピーキング力の向上に貢献しています。言語技術授業の英語と日本語往還の実験も、GLP で行われました。

本年度の取り組みは16名で行っています。毎週火曜日・金曜日のクラブ終了後18時から19時30分過ぎまで、CALL教室で行います。また必要に応じて合宿などの集中プログラムを実施します。

■ 昨年度との相違点

①課題研究メソッドを指導するために、全員で中学生の SNS の使用をテーマにした課題探求を行い、意見文(小論文)を書かせました。これにより使用教材である「学びの技」(玉川大学出版)の活用を生徒たちが強く意識することができました。

②フィールドワークに向けて、平和的な都市計画、地球温暖化、貧困、環境と開発など、SDGs と関わりのある小テーマを4つ設定し、テーマごとに4人1組のグループワークを行いました。「学びの技」に基づき、仮説を立てて進めることで、論理的かつ分析的な探究型学習を実施しました。

③オープンキャンパスや、学園祭などではポスターセッションを実施し、公開された空間でのポスターセッションを実施。また中間報告会および最終報告会において、英語でのプレゼンテーションを行いました。また横浜での SGH 全国高校生フォーラムにも参加しました。2018年3月には SGH 甲子園にも出場予定で、英語によるポスタープレゼンテーションおよび、ラウンドテーブルディスカッションに参加します。

④英字新聞の監修がジャパンニュースに変わりました。

⑤核問題について全員で取り組むことで、4月に実施される、カリフォルニア・ミドルベリー国際問題研究所の主催する、核廃絶に関する高校生による国際会議、クリティカル・イシューズ・フォーラムに向けての取り組みで、全員が英語によるプロジェクト作品を作り上げることができました。完成作品は活動報告会において、英語で発表しました。核不拡散問題では、専門家の講師とカリフォルニア＝東京間をオンラインで結んで、レクチャーを行うことができました。あわせて2017年のノーベル平和賞受賞者・ベアトリクス・フィン ICAN 事務局長による講演会にも参加し、解決困難な地球規模課題の最前線に触れることができました。また GLP の生徒が、オーストリア・ウィーンで実施された CTBTO の SnT 国際会議に、日本の高校生代表として招待され、現地では、核廃絶をテーマとした映像プロジェクトの発表を行いました。

⑥クラスサイズ含め、基本的な運営方法は同じでしたが、2学期より授業会場が図書館3階から、アクティブラーニング向けにリニューアルされたコール教室に変更になりました。これにより、自由度の高いディスカッションが行えたほか、ポスタープレゼンテーションの練習なども行いやすくなりました。

■ プログラム内容

「学びの技」を教科書として、論理的・批判的思考や情報収集・分析力など探究型学習の基礎を育てます。その研究メソッドを活用し、沖縄とカリフォルニアで実施されるフィールドワークを行います。さらに、フィリピン人講師によるオンライン英会話ではインタビュースキルなどの英語力を磨きます。また地球規模課題への理解と知識を深めるために、国連大学訪問や、人権和学者、外交官、国際機関職員による懇談会を行なっていただいています。さらに、核廃絶問題のテーマをふまえ、2017年ノーベル平和賞受賞者ビアトリス・フィン ICAN 事務局長の講演会に参加しました。

■ 年間のプログラムの流れ

まずは地球規模課題の学習と仮説を設定し、それを踏まえてフィールドワークを実施しました。さらに内容と仮説を吟味して、学園祭でポスターセッションを行いました。同時に、それまでの取り組みの内容を、ジャパンニュース監修の英字新聞作成を実施。その後は、主張をまとめて、ギガビジョン株式会社のプロの動画製作者の指導のもと、動画を制作しました。作成した動画を YouTube などにアップロードしました。3年生がこの活動を取りまとめ、活動報告会を英語で行いました。また4月にカリフォルニアで開催されるクリティカルイシューズフォーラム(CIF)に向けて、核不拡散についての研究を取りまとめたミニプロジェクトを全員で作成しました。この内容は2年生が活動報告会にて、英語で発表しました。

GLP 年間スケジュール

日程	プログラム内容	探究・発表等の手法など
春期休業	集中講義:アイスブレイク、年間計画の確認、ワールドカフェ	Chromebook 配布(貸与)
4月	Critical issues forum(CIF)参加 (4/1~5、代表2名)	長崎県長崎市
	講演「持続可能な開発目標(SDGs)とは」 講師:国連報道官 須賀正義氏	
	授業「探究学習のステップ」	マインドマップ
	言語技術「報告書の書き方」	
5月	国連大学研修 講演「SDGsと人間の安全保障」 講師:国連大学サステナビリティ高等研究所 プログラムアソシエイト 今井夏子氏	国連大学
	講演「国連の役割」 講師:国連広報センター 千葉潔氏	
	授業「国家の安全保障・人間の安全保障とは」	グループワーク
	授業「研究手法:アンケート調査・文献調査」	
6月	講義「アメリカ社会の多様性」 講師:ハワード大学 カミラ・マジエード博士	

	授業「国家とは何か～メリアンダイアログを通して」	ディスカッション
	英字新聞編集会議	KJ 法
	作業「フィールドワークに向けてのリサーチ」	
7 月	ディスカッション「探究学習のテーマについて」	ディスカッション
	英字新聞 行程表作成・インタビュー実施	
夏季休業	集中講義 ① 各フィールドワーク先での探究学習テーマを設定・プレゼン ② 英字新聞編集会議	グループワーク ディスカッション プレゼンテーション
	フィールドワーク アメリカ(7/31～8/7) 沖縄(8/8～11)	アメリカでのフィールドワークは GCP と共に実施
9 月	授業「ポスターの作り方」	
	課題「探求学習テーマ報告書作成」	報告書作成
	作業「ポスター作成・発表練習」	

日程	プログラム内容	探究・発表等の手法など
	ポスター発表「フィールドワーク報告」(一般公開)	ポスターセッション
10 月	講義「映像のクリティカルリーディング」 講師:映像制作会社 Gigavision 津田盛治氏 他	
	授業「英語プレゼンテーションスキル」	ペアワーク
	授業「核兵器禁止条約とは」	
	講義「核兵器なき世界を実現するために」 講師:ミドルベリー国際大学院 トキ・マサコ女史	
11 月	交流会: 沖縄県立那覇国際高校	プレゼンテーション
	中間報告会「フィールドワーク報告(英語)」(一般公開)	プレゼンテーション
	SGH 全国高校生フォーラム参加(英語)	ポスターセッション
12 月	第二回全国中学校・高等学校英字新聞コンテスト出場	
	集中講義:一年間で学んだことを伝える映像制作	グループワーク、映像制作
冬季休業	映像制作作業	
	映像課題「核兵器の科学的性質」	
1 月	講義「核兵器廃絶に向け市民社会が果たす役割」 講師:ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン) ベアトリス・フィン事務局長	ペアワーク
	作業「CIF ミニプロジェクト作成」	

2 月	2018 年度 CIF 準備	
	GLP 最終発表会	プレゼンテーション
	活動の振り返り・評価	自己評価・相互評価

B) クリティカル・イシューズ・フォーラム (CIF)

■ 実施 4月1日(土)～4月5日(水)

■ 参加者 代表生徒2名(3年生男女1名ずつ)

■ 場所 長崎・活水高校

■ 主催 ミドルベリー国際問題研究所ジェームズ・マーティン不拡散研究センター(MIIS)

■ 内容 日米露の高校生による核軍縮に関する提案の発表会で、会議には、ロシアから4校、アメリカからハワイも含め6校、日本から7校の代表生徒約2名ずつが参加し、核兵器の不拡散をテーマにプレゼンテーションやディスカッションを通して意見を交換しました。2017年の Student Conference のテーマは「CTBT とその核兵器無き世界への役割」でした。

また、4月の開催に向け、2年生の GLP のメンバーが核問題についての包括的な理解をまとめオンラインプレゼンテーションアプリ prezi で mini-project を作成。事前に提出し、MIIS の研究員からフィードバックを受けました。

作品のリンクは以下の通り。

http://prezi.com/qfqn2elv0ggk/?utm_campaign=share&utm_medium=copy



MIIS 研究員からのコメント: “Your Prezi is well designed. The image of the road and various signposts are effective. You have only a few edits to make. On the opening content slide “Radiation,” change text to “their cells die...” (present tense); Slide 2 “radioisotopes” (plural); Pay attention to article usage: Insert “A” chain reaction... “an” Advisory Committee... On slide (1955), change to insisted on... the abolition... the UNGA; CTBTO “explosions” (plural); Citations (plural). Generally, check for article usage and verb tense agreement throughout your document. Your visuals are well done!”

■ 行程

初日は、今回の CIF の会場となる長崎活水高校にてアメリカ・ロシア、日本の高校生と初めて顔を合わせました。そのあとはグループに分かれ、活水高校の生徒さんのガイドで、出島とグラバー園を見学しました。長崎という、ほかの日本の地域にはない異国の雰囲気の中で、英語で交流をしました。

2 日目の午前中は活水高校・講堂にてリハーサルを実施。午後にはフィールドワークで長崎平和公園を訪問。北村西望制作の平和祈念像を前に、全員で記念撮影をしました。その後、長崎原爆資料館にて核兵器の引き起こす悲劇を改めて確認しました。引き続き、被爆者の山脇さんによる被爆体験を英語で伺いました。

3 日目はフォーラム初日となり、日・米・露の各校がそれぞれの研究成果を発表しました。基調講演では朝長万左男長崎原爆病院名誉委員長が原爆70年の科学の進歩について語っていただきました。

フォーラム2日目(4日目)は、ゼンジ在日アメリカ領事館職員から外交官の仕事についての講義を受けた後、創価高校の発表日でした。映像制作で作成した動画は大変に好評で、CTBTO に対する提言もしっかりと、最後まで堂々と発表してくれました。すべての発表を終えた後、国内で唯一入場できる現存する被ばく遺産である城山小学校を訪問しました。当時最新のコンクリート施設が爆風で吹き飛ばされたという歴史と、現在生き残っている唯一の生存者の原田さんのお話を伺い、原爆の壮絶な力を想像することができました。その後、原爆資料館に移動して、ゼルボ CTBTO 議長との懇談会に参加。青年を前に、ユーモアのセンスで高校生の質問に真摯に答えてくださいました。何より、北朝鮮問題が過熱する中、この会合だけのためにウィーンから日帰りであらったという情熱に感動しました。夕方より行われた公開シンポジウムは多くの聴講者とメディアも入っての本格的なものでした。その席上の最後に行われた日本語と英語を交えてのシンポジウムで、日本代表の一人として小野寺君が CIF の取り組みの意義をしっかりと語ってくれました。また、ゼルボ議長からの質問にもしっかりと答えてくれました。客席からの「あなたにとっての平和とは」という質問にも、「全人類のひとが幸せになること。それははるか遠くにいる人の痛みや苦しみを、自分のことととらえることです。それを実現するために今は力をつけたいと思います。」と堂々と答えてくれました。

フォーラム最終日となる5日目は、長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)の吉田文彦副センター長からのこれからの核時代についての講義に先立ち、日米露の3ヶ国の高校生が、フォーラムを通して自分たちの学んできたものを、小グループで報告しあいました。話し合う事で、コミュニケーションを取ることの大切さと、国境を越えて人と交流する事、そしてグローバル化した事で、国境を越えて連帯出来る事を確認しあいました。閉会の挨拶に立たれた鈴木達治郎 RECNA 所長は、高校生たちの高い研究成果に感動しつつも、自分たちの生きている内に核兵器の撤廃を目指すというさらなる高みに向けて、より具体的なアドバイスをいただきました。

◆ 生徒感想

「5 日間にわたって各国のトップクラスの高校生たちと英語で渡りあうということ自体が非常に刺激的な体験でありました。また、CIF 終盤では、CTBT 準備委員会事務局長のラッシーナ・ゼルボ氏をお迎えして、軍縮不拡散教育国際会議一般公開シンポジウムが行われました。ここで自分はパネリストとして登壇し、参加者の質問を受けさせていただきました。一般の方々からの質問でしたので、ここは日本語だったのですが、その前までの学術的な話題とは打って変わって、『あなたにとっての平和とは何ですか』という非常に単純な質問を受けました。その質問に対して答え、また他の人の答えを聞く中で、なぜ自分たちは平和を目指すのか、という、最も根本的で、最も大切な、考え方の土台の部分を変更して考え直すことができました」

「閉会式では CIF の期間中にできた友人と別れを惜しみました。長崎の地から平和と不戦の

誓いに立った多くの若者が自らのコミュニティで力を発揮していくのだと思うと、平和な未来を確信せずにはられません。また、私も、これから頑張っていきます。理想は現実の上に成り立ちます。先人が築いてきた日本という国の安定を守りながら、理想の構築に向けた着実な一歩を踏み出していきます。そして、平和を真に実現することのできる実力をつけていきます」



Critical Issues Forum の2017年生徒発表の様子 参考サイト

<http://sites.miis.edu/criticalissuesforum/2016-2017-student-presentations/>

C) CTBTO サイエンスアンドテクノロジーカンファレンス(SnT)

- 実施 2017年6月25日(日)～7月2日(日)
- 参加者 代表生徒1名(2年小野寺改主君を招聘。日米露より1名ずつ)
- 場所 オーストリア・ウィーン ホフブルグ宮殿
- 主催 包括的核実験禁止条約機関準備委員会(CTBTO)
- 内容 CTBTOのゼルゴ議長から、核実験廃止のための国際会議であるCnT 2017に、核なき世界を担うCIFに参加した高校生3名を代表としてCIFにおいてパネルディスカッションのプレゼンターとして創価高等学校2年生小野寺改主くんが招聘されました。世界のトップレベルの国際会議に参加し、また大学生を中心とした会議であるCTBTO Youthにも参加し、若者の世代の核なき世界に向けての連帯を深めました。

■ 行程 5日間に渡るカンファレンスでは、世界の最先端の理系研究と各国大臣や国際機関のトップが集い、これからの核廃絶の道について、外交トップレベルの来賓を迎えての会議や、各国の研究所長による難易度の高い最新の検査技術と課題についてのディスカッションなどが、夜6時過ぎまでみっちり入るというスケジュールでした。2日目にはミドルベリー研究所のウィーン事務局であるVNDCPを訪問。IAEAで長きに渡り貢献し、ノーベル平和賞受賞チームメンバーであられた、ローラ・ロックウッド所長から、現場から見た国際社会における核廃絶への道についての講義を受けました。その後、国連ウィーン本部を訪問しました。4日目には、青年のための啓蒙企画提案発表会が行われ、参加者10名のうち代表の3組の1つとして、小野寺君がプレゼンを行いました。実はその実施を前々日に詳細を伝えられ、ひと晩でプレゼンを作成して臨みました。



D) G20 高校生向け国際会議

- 実施 2017年7月5日(水)～7月9日(日)
- 参加者 代表生徒1名(2年岡田悠也くん)
- 場所 会場 ドイツ・ハンブルグ ヨハネウム学院
- 主催 ドイツ国財務省(G20ホスト国)

■ 内容 2017年のG20議長国ドイツが実施するG20各国の高校生向けのプロジェクト「Global Classroom in the G20 Finance Track」に高校3年生5人のグループが応募し審査を通過した結果、代表1名がハンブルグに招待されました。

■ 行程 ドイツでは、各国代表の高校生たちが、イベントの最終プロジェクトとして、「G20に対する20の質問」をまとめて、正式に提出できる書面(コミュニケ)を作るという課題に取り組みました。「財政システム」、「デジタル化」、「環境」、「G20と世界」という観点から5つずつ、合計20の質問を考える活動をしました。各国代表の高校生が自分の名前と国の旗がおかれている位置に座り、議長を中心にG20に提出する書面の内容についてディスカッションの様子は、まさに模擬G20でした。岡田君もしっかりとディスカッションに参加し、パネルスピーカーの教授に高く評価されていました。

3日間のグローバルクラスルームは、ハンブルグ市内の観光、暗闇の中の対話(盲目体験)、模擬G20、等、様々な角度から、良い刺激にあふれた素晴らしいプログラムでした。「G20に対する20の質問」の内容も、「デジタル化におけるジェンダーギャップについて、G20が推進できることは何か」や、「保護主義から離脱して、若者が本当に有益だと感じられるような自由貿易を推進するためにG20は何ができるか」など、とてもレベルの高い内容にまつまっていました。

表彰式終了後にはカナダの外務大臣であるフリーランド氏と懇談をすることができました。またカナダのトルドー首相との出会いの機会もありました。



E) ゲスト講義および都内フィールドワーク

- 講義 国連報道官 須賀正義氏 (2017年4月14日)

- 概要

「持続可能な開発目標とは何か」をテーマに、国連海洋会議、グローバルコンパクト、ニューヨーク宣言など、多面的かつ具体的な事例を踏まえてわかりやすく講義をしていただきました。また、世界市民のあり方などについても懇談的にお話しいただきました。

- ◆ 生徒感想

「国連が抱えている地球規模課題の複雑さと解決の難しさを痛感し、なかなか進展しないという現実も知ることができました。地球規模課題解決のためには過去・現在・未来とマクロ・ミクロの視点を念頭に置いて考える必要性があり、受け入れる側と受け入れられる側の双方の視点に立って考えることが大切だと思いました。将来国際的な仕事に就く時に、多岐的な視野がないと問題は解決できないということを実感し、その力を今のうちに培う必要があると思いました」



- フィールドワーク 国連大学訪問 (2017年5月9日)

- 概要

国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) プログラムアソシエイトの今井夏子さんと、国連広報センターの千葉さんの講義を受講しました。

今井さんの講義では、国連大学の氏名、UNU-IASの活動、人間の安全保障について話ししていただきました。また、千葉さんの講義では、国連広報センターや、国連とは何か、今世界が直面している課題と対策についてお話しくださいました。

その後、1945年から国際連合のオリジナルの文書が保存されている国連大学内の図書館と、安倍首相やアンジェリーナ・ジョリーが訪問したウ・タント会議場を見学しました。

- ◆ 生徒感想

「国家のみでは解決しきれない問題が増えた今、国連大学は国連と連携することで今まではなかった視点や解決へのアプローチができるのではないかと考えました。なぜなら国連大学には膨大な資料があり、国際問題に明るい研究者の方たちが毎日研究されています。ここなら、学際的な立場から第一線で活動をする組織に適切な助言をすることが可能だと思うからです。自分もこのような場所で活動してみたいと感じました」



■ 講義 ハワード大学 マジェード博士(2017年6月16日)

■ 概要

「アメリカ社会の多様性」とのタイトルで、英語で講義してくださいました。民族の概念について確認し、アメリカ社会における差別の歴史についてお話しいただいたあと、「差別は人々を隔離し、人間としての最も基本となる他者に対する尊敬や社会に対する希望を失わせてしまうことだ」と強調。「差別を打ち破るために、尊敬、慈愛、正義を広めるグローバルリーダーに」と、生徒たちに期待を寄せました。

◆ 生徒感想

「今回の講義を通して僕が考えたことは、世界を知るためには、現在の国の状況を知るだけでなく、その国が今まで積み重ねてきた歴史を学ぶことが大事だということです。なぜなら現在の国の状況とその国の歴史は密接に関わっているからです。世界中で様々な人やものに出会ううえで、本質的な部分である歴史を学ぶという意義はとても大きいと思いました。初めての英語による講義は大変でしたが、とても良い経験になりました」



■ 講義 ミドルベリー国際大学院 トキ・マサコ氏(2017年10月28日)

■ 概要

アメリカ・モンレーのミドルベリー国際大学院とオンラインでつなぎ、長年にわたって核不拡散教育に従事していらっしゃるトキ・マサコ氏に英語で講演していただきました。トキ氏は、「Toward a World Free of Nuclear Weapons」(核兵器なき世界を目指して)とのテーマで、各国の核兵器をめぐる現状や課題、本年7月に採択された核兵器禁止条約の概要、市民社会の役割などを述べたあと、核兵器廃絶に向けて若い世代の担う役割の重要性を繰り返し強調しました。GLP生の質問にも丁寧に答えていただきました。

◆ 生徒感想

「若い世代が核兵器の廃絶に関心を持ち、考えることは次世代にも影響するのだわかりました。特に、日本の私たちは、唯一の被爆国として、核兵器の恐ろしさを伝え広めるべき人間の一人なのだと自覚させられました」

■ 懇談 デポール大学 ジェイソン・グーラー准教授

■ 概要

デポール大学准教授、池田大学教育研究所所長のグーラー氏をお招きし、英語での懇談会を開催しました。懇談会では、「グローバルリーダーに必要なスキルは何か」、「価値とは何か」、「創価教育の社会での役割とは」「よりよい対話を行うために必要なことは」などの多角的な質問に、丁寧に回答していただきました。

◆ 生徒感想

「強く印象に残ったことは、教授の態度や姿勢です。教授が私達に対して関心を持っていることのが感じられる受け答えで、教授が一方向的に話すのではなく、私達と一緒に話を進めて行く様子に驚いたからです。生徒の質問に対する答えにもあったように、誰かと対話をする際、相手への関心や興味を向けられれば、その会話は深い対話となるという事に自然と気がつくことができました」



■ 講演 核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN) ベアトリス・フィン事務局長

■ 概要

昨年のノーベル平和賞を受賞した国際 NGO である ICAN のベアトリス・フィン事務局長の講演会が国立オリンピック記念青少年総合センターで開催され、GLP 生で参加しました。フィン事務局長は講演の中で、核兵器廃絶に向けて市民社会が果たす役割の重要性を強く訴えました。

◆ 生徒感想

「女性が堂々と先陣を切って核兵器の廃止を訴える姿と、その様子が世界的に評価されている事実にたくさんの勇気をもらいました。講演の中で強調されていた『希望によって核は廃絶できる』ということを感じて、私自身、もっともっと積極的に疑問を持って積極的に学び、世界平和への揺るがない信念を作ろうと決意しました」



F) プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション・英語プレゼン)

■ プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション)

■ 概要

学園祭において、夏にカリフォルニアと沖縄で実施したフィールドワークの研究内容を、ポスターセッション形式で発表しました。1日目は学園生を対象に、2日目は一般の来場者に発表を行いました。それぞれのグループが事前に立てた論題がどのように展開したのかをポスタ

ーにまとめ、声の大きさや速さなどの話し方、身振り、目線などの発表態度を意識しながら、学園生だけでなく一般の方々に向けてポスターセッションをすることができました。



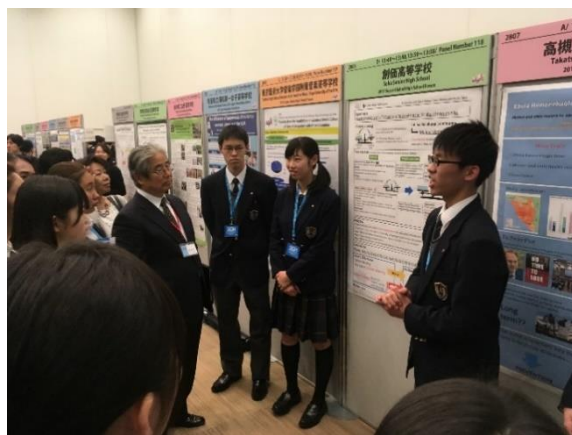
■ プレゼンスキル(英語プレゼン)

■ 概要

11月25日、SGH全国高校生フォーラムが神奈川・横浜市のパシフィコ横浜で開催され、GLP代表4名がポスターセッションに参加しました。

これに先立ち、メンバーは事前にネイティブスピーカーのプレゼンテーションスキルについてのレクチャーを受け、ペアになってLとRの発音練習や、ジェスチャー、言葉の強調などの練習をしました。

当日のフォーラムにはSGH指定校123校、アソシエイト校56校の生徒代表が参加。日頃学んできた社会問題などの概要や提案などを英語でポスターにまとめて発表しました。本校生徒は「紛争地域における平和構築とパワーシェアリングの役割」と題して、平和な世界構築に向けての課題とその解決へのアプローチを提案しました。多くの方が足を止め、活発な質疑応答が行われました。



2806

➔ Soka Senior High School

Ryohei Ishimura, Daiichi Takagi, Sachi Nishida and Noriko Ogita

Hypothesis
Power sharing is an effectual way to create a multicultural community.

• Power sharing

Forms: Distribution of representative seats and money, etc.

By: The United Nations, a court, negotiation between ethnic leaders, etc.

➔ **Mutual dependence**

• A multicultural community

Coexistence is essential because people depend on the benefit gained by each other.

Case studies (Research areas: Johannesburg, Sarajevo, Brussels, Belfast)

BEFORE	AFTER
<p>Johannesburg, South Africa An economic disparity between <u>the whites</u> and <u>the blacks</u> Blacks Unstable their living standards in the black area (they boycotted against the whites.) Whites Lack of security because of blacks' boycotts</p>	<p>Blacks Their living standards were improved and they gained economical stabilization. Whites They obtained security from the boycotts.</p>
<p>Belfast, Northern Ireland Disparities in social status between <u>Catholics</u> and <u>Protestants</u> (Catholics were living in Northern Ireland and Protestants lived in the south of England) Catholics Catholics had political participation, though all Protestants had authority, they were re-elected in order to insist their authority. Protestants Being in danger because of resistance movement of Catholics</p>	<p>Catholics They gained authority to govern their local politics. Protestants They obtained their stable living security from being in conflict.</p>

Analysis

○ Power sharing can make **mutual dependence** by adjusting imbalance of power between ethnic groups.

○ There are **3 steps** to reach a mutually dependent community via power sharing.

Step 1. **ONLY** the weaker demands its own rights or benefits from the stronger.

Step 2. Power sharing is implemented.

Step 3. **BOTH** the stronger and the weaker depend on benefits gained from each other.

Conclusion

Power sharing is an effectual way to create a multicultural community.

Local / City scale

Understanding the role of **power sharing**

Ethnic Identity
Based on religion, culture, race, language, etc.

➔ Hints

➔ Extension

National / State scale

Today's world ...

Nationalism is becoming powerful.

References

1. The United Nations, 'The United Nations, a court, negotiation between ethnic leaders, etc.', 2000.

2. The United Nations, 'The United Nations, a court, negotiation between ethnic leaders, etc.', 2000.

3. The United Nations, 'The United Nations, a court, negotiation between ethnic leaders, etc.', 2000.

G) 英字新聞の取り組み

■ 概要

GLPの日頃の活動やフィールドワークの成果について、情報を整理し、的確に発信することを目指して英字新聞作成に取り組みました。

この活動を通し、GLPメンバーは新聞を作成するときの英語の表現法や、情報を取捨選択する大切さを学ぶことができました。

また、一般社団法人グローバル教育情報センターが主催する、第2回「英字新聞甲子園」に出場し、作成した新聞を披露するとともに、制作過程での苦労や学んだことを発表しました。(2017年12月17日実施)



■ 主なスケジュール

①2017年6月13日(火)

授業内で講義の上、ディスカッションを通じて、「誰に向けて作成しているのか」を意識することや、情報を共有する大切さを学びました。その後、プロジェクトの編集長を選出し、何を伝えたいか、誰に伝えたいかを話し合いました。

②2017年7月7日(火)

英字新聞のトピック決めを行いました。「GLPにしかできないこと」、「去年のものとは違うもの」を前提に話し合い、フィールドワーク、紛争とSDGsを関連させたオピニオン、SDGsに関わる小平市のことを書くことを決めました。最後に、記事の分担を決めました。

③2017年7月11日(金)

英字新聞の工程表の作成をトピックごとに行いました。また、インタビューの対象者を決め、質問の内容を考えました。その後、インタビューの希望日程を決めました。

④2017年9月8日(金)

これまでに書いてきた各グループの記事の内容や英訳について検討し、見出しを考え、記事に添える写真を選びました。できあがった記事を第1稿として提出しました。

⑤2017年9月26日(火)

第2稿をグループごとに作成しました。第1稿は「日本語をそのまま英語に訳している」との指摘があり、タイトルや文中の曖昧で不自然な表現や誤字脱字の修正を中心に行いました。

⑥2017年10月6日(金)

返された第2稿について、グループで話し合いながら、記事の修正や加筆をしたり、写真や図の大きさやレイアウトを考え直したりしました。

⑥2017年10月27日(金)

最終稿の英字新聞を丁寧に確認しました。

※完成した英字新聞は、10.関係資料③に収録

◆ 生徒感想

「英字新聞記事の作成を通して感じたことは、記事に何を書くかについて、取材した内容や自分たちが見聞きしたことから抽出していくことの難しさです。新聞記事では、取材したことの全てを記事にするのではなく、その中から記事に必要な情報だけを判断する必要があります。『記事を通して何を伝えたいのか』ということが、記事に必要な情報かどうかを判断する基準になると思いました。」

H) 映像制作の取り組み

■ 概要

GLPの研究の成果物として、これまでに学習した内容を表現する映像を制作しました。1グループ4人の4つのグループで90秒程度の作品を制作し、最後の場面で英語でメッセージを提示することを条件とし、「今年度の活動を通して学んだこと」というテーマで制作しました。

■ 主なスケジュール

①2017年10月3日(火)

GIGAVISIONによるレクチャーの後、映像を感覚で捉えるのではなく、細部を観察し論理的に考える力をつけることを目指して、映像鑑賞を行いました。「アナと雪の女王」などの映像分析を通し、各シーンにわけて分析することや、テーマ設定に必要な視点について説明を受けました。また、制作側が伝えなかったことの根拠を示すことが重要であることを学びました。

②2017年11月10日(金)

視聴者に分かりやすくメッセージを伝えるために、音楽、アングル、小物、光と影などを効果的に利用する方法を学びました。次に、映像構成についてのレクチャーを受け、どのように映像を作り上げていくかのプランの立て方を学び、グループで映像構成について話し合いました。

③2018年1月12日(金)

映像編集の考案をGIGAVISIONに伝え、完成イメージを共有しました。映像に取り入れる効果音やBGM、映像の切り替えなどの編集点を確認し、使用する映像素材を提出しました。

③2018年1月23日(火)

お互いの映像を見合い、最も伝えたいメッセージが何なのかを話し合いました。どの映像もメッセージを伝えるための表現方法に工夫が凝らされており、多くの意見が飛び交いました。

◆ 生徒感想

「映像分析のレクチャーを受け、無意識のうちに製作者が伝えようとしている思いや、意味などを
感じ取ることはなんとなくできるものの、分析しようとするのが難しいと感じました。テーマについて考えるときも、それぞれのシーンの概要をひとつのテーマとしてまとめるのが難しいです。映像の分析を通して、
これからは映像を見たときに無意識にただ楽しむだけでなく、その映像に込められた製作者の隠れた
思いやメッセージを分析してしっかりと感じ取りたいと思いました。」

1) 評価と分析

GLPの活動の評価方法として、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させた。本校のSGH構想調書において定義された「グローバル人材」の要件をもとに、以下のような資質と能力を具体的に取
り上げ、これをGLPの生徒に自己評価させた。この自己評価表については、以下の手順で
進められた。

1、3月オリエンテーション:1年間の活動を通じて自分が伸ばしたいとかがえている能力
に○をつけること。その中でもとりわけ向上させたいと考えているものに◎をつけること。

2、2月終了時点:自分がこの1年間で向上したと考えられる能力に◎を、まあまあ伸びた
物に○を、あまり伸びなかったものに△をつけること。どちらでもないものはそのまま無記入とす
ること。

3、但し、記入した場合は、その根拠となる具体的な例を記入すること(GLPの活動に関わ
らなくてもよい)。

4、終了後に映像制作を行ったグループに分かれて、他のメンバーが見た評価を別の色の
ペンで記入すること。

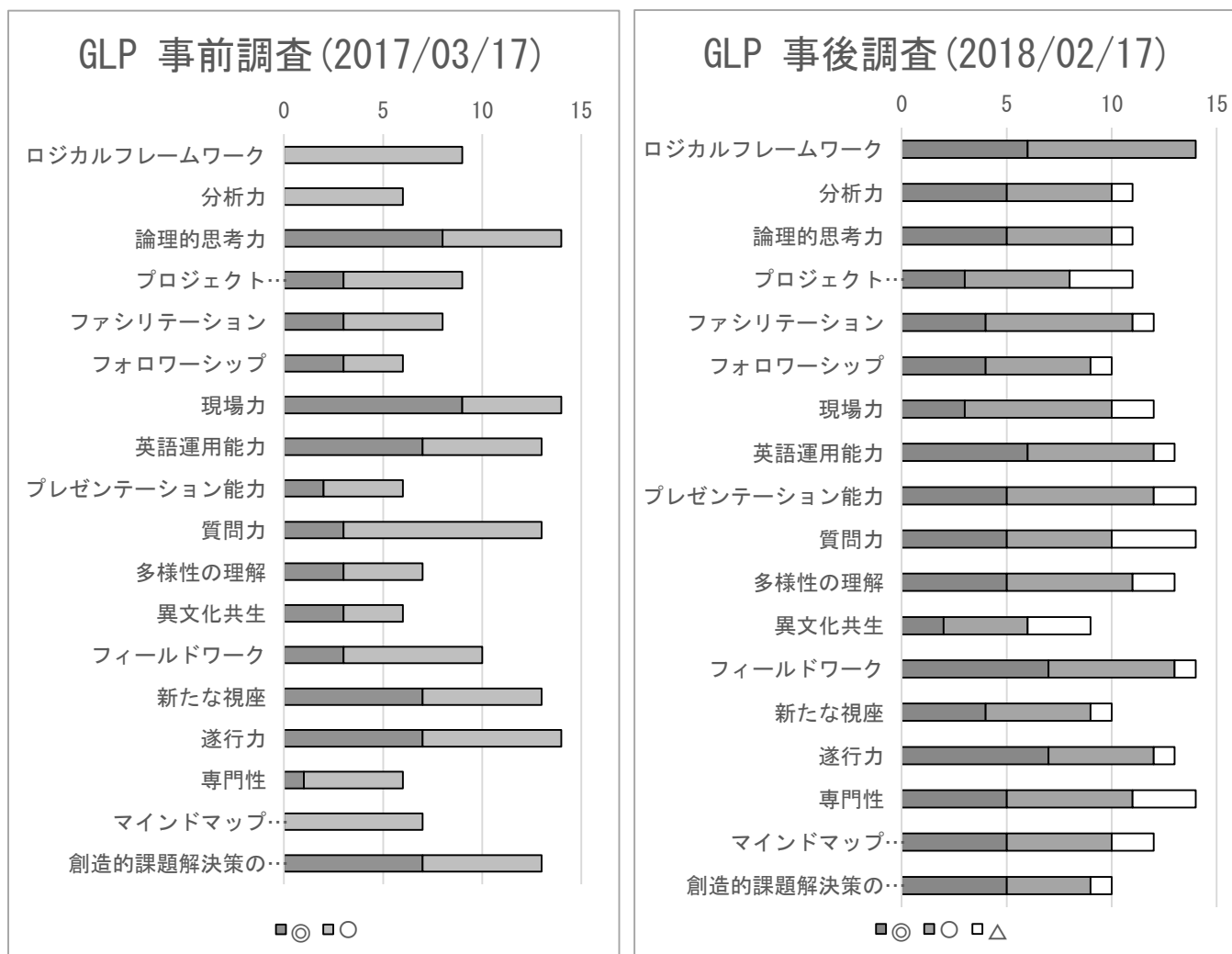
	項目	分野		項目	分野
世界市民の能力	問題解決能力	ロジカルフレームワーク	世界市民の資質	多面的・多角的な視点と寛容の精神	多様性の理解
		分析力			異文化共生
		論理的思考力			フィールドワーク
	プロジェクトマネジメント	新たな視座			
	協働的能力	ファシリテーション		教養と理解	遂行力
		フォローアップ			専門性
		現場力			マインドマップ・設計のプロセス
	対話力・コミュニケーショ ン能力	英語運用能力			創造的課題解決策の考察と実践
		プレゼンテーション能力			
		質問力			

獲得させたいグローバル人材の資質・能力一覧

4月の事前調査により、GLP 生徒は「論理的思考」「現場力」「遂行力」に高い関心を示している。一方、「フォロワーシップ」「異文化共生力」が低いのは、SGH 全体のアンケートにも見られるように、本校生徒の傾向として、もともと「協働的な資質」が全体として高いことに起因すると考えられる。また、「プレゼンテーション能力」への期待が低いのは、GCP ファイナル・プロジェクトはじめ、英語授業など様々な場面においてプレゼンテーションを行うことが日常化した結果、GLP でとりわけ向上させたい項目から外れたことが予想される。

事後調査では全員が「ロジカルフレームワーク」の向上を認識した。事前においても獲得したいスキルとして数値の高かった「遂行力」は、事後でもその成長を認識できている。また3月当初にとくに高めたい力のひとつ「英語運用能力」と同時に、伸ばしたい技術としてそれほど高いポイントのなかった「プレゼンテーション能力」と「専門性」が事後では高くなったのは、GLP 年間を通じて、高度な探究活動の末に、英語での発表を求められた結果と考えられる。

一方で、伸ばしたい力の上位に上がっていた、「質問力」「創造的課題解決策の考察と実践」では、伸びなかったもしくは評価しない(無印)の解答が3割近くを示した。この部分でのプログラムの改善が必要と考える。



4. 言語技術

A) 概要・年間スケジュール

■ 概要

「言語技術」とは、「議論する(話す・聞く)技術」「読解する(読む)技術」「作文する(書く)技術」「思考する(論理的思考・批判的思考の)技術」といった、言語をより有効に運用するための技術のことです。世界の多くの国々では、この「言語技術」が、各言語の「母語教育」として、小学校から高校まで体系的に教えられています。つまり、世界には発想・表現方法に共通の基盤があり、議論や交渉などは、それらに基づいて行われているということです。まさに「言語技術」は、言語を運用する上での「世界標準」であり、世界の多様な人々と議論を交わし、グローバルに活躍するための必須の能力だと言えます。本校では、グローバル人材像の資質として、「地球規模課題(Global Challenges)の解決に貢献する能力」を有することを定めていますが、この能力の基盤には、コミュニケーション能力や論理的・批判的思考力が欠かせないとしています。「言語技術」の導入は、まさにそれらの力を鍛えていくことを目的としています。本校では、つくば言語技術教育研究所所長の三森ゆりか氏が開発した「言語技術」教育のプログラムをもとにし、同氏から指導・支援を受けながら、「言語技術」教育を実施していきます。

「言語技術」の授業では、まず日本語でトレーニングを行い、同じ内容のトレーニングを英語でも行うという往還学習を実施します。この往還学習は、言語間の共通点や相違点を認識することで、「言語技術」習得の効率性を高めるという本校独自の取り組みです。この取り組みによって、日本語の言語能力の向上はもちろんのこと、各言語共通の「言語技術」の獲得は、外国語習得の効率化、及びその運用能力の向上を促進すると思われれます。このようにして鍛えられた言語運用能力は、全教科における生徒一人ひとりの学習理解を促進し、実社会・実生活の営みも、より充実したものにしてくれるはずです。この「言語技術」の授業を通し、世界に通用する言語運用能力を備えた人材を、本校は育成していきます。

■ 昨年度との相違点

今年度から新たに、2年生の総合クラス(8クラス中6クラス)で、週1時間「言語技術」の授業を開設しました。2年生では、以下の3つの技術を日本語と英語でトレーニングしました。

- ①「情報分析」の技術
- ②「認知」の技術
- ③「議論」の技術

その他にも、2年生では以下の3つのことに取り組みました。

- ①GCP企画と連動した「人権ディベート」
- ②進路指導部と連携し、大学の志望理由書の作成指導
- ③当該学年と連携し、修学旅行先についてのポスターセッション

昨年度から実施している1年生では、以下の2つのことに新たに取り組みました。

- ①1年間GCPで学んだ内容をもとに、1000字の小論文の作成指導
- ②高校生活のキャリアデザインを文章化する「パーソナル・エッセイ」の作成指導

その他のものとして、以下の5つのことにも新たに取り組みました。

- ①生徒自身が、毎回の授業における学びの履歴をいつでも振り返り、様々な場面で活かせるポートフォリオの作成
- ②学校全体に「言語技術」の活用を浸透させるため、教員自身の言語運用能力向上を目的とした、担任教員の「言語技術」の授業への毎回の参加
- ③創価中学校、東京創価小学校における「言語技術」の内容を取り込んだ授業の実施
- ④創価大学の初年次必修科目である「学術論文作法」を担当する教員と授業参観の交流
- ⑤学園祭のメイン展示会場、校外の方対象の教育公開講座、オープンキャンパスにおける模擬授業の実施

■ 年間スケジュール

2017年度 高校1年生 言語技術計画

1学期

時数	授業内容
1	・言語技術とは何か ・問答ゲーム(好き嫌い、立場限定、なりたいたくなくない)
2	・英語問答 ・ナンバリング
3	・どちらが好きか ・どちらを選ぶか ・賛成か反対か ・英語問答
4	・5W1Hを意識して例文添削する
5	・5W1H(英語) ・質問の分解(ブレイクダウン) ・2往復の問答ゲーム
6	・相手の応答を掘り下げる ・2往復、3往復の問答ゲーム
7	・パラグラフとは何か ・パラグラフの構成要素(TS、SS、CS) ・パラグラフの実践(コンビニ)
8	・説得力のある理由を考える(SSの掘り下げ) ・意見のパラグラフの実践(携帯電話)
9	・有効なTSの作り方 ・意見のパラグラフの実践(読書)

2学期

1	・1学期の振り返り ・問答ゲーム
2	・例示のパラグラフの実践(好きな街)
3	・英語のパラグラフの実践 ・つなぎ言葉
4	・事実と意見(日本語、英語)
5	・反論、交渉の技術
6	・キャンプの持ち物(情報を整理分類する・ラベリング・空間配列の原則)
7	・情報の整理分類、ラベリング、空間配列の原則の応用(パラグラフ・ライティング)
8	・反論(英語)
9	・時間配列の原則(物の作り方)
10	・パーソナル・エッセイの書き方(複数のパラグラフで文章を書く)
11	・パーソナルエッセイを書く

3学期

1	・概要から詳細へ ・机の並び方
2	・机の並び方振り返り ・道案内
3	・英語で道案内 ・英語でカレーライスの作り方
4	・GCPで学んだことをもとに2パラグラフで意見文を書く
5	・意見文書き
6	・道案内振り返り ・1年間の振り返り ・問答ゲーム ・テキスト、ファイル回収

2017年度 高校2年生 言語技術計画

1学期

1	ガイダンス
2	描写①
3	描写②
4	イラストの分析
5	絵画の分析①
6	絵画の分析②
7	詩の分析
8	詩の分析②
9	小説の分析①
10	小説の分析②

2学期

1	マンガによる視点変更1(赤ずきん)
2	マンガによる視点変更2(赤ずきん)
3	テキストの視点変更1(動詞の変化・英語)
4	テキストの視点変更2(振返り・事実整理)
5	テキストの視点変更3(年表作成)
6	テキストの視点変更4(歴史執筆)
7	テキストの視点変更4(歴史執筆)
8	論理1(三段論法の練習問題)
9	論理1(答え合わせ)
10	論理2(論理の飛躍・隠された前提)/英語
11	反論の方法

3学期

1	ディベートのルール確認、ブレインストーミング
2	ディベート練習①【日本語】
3	ディベート練習②【日本語】
4	ディベート練習③【英語】
5	ディベート練習④【英語】
6	立論(小論)執筆【「型」の解説・執筆】

B) 学習・トレーニング内容

1年生

1年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

- ①「対話」のトレーニング
- ②「作文」のトレーニング
- ③「情報伝達」のトレーニング

以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

①「対話」のトレーニング

「対話」のトレーニングでは、(1)「問答ゲーム」、(2)ナンバーリング、(3)質問の分解、(4)論拠の確認・反論の技術、(5)「事実」と「意見」の区別 の5項目を行いました。

(1)「問答ゲーム」

「対話」のトレーニングでは「問答ゲーム」を中心に行います。「問答ゲーム」は「対話」の技術のトレーニングの最も基本となるものです。2人1組となり、簡単な質問と応答をゲーム形式で繰り返します。「好きか嫌いか」という簡単な質問から始まり、「どちらが好きか」「どちらになりたいか」という選択を迫る質問、最後は「賛成か反対か」といった高度な質問まで行います。日本語で「問答ゲーム」を行った後には、中学導入レベルでの簡単な英語による「問答ゲーム」を行います。また、応答の際に「好き」や「賛成」など、あらかじめ立場を限定して答えさせ、自分の考えとは逆の立場に立って考えさせることも行いました。

対話のトレーニングの実践

例題(理由は1つ)

1. あなたは晴れの日が好きですか？
2. あなたは冬が好きですか？
3. あなたはテストが好きですか？(好き)
4. あなたはゲームをすることが好きですか？(嫌い)
5. あなたは魚になりたいですか？
6. あなたは大人になりたいですか？

Training on Dialogue

Example

1. Do you like watching TV?
2. Do you like cats?
3. Do you like baseball?
4. Do you like reading *manga*?

発言の際は、以下のルールを必ず守って行います。

- ・結論をまず先に述べ、その後に必ず根拠をセットにして言う。
- ・発言の最後に結論を繰り返す。
- ・主語・目的語を省略しないで話す。
- ・質問に対して直接的・具体的に答える。

上記のルールに則ったものを「応答の型」として、繰り返しトレーニングし、体に染み込ませていきます。また、英語の「応答の型」も同様にトレーニングしていきます。

応答の型

「私は〇〇が好き(嫌い)です。 ←結論を先に
なぜなら、…だからです。 ←理由を必ずつける
だから、
私は〇〇が好き(嫌い)です」 ←結論を繰り返す

※ 対話の時は相手の目を見ること！

Training on Dialogue

英語の問答ゲームの「型」

“Yes, I like 〇〇, because That's why(so) I like 〇〇.”

“No, I don't like 〇〇, because That's why(So) I don't like 〇〇.”

(2) ナンバーリング

理由が複数個ある場合は、ナンバーリングの技術を用います。ナンバーリングの型を日本語・英語それぞれで覚え、「問答ゲーム」で繰り返しトレーニングをします。

応答 (ナンバーリング) の型

☆ナンバーリング

初めに理由がいくつあるかを示し、数字を使って順番に意見や理由を述べること。

「私は〇〇が好き(嫌い)です。

理由は2つあります。1つめは・・・だからです。2つめは・・・だからです。

だから、私は〇〇が好き(嫌い)です」

ナンバーリングの実践(English)

☆英語問答の「型」

Yes, (No,) I (don't) like ○○.

I have TWO reasons (why I like ○○).

Firstly, Secondly,

That's why(So) I like ○○.

対話のトレーニング

例題(理由は2つ)

☆即座に立場を決める！理由はできるだけ具体的に！

1、子ども部屋にテレビがあることにあなたは賛成ですか、反対ですか？

2、スマートフォンを見ながら歩くことにあなたは賛成ですか、反対ですか？

Training on Dialogue

Watching
your
Friend's
eyes!!

- 1、 Do you like Disneyland?
- 2、 Do you like jogging?
- 3、 Do you agree that all high school students should belong to club activities?
- 4、 Do you agree that all high school students should do volunteer activities?

(3) 質問の分解

内容の濃い対話のために、相手に情報を伝える時は5W1Hをもとに、落ちている情報がないかどうか常に意識して話を組み立てます。また、相手の話を理解するために5W1Hを軸に、不足している情報がないかどうか常に意識して聴き、質問を分解(ブレイク・ダウン)して聞き返します。「質問→応答」の1セットで終わっていた「問答ゲーム」を、「質問→応答→質問→応答」と2セット、3セットと往復して行うようにします。このとき、話題を掘り下げていくような質問をすることを意識し、話題が拡散しないようにさせます。

対話のトレーニング

☆コミュニケーションの基本

- ①自分の考えをより正確に伝える。
- ②相手の考えをより正確に理解する。

①②のためには、より具体的に話す・聞くこと

→ 5W1Hを意識して話す・聞くようにする！

→ 誤解を生じさせないコミュニケーションが生まれる

5W1Hを意識した対話のトレーニング

次の文で不足な情報を5W1Hを使って質問しよう。

この前、買い物に行って、うっかり置き忘れてしまったらしいのです。不便だから取りに行こうとしているようなので、一緒に行ってあげようとしているみたいです。

5W1Hを意識した対話のトレーニング

SVOCMを意識して、次の文を英語化してみましょう

そのとき足りない情報は何でしょうか？またそれを尋ねる5W1Hは？

この前、買い物に行って、うっかり置き忘れてしまったらしいのです。

When? Who? Where? Who?
 Last ○○, ●● went shopping to △, and said ◎◎
 forgot ■■ うっかり.
 What?

5W1H in ENGLISH

- 問題文を英語で考えた方が、欠落している情報がよく見えるので、5W1Hは意識しやすい。
- 5W1Hのうち、HOW? は、日本語のWHATと混ざることが多い。HOW? は形容詞・副詞を尋ねる文になる。

(4) 論拠の確認・反論の技術

対話をしている時、相手の発言が、ある「常識」を前提としてなされる場合があります。この「常識」が共有されていないと、対話がかみ合わなかったり、後に問題を引き起こしたりします。よって、対話をしている際には、相手の発言の陰に潜んでいる「常識」に注意していく必要があります。そして、潜んでいるとしたらどのような「常識」が隠れているのか気づけるようにトレーニングをします。

また、「問答ゲーム」や質問の分解の延長として、反論の技術もトレーニングします。2種類の反論の方法を知り、時と場合によって有効な方法を判断して、用いることができるようになります。

論拠の確認・・・常識の再確認

自分が話している(文章を書いている)時、聞き手(読み手)も当然理解をしていると思って話して(書いて)いたら、相手は全く理解をしていないという場合がある。

→対話・議論の前提＝常識(Warrant)が共有されていない。→対話・議論がかみ合わない。

反論の技術

反論の方法の種類

- ①相手の主張に**直接反論**する方法
- ②相手の主張に**理解を示した(受け入れた)上で**、論理的に矛盾している部分について反論する方法

(5)「事実」と「意見」の区別

話したり聞いたりするとき、「事実」と「意見」を区別することができれば、中身に振り回されることなく情報を得ることができ、正確な情報を発信できるようになります。まず、短文を「事実」か「意見」か区別するトレーニングを行いました。その後、「事実」と「意見」が混ざった文を区別するトレーニングを行いました。

事実と意見を区別できるようになると・・・

(黄色のテキスト13ページ)

①内容に惑わされずに受信

→どこまで本当にどこから意見か、人の言葉や文章を冷静に客観的に検討できるようになる。

②事実に基づく正確な発信

→より説得力のある話や文章になる。

「事実」・・・本当にあること、本当にあったこと
 「意見」・・・人の考え、人の思い、人の判断

根拠を示さず意見だけ述べても説得力はない。そして、一般に、意見の根拠となるものは(正しい)事実である。

例(意見)

『クリスティアーノ・ロナウドは優れたサッカープレイヤーだ』

(根拠)

- ×『彼は観客を魅了するような華麗なドリブルをする』
- 『彼はこれまで欧州最優秀選手に3回選出された』
- 『彼はこれまでFIFA最優秀選手賞を4度受賞した』
- ×『彼はこれまでFIFA最優秀選手賞を10度受賞した』

事実と意見の区別

- A.これは、建設から30年経ったビルだ。
- B.これは、建設から30年経った古いビルだ。
- C.これは、隣のビルよりも古いビルだ。
- D.リチャード・ニクソンはアメリカの優れた大統領であった。
- E.彼は、リチャード・ニクソンはアメリカの優れた大統領であったと言っている。
- F:アブラハム・リンカーンは、リチャードニクソンより実績が多い。

Fact and Opinion in English

1. Blue is the prettiest color.	F / O
2. Sarah went to the store on Monday.	F / O
3. A camel is a mammal.	F / O
4. Spinach tastes great.	F / O
5. Everyone should go to the movies on Friday.	F / O
6. Theresa's dog is a poodle.	F / O
7. Bears are very interesting.	F / O
8. Jake is the best baseball player.	F / O
9. George Washington was the first president of the United States.	F / O
10. Picnics are better in the summer.	F / O
11. Soccer is a dumb game.	F / O
12. The earth has a north and south pole.	F / O
13. Cheetahs can run faster than horses.	F / O
14. George Washington was the greatest president of the United States.	F / O
15. Red shoes are better than white shoes.	F / O
16. Tuesday comes after Monday.	F / O
17. Spiders are creepy.	F / O
18. January is the worst month of the year.	F / O
19. Dogs have a better sense of smell than humans.	F / O
20. Halloween is in October.	F / O

②「作文」のトレーニング

「作文」のトレーニングでは、(1)パラグラフの構成と作り方、(2)サポーティング・センテンスの掘り下げ、(3)有効なトピック・センテンスの作り方の3項目を行います。

(1)パラグラフの構成と作り方

パラグラフと、日本でいうところの「段落」との違いに着目させ、パラグラフの構成要素を学びます。社会に出て求められる意見文や報告文の文章は、パラグラフ形式で書かれた文章であることを教えます。また、英語をはじめ欧米の言語は、基本的に文章をパラグラフで書くことが決まっており、外国語の文章を読み書きする時にとっても重要になることを伝えます。

■ パラグラフの構成要素と作り方

- ・トピック・センテンス(TS) →主張・話題を述べる。基本的に第1文目に置かれます。
- ・サポーティング・センテンス(SS) →TSに対し根拠・例示などを付け加える複数の文です。
- ・コンクルーディング・センテンス(CS) →再主張して締めくくる文。基本はTSを繰り返します。
- ・TS、SS、CSを改行せずにひとつなぎで書く(=パラグラフ)

→「対話」の技術における、発言の際のルールに従った「応答の型」をひとつなぎで書けばパラグラフになります。

(2)サポーティング・センテンスの掘り下げ

トピック・センテンスの内容が説得力を持つよう、サポーティング・センテンスで定義・説明・事例・根拠などを記述してトピック・センテンスを支えます。トピック・センテンスの内容から絶対に逸脱しないようにしなければなりません。しかし、トピック・センテンスを支えるサポーティング・センテンスを考えたとしても、相手からしてみると理由や根拠としては不十分な場合があります。特に自分の意見や主張を述べる際には、相手が納得できるよう、説得力のある内容にしなくてはなりません。そのためにも、自分の考えたサポーティング・センテンスをさらに掘り下げるトレーニングをします。

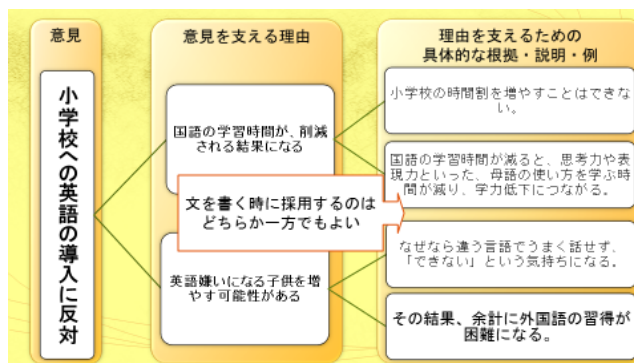
作文のトレーニング

私は小学校への英語の導入に反対です。(TS) 私がそのように考える理由は2つあります。1つ目は、英語が授業に入ってくると、国語の学習時間が、削減される結果になるからです。2つ目は、小学校で英語教育を行うことで、英語嫌いになる子供を増やす可能性があるからです。(SS) 以上の理由により、小学校で英語を導入すべきでないと思います。(CS)

国語の学習時間が削減されるとなぜ困るの？

なぜそのような可能性があると考えたの？

相手を説得するには理由を掘り下げる必要がある



(3) 有効なトピック・センテンスの作り方

トピック・センテンスの2つの構成要素を知り、より良いトピック・センテンスを作る練習をします。トピック・センテンスを読んだときに、読み手が、その続きのサポーターリング・センテンスに興味を持ち、「おおよそこんな内容なのだろうか？」「このトピック・センテンスを支えるのはどのような内容なのだろうか？」「この続きを読みたい！」と考えるような文を作ります。逆に、単なる事実を示す文や、具体的に詳細を語りすぎる文は良いトピック・センテンスとは言えません。

■ トピック・センテンスの構成要素

・トピック(話題) + コントローリング・アイデア(話題を制御し、パラグラフの方向を決定する内容)

→トピック・センテンスの有効性は、コントロールリング・アイデアの良し悪しに左右される。

作文のトレーニング

トピック

私の姉

コントロールリング・アイデア

- ・ 学業ばかりでなく運動や社会活動にも熱心な優等生である。
- ・ 几帳面で決まりや約束事を良く守る。
- ・ 高校2年生の夏休みに最高の経験をした。

◎ **良いトピック・センテンス**

- ① 話の内容が予測できる文
- ② 話の全体像を端的に述べている文

作文のトレーニング

トピック

私の姉

コントロールリング・アイデア

- ・ 17歳である。
- ・ 高校生である。

◎ **悪いトピック・センテンス**

- ① 話の方向性が見えない文
- ② 具体的に詳細を語りすぎる文

※SSで書く内容と区別する。

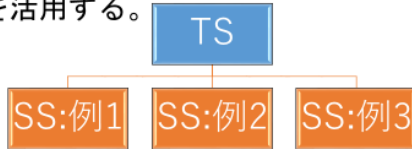
以上、学んだ3項目をもとに、パラグラフ・ライティングの実践をします。1年生では、「意見型パラグラフ」と「例示型パラグラフ」を書かせました。基本的にすべて1パラグラフの文章です。

■ 課題例

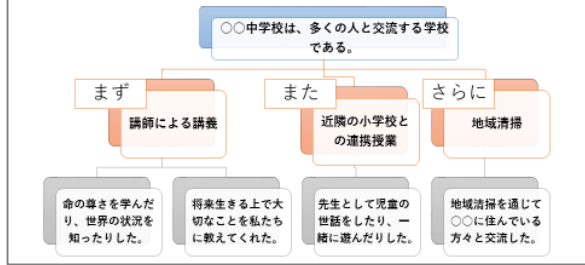
- ・あなたは24時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成か、反対か？(根拠は2つ)
- ・あなたは高校生が携帯電話を持つことに賛成か、反対か？(根拠は2つ)
- ・トピックを「読書」とし、これに自分でコントロールリング・アイデアをつけて、良いトピック・センテンスを作り、自分の意見を書く。
- ・自分が住んでいる街、故郷、自分の好きな街など、書きやすい街を選び、その街の特色について例を3つ挙げながら「例示型パラグラフ」で書く。(都道府県でも市区町村単位でもかまわない)

例示型パラグラフ

- ①いくつかの例をまとめるTSを設定する。
- ②同じ例の繰り返しに気をつける。
- ③接続詞を活用する。



例示のパラグラフの構成例



Cats are nicer pets than dogs in some ways. **TS**
 First, cats are cleaner. **SS1** They love to be very **FE**
 clean. **SS2** Cats are also quieter than dogs. **SS3** Cats
 are safer, **SS2** too. **SS3** Dogs sometimes bite people, **FE** but
 cats almost never do. **CS** Cats have many **FE**
 advantages to keep as pets. **CS**

Paragraph Reading in English

文と文をつなぐ表現(LINKING WORDS)

列挙	first(y) (第一に), second(y) (第二に), third(y) (第三に), finally (最終に)
順序	before (～の前で), after (～の後で), earlier (以前に), later (後で)
追加	also (～もまた), besides / moreover (その上), in addition (加えて)
例示	for example / for instance (例えば), such as (～のような)
逆接	but (しかし), however (しかしながら), on the contrary (それどころか)
譲歩	though / although (～だけれども)
対比	meanwhile / on the other hand (一方では), while (～の一方で)
原因・理由	because (～なので), because of (～の理由で), since (～なので)
結果	so (だから), therefore (それゆえ), thus (したがって), as a result (結果として)
言い換え	in other words (言い換えると), that is (to say) (つまり)
要約	in short (要するに), in a word (一言で言うと), in summary (要約すると)
結論	in conclusion (結論として)

③「情報伝達」のトレーニング

「情報伝達」のトレーニングでは、(1)情報の整理分類、(2)ラベリング、(3)空間的秩序の原則、(4)時間的秩序の原則、(5)概要から詳細へ 5項目を行います。

(1)情報の整理分類

同じ性質を持つ情報は共通項でくくり、整理分類をして提示するようにします。そうすることで説明は格段に分かりやすくなります。


(2)ラベリング

整理分類し、共通項でくくった情報に、ラベル(見出し)を貼って先に示します。「この部分は何についての情報なのか」を先に明らかにしてから説明すると、聞き手は分かりやすくなります。

(3)空間的秩序の原則


空間的秩序の原則とは、一方向で説明をするということです。例えば、「上から下、あるいは下から上」「右から左、あるいは左から右」「手前から奥、あるいは奥から手前」「外から内、あるいは内から外」というように説明するというです。聞き手(読み手)の視点が行ったり来たりしないようにします。一方向の説明の方が、聞き手(読み手)は覚えやすく、理解しやすくなります。

(1)から(3)までを学び、トレーニングする例題として、「キャンプの持ち物の説明」を取り上げます。キャンプに持って行く持ち物を、ただ羅列して挙げるだけでは、聞き手は理解するのに手こずります。そこで、共通の性質を持つもの同士でカテゴリー化し、そのカテゴリーにラベルを付けます。また、同じ枚数どうしでくくると、説明はより分かりやすくなります。今回の例題では、以下に示すように、「衣服」と「洗面道具」というカテゴリーに分け、ラベルを貼ることができます。ラベリングをした後、説明する順番をよく考えます。そうすると、衣服に関しては、上半身の服、下半身の服、足に履く物の順番に挙げ、上から下へ一方向で説明するのが適切です。




(問題) 三郎君がキャンプの持ち物の説明を直しました。もっと分かりやすい説明には、どうしたらできますか？

これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、半袖Tシャツ1枚、タオル1枚、歯磨き粉1つ、長ズボン1本、靴下1足、半袖Tシャツ1枚、長袖トレーナー2枚、それに歯ブラシ1本です。以上がキャンプの持ち物です。




情報の整理分類の実践

これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、長ズボンを1本、**長袖トレーナーと半袖Tシャツを2枚ずつ**、靴下1足、そして、タオル1枚と**歯磨きセット**です。以上がキャンプの持ち物ですので、忘れずに持ってきてください。



ラベリングの実践

これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、まず**衣類として**、長ズボン1本、**長袖トレーナーと半袖Tシャツを2枚ずつ**、靴下1足です。また**洗面道具として**、タオル1枚と**歯磨きセット**です。以上がキャンプの持ち物ですので、忘れずに持ってきてください。



空間的配列の秩序の実践

これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、まず**衣類として**、**長袖トレーナーと半袖Tシャツを2枚ずつ**、**長ズボン1本**、**靴下1足**です。また**洗面道具として**、**タオル1枚と歯磨きセット**です。以上がキャンプの持ち物ですので、忘れずに持ってきてください。

(4) 時間的秩序の原則

時間的配列の秩序とは、時間の経過に従い、時間の早いことから順を追って説明していきます。物の作り方や実験の手順などを説明・報告する時には、時間が逆行しないように、この時間的配列の秩序を守ります。また、聞き手(読み手)が分かりやすいように、順序を表現する副詞(まず、最初に、はじめに、次に、それから、その後、最後に、終わりに等)を有効に使うようにします。

(5) 概要から詳細へ

相手に情報の全体像(見通し)を与えてから、部分の詳しい説明をします。道案内をするときや、探している物を相手に伝える時など、最初に概要を伝えてから、詳細な部分を伝えます。最初に全体像や見通しが与えられると、情報の受け手は情報の内容をイメージ(理解)しやすくなります。

2年生

2年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

- ①「情報分析」のトレーニング
- ②「認知」のトレーニング
- ③「議論」のトレーニング

以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

①「情報分析」のトレーニング

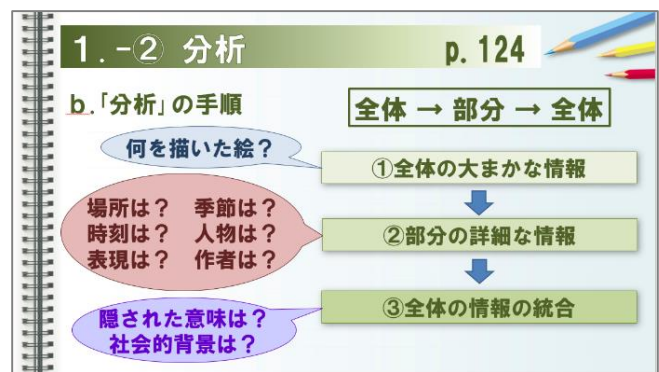
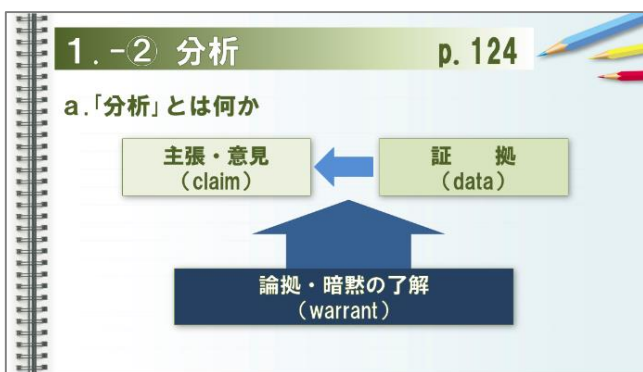
「情報分析」のトレーニングでは、(1)描写、(2)絵の分析、(3)テキストの分析 の3項目を行います。

(1) 描写

最初の描写では、ごく簡単な国旗やイラストを言葉のみで伝えることを例題として、下記の3項目の必要性を確認し、グループワークで協力して行います。

- ・描写に必要な情報を列挙する
- ・挙げられた情報を分類整理する
- ・どの順序で描写すると効果的かを考える

次に個人の作業として、1年次に学習したパラグラフライティングの形式で、描写文を書くことに取り組みます。このように2年生の言語技術、特に日本語では、作文を書く機会が多いので、生徒が書いた描写文は、担当教員の1人がルーブリックに基づいて採点、添削して返却するようにしています。具体的なルーブリックと添削については、後述します。



つづいて、同様の内容を英語でも練習します。英語では作文を書くことはしませんが、イラストを見ながら、ペアでお互いにイラストを描写する練習を行います。

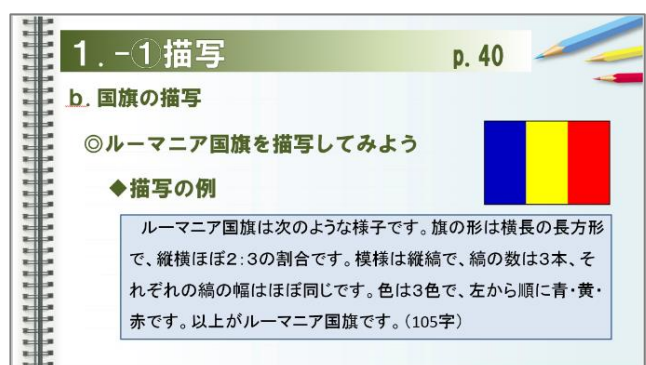
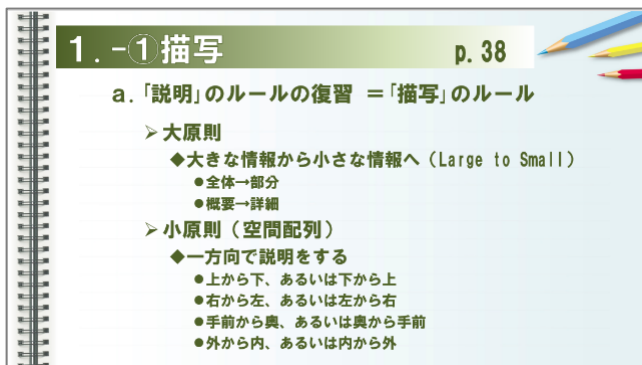
最後に、「大きな情報から小さな情報へ一方向で説明する」という空間的秩序の原則を確認して描写の授業を終わります。

(2) 絵の分析

私たちはある絵を見たときに、絵から得られた視覚情報を元にほとんど無意識のうちに「この絵には〇〇が描かれている」などと判断します。この授業では、そのような判断が、どのようにして成り立っているのかを意識することから始めます。

まず、絵という情報をよく観察し、そこから判断の根拠となる証拠を発見します。次にそれらの証拠を総合して解釈することで、ある判断が成り立っていることに気づかせます。

さらに、絵の中にある1つの情報が何を意味するかは、常識や慣習などの暗黙の了解を論拠としていることがある、ということも学びます。このような「暗黙の了解」は、文化を共有してい



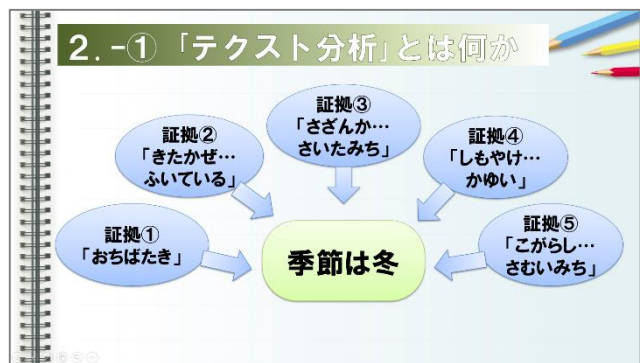
る者同士では何の説明もなく通用しますが、異文化とのコミュニケーションを図ろうとすると、意識して説明する必要が出てきます。この暗黙の了解は、認知のトレーニングや、議論のトレーニングでも振り返る必要のある重要な項目です。

以上のように、絵の分析を行う目的を理解した後は、具体的な「分析」の手順を学びます。分析の手順は、基本的に前項の空間的秩序の原則と同じく「全体から部分へ」ですが、少し違うのは、最後にもう一度全体に戻るとい点です。細部の観察を行った後に、これまでの情報を統合して、この絵が何を描こうとした絵なのか、どんな意味が隠されているのかなど自分の意見を持つことになります。絵の分析ではそれほど情報量の多くないイラストの分析から始め、次のステップで、情報量の多い絵画を分析し、そこに隠されたテーマや物語を読み取ることへと進みます。



(3) テキストの分析

テキストの分析も、絵と同じように、テキストの中から証拠を見つけ、それらを解釈することで成り立ちます。たとえば、「たき火」という童謡の歌詞を分析すると、



季節を示す様々な証拠が見つかります。1つの証拠だけでは季節を確定できないものもありますが、全ての証拠を総合すると、季節は「冬」であると解釈することができます。このように、テキスト分析とは「テキストに書かれた言葉を証拠として、そこから推論して解釈や意見を示すこと」をいいます。

テキスト分析の実践では、まず詩の分析から始めます。詩は、1時間の授業で取り扱える程度の分量であり、具体的なイメージが掴みやすいからです。まず始めに日本語の詩から登場人物の境遇や、中心的に描かれている対象との関係等を読み解くことから始めます。大切なことは、絵の場合と同じように、必ず本文の中から証拠を挙げて解釈を示すことです。

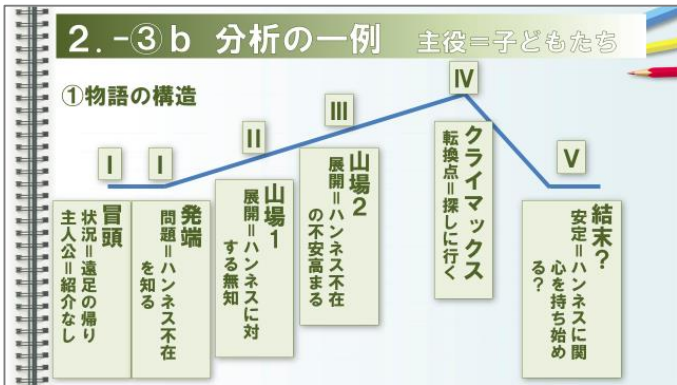
続いて、J-POP の歌詞を英訳することを試みました。グループ毎に2行を担当し、英訳していきます。生徒たちは、英訳するためには、日本語の詩を分析し、書かれていない言葉を補う必要があります。そこで彼らが気づいたことは、特に詩においては、主語や所有格がほとんど省略されていることです。

Something inside my heart
 Someday, something loose sight
 That's right by my side
 You never forget about that

Something inside your heart
 Beats inside distance
 Fell in love with your
 Flow of fingers, Scent of cheeks
 Beyond man and wife

このようにテキスト分析を、日本語と英語で行うことで、1年次から徹底してきた「話すとき、書くときには必ず主語をつけよう」という原則を改めて確認できる、という効果もあります。

テキスト分析は、詩に続いて短編小説の分析を行いました。短編小説では、物語の構造と、文中に描かれた太陽の象徴性を合わせながら、グループで協力して分析しました。



2.-③b 掌編小説の分析

③太陽は何を象徴しているか ~分析の手順~

- 本文の太陽に関する記述をマークする。
- 構造図に太陽の状態(位置・明るさなど)を図示する。
- 太陽に関する記述の前後をよく読んで、根拠を探し、何と関係しているかを考える。

2.-③b 掌編小説の分析

③太陽は何を象徴しているか
 根拠を示す⇒引用して説明する

根拠の示し方の例
 太陽が「……」(行)ている時に、○○は「……」(行)ている。ところが、太陽が「……」(行)なると、○○は「……」(行)しており、太陽が○○○○を象徴していることを示している。

2.-③b 掌編小説の分析

引用の方法

必要最低限の簡潔な引用

ページと行を明示

《適切な例》
 下人は、「猫のように身をちぢめて、息を殺し」(34-12)しており、緊張していることを示している。

《不適切な例》
 引用には必ず「」をつける
 下人は緊張している。なぜなら、「猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。」(34-12)と書いてあるからである。

必要以上に長い引用

「なぜなら…からである」の繰り返しになり、冗長

さらに、分析結果を全員の前で発表する際には、パラグラフの形式に従って話すことと共に、必ず証拠を示しながら話すことを徹底しました。このように、分析結果を発表するという行為をとおして、分析のみならず、1年次で学習した説明の能力や、パラグラフ・ライティングの能力も繰り返しトレーニングすることになります。

②認知のトレーニング

認知のトレーニングでは、(1)漫画による視点の分析、(2)テキストの視点変更 の2項目を行います。

(1) 漫画による視点の分析

授業の初めに、私たちは、物事を認知する際にはどうしても特定の視点から認知せざるを得ず、視点が変わることで事実の認知が変わることに気づかせます。そこで、童話「赤ずきんちゃん」のコマ漫画を使って、赤ずきんの視点で認知できないコマがあることを確認し、まず、日本語で、赤ずきんの視点で物語を書きました。

1. マンガによる視点の分析 p. 112

①「視点」とは……
ある対象を認知する立場
視点が変わる ⇒見え方が変わる
同時に複数の視点から見る
⇒不可能
様々な視点から物事を見るトレーニングが必要

1. マンガによる視点の分析 p. 116

③『赤ずきん』の視点分析

- 赤ずきんの視点で認知できないのはどのコマか
- 狼の視点で認知できないのはどのコマか
- 赤ずきんの視点で物語を作る
 - 台詞はマンガのものをそのまま用いてよい。
 - 呼称や文体は赤ずきん自身が語るのにふさわしい表現を工夫する。
 - 「物語の構造」を意識して書く。
 - 5W1Hを意識して書く。

赤ずきんちゃんの報告

A	5	4	3	2	1
B	5	4	3	2	1
C	5	4	3	2	1
D	5	4	3	2	1
E	5	4	3	2	1
計	15 /				

12
Good Job

(2) テキストの視点変更

次のテキストの視点変更では、叙述の視点が変化することによって、文中の動詞の形が変化すること、また日本語においては、受身表現が心情表現になる場合があることなどを、短い文章の書き換えで学びます。

つづいて、言語技術の教科書にある架空の歴史書を使って、視点が異なることで、事実認識に相違が出る場合があることを学びます。教科書には、「アース国とヴァン国という対立する二つの国の歴史家が、それぞれの視点から書いた歴史書」が掲載されているのですが、そこ

から事実認識に相違がある点を発見し、客観的な事実を年表として整理する、という作業を行います。

更に、その年表を元に、グループで分担して「アース国・ヴァン国」両国を吸収して成立した「アジアン国」の歴史家が、客観的な視点から歴史を叙述する、という課題に取り組みました。グループのメンバーそれぞれが、歴史の一場面を担当し、原稿を書き上げます。その後、ルーブリックに基づいてお互いの原稿を添削採点し、さらにその原稿を教員が採点する、という手順をとりました。

③議論のトレーニング

議論のトレーニングは、(1)論理の学習、(2)反論の技術、(3)ディベートの3項目を実施します。

(1)論理の学習

論理の学習では、日常的にもよく耳にする、「『論理』とは何か」「『論理が正しい』とはどういうことか」「『論理的』とはどのような状態か」などのことばを定義するところから始めます。更に、論理を組み立てる際の「前提」や「推論」といった用語を説明してから、具体的な練習問題に取り組みます。

練習問題としては、まず、論理の基本となる三段論法を紹介し、例示された三段論法のどこに問題点があるのか、を話し合うところから始めます。続いて20問ほどの練習問題を出題し、生徒が協力して、それぞれの論理的問題点を指摘します。それらの練習問題を考えることをとおして生徒たちは、正しい推論の条件として、

- ・理論の飛躍がないこと
- ・前提が正しいこと

の2つが必要なことを確認します。

更に、同じような文化や生活を共有している者同士では、論理の前提が隠されていること、いわゆる「暗黙の了解」があることを学びます。これは、「絵の分析」で学んだことの復習にもなります。

最後に、200字程度の文章を示して、その中に含まれる様々な論理的欠陥を指摘する課題に取り組みます。この時に問題文として示した文章は、昨年卒業した生徒たちがファイナルプロジェクトとして作成した文章を、練習用に改作したものです。これは、現2年生も、来年のファイナルプロジェクトのポスターセッションの際に質疑応答をすることを念頭に置いて、論理的に欠陥のない文章が書けるように意識させるためです。

(2)反論の技術

ここでは、反論の方法として、

- ・相手の主張に直接的に反論する方法
- ・相手の主張に理解を示した上で、論理的に矛盾している部分などについて反論する方法

の2種類があること、更に、それぞれの方法を実際に用いる際の、話し方の「型」を学びました。以下がそれぞれの「型」です。

① 私は、〇〇君の意見に反対です。〇〇君は、「…(引用)…」と述べています。しかし、この主張は成立しません。第1に、……。第2に、……。以上の理由により、〇〇君の意見は成り立ちません。

② 〇〇君の意見は一理あります。確かに「…(引用)…」という点では彼の主張は正しいと言えます。しかし、その主張は次の点が矛盾しています。第1に、……。第2に、……。以上のように彼の主張には複数の矛盾点があるため成り立ちません。

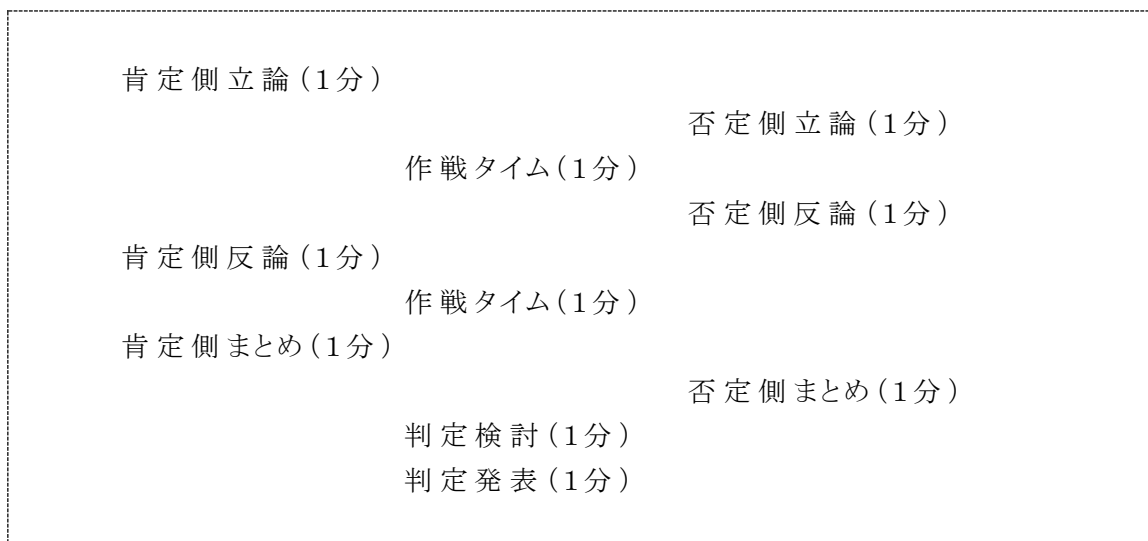
いずれも、1年次で学習した「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングの形式に基づいて、始めに自分の立場を明示し、続いてその根拠を示し、結びとして自分の立場を再度主張する、という形をとっています。生徒たちは、「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングでこの形式には慣れていきますので、この後のディベートでもこの「型」を使いこなしています。

(3) ディベート

生徒の多くは、中学校の国語でディベートを経験していましたが、ディベートそのものの定義や説明は、ごく簡単に示すにとどめ、チーム作り、役割分担、論題決めなど具体的な準備を始めます。教室で一斉に実施するために、各チームが、試合ごとにどの論題を取り上げるのかは予め決定しておき、それぞれの論題について肯定・否定両方の立論や反論を作成する形で準備を進めます。

なお、ディベートのルールや方法を説明する際には、英語表現の教科書を併用します。これは、英語表現で英語によるディベートが取り上げられていますので、日本語に続いて英語でもディベートを行うことを考慮したものです。従って、試合の方法などは原則として英語表現の教科書に合わせます。

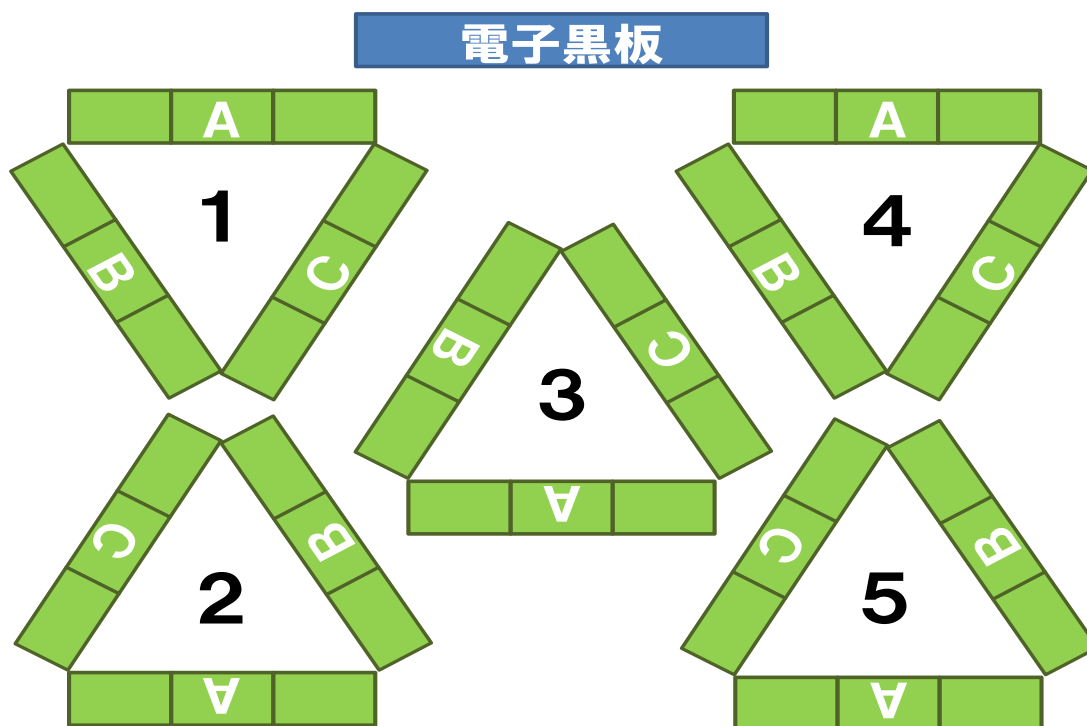
下記が試合の進行です。ディベート甲子園などの本格的ディベートとは違い、質疑応答を行わないなどかなり簡略化してありますが、これも英語表現の教科書に合わせたものです。



次ページの図が教室内の配置図です。3人1チームを原則として15チームを作り、3チームを1グループとして、グループ内で対戦します。例えば、第1試合はAチームとBチームが対戦

し、C チームがジャッジと進行を担当する、という形で、全チームが2試合行い、1試合はジャッジを行うようにしてあります。

以上のように、全員が日本語でのディベートを体験してから、英語でのディベートに取り組み、ディベートのやり方に慣れることを目指します。これは、GCPで実施する人権ディベートの準備ともなっています。



C) 評価

評価の対象は大きく分けて①「毎回の授業の記録・振り返りプリント」と②「課題作文」の2つになります。以下に生徒作品例と評価ルーブリック例を示します。

①「毎回の授業の記録・振り返りプリント」

毎回の授業で、プリントを配布し、授業でポイントとなる内容や、ペアやグループで話し合った内容、自分で考えたり気づいたりした内容をメモさせます。そして授業の最後の5分で、「今日の授業で自分が学んだこと」と「今日学んだことをどのような場面で活かせるか」を記録させます。そして、メモの充実度（授業ポイントをおさえられているか・話し合いの要点を記録できているか）や、振り返りの充実度（学んだことを自分で意識化できているか・学んだことを活かそうと意識できているか）をもとに3段階で評価します。

教員でチェックしたプリントは生徒に返却し、ファイリングさせ、いつでも学びの履歴を見返せるようにします。他の授業や行事の時に、このファイルを見返しながら文章を書いたり、説明の準備をしたりする生徒の姿も見られました。まさに実生活に活かせるポートフォリオの作成ができました。

り慣れてきたようです。以下に、2年生の課題作文における評価ルーブリックを示します。

【描写文】「手提げバッグの描写」 (200字程度)		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記a)～c)の全てにおいて優れている。 a)TSの内容が明快である。 b)TSとSSが論理的につながっている。 c)CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～c)の全てが守られているが、どれか1つに工夫が必要である。 〈例〉 TSがやや分かりにくい。	a)～c)の全てが守られているが、2つ以上に工夫が必要である。 〈例〉 TSとCSが全く同じ。TSとSSのつながりにやや問題がある。	パラグラフの構成についての理解不足。 〈例〉 TSとCSの内容が変わっている。TSとSSの順序が入れ替わっている。	パラグラフの構成が理解できていない。 〈例〉 TS・SS・CSのどれかが欠落している。途中で改行している。
B	内容	下記イ)～ハ)の全てにおいて優れている。 イ)描写すべき情報が分類整理されている。 ロ)「空間配列」のルールに従って記述されている。 ハ)個々の情報の表現が適切で分かりやすい。	イ)～ハ)のどれか1つが不十分である。	イ)～ハ)のどれか2つが不十分である。	イ)～ハ)の3つとも不十分である。	課題を理解していない。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている I 文体の統一 II 主語の挿入 III 接続語が適切 IV 句読点が適切 V 誤字・脱字がない VI 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1つに不備がある	ルールのうち2つに不備がある	ルールのうち3つに不備がある	ルールのうち4つ以上に不備がある

【テキスト分析】「太陽」の象徴するもの		3点	2点	1点
A	成ラパ ラフ 構	SSがTSの内容を適切にサポートしている。(今回はCSは不要)	TSとSSのつながりが不十分	TSとSSのつながりがない。
B	内容	下記a.～b.の全てが守られている。 a. 解釈の根拠が全てテキストから導き出されている。 b. 解釈と根拠の関係が論理的である。	a.～b.について、不十分な点が1～2箇所ある。	a.～b.について、不十分な点が3箇所以上ある。
C	引用	下記a.～c.の全てが守られている。 a. 引用のルールを守っている。 b. 引用が正確である。 c. 引用が簡潔である。	a.～c.について、不十分な点が1～2箇所ある。	a.～c.について、不十分な点が3箇所以上ある。
D	記述のルール	下記a.～e.の全てが守られている a. 文体の統一 b. 主語の挿入 c. 接続語が適切 d. 句読点が適切 e. 誤字・脱字がない	a.～f.について、不十分な点が1～2箇所ある。	a.～f.について、不十分な点が3箇所以上ある。

【視点】「赤ずきんちゃん」の報告 (800字程度)		5点	4点	3点	2点	1点
A	視点	視点のブレがなく、人物の表情分析や状況説明が適切である	視点のブレがなく、その視点ならではの状況説明がある	視点のブレが多少ある(人物の表情分析や状況説明は少ない)	視点のブレがかなりある 大事な主語が抜ける	誰の視点か不明
B	展開	巧み(a～eを守っている)＋卓越している	工夫している(a～eを守っている)	話の流れは追えているが、a～eにやや欠点がある。	流れが飛んでいるなど、a～eに欠点がある。	SW1Hを取り入れていないなど、a～eを全く守っていない。
		【展開のポイント】 a) 物語の構造を意識している b) SW1Hを意識している c) 時系列・因果関係を意識している d) 物語の展開に応じて段落を変えている e) 一人称や話し方の工夫をしている				
C	記述のルール	優れている(a～gを守っている)＋卓越している	出来ている(a～gを守っている)	普通(a～gにやや欠点がある)	読みにくい(a～gに欠点がある)	ルールをクリアしていない(a～gを全く守っていない)
		【ルール】 a. 文体の統一 b. 主語の挿入 c. 接続語が適切 d. 句読点が適切 e. 誤字・脱字がない f. カギ括弧が正確 g. 原稿用紙の使い方(1字下げ・改行)				

D) 成果および今後の課題

■ 成果

①生徒アンケート

年度末に1、2年生全員にアンケートをとりました。対話・作文・情報伝達の各技術を学んだ1年生は、90%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感しています。情報分析・認知・議論の各技術を学んだ2年生は、80%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感しています。また、同アンケートにおいて「日本語で学んだ言語技術を英語の授業で活用できた」と回答した生徒は1年生で79%、2年生で82%いました。さらに「全体の構造や、つながりの言葉を意識しながら、英語のパラグラフを書けるようになった」と回答した生徒は1年生で73%、2年生で83%いました。いずれも1年生より2年生の割合の方が高くなっており、2年間の「言語技術」のトレーニングの成果が出ていると言えます。

②ポートフォリオの作成

生徒には毎回の授業で「学んだこと」と「それらをどのような場面で活用できるか」ということを記録・ファイリングさせました。これにより生徒は学びの履歴をいつでも振り返ることができ、他の授業や行事において、ファイルを見返しながら身につけた技術を活かそうとする生徒の姿も見られるようになりました。実生活に活かせるポートフォリオの作成ができたと思います。

③英検スコアの上昇

言語技術の成果は、英作文にも表れています。第3回英検2級合格者のCSEスコアにおいて、リーディングでは1年生よりも3年生の方が高い得点でしたが、ライティングにおいては1年生の方が高い得点となりました(3年 532、1年 557)。

④教員自身の言語技術トレーニング

言語技術の授業に担任教員が毎回参加するようになり、「言語技術」教育の取り組みが全校的なものになりました。各担任教員が担当する教科やLHRで「言語技術」を活用する流れもできました。

・現代文：定番教材『こころ』『永訣の朝』『小諸なる古城のほとり』の学習にテキスト分析を応用しました。『こころ』では、グループごとに「『こころ』年表」を作成することで、小説全体の構造を確認してから、教科書掲載部分のテキスト分析を行いました。全体の構造を踏まえた上で、教科書掲載部分を学んだことで、「暗いだけの小説だと思っていたが、必ずしもそうではなく、作品に対する印象が大きく変わった」などの感想が多く寄せられました。詩の分析は、グループごとに選択した作品について、時・所・視点人物・描かれた状況や心情など基本的な分析を行いました。グループ間で分析結果が異なった場合も、証拠となるテキストを示しながら議論することで、かみ合った議論ができました。その結果、現代文でよく問題になる「解釈は一つではない」という問題についても、解釈の根拠が提示され、テキスト全体と矛盾することがなけ

れば、解釈にある程度の「幅」があることが納得できたようです。

・英語：視点を変更して教材の文章を書き換える取り組みや、教科書に書かれている客観的な事実をもとに、自分の意見をパラグラフで書く取り組みを行いました。

・地歴公民：教科書や資料集に掲載されている図表や風刺画を分析する取り組み(分析の技術)や、立場が対立する事件について視点を変えて考察する取り組み(認知の技術)を行いました。

・理科：実験の意図を説明(説明の技術)させたり、実験手順を経過型パラグラフで書かせたり(作文の技術)しました。

⑤小中高一貫プログラムの作成

創価中学校・東京創価小学校においても「言語技術」の取り組みが始まったことにより、小中高12年間の「言語技術」教育のカリキュラムを検討・作成する委員会が立ち上がりました。

⑥高大連携の強化

創価大学の初年次必修科目である「学術論文作法」を担当する教員と授業参観の交流が開始し、言語能力を育成するための高大連携がさらに強化されました。

⑦指導教員の増強

つくば言語技術教育研究所(三森ゆりか所長)の研修に教員を派遣し、指導教員の増強を図ることができました。また、その言語技術の内容をもとに、小中高の教員対象に研修を開催しました。

⑧GCPとの連動

1年生は、1年間GCPで学んだ内容をもとに、自分が興味を持ったテーマについて、1000字の小論文作成のための指導を行いました。2年生は年間を通して学習した「人権」学習のまとめとして、視点変更や議論の技術を応用して、多角的に「人権」を考えさせる取り組みを行いました。

⑨キャリア教育との連動

1年次では、言語技術で学んだ「作文」の技術を応用して、自分自身の進路や学校生活についての考えをパーソナルエッセイとして書かせました。このパーソナルエッセイは、本校が10年以上にわたって伝統的に取り組んでいるものですが、これまでは書くべき内容は指導していましたが、書き方については、ごく簡単にしか指導していませんでした。しかし、現在では、パラグラフィティングを学んでいますので、エッセイの「型」を示したところ、ほとんどの生徒が1000字～1200字である程度形式の整ったエッセイを書き上げることができました。各担任はこれを元に進路面談を行ったのですが、担任からは、「文章が整理されていて、読みやすい」との評価が寄せられました。

2年次のキャリア学習では、1年次のパーソナルエッセイを発展させて、大学入試を意識し

た「志望理由書」の作成に取り組みました。生徒たちは、2年次の言語技術の学習をとおして、パラグラフィティングの技術がかなり定着していますので、整った形式で文章を書くことにはほとんど抵抗がありません。また、論理の学習をとおして、論理的に整合性のある文章を書くとする意識も芽生えてきています。

⑩学年行事との連動

2年生3学期には、3年生で実施する修学旅行の訪問地である青森県の様々な課題について研究し、ポスターセッションを行います。これは、言語技術で学習した「説明」の技術や「作文」の技術と、GCPで学習したSDGsを関連づけて行ないます。GCPのファイナルプロジェクトの予行にもなっています。

■ 今後の課題

- ①学園祭やオープンキャンパス、外部対象の教育公開講座にて、多数の来校者を相手に模擬授業を実施しました。参加者のアンケートには「社会で必ず必要とされる力であり、このようなことが学校で学べるのがうらやましい」「多くの学校でも『言語技術』教育をやるべきだと思う」との感想が多数ありました。「言語技術」の内容については、大人のほうがその必要性を痛切に感じている印象です。この「言語技術」の取り組みを、校外にも広く知ってもらうため、公開授業を定期的実施する計画を立ててまいりたいと思います。また、毎回の取り組みをホームページやSNSで発信していくように環境を整備してまいります。
- ②来年度はSGH3年目となり、3年次のGCPで行う「ファイナル・プロジェクト」の完成にあたる年です。最終レポート作成指導を国語科・英語科・地歴公民科と連携し、合教科型のモデルとなるプロジェクトを推進いたします。「言語技術」としては、最終レポートの内容充実のために、2年間トレーニングしてきた内容を総復習いたします。
- ③「言語技術」導入の目的である、コミュニケーション能力・論理的思考力・批判的思考力の伸長を客観的に評価していかなければなりません。客観的に測るアセスメントテストの導入を検討し、実施してまいりたいと思います。
- ④生徒は、言語技術の重要性は理解している(90%以上)ものの、活用できているかどうかの質問に対しては、昨年度同様70～80%前後と評価は比較的低い状況です。昨年度に比べ、担任教員が「言語技術」の毎授業に参加し、全校的に「言語技術」を活用しようとする意識は大きく高まりましたが、さらに学校生活のあらゆる場面で「言語技術」が活用される体制を強化し、学校全体で言語運用能力の向上を図っていきたいと思います。例えば、「言語技術」に基づいた、校内のあらゆる活動で意識すべき言葉の使い方ルールを作成することや、「言語技術」の授業に参加した教員が自分の教科で取り組んだ実践事例を蓄積し、誰でも活用できるようにすることなどです。
- ⑤「言語技術」に関しては、できるだけ若い年齢からトレーニングすることが有効と思われます。今年度は、創価中学校・東京創価小学校においても「言語技術」の取り組みが始まったことにより、小中高で「言語技術」教育の重要性が認識されました。創価中学校・東京創価小学校と連携し、「言語技術」教育の年次配列をよく考えて、効果的な12年間の「言語技術」教育カリキュラムを検討・作成してまいります。

⑥作文の添削・評価にかかる時間はやはり膨大です。ただし、労力が大きいからといって、適当に文章添削しては、生徒の能力は伸びません。文章作成指導を持続可能な取り組みにするためにも、指導教員の増加・スキルアップを目指すとともに、評価のためのルーブリックや、自己・相互による評価法の開発を推進いたします。

5. フィールドワーク

A) カリフォルニア

■ 期間：7月31日（月）～8月7日（月）

■ 場所：アメリカ・カリフォルニア州

■ 主な訪問地：カリフォルニア大学アーバイン校、アメリカ創価大学、ゲティ美術館

■ 目的 民族と資源の面から見た紛争解決、アメリカの宗教間問題、アーバイン市の無炭素社会計画について、それぞれの一流の方から講義を受けました。さらにテーマごとにプレゼンテーションを行い、アメリカの高校生・大学生と意見交換を行いました。

■ 行程

● 1日目

カリフォルニア大学アーバイン校に到着し、寮に宿泊しました。本日は朝からプログラム担当のカール氏よりオリエンテーションを受け、その後アーバイン校のサフィネ先生の担当で第一回目の講義を受講しました。テーマは「宗教間の関係」で、グループでディスカッションをしながら、宗教の社会的な使命や役割を学びました。

◆ 1日目 生徒感想

「今日は「宗教間関係」のテーマのもと講義を受けさせてもらって、自分たちが今まで勉強してきた内容が入っていたので、より内容が理解しやすくて楽しかったし、宗教と紛争との関係にも触れることができたのでとても勉強になりました」

● 2日目

午前中は、アーバイン校の社会生態学の教授であるリチャード・マシュー教授が「資源と紛争」をテーマに講義をしていただきました。教授は国連のスタッフとして、シエラレオネやパキスタンなどの紛争地域で実際に「平和構築」に取り組んできた経験をもとに、真の平和構築は単に紛争が終わり政治的に安定するだけでは十分ではなく、環境を含めた地域住民の生活の安定が大事であることを教えてくれました。また質問に答えて、今後の「平和構築」の取り組みにとって大切な職能についても具体的に語っていただき、大変に刺激的な講義となりました。午後には、アーバイン校のスタッフの方より、アメリカの大学入学についての基本情報のレクチャーを受けました。その後は、カンバセーション・パートナーと一緒にキャンパス内のイベントに参加したり、今回の研究テーマでもある「環境」についての意識調査の街頭アンケートをキャンパス内で取り組みました。また夕食後には、いよいよ明日に控えた各グループのプレゼンテーションの準備に遅くまで真剣に取り組み、リハーサルも行いました。

◆ 2日目 生徒感想

「今日 1日は自分にとって刺激的なものとなりました。というのも、午前中に受けた講義の内容が自分の興味分野の1つであった環境と対立の問題であったからです。しかし講義の内容と英語のレベルがとても高くあまり理解することができませんでした。自分の英語力の不足を改めて感じ、英語学習に対してのやる気も高めることができました」

● 3日目

本日は地元の高校生を迎えて、生徒たちが準備してきたプレゼンテーションの発表会を行いました。4グループが、それぞれ「日米の宗教間関係とその提言」「米国の温室効果ガス削減条約の脱退」「日本における資源問題と領土紛争」「多民族都市における平和構築とそ

の問題」をテーマに発表、その後の質疑応答に臨みました。日本にいるときから準備に取り組み、それぞれが非常に複雑で難しいテーマに真正面から取り組み、見事なプレゼンテーションを行いました。質疑応答では、かなり難しい質問も出て、回答に苦慮する場面もありましたが、将来、世界の人たちとこうした問題について議論をしていかなければいけないことを実感できました。

午後にはカンパセーション・パートナーと共に環境意識調査を引き続き行いました。その後、アーバイン校工学部の大学院生による温室効果ガス削減の取り組みや燃料電池自動車、自動運転自動車等の最新テクノロジーによる取り組みについてのプレゼンを受講しました。終了後には多くの生徒が質問攻めにし、発表した大学院生はもちろん、研究所長からも「中国や中東の生徒たちも来ますが、こんなに質問に集まってくるのは初めてのことで驚いている。素晴らしい光景です。立派な生徒たちですね」との感想をいただきました。

◆ 3 日目 生徒感想

「今日は朝からプレゼンテーションだったので、緊張していました。昨日の夜まで皆で修正をし、より良いプレゼンテーションができたと思います。質問もたくさんの方からしてもらい、深い話し合いができました。午後はカンパセーション・パートナーと最後の交流でした。ようやく慣れることができ、日常会話も大分聞き取れるようになって自分のことも話せるようになり楽しむことができました」



● 4 日目

アーバイン校のスコット・ボレン教授を迎えて、「平和構築」をテーマに講義を受講しました。ボレン教授は、民族対立による内戦で破壊された都市の再建を研究されており、ご自身が現地で取材をしてきたバイルート、サラエボ、ベルファースト、エルサレム等の都市を例に、第二次大戦以降に起こった内戦の背景と現状についてわかりやすく語って頂きました。生徒たちからの質問に対しても、時間をかけて答えて下さり、内戦において一方的な勝利に平和はなく、パワーシェアリング(権力の分配)の大切さや、教育の重要性、紛争の中の本物のリーダーのあり方について具体例を挙げて答えてくださいました。引き続いてアーバイン校での講習の修了式が行われました。生徒たちは、一人ひとり名前を呼ばれ、誇らしげに、また笑顔で修了証書を受け取っていました。

その後、アメリカ創価大学(SUA)を訪問しました。スタッフに出迎えていただき、記念撮影、ガイダンスを受けたのち、カリフォルニアの青空の下、SUA キャンパスツアーを行いました。また羽吹学長との懇談会では、学長が一人一人の話や質問をじっくりと聞き、丁寧にアドバイスと激励をしてくださり、生徒たちも決意を新たにしていました。

◆ 4日目 生徒感想

「今日は、私のグループが勉強してきたテーマの講義をボレン教授から聞くことができました。勉強した甲斐もあって、内容も理解でき、また話を聞きながら自分で考えることもできたので良かったです。昼食会では、カールさんや他のスタッフの方々ともお話することができ楽しかったです。また、カールさんと一対一で話していて気付いたことがあります。自分は一人の相手と話すときは自分の言いたいことを話すことができますが、大勢が自分の話を聞いているとき、英語の能力をジャッジされているような気がしてしまい、頭ですごく考えてしまいます。大勢の前でも堂々と英語を喋れるように、あまり気にせずいつも通りに英語を話せるようにしたいです」

「SUAでは羽吹学長と懇談していただき、やはり一人一人の対話が大切だなと思いました。また、他の15人の仲間ともっと知り合っていてお互いに切磋琢磨していきたいです。そして、お世話になった方々にお礼を忘れないようにします。いつも見守ってくださってありがとうございます」

● 5日目

5日目は、最終日には午前中にグティ美術館を訪問しました。ここでは言語技術の授業で学んだ「分析の技術」を活用し、絵の分析をおこないました。深夜1:55発の飛行機にて帰国しました。

◆ 5日目 生徒感想

「今回のフィールドワークでは、まず得意としていた英語が、英語だけの環境で過ごすには未熟だという事に気がきました。今後はより自発的な学びへと挑戦していきます。また、カリフォルニア大学アーバイン校やSUAでの学びとアメリカを直接肌で感じることで、高校入学後の人間関係や部活などの様々な悩みの中で消えかけていた、『世界で活躍する』という幼い頃からの決意が蘇ってきました。この体験をしっかりとらえ、学園に還元していきます」

「今回のカリフォルニアフィールドワークに参加できて、本当に良かったです。1週間前の自分と比べて成長した部分は、英語力はもちろん、質問する勇気を身につけたことです。しかし、同時に見えた課題である海外の人と臆することなく対話できる語学力を身に着ける必要も見えました。こういった日本には気づくことができなかつたことを糧に、今後の勉強への意欲につなげて取り組んでいきます」



絵の分析@ The Getty



・基礎情報(この絵の説明を基に)

場所は地中海沿岸。絵の右奥に見える船はイギリスの商船で荒れ狂う海の上で戦っている。岸にいる人たちは、難破船から救出された生き残りの船員である。

・分析

季節は、春か秋である。岸にいる人々の着ている服は袖が長いが、比較的气温の低い冬を考えると、生地がそこまで分厚くないため、季節は冬ではないと推測できる。また、夏ではない理由として、地中海性気候では雨がほとんどふらないのに加え、高温となる夏に適した服を人々が着ていないから。

時間は、午前8～11時頃である。人や岩の影が長く伸びていることから、太陽が昇り、または沈み途中である時間帯ということがわかる。そして、空が青いため夕方ではない。以上より、早朝過ぎず、正午ではない時間帯であると

判断した。この絵の主題は、自然の世界で好き勝手に振る舞う人間に対して怒り狂う自然である。私がおのように考えたポイントはいくつかある。まず、「自然の怒り」の対象である「自然の世界で好き勝手に振る舞う人間」というのは、戦いを繰り広げる商船と沿岸にそびえ立つ壮大な塔が表している。それらとともに、自然の資源を用いて、人間によって作られた。ここでは、それらの人工物を「自然」に対しての「人間」を象徴している考えた。また、戦いは、主に人間の都合によって起こり、それによって身の回りの自然は破壊されてしまうことが多々ある。このように、「人間」の行いにより、犠牲になる「自然」という関係が見られ、それが「自然の怒り」を引き起こす原因だと私は考えた。「自然の怒り」は、絵の中では、船が転倒してしまうほど荒れ狂う暗い海や、空を覆う黒雲から塔に集中して降り注ぐ雨、人間のいる岸に押し寄せるたくさんの波によって表現されている。ちなみに絵の右側は青空が見え、晴れている様子が見られるが、これは人間のいない海の方面、つまり「人間」に汚されていない「自然」でのことである。以上より、この絵のメインテーマは、自然の世界で好き勝手に振る舞う人間に対して怒り狂う自然である。

絵の分析生徒作品例

B) 岩手

■ 期間 8月3日～5日の3日間

■ 参加者 高校1年生12名 高校2年生3名 高校3年生1名 計16名
全校より希望者をつのり、抽選により参加者を決定

■ 目的

地球規模課題の一つである「環境問題」をテーマに、環境先進自治体である岩手県葛巻町を訪れ、クリーンエネルギー諸施設の見学や畜産体験を通して循環型農業を実感的に学ぶ。また、6年前の3.11東日本大震災の際に大きな津波被害を受けた、岩手県陸前高田市を訪れ、自然と共生する復興の様子を学ぶ。

■ 事前学習・準備

- ジグソー法を用いた環境問題に関する基礎学習
- 村上清氏(SGH指導委員/陸前高田市参与)による懇談会
- 現地でのインタビューのための質問シートの作成

■ 行程

● 1日目

1日目、葛巻町のくずまき高原牧場を訪れました。まず牧場職員の方との懇談をしました。畜産体験では、乳牛への餌やりを体験し、また、夕飯にてそこで育った牛のお肉を頂くことで、人間が経済動物の大切な命を頂いて生きている事実を心の底から実感しました。畜産体験の後、原木シイタケの収穫・収



穫準備の体験をし、重労働かつ経済的に非効率的なこの栽培方法を、町の自然のために利用していることを学びました。

◆ 生徒感想

「葛巻町発展の41年間の歩みを聞いて葛巻町が環境問題や食糧問題などの地球規模課題に真剣に取り組む中で、同時に町の経済を活性化させてきたこと、また多くの人に体験と学びを提供する教育の場となっていることを知りました。牧場職員の方の、熱意と人柄にも感動しました。更なる学びの研修にして参ります」

● 2日目

2日目は、葛巻町職員の方からクリーンエネルギーのお話を伺いました。また、風力発電所を見学させて頂きました。その後、陸前高田市に移動し、まず追悼施設や、津波の跡が残る道の駅「TAPIC45」や、建設途中の高さ12mの防潮堤、奇跡の1本松を見学しました。また、陸前高田市の戸羽太市長や夜には陸前高田に住む方々との懇談会の場を頂きました。



◆ 生徒感想

「陸前高田市の戸羽市長の話聞いて、時には周囲の反対を受けながらも、陸前高田市を震災前と同じ状態に戻す“復旧”ではなく、前よりも良いものにする“復興”のための決断をされてきたことに市長の強さを感じました。そしてこの強さは、一番苦しい時を乗り越え、命の大切さを知る人にしかないものだと感じました」

● 3日目

3日目は、震災後に町全体を14mかさ上げするため、土の材料として切り崩した山の跡地や町に新しく建てられた市立図書館に行き、町全体の復興が進む様子を肌で感じました。最後に事前学習や市内視察でお世話になった村上さんと再び懇談をし、フィールドワークの振り返りと今後の学校生活への決意を固めました。



◆ 生徒感想

「今日は、陸前高田市の復興の様子を一望できる高台に特別に案内していただきました。そこから見える景色には、町の人々が復興に向けて必死に闘う命の美しさがあり、心が震えました。この2日間で目にした光景を脳裏に焼き付け、これからも被災地の皆さんと同じ心で、負けじ魂を燃やして生きていこうと決意しました」

一目的 ①エネルギー自給率160%の葛巻町で環境への取り組みについて体験的に学ぶ
②3.11の東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた陸前高田市で復興の様子を学ぶ

1日目 (8/3) 葛巻町 (くずまき高原牧場)

酪農畜産事業を中心に、エサの栽培や家畜の糞尿を活用したバイオマスエネルギーの開発など地域の資源を無駄なく使う循環型畜産業を行っている。

○木村 元志さんとの懇談会

- くずまき高原牧場で「食料・環境・エネルギー」の問題を考えながら酪農事業を営んでいる。
- 日本は豊かすぎるため、食糧不足の苦労を知らない。一食糧産家世界一になってしまった。
- 失敗が何よりの学び。進んで戻つてを繰り返す。フラスコイネズミになれたい。世のため人のために新しい取り組みに挑戦し続ける。
- 牛たちに人工授精をすることで私たちの命はつながっている。

○原本シイタケの栽培体験

森の廃材を無駄にせずしいたけ栽培に利用している。
→三人の婦人のみで栽培し、全国から注文されている。

【感じたこと】

- 普段の私たちの食物には生産者の思いや苦労がある。
- 動物のいのちを頂いている。粗末にはいけない。

2日目 (8/4) 葛巻町 (上外川風力発電所)

○日本初 標高1000mを超えた風力発電所の見学

- この発電所内にある12基の風力発電施設で総発電量が1750kw
- 生み出された電力は陸前市まで送られている
- 風車の大きさは柱の部分は90m
- 羽の一枚の大きさは20m

○館口 美知代さん (葛巻町農林環境エネルギー課) の話

- 地域のものを使って事業を行うので、地域に最大限のメリットが出るようにするのが大気。
- 小規模分散型→停電時に早急に対応できる
- 新エネルギーはビジョンがなくならない。
- 新エネルギーは製作費用が高いが地球環境のために。
- 風車のために山を切り崩し環境破壊につながるが、地球環境を重視。1リサイクルが大好きな面です。」

現在22基の風車を持つ新たな風力発電所を建設中で、2019年春の運転開始に向け工事が進められている。

2日目 (8/4) 陸前高田市 (市内視察・懇談会)

○市内視察

- 遺構施設 津波による死亡者…1602人 行方不明者…203人(2017年3月1日付)
- 奇跡の一本松…約7万本の松林の中で唯一耐え残った一本の松

○戸羽太 市長との懇談会

- 復旧ではなく、復興を進めていきたい!
- 「ノーマライゼーション」という言葉の知らないまちづくりを目指す。
- 震災時の市長自身の体験から、人生において後悔しないため『最後は自分の納得できる決断をすることが大切です』。

○被災者の方々の懇談会

- 震災で多くの物を失ったが『心の財は壊されない』被災者の皆さんの強さ、温かさに、励まされました。
- 被災者の皆さんとの言葉を支えにしている。
- 私達と同じことを経験してほしい。
- 震災・津波の被害を後世に伝えてほしい。

3日目 (8/5) 陸前高田市 (市内視察・懇談会)

○市内視察 (市民に希望を届けるため、通常30年かかる工事を「復興8年計画」としている)

- 大型複合商業施設 (図書館/ショップ/カフェ)
- 建設中の堤防

○村上 清さん (陸前高田市参与) との懇談会

- 仮設住宅一今も震災当時の約半数の人が暮らしている。
- 国の役人と現場にいる市長たちとの認識の差に苦労。

一まとめ < 岩手の人々 ⇒ 利益を求めない思いやりの心 >

～葛巻町～
人間は経済動物の命に支えられている。地球規模課題に貢献しようと努めていた。
*自然と共に、自然と向き合いながら前を向いて強く生きる人々の姿があった。
*地球規模でも我がことと考え、私たちが行動を起こしていくべき。

～陸前高田～
人々の日常を一顧にして壊してしまう自然の脅威に圧倒された。
震災と向かい合いながらも前を向いて強く生きる人々の姿があった。
*被災地の方々の思いを心にとどめて二度と同じ被害を起こさないため、次世代のためにも備えていくべき。

C) 広島

- 期間 7/24(月)～26(水)の3日間
- 参加者 15名 (高校1年生10名 高校2年生4名 高校3年生1名)
- (希望者抽選)
- 目的

地球規模課題の一つである「核兵器」をテーマに、原爆投下より72年を迎える広島県広島市を訪れ、広島平和記念資料館(原爆資料館)・平和記念公園の見学、広島平和文化センター小溝泰義理事長、被爆者の方との懇談会を通して、戦争と平和、そして核廃絶へ向けた取り組みを学ぶ。また、核廃絶のために何ができるかを考えていく。

■ 事前学習

被爆体験や原爆被害の概要、核兵器禁止条約の成立、オバマ大統領の広島訪問等、多くの資料がおさめられた学習冊子を読み、ディスカッションを通して深め合った。

■ 行程

● 1日目

広島到着後、午後からは広島池田平和記念会館にて被爆体験の語り部・竹岡智佐子さんと語り継ぎ部・東野真里子さん母娘との懇談会及び、会館内の常設展示を見学しました。懇談会では、東野さんがピースボートに乗船し、オランダの主要な議員の心を動かし、核兵器禁止条約の採択に関わる活躍をなさったお話を伺いました。17歳で被爆した竹岡さんからは、



味わった壮絶な体験を中心に伺いました。原爆のもたらした地獄の中で必死に生き抜いた竹岡さんの生き様に、生徒たちは圧倒されながらも目を背けることなく、まるで一つ一つの言葉を心に焼き付けるように真剣に耳を傾けていました。原爆の残酷さを学ぶとともに、平和とは何か自分には何が出来るか自身の心に深く問い始めた一日となりました。

◆ 生徒感想

「本日の竹岡さんと東野さんの懇談会を通して私が強く感じたことは、この残酷で悲惨なことをもう二度と起こしてはならないということと、その気持ちを胸にお二人は今も核廃絶、世界平和へ闘争を続けていることです。英語を学び、海外へ行くという竹岡さんの夢は英語が敵国語になったために実現できなかったということ知り、夢も可能性も奪う戦争に怒りが湧きました。子どもの未来を拓くための教育です。全ての子どもが教育を受けることのできる社会を絶対に築こうと思いました。私もお二人のように、一生涯平和を目指して戦っていきます。8月6日に亡くなった方々、原爆の放射線で亡くなった方々が来世生まれてくる世界を、核兵器のない、平和な世界にします」

● 2日目

午前中は、国立広島原爆死没者追悼平和記念館を見学し被爆体験記朗読会に参加後、ボランティアガイドの品川さんご夫妻に案内していただき広島平和記念公園内を巡り、慰霊碑で黙祷を捧げました。

午後は、爆心地の最も近くで被爆した本川小学校をはじめ、同じく袋町小学校や旧日本銀行広島支店等の被爆建物や展示を見学し、被爆者の描いた絵等、貴重な資料に生で触れることができました。最後に訪れた広島平和記念資料館では、原爆投下までの経緯、あまりに残酷な被害と生の声が聞こえてくるような遺品の数々に、原爆とは何か、原爆の何が一番残酷なのか、「ノーモア・ヒロシマ」について深く考える時間となりました。

◆ 生徒感想

「今日のはじめに原爆の爆心地である「島病院」に行きました。私はこの場に立った時、72年前の8月6日にいつもの生活を送っていて、原爆が落とされて一瞬で命を奪われた多くの人たちのことが思い浮かんで、怒りと悔しさでいっぱいになりました。品川さんのガイドによる平和記念公園内の散策では、そこに行かなければ感じることのできない原爆、戦争の恐ろしさ、残酷さについて、自分がその時その場所にいたらどう思っただろうと考えながら実感することができました。広島平和記念資料館には驚くほど多くの外国人の方が見学に来ていて、『核廃絶』という同じ夢を持った人々が、国境を越えて平和へと少しずつ歩めているんだと思い、嬉しかったです」

● 3日目

最終日は、広島池田平和記念会館に平和文化センターの小溝理事長をお招きし、「核兵器廃絶のために市民社会ができること」と題して核兵器廃絶を目指す具体的道筋や未来

を担う青年に必要な資質、人間としての生き方等、様々な角度からお話をいただきました。質疑応答では絶え



間なく質問の手が挙がり、生徒たちにとって宝の出会いとなる、充実の懇談会となりました。

◆ 生徒感想

「懇談会の中で小溝理事長は他者との対話において先入観で相手を決めつけないことの大切さや勇気を持つことの意味など、人間として生きていく上で重要なことを自分の体験も交えながら教えてくださいました。自分は今、全世界の人に核兵器や戦争の悲惨さを訴え、世界を平和にするために貢献したいと考えています。これは今回のフィールドワークを通して見つけることができた夢です。この三日間で学んだことを決して忘れず、夢の実現に役立てていきます」

目的
一、核兵器の存在の恐ろしさを学ぶ
二、今、核廃絶のために何ができるか考えていく

2017年は、原水爆禁止宣言から60周年、核兵器禁止条約が採択された意義深き年
 原水爆禁止宣言...1957年、戸田城聖が彼自身の遺訓として「生命尊厳」の思想から、核兵器は「民衆の生存の権利を奪う」絶対悪であり使用してはならないと断え、青年に核廃絶を託した宣言。
 核兵器禁止条約...本年7月に国連で採択、9月20日から署名が行われた。核兵器の「保有」、「使用」、使用するとの「威嚇」まで、例外なく禁止する、「核なき世界」への第一歩となる条約。

1日目 語り部 竹岡智佐子さん、語り継ぎ部 東野真里子さんとの懇談会



御年89歳。17歳のとき、友達と遊びに行くため、家を出た直後に被爆。
母を探している最中に、赤ちゃんを抱いて死んでいる母子を見て、怒りと涙でいっぱいになり、アメリカに行き、この被爆体験を語ることを誓った。

こんな戦争誰がしたんだ！
 こんなかわいい赤ちゃんを殺した！
 たくさんの人を一度に殺した！
 戦争をするアメリカも悪い！
 日本も悪い！

ようやく見つけた母は、全身大やけどで、右目が顔から飛び出していた。麻酔なしで右目を取り除く手術をしたとき、竹岡さんは母の絶叫をひとり廊下で聞いていた。

竹岡智佐子さんの娘として、語り継ぎ部として、母の被爆体験を世界に語っている。

2016年10月、オランダで被爆体験を語ると、現地のある女性国会議員が、「子どもたちに広島を訪れたことを思い出した。核軍縮に尽力します」と。彼女はもともと、核抑止を支持する保守派政党の有力議員だった。

オランダはNATOに加盟し、アメリカの核の傘に守られている国である。この議員の方針転換やオランダ市民社会の動きかけもあり、3週間後の核軍縮に関する国連総会に、オランダは核の傘に守られている国の中で唯一参加することとなった。

2日目 ピースボランティア品川さんご夫妻によるガイド

広島平和公園内散策 平和の灯火
 核兵器がある限り火は燃えている。20世紀にはこの火を消すことができなかった。
 →私たちがこの火を消さなければならない

原爆死没者慰霊碑
 原爆死没者名簿が納められている。30万8725名（2017年8月現在）約5000名追納。毎年5月に風通しがされる。
 碑文：「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」
 →自分と同じ苦しい思いを二度と誰にもさせたくないという、ヒコパンチャの方々の強い決意。

品川正剛さん



本川小学校 平和資料館見学

←被爆後に子どもたちが描いた絵
 被爆後、アメリカからクレヨンや絵の具が贈られた際に描かれた絵。絵によって全てが失われ、多くの大人達が絶望する中で、子どもたちは喜びと楽しさのあふれた、色彩やかな世界を描いて見せた。
 子どもたちの明るさとエネルギーが希望そのものだったという。

被爆後の校庭での遊戯風景

広島平和記念資料館 東館見学

←オオハマ大鐘樓が記したメッセージと新鐘
 メッセージ 私たちは戦争の苦しみを経験しました。共に、平和を広げ核のない世界を追求する勇気をもちましょう

上空から見た爆心地のシミュレーション
 ↓被爆した三輪車

3日目 広島平和文化センター理事長・小溝泰義さんとの対話



◆核のない世界の実現のために...
 ○多くの人に核の恐ろしさ、残酷さを知ってほしい。
 ○市民の行動と指導者のリーダーシップの両立が必要。
 ○多様性を尊重する対話を通して、同じ人間としての共同体意識をお互いに持つことが重要。

1970年（昭和45年）外務省に入省。
 元駐クウェート国特命全權大使、元IAEA（国際原子力機関）事務局長事務局長特別補佐官。

◆未来を生きていくために...
 個性について
 失敗や挫折を繰り返したとしても、何度でもチャレンジしていく中で初めて自分の能力、専門性が培われる。誰にもマネできない個性になる。
 本当の勇氣
 皆、臆病。誰かのためにという時、本物の勇氣が出る。人間を踏みこじめるものに対して立ち上る勇氣を貰っていく中に真実の人間としての価値がある。

核なき世界



市民社会 ↔ 指導者
 共通社会の構築 ↔ 多様性の尊重
 ↑ ↓
 共同体意識 ↔ 対話

核廃絶のための Next Action

1. 世界には現在も多くの核兵器が存在しており、決して「平和」ではないことを認識すること。
2. 原爆の歴史的事実や核兵器の恐ろしさを学んでいくこと。
3. 私たち一人ひとりが立ち上がり、一対一の対話を通してヒロシマの記憶、核兵器の恐ろしさを伝えていくこと。

D) 沖縄

■ 目的

沖縄県における SDGs について課題研究テーマを設定し、文献調査、現地での学術機関の専門家の方へのインタビューを通して学び深める。また、唯一の地上戦であった沖縄戦の事実について、博物館見学や壕内部の見学、戦争体験聴講を通して学ぶ。さらに、沖縄県立那覇国際高校の生徒とテーマについて意見交換し、交流を深める。

■ 期間 8月8日～11日の4日間

■ 参加者 高校2年生6名 高校3年生2名 計8名（いずれもGLP生）

■ 事前学習・準備

・4人ごとのグループに分かれ、以下の研究テーマを設定しました。

「沖縄におけるサンゴの環境保全と産業開発の持続可能な両立は可能か」

「沖縄の子どもの貧困は産業構造が原因なのか」

・現地で行うインタビューに備え、質問項目を作成しました。

■ 行程・感想

● 1日目

到着後、沖縄県営平和祈念資料館にて沖縄県立那覇国際高校の生徒9名と合流し、常設展示を見学し、沖縄戦前後の沖縄の状況や当時の教育について学びました。

その後、同館会議室にて交流会(ピースフォーラム)を開催し、展示を見学しての感想や、課題研究テーマである子どもの貧困やサンゴ礁の白化と持続可能な開発について意見交換しました。

終了後には、平和祈念公園に移動し、園内の平和の礎にて記念撮影と平和祈念公園の見学を行いました。園内には平和の礎という国籍や軍人・民間人の区別なく沖縄戦で亡くなったすべての人々の氏名を刻んだ祈念碑があり、それらを両校生徒が丹念に見て回りました。



◆ 生徒感想

「沖縄県平和祈念資料館で特に印象に残っていることは、集団自決の背景に国家の皇民化政策があったことで、その状況がさらにひどいものになったということです。もしも国家が愚かな政策をしなければ、沖縄県民の犠牲はもっともっと軽くなっただと思うのです。正しい教育とは何か、その重要性を痛感した一日でした。」

「ピースフォーラムで、戦争を経験していない沖縄の10代にとって米軍基地は経済的・文化的に良い影響をもたらしてくれる存在である一方、戦争を経験した世代は米軍に良い印象を持っていないことが多いと教えてもらいました。打ち解けた雰囲気でも聞いたかったことを十分聞くことができ、充実した時間となりました。」

● 2日目

課題研究のテーマ毎に4名ずつ2グループに分かれて行動しました。両グループ、那覇国際高校の生徒が同行しました。

「沖縄の子どもの貧困」をテーマとするグループは、沖縄大学の島村聡教授の講義を通し、沖縄の産業構造がその一番の問題であることや、沖縄の子どもを取り巻く環境の厳しさを再確認しました。また、積極的に専門家に質問することで、自分たちの研究を深める価値ある時間とすることが出来ました。

もう一方のグループは、琉球大学熱帯生物圏研究センターの中野義勝先生のを訪問し、「サンゴの白化現象と赤土の関係」をテーマに懇談会を行いました。サンゴの重要性やその保護の生物学的・経済学的な難しさ、白化現象と持続可能な開発との関係についてなど、質問と意見が飛び交う有意義な懇談会となりました。また、サンゴ礁のビオトープを実際に見せて頂き、白化したサンゴはどのようなものか、間近に見ることが出来ました。



大学訪問の合間には、ひめゆり平和祈念資料館を訪れ、自分たちと同年代の女学生たちが、どれほど戦争に翻弄された人生を送ったのかを目の当たりにしました。元ひめゆり学徒の方の「命がなければ何もできない。一番大切なのは命なんですよ」との言葉を、生徒は真剣に聞いていました。2グループ合流後には、対馬丸記念館を訪れました。対馬丸記念会理事長の高良氏による対馬丸事件についての講話を拝聴するとともに、館内展示の見学を行いました。これらを通し、戦争がもたらす悲劇をまた一つ知り、戦争の悲惨さを改めて感じました。見学後、高良理事長のご案内で、対馬丸事件で犠牲となった子ども達を慰霊する「小桜の塔」にて記念撮影を行い、平和を実現しゆく決意を再確認する一日となりました。

◆ 生徒感想

「今日の活動で特に印象に残っていることは、対馬丸記念館理事長で家族の殆どを対馬丸事件で失われた高良さんの講演です。対馬丸事件の犠牲者の大半がまだ分別の付かない年頃のもので、幼かった彼らは期待を胸に船に乗ったにも関わらず、一瞬の出来事により一気に地獄を味わうこととなったことを知り、僕は容赦なく幼い命を奪う戦争に強い怒りを覚えました」

「サンゴのお話で特に印象に残っていることは、沖縄の貧栄養な海がサンゴ礁やきれいな海を生み出しているということです。また、沖縄戦の歴史に関しては、私達と同世代であるひめゆり学徒隊が想像を絶する過酷な状況にいたことにとっても衝撃を受けました」

● 3日目

喜屋武岬周辺で戦没者遺骨収集の活動に参加しました。NPO 法人「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さんの説明を聞きながら、実際沖縄戦の戦場であったガマを見学し、作業を体験しました。戦時中を思わせる、蒸し返すような暑さの中、自ら道具を使って土を掘ったり、以前に掘り出された骨や遺留品、弾丸の破片に触れたりすることで、70年以上前に起きた戦争をより現実として実感することができました。

◆ 生徒感想

「今日の経験の中で、ガマフヤーの方のどんなに困難な状況でも自分たちの正義のために行動し続ける尊さに大変感銘を受けました。私も少しずつそうなるように日々自分と対話しながら生きようと思いました」

「今日は遺骨収集に行き、戦争の現場を肌で感じたことが特に印象に残っています。岩場の道やガマの中はとても不気味で、2ヶ月以上もこの場所で、死ぬ怖さと戦いながら生きていくことを考えるだけで恐ろしかったです。また、以前発見された遺骨に触ることができ、戦争はまだ終わっていないことを改めて感じました」



● 4日目

沖縄件恩納村にある沖縄研修道場を訪問しました。沖縄研修道場は、かつての米軍「核ミサイルメース B 基地」跡地に、1977年に本校創立者・池田大作先生が建設された施設です。到着後、かつての核ミサイルの発射台と沖縄戦展示を見学し、冷戦当時の核兵器配備の実態などについて学びました。その後、那覇国際高校生徒を含む地元高校生約50名と共に、稲嶺恵一元沖縄県知事の講演「沖縄県から見たグローバル人材の要件と役割」を拝聴しました。ご自身の戦争体験や県知事時代の体験から、多様性への寛容さと、経験することの大切さを語ってくださり、生徒はグローバルリーダーに成長しゆく決意を深めました。

◆ 生徒感想

「稲嶺元知事の講演の中で『経験が何よりも大切。本などで学ぶより沢山のことを学べる』と言っておられたのがとても印象に残りました。参加した一人として、今回学んだことをより深め、将来世界平和を実現できる人材へと成長していきます」

「今回のフィールドワークはまさに『経験』でした。沖縄の資料館を訪ね、語り部の方にお話を聞き、また遺骨収集もさせていただいて沖縄戦について様々な角度から学ぶことができました。本州にいる私たちは、もっともっと沖縄戦について知っていかなければならないと思いました」



E) JICA 地球ひろば(市ヶ谷)

■ 期間 2/3(土)

■ 参加者 22名(高校1年生14名 高校2年生4名 高校3年生4名)

■ 目的

「国際理解」をテーマに、JICA 地球ひろばを訪れ、青年海外協力隊の経験者による施設案内や、レクチャーを通して、世界の実情を体験的に学び、その解決の方途を探る。また、テーマディスカッションを通して、世界の諸問題に対する関心・理解を深め、国際協力のあり方を見つめ、また将来の進路選択の一助とする。

■ 事前学習

出発前の事前学習として、「JICA」、「青年海外協力隊」、「児童労働」、「持続可能な開発目標(SDGs)報告2016」の4つのテーマについてジグゾー法を用いて学習しました。学習の流れはまず、1人1つのテーマを選び、その内容を各自で調べてきます。その後、同じテーマを担当した人同士で集まり、情報を共有し合うことで、全生徒がテーマのエキスパートになります。最後に、異なるテーマを選んだ人で集まり、各々のテーマを発表・共有することで、全員が4つのテーマを効率的に学び深める事ができました。



フィールドワーク当日、市ヶ谷駅に集合し、10分程度歩いて、JICA 地球ひろばに行きました。合計3つある研修のうち、最初は、青年海外協力隊としてエチオピアで数学教師をしていた方の体験談を伺いました。体験談では、導入として、JICA そのものや、日本がなぜ開発援助をしているのか、また、青年海外協力隊の活動内容を説明して頂きました。その後、実体験を踏まえ、教育活動を通しての感想をお聞きし、途上国の教育には課題が山積みであることを深く認識しました。



その後、2つ目の研修である展示施設の見学を行いました。ここでは、世界のあいさつ、貧困、保険医療、水、教育、紛争、相互依存、持続可能な開発目標(SDGs)の8つのブース

があり、青年海外協力隊等で国際経験を積んできた地球案内人のガイド付きでそれぞれのテーマに沿った内容を体験的に知ることができました。また本年は、昼食にエスニックビュッフェとして海外の素材を使った料理を味わいました。

昼食を挟み3つ目の研修として、洋服生産をめぐる児童労働をテーマにしたワークショップを行いました。ワークショップでは、インドでコットンを生産する農家やそこで働く児童労働者とその母親、また、コットンを買い取り、衣服を生産する中国の工場長、その衣服を買い取り市場に回す日本のアパレル会社の社長と、そして衣服を買う女子大生の6つの役割に生徒が分担して役になりきります。やがてコットン栽培における児童労働が世界的に問題になり、立場の違う人々で問題の解決策を議論するというロールプレイを行いました。

◆ 生徒感想

「今自分がこうやって毎日安心して暮らせていること、教育を受けていることはとても幸せなことであると実感しました。展示では実際に使われていた銃や地雷、発展途上国での民族衣装や楽器など親しみや実感をもって学習することができ、大変勉強になりました。今日は見学することができて本当に良かったです」



「今日はとても貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。一番心に残っているのは、『日本に生まれて安全にきちんとした教育を受けられるのは、宝くじよりも低い確率なんだよ』という青年海外協力隊の方の言葉です。夢の実現に向けて思い切り勉強できることへの感謝を、世界の恵まれない子供たちのためにも絶対に忘れてはならないと思いました」

F) 国立ハンセン病資料館(東村山)

- 期間 2/3(土)
- 参加者 15名 (高校1年生9名 高校2年生2名 高校3年生4名)
- 目的

国立ハンセン病資料館並びに多摩全生園を訪れ、ハンセン病回復者の方との交流を通して、ハンセン病の歴史的背景を学ぶとともに、人権を踏みにじられてきた体験者の痛みに触れ、自身の生き方や人権について考え、深める機会とする。

■ 事前学習

ハンセン病に関する映像(映画「あん」・NHKスペシャル「瀬戸内 ハンセン病の島の記憶 大島青松園」)を視聴するとともにハンセン病の概要や日本における差別の歴史がおさめられた学習冊子を読み、ディスカッションを通して学び合った。

ハンセン病に関する基礎知識を踏まえ、一人ひとりが現地でハンセン病回復者さんに伺いたいことを考えて当日を迎えた。

■ 行程

午前は、国立ハンセン病資料館の学芸員さんに解説していただきながら館内の展示を見学し、日本におけるハンセン病の差別の歴史を学びました。各地の療養所で実際に使われていた生活道具や患者さんがつくった詩や陶芸作品を目の当たりし、出口の見えない隔離生活の厳しさとその中で生きる希望を持ち続けた患者さんたちの力強さに心が震えました。

昼食は、多摩全生園内のお食事処なごみにて全生園の職員の方と懇談しながら頂きました。また、映画「あん」の撮影で実際に使用された物を見学しました。

午後は「ハンセン病回復者と話す会」と多摩全生園のフィールドワークに参加しました。話す会でお話を伺った二人の回復者さんは、学生の時にハンセン病を発症し、家族が差別を受けないように自分の故郷を離れ、名前を捨てて療養所に入ったといいます。一人ひとりかけがえのない人生があったこと、それを踏みにじった差別が現実にごく日本で存在したのだということに大きな衝撃を受けました。差別に苦しみ続けてきた回復者さんの生の声に直接触れ、生き抜いてきた地を自分の足で歩く中で、生徒一人ひとりが人権という問題と深く向き合う時間となりました。



◆ 生徒感想

「私はハンセン病に関してまったく無知で、名前も初めて聞いたという状態でこのフィールドワークに参加しました。学んでいくうちに、療養所で隔離された患者さんの苦しみを知り、胸が苦しくなりました。回復者さんとの懇談で、「昔の政府を糾弾するのではなく、自分がもし同じ立場だったら偏見なく患者さんと接することができるのか考えてみてほしい」という言葉がとても心に響きました。同じ過ちを繰り返さないために、正しい情報を正しく伝え、もしこれから新しい病気が出てきて同じような状況になったとき、人権を尊重できる社会であるように、私にできることをしていきたいと思いました」

「全生園は想像していたよりずっと静かで、まるで別世界のように感じました。本当にここで生涯を過ごさざるを得なかった、その重みと歴史が強く胸に迫りました。資料館では学芸員さんが様々な立場の人の想いを汲み取って解説してくださり、ハンセン病の歴史の真実に少しでも近づけた気がします。回復者さんとの懇談会では、今も痛みや苦しみを抱えながら私たち若者と向き合って、優しく朗らかに生き抜こうとする姿が胸にささりました。今日出会った方々に応えていくためにも、人権問題と向き合い続ける自分になります」

「このフィールドワークへの参加を決めたとき、私はハンセン病について何も知りませんでした。現在ハンセン病患者は少なく、発症して数日で治る病気だといいます。今日の学びを通して、私たちが学ぶべきはハンセン病を理解しようとしなかった社会が患者さんに対して差別を重ねてきた残酷な歴史だと感じました。家族にまで縁を切られた悲しみ、ハンセン病だったと知られて自分のいた場所を目の前で消毒されたという悔しさ、そのすべてに私たちは同苦すべきだと強く感じました。また、苦しんでいる人を助けることができない法律や憲法の現実を、回復者さんとの懇談で目の当たりし、大学では差別をなくすために国は何をしていくべきなのか考えていきたいと思いました」

6. グローバルセミナー

■ 対象： 全校生徒（希望者参加）

全校生徒対象のグローバルセミナーは、一昨年度のSGHAより開始し、通算して17回行いました。本年度は第13回から第17回と行い、回を重ねました。

○第13回グローバルセミナー 4月14日（金） 会場：栄冠ホール

講師： 須賀正義 国際連合広報官



国連ニュースセンターのマルチメディアプロデューサーの須賀正義氏をお迎えし、栄冠ホールにて「世界を舞台に平和のために貢献するには」をテーマにグローバルセミナーを開催しました。須賀氏は、国連の幅広い活動を紹介しながら、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」ということを力説、紛争解決には国や民族の差異を越え、互いの「人間性」を尊重し、相手の「人間性」に訴えていく必要があると訴えました。

◆ 生徒感想

「語学を学び、対話で世界平和の連帯を築いていきたい」「身近なこと、できることから行動を起こし、何事にも希望を捨てずに進んでいきたい。」

「私の夢は、国連職員になることです。今日のお話を聞いてさらにその思いが強くなりました。語学の習得に励むと共に、もっと世界に目を向け世界の流れを知ることから初めて行きます。」

○第14回グローバルセミナー 6月12日（月） 会場：栄冠ホール

講師：オリビエ・ウルバン博士 民音研究所所長

民音研究所（民音音楽博物館附属研究所）所長で、音楽を通じた平和構築について研究をしているオリビエ・ウルバン博士をお迎えし、栄冠ホールにて「平和構築のために音楽が貢献できること」をテーマにグローバルセミナーを開催しました。

博士は講演の中で、「音楽はよい方にも悪い方にも加担する両義的なものである」、「音楽だけが独立して平和を作るのではなく、行動を伴ってこそ平和構築に貢献することができる」ということから、音楽は名詞ではなく動詞の『**music**ing』という考え方を通して、「音楽の背景には平和の哲学が必要である」とお話してくださいました。

◆ 生徒感想

「今日の講演で、音楽は言葉の壁を越える道具であり、心と心をつなぐ橋であり、また、それを可能にする力は音楽単独ではないことを学びました。」

「音楽は、そこに気持ちや思いがのることでその素晴らしい力を発揮できるという新しい視点を得ることが出来、これからの自分の演奏に生かしていきます。」



○第15回グローバルセミナー 12月19日(火) 会場:栄冠ホール

講師: ジェイソン・グーラー博士 デポール大学・准教授

アメリカ・デポール大学池田大作教育研究所所長ジェイソン・グーラー博士をお迎えし、栄冠ホールにて「World Citizen Education and Human Becoming in the Soka



Heritage (創価の系譜における世界市民教育と人間的成長)」をテーマにグローバルセミナーを開催しました。

博士は、本校の創立者が唱える、ありのままの人間とその成長を常に信じ続ける「人間教育 (Human Education)」と西洋の「人間主義教育 (Humanistic Education)」との相違点や「世界市民教育」の哲学などについてお話してくださいました。

◆ 生徒感想

「今回の講演を通して、改めて創立者の『人間主義』の体現者として、世界平和や人類に貢献していくことを強く自覚し、決意しました。」

「『毎日、自分はどのように行動すればよいのかと考えることが今できる世界市民としての行動だ』との話が一番心に残りました。今自分が出来る精一杯のことに全力で取り組んでまいります。」

○第16回グローバルセミナー 2月6日(火) 会場:栄冠ホール

講師: 河合公明 創価学会平和委員会事務局長

創価学会平和委員会事務局長の河合公明氏をお迎えし「核兵器禁止条約—SGIの役割と貢献」をテーマにグローバルセミナーを開催しました。

河合氏は、2017年 9月に署名式が行われた「核兵器禁止条約」が採択されるまでの交渉の様子や、ご自身が出席したICANへのノーベル平和賞授賞式の模様を通して、本校創立者の進めてきたSGIの草の根の平和運動について、教えていただきました。講演終了後には質疑応答も活発に行われました。

◆ 生徒感想

「今日一番心に残ったことは、『核兵器と生命の尊厳は両立しない』ということです。世界は核兵器があるのは当たり前、でもそれは世界中の人々の死が隣り合わせにある、ということにもう一度気づかされました。」

「宗教が人の認識を変え、それが世界の問題を解決する上での契機になる、とのお話が印象的でした。また、『どんなことも自分の身に置き換えて考えてみる』とのお話は、将来の大きな選択を助けてくれる新しい考え方になりました。」



○第 17 回グローバルセミナー 2月26日(金) 会場:栄冠ホール

講師: 長尾榮治氏 国立療養所大島青松園名誉園長



国立療養所大島青松園名誉園長の長尾榮治氏をお迎えし「ハンセン病対策と人権問題」とテーマにグローバルセミナーを開催しました。

長尾氏は、長年、日本国内はもとより海外 10 数カ国でハンセン病医療に係わってきた体験を通して、ハンセン病のかかえる人権問題、宗教による思考の違い、国における福祉のあり方、公衆衛生と臨床的な治療など、様々な観点からの解決が必要であることを教えていただきました。お話

の後には活発な質疑応答も行われました。

セミナー修了後、国立ハンセン病資料館へのフィールドワークに参加した生徒とのポスターセッションに出席し、様々な指導助言をいただきました。

◆ 生徒感想

「『学ばなければ加害者になる』との長尾さんの言葉と、直接そのような方たちと関わっていく中で、差別意識がなくなっていくというお話が印象に残りました。無知が他者への理解を妨げ、その人を傷つけ差別することに繋がるのだと、改めて気づかされました。」

「ハンセン病について詳しく知ることができ、患者さんたちがとても辛い思いをされていたのだろうと感じると共に、今も苦しんでいる方がいることや、他の病気でも苦しんでいる方がいることを想像すると心が痛みました。私の将来の仕事について考えていく中で、大切な経験となりました。」

7. 語学活動

A) 英字新聞(GCP)

- 期間 11月中旬～3月中旬
- 参加者 26名(1年生17名 2年生6名 3年生3名)(希望者)
- 目的

英字新聞の作成を通し、英語力・発信力を高めるとともに、取材や新聞作成を通じ、社会や世界との関わり方、情報活用能力、チームによる計画実行能力等を涵養する。

- 事前準備

参加者を学年が混在した4～5名ずつの6グループに編成。プロジェクト全体を統括する編集長(2年生)を1人決めました。学校紹介の英字新聞となることを説明し、各グループが1～2つの記事を担当することを伝え、各グループ話し合って記事にしたいことを検討していきました。

- 講義内容

1回目 11月15日(水)(2時間)

初回の講義はジャパントイムズ報道部長の内藤陽介氏に担当していただきました。「1人称は用いない」「ニュースソースを明確にする」など英字新聞の基本的な作法について学びました。次回に向けて取材企画書を用意して臨むことになりました。

2回目 12月12日(火)(2時間)

ジャパントイムズ報道部次長の小竹朝子氏をお迎えし、最近執筆された記事作成にまつわるエピソードやご自身の留学体験などを踏まえた英語学習へのアドバイスをいただきました。また編集会議を実施し、各グループのテーマが「GCP 企画(貿易ゲーム)」「図書館への寄贈本」「ネイティブの英語講師へのインタビュー」「スコラ手帳活用」「生活組織」「誓球寮」「対話運動」「創価教育の歴史」となりました。

3回目 1月24日(水)(2時間)

ジャパントイムズ編集企画部・部長の松谷実氏に講義を担当してもらいました。冬休みに作成・提出した英文原稿について、どのように修正すべきかの提案についてプリントに基づき、詳しく説明していただきました。

4回目 2月5日(月)(1時間)

週刊STの高橋敏之編集長が「英語を書くことを改めて考える」と題して講義。前回、修正提案を受けた英文について、各グループで直し、再提出。その原稿を紙面の形に印刷したものを配布してもらいました。各グループの記事について、講師に具体的に質問し、原稿のブラッシュアップを進めました。

5回目 3月10日(土)(1時間)

ジャパントイムズの大門小百合編集局長の担当で、生徒版とプロのチェックを入れて完成した版を比較し、英文・見出しなどがどのように修正されたのか解説を受けました。かなり修正されている箇所もあり、簡潔に言いたいことが伝わる英文に接し、大きな学びを得ました。



◆ 生徒感想

「このプロジェクトを通して、新聞の作り方、英文法だけでなく、『人に何かを伝える時』に大切なことやチームワークの重要性など多くのことを学びました。努力して作った新聞が完成した時の喜びがとても大きかったです。より英語が好きになりました」

「2年続けてプロジェクトに参加し、今回は編集長を務めました。今年はグループ長会を繰り返して行い、緊密に連携をとりました。その上で、トピックの決定にあたっては予めプロセスを決めておくなどさらに改善できると思いました。全体の進行やダミーシートの作成などにも携わり、とても勉強になりました」

「生徒同士の編集会議で様々な案が絞られ、ひとつの新聞が出来上がるまでのプロセスを体験できました。その中で英文を書くときの技術をたくさん学ぶことができ、今後活かしていきたいです。また英語のインプットとアウトプットをもっと積極的に行い、力をつけていきます」

*** 完成した英字新聞は、10.関係資料④参照**

B) イングリッシュキャンプ

■ 期間 11/11(土)～12(日)の2日間

■ 参加者 34名 (1年生15名 2年生14名 3年生5名) (希望者)

■ 目的

創価大学に1泊2日を英語のみを使いながら過ごし、最新の施設を使用しながら、英語コミュニケーション能力の向上を図る。また、留学生との交流・共同作業を体験する。

■ 事前学習

参加者を2～3名ずつの12グループに編成しました。「留学生から見た日本」について留学生にインタビューを行うための下準備として、テーマ設定とそれに基づいた質問を作成。テーマは「成人式」「挨拶」「年齢制限」「誕生日パーティー」「バレンタインデー」「ハロウィン」など多彩でした。

■ 研修内容

1日目

午前10時に創価大学中央教育棟に集合。今回使用することになるSPACEやワールドランゲージセンター(WLC)内の施設を見学。その後、開講式を行い、創価大学のサミュエル・ブルース先生より、ポスターを作る際のポイントや、プレゼンテーションのスキルについて講義していただきました。

午後からは9カ国・12名の交換留学生と交流をスタート。3～4名を1グループとし、各留学生の自己紹介や出身国の文化についてなど語ってもらいました。生徒は、準備をしてきた質問リストにそって留学生



にインタビューを行い、「留学生から見た日本」について情報を集めました。留学生は、ポスタープレゼンテーションについてのアドバイスをする「チューター」



として、各グループ1名ずつ担当してもらいました。夕方からのセッションは、発見・考察したことをA2サイズのポスターにまとめる時間とし、担当留学生と熱心に相談しながら、マーカーで記入したり、色紙を使って視覚情報を工夫して盛り込んだりして、ポスターを作り上げていきました。

2日目

朝は作業教室へ集合し、少しでも準備の時間を取るうと、朝食をとりながらポスターの仕上げや発表練習をしました。そして、何人かの留学生も集合時間より早く来て、学園生を応援してくれました。

グループ内でのリハーサルを経て、午後、いよいよSPACEに集合。広い空間にホワイトボードを配置し、ポスターを掲示しました。本校を卒業し国際教養学部で学んでいる先輩方もプレゼンを聞くために駆けつけてくれました。1時間半近くにわたるポスターセッションの中で、多くの方に質疑応答を含めた発表を行いました。閉講式では代表生徒の感謝の言葉の後、全員でWe are the Worldを合唱。最後は留学生とともに記念撮影し、充実の2日間の行程を終了しました。



◆ 生徒感想

「二日間英語づけているのは人生で初めてでしたが、とてもとても楽しかったです。言語の違いを越えてコミュニケーションを交わし、関係を築くことで得られる喜びや誇りは計り知れないほど大きいことに気付きました。英語のスキルはもちろんのこと、その他にも今勉強している目的や、人とつながる上でとても大切なことを学ばせていただきました。」

「今回は二度目のイングリッシュキャンプでしたが、前回以上に濃い二日間になりました。2日目のポスターセッションはあまり緊張せず、楽しく発表できました。また、昨年全く出てこなかったトピックがたくさんあり、他のグループの発表を見るのもすごく勉強になりました。この英語を話す楽しさを忘れずに、日々の英語の授業をもっと集中して受けようと思います。」

「1日目の午前中は英語を話すことを恥ずかしがってしまい、なかなか自分から話せなかったり、Yes、Noだけで会話を終わらせることが多かったのですが、今となってはその時間をもったいなかったと思



っています。英語を話す楽しさが心から分かった気がします。これからの英語の勉強で今回の経験は必ず生きていくと思うので、しっかりと地道に英語の勉強を続けていきます。」

C) スカイプ英会話

全校生徒に対しても、学期に2回程度のウェブリオ英会話を実施しました。1年生は英語コミュニケーション、2・3年生は英語表現Ⅱの時間を活用し、それぞれCALL教室にてiPadを使用して、クラスを23名程度、約20分ずつを2回行いました。これにより英語のスピーキングの機会が増えました。2年目となる今年度は、学校全体としてオンライン英会話に慣れてきました。各学年で英語の授業内容と関連するトピックを設定しました。さらに今年度は、weblio株式会社と協力してオリジナル教材を作成することで、授業との相関性をさらに高めました。ルーブリックを活用し、20分間また、1年生は日本語・英語の往還を意識しての言語技術の活用を、3年生はファイナルプロジェクト・ポスターセッションの再現と質疑応答を行いました。

本年度各学年であつかわれた主なトピック

対象	トピック
1年生	・夏休みの思い出 ・仮定法のトレーニング(英語表現Ⅰ) ・カレーライス作り方の説明(言語技術)
2年生	・自動車台数の制限問題(英語表現Ⅱ・意見文) ・日本の世界遺産ツアープラン(英語表現Ⅱ・プレゼンテーション)
3年生	・学校の制服着用は是か非か(英語表現Ⅱ・英語ディベート) ・GCPファイナルプロジェクト(再現と質疑応答)

weblio英会話 Grade1_3

1. ROLE PLAY (Ordering at a restaurant)

Read the dialogue with your tutor. (Appropriate time: 4min)
講師と会話文を音読しましょう。

Tutor 講師	Hi. May I take your order please?
Student 生徒	Sure. Can I have a bowl of green salad for appetizer please?
Tutor 講師	Sure. Would you like to have it in solo or large size?
Student 生徒	Solo please.
Tutor 講師	I see. Thank you.
Student 生徒	And I'd like to have a tuna melt sandwich.
Tutor 講師	Okay. Anything else?
Student 生徒	I'll also have 1 large iced tea.
Tutor 講師	Alright. Anything else? How about dessert?
Student 生徒	That's it for now. I'll just order a dessert later. Thank you.

2. PRACTICE (Ordering at a restaurant)

Look at the menu below. Let's practice ordering at a restaurant. (Appropriate time: 6min)
メニューを見て注文してみましょう。

Tutor 講師	May I take your order please?	FOOD • Green salad (S/M/L) • Today's soup • Fried chicken (3pcs/5pcs) • Spaghetti carbonara • Monster hamburger DRINK • Coke • Lemonade • Orange juice • Tea (milk/ lemon) • Coffee
Student 生徒		
Tutor 講師		
Student 生徒		

To continue.....

© All Rights Reserved. All rights reserved.

英語表現 I Lesson 12 + Review 振り返りシート

項目	1	2	3	4	5	備考
既定文 if it rained, I would not go to the concert.	既定文は既定の型、がらからしない	既定文の文を認め、現在と過去の違いを理解できる	既定文の現在と過去の基本的な文をつくらなければならない	既定文の現在と過去の基本的な文をつくらなければならない	既定文の should や were in, With, 前置詞などの文を理解し、つくることができる	
動詞形と動名詞	動名詞は動詞を V-ing に変換すること	動名詞と動詞の使い分けがわかる	動詞形と名詞の強い関係がある	動詞形と名詞の強い関係がある	動詞形と名詞の強い関係がある	
①過去完了 ②未来完了 ③完了進行形	過去完了は過去の過去の型、現在完了は現在完了の型、未来完了は未来完了の型、完了進行形は完了進行形の型	過去完了は過去の過去の型、現在完了は現在完了の型、未来完了は未来完了の型、完了進行形は完了進行形の型	過去完了は過去の過去の型、現在完了は現在完了の型、未来完了は未来完了の型、完了進行形は完了進行形の型	過去完了は過去の過去の型、現在完了は現在完了の型、未来完了は未来完了の型、完了進行形は完了進行形の型	過去完了は過去の過去の型、現在完了は現在完了の型、未来完了は未来完了の型、完了進行形は完了進行形の型	
不定詞と動名詞	不定詞は動詞を V-ing に変換すること	不定詞と動詞の強い関係がある	不定詞と動詞の強い関係がある	不定詞と動詞の強い関係がある	不定詞と動詞の強い関係がある	
コミュニケーション活動 自己学習	英語で何を言いたいのかを伝えることができる	英語で何を言いたいのかを伝えることができる	英語で何を言いたいのかを伝えることができる	英語で何を言いたいのかを伝えることができる	英語で何を言いたいのかを伝えることができる	
授業で学んだこと (授業で書いても大丈夫です。3 文以上書くこと)						

D) クリティカル・ライティング・センター

■ 概要

本校生徒であれば誰でもいつでも利用できるライティング・センターを 2015 年 4 月に開設してから 3 年が経過しました。本校「クリティカル・ライティング・センター(以下「CWC」)」では、生徒の母語である日本語で書くことに関する相談(以下「セッション」とする)を行います。セッションでの支援は、原則 1対1 の対話をベースに「書くプロセスの支援」また「書き手の支援」となります。このような対話型の支援は、いわゆる添削のように、書き手に書くための答えを与えるのではなく、「書き手が自分の中から考えを生み出し、整理する段階」を積極的にサポートすることとなります。そして、本校ライティング・センターでは、生徒の「自ら考え、発信する力」の育成を目指しています。つまり、CWC では「書くこと」のみならず「深く考えること」との 2 点を柱として「書き手の成長」を目指す支援・運営を行っています。本項目では、昨年度に引き続き SGH 実践校における母語(日本語)ライティング支援の取り組みについて報告します。

本年度(2017 年度)は、SGH 事業の軸となる「言語技術(高校 1 年・2 年)」「GLP(選抜生徒)」に対し、CWC による補助的な支援を行いました。また、放課後に開かれる CWC では、主に大学受験関連の文書を支援しました。昨年度(2016 年度)の SGH 報告書にて次年度の課題とした「CWC 利用者のライティング能力評価」および「ライティング支援そのものの評価」の予備調査として利用者に対してアンケートおよびインタビューを行い、ライティング支援の効果と評価の一端を明らかにすることができました。これらの調査の結果、**CWC 利用者は**

①文章力の向上のみならず、書くことそのものに対する姿勢や意識の変化をメタ的に認知していること、②ライティング支援に対し、CWC利用前までの自分にはなかった新しい視点や新しい自分を見つけられたという評価をしていることの大きく2点が明らかとなりました。そして、これらの実践報告を The Tenth Symposium on Writing Centers in Asia (2018年3月9日・東洋大学白山キャンパス開催)にて報告し、主催者からも日本ではまだ珍しい高等学校のライティング・センター実践に期待が寄せられました。そのうえで、昨年度からの課題として残っている①教科を超えたライティングの取り組み拡大、②生徒・教員向けの広報活動の2点に加え、新たに③英語 CWC との連携強化を次年度の課題としたいと考えています。

■ 本校におけるライティング支援－教員によるライティング支援と支援方針－

昨年度同様、CWC(日本語)では平日週5日16:00-18:00に教員によるライティング支援を行っています。セッションは原則個別対応で、対話型のライティング支援を行います。CWC利用者に対するチュータリングは、常駐する2名の非常勤講師が担当しています。高等学校のライティング・センターで、教員がチュータリングを担当するのは本校のみです。教員がチュータリングを行うことにより、学校組織にとっては、各教科の教員とCWC、またクラス担任の教員とCWCとの連携が容易となる利点があります。また、CWC利用者にとっては、利用者の状況、興味・関心に合わせたキャリア支援や、利用者自身の中で「高校での学び」と「大学での学び」を結びつけるという個人レベルでの高大接続支援が受けられる利点があります。

CWCでは支援方針として、各国ライティング・センターの方針同様、「書き手のオーソリティを尊重し」、「添削を目的としない」「対話による」ライティング支援を実施しています。これに伴い、CWCでは書かれた文書そのものの「評価」は行いません。ただし、「言語技術」や「GCPファイナルプロジェクト」のように担当教員と連携して「授業」に関与する場合には、指導的側面を考慮し、評価基準の策定などに寄与します。

■ CWCによるSGH関連・授業への取り組み

● CWCとSGH活動との連携

まず、本年度が2年目の取り組みとなる「言語技術」では、高校1年生・2年生の履修者全員に対して添削を中心としたフィードバックを行いました。1年生ではパラグラフ・ライティングの基礎的な作文(5~6本/年、400字以内)に加え、パーソナルエッセイやGCP(グローバル・シティズンシップ・プロジェクト)で学んだ地球規模課題に関する小論文等800~1,000字程度の作文を課しました。2年生では、單元ごとの作文(4本程度/年、400字~800字程度)に加え、3学期はGCPで扱った人権をテーマに4~5パラグラフの小論文を課しました。その際、授業内で書けない生徒に対して、放課後にCWCでの個別サポートも行いました。

次に、高校2・3年生の選抜生徒を対象とするGLP(グローバル・リーダーズ・プログラム)では、毎回の活動で輪番による報告書作成を課しました。報告書は、活動から学んだこと・得られたことを掘り下げるための課題とし、特に今年度は「所感」と「考察」を項目として分け、それらを意識的に分けられるよう促しました。書かれた報告書には、Google Docsのコメント機能を活用してCWCから不明点や課題点を「質問」形式でコメントし、リライトを勧めました。

● 現代文ライティング指導(ティーム・ティーチング)

SGH事業関連のサポートに加え、2017年度は昨年度に引き続き、CWCのチューターが文理クラス(2・3年の2クラス)の現代文の授業にそれぞれティーム・ティーチング(以下「T.T.」)

で入り、ライティング指導を行いました。昨年度と異なる点は、高校3年生文理クラス2クラスのうち創価大学理工学部への内部推薦生が半数を占める1クラスだけ、週2時間の T.T.としました。このことにより、2学期の学期間は「センター演習」と「小論文演習」とにクラスを分け、内部推薦試験が終わった生徒と大学受験で小論文対策が必要となる生徒らのニーズに応じた指導が行えるようになりました。

高校2年生の1年間と3年生の1学期間は、T.T.の授業内で、「振り返りシート」を通し、文章を書く、自分の考えを文字で表現することを習慣化しました。そのうえで、各定期考査前後に論述課題を課しました。文理クラスに所属する生徒(約 90 名)は、2年間を通じて 400～800 字程度の論述課題を計 7～8 本書き上げることとなります。そして、それらすべての課題に対して、教員からのフィードバックが得られます。

■ 放課後の CWC によるライティング支援—利用者の意識変化と利用者による支援評価
放課後の CWC では、主に大学受験に関連した文書のライティング支援を行いました。CWC 利用者の利用目的は、6.5 割が大学をはじめとする進学関連となります。志望理由書を中心に、小論文や面接対策なども取り扱いました。また、その他のライティング支援として、授業課題や奨学金申請書、個人的な文章の相談等、文章の種類を問わず相談に応じました。

● 利用実態の3年間の推移

3年間の CWC 運営で、セッション数は開設初年度から 2.9 倍増加しました(表 1)。初年度から本年度まで、205 件(初年度)、501 件(昨年度)、587 件(本年度)と増加し、3 年間で計 1,237 件の相談がありました。特に最もセッション数が増加する 10 月は、大学入試に関連する志望大学への出願準備があります。そのため、10 月のセッション数は 44 件(初年度)から 167 件(本年度)と 3.75 倍の利用増加が確認されます。ここから、生徒本人にとって人生やキャリアと深く関わる大学入試関連の文書を見てもらいたい、相談に乗ってもらいたいというニーズが読み取れます。また、生徒本人にとって重要な文書となるため、複数回 CWC を利用し、文書を完成させる場合が多くあります。このことから、書くことへの強い内発的動機が生徒本人にあるということが出来ます。

表 1 2015 年度から 2017 年度のセッション数(学年別)

	2015年度	2016年度	2017年度	計
1年生	4	9	13	26
2年生	34	66	59	159
3年生	167	426	513	1,106
教員	0	0	2	2
計	205	501	587	1,293

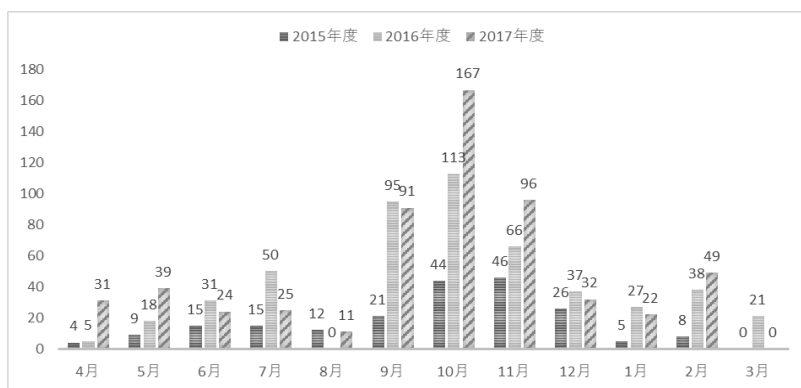


図 1 2015 年度から 2017 年度の利用実態(月別)

● 利用者の自己評価（アンケート結果）

昨年度まで CWC 利用者には毎回のセッション終了後に、アンケートを行い、利用者の変化を追っていました。これは、セッションの支援効果を測定するための、利用者自身による自己評価アンケートとなります。このアンケートは、セッションを通しての個々の意識の変化をみるのに有効という利点があります。しかし、変化の要因を探ることが難しく、また 10 月などの混雑時には利用者全員に行うことが困難となったため、現在は当該アンケート調査を中止しています。

● 支援効果 1（卒業生アンケートの結果）

昨年度に続き、CWC を利用した生徒 18 名の卒業生に対し、CWC 利用による効果についてアンケートを依頼しました。

その結果、「CWC を利用して得られた力はなにかありますか（全 7 択、複数選択可）」では、昨年度の結果では「自分の考えや意見をまとめる力」（100%）、「構成を意識して文章を書く力」（92.3%）、「物事について様々な視点から検討する力」（84.6%）が上位の 3 項目となっています。それに対し今年度は、「物事についてじっくり考える力」（88.9%）と「構成を意識して文章を書く力」（88.9%）の 2 項目がトップとなり、続いて「物事について様々な視点から検討する力」（77.8%）となっています。

また、「CWC を利用してどのような変化がありましたか」との問いに対する回答（自由記述）は、「文章を思いついた順ではなく理論立てて順番つけられるようになった」（生徒 A）「自分が気づかなかった自身の一面を発見できた」（生徒 B）「自分の考え方を整えることが出来ました。また、読み手のことを考えながら文章を書けるようになりました」（生徒 C）「考える課程で『これってどうなの？具体的には？』と、自分に問いかけることが出来るようになった」（生徒 D）というように、生徒自らが CWC の支援を活用し、書くこと以外にも自分自身の内面と積極的に向き合ったことが読み取れます。

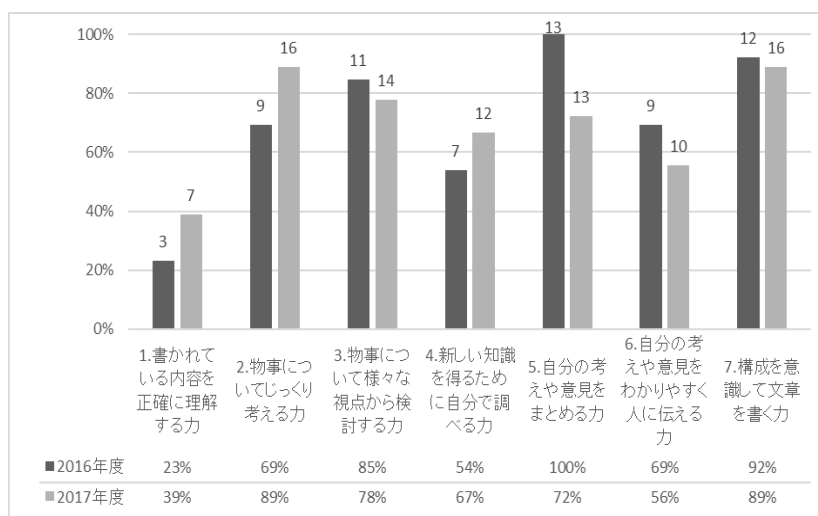


図 2 「CWC を利用して得られた力はなにかありますか」（複数回答可・年度別比較）

● 支援効果 2（インタビューの結果）

昨年度課題となっていた「CWC 利用者のライティング能力評価」および「ライティング支援そのものの評価」を測るため、本年度は CWC 利用者に対してインタビュー調査を行いました。対象は受験目的で利用をした 3 年生、計 11 人としました。その中で、書き手が自覚している変化として、①自分の書いた文章に対する姿勢の変化、②書くことに対する変化、③自己形成・メタ認知能力に関する変化、④自立的な側面での変化の 4 点が確認されました。また、ライティング支援そのものの評価については、「他者の視点を獲得」、「思考の深まり」、「新しい自分が見つかる」という 3 点の効果があることが、書き手自身により評価されました。

■ 次年度以降の課題

3年間の CWC(日本語)実践によって、利用者の書くことに対する意識が前向きに向上しただけでなく、CWC を利用することで生徒自身が自己の内面と向き合い、自己形成を行っていくという支援効果を確認することができました。これらをふまえて、SGH3年目となる次年度は、①教科を超えたライティングの取り組み拡大、②生徒・教員向けの広報活動、③英語 CWC との連携強化を課題とします。まず、昨年度に引き続き、教科を超えたライティング機会の創出や支援の取り組みを拡大していきます。「書く力」を伸ばすために、書く機会が豊富であることは不可欠となります。また、高大接続を意識した「教科から学問へ」の質的充実も図っていきます。次に、CWC がどのような機関、どのような支援を受けられる場所なのか生徒・教員に対して一層の広報活動に力を入れていきます。さらに、次年度以降は、グローバル人材育成のためにも、CWC(英語)との連携強化を図り、地球規模課題の解決に貢献するための言語運用能力の向上を目指します。これらの点を目指した CWC 運営を行っていくこととします。

8. 時間管理手帳

■ 目的

時間管理手帳(スコラ)を活用した時間管理能力育成(タイムマネジメントの指導法開発)

■ 実施

SGH の取り組みの一つとして、生徒の時間管理能力を育成し、PDCA サイクルを習得させるため、時間管理手帳(以下、「スコラ」)を全生徒に配付して活用しています。キャリア教育推進委員会(月 1 回程度開催)での協議をもとに、学年ごとに計画的に生徒への指導・激励を行っています。

1年生については、入学前にスコラを配付し各人で試行させるとともに、入学後には「手帳教室」を開催し、PDCAの概念や手帳の利用方法などについて学ぶようにしています。全校では、日々の連絡事項や学習・部活動をはじめとする諸活動の記録と振り返りに活用させています。特に、定期考査の2週間前には、目標や学習プランを各自で作成させ、毎日の時間管理を習慣づけるとともに、試験終了後には振り返りを行わせるようにしています。

スコラの活用法等を競う「手帳甲子園」(主催:NOLTY プランナーズ)への出品を行うため、学園祭では校内手帳甲子園を実施し、公開展示。評価の高かった29名のスコラを、東京予選会(2017年11月25日/於:千代田区立麴町中学校)に出品しました。その結果、第6回「手帳甲子園」(2017年12月16日/於:原宿クエストホール)において、本校生徒2名



が各賞を受賞しました。全国より736点の応募があった手帳活用術部門では、荒井花菜さん(1年)が最優秀賞(全国第1位)に、また417点の応募があった表紙デザイン部門では、永宮亜紗陽さん(1年)が優秀賞(全国上位5位以内)を受賞。荒井花菜さんはスコラを活用し、高校生活を改善向上させたことについてプレゼンテーションを行いました。

●効果測定より

NOLTY プランナーズがスコラを活用している全国の生徒に実施した効果測定（2017年7月に実施 160,966名が回答）から、本校の傾向として以下のような点がみえてきました。

本校においては、手帳の使い方については友人（同級生・上級生）の取り組みが影響を及ぼす傾向にあることがわかりました。TV朝礼等を活用し、生徒代表がスコラ活用事例のプレゼンテーションをしたり、優れた手帳活用の掲示を行うなどの工夫が効果をあげたものと考えられます。効果測定では、「手帳の使い方参考になったものはありますか？（複数回答可）」との質問項目について右のようなデータが測定されました。

「手帳の使い方参考になったものはありますか？（複数回答可）」 ～2017年7月実施の効果測定より～		
学年〈期〉	先輩の手帳（全国平均）	同級生の手帳（全国平均）
1年生〈50期生〉	18.34%（5.43%）	25.50%（15.50%）
2年生〈49期生〉	14.60%（3.46%）	36.02%（17.28%）
3年生〈48期生〉	13.38%（3.13%）	35.45%（15.41%）

9. 評価と分析

A) アンケートと分析

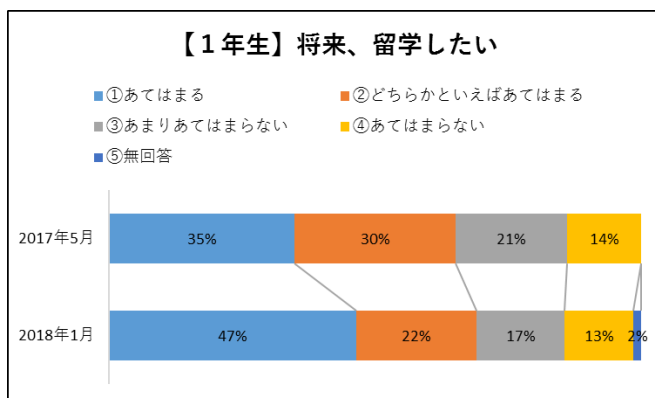
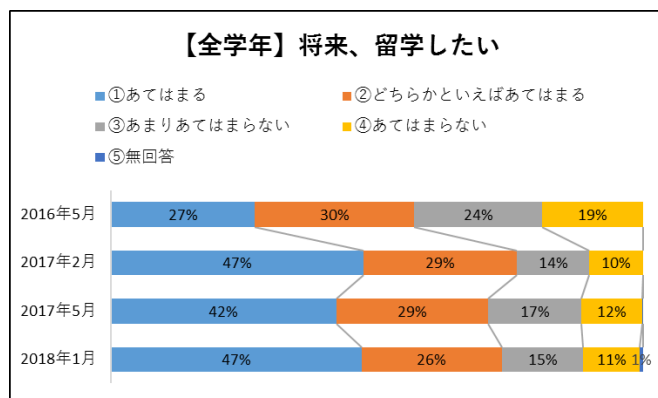
■ 生徒対象のアンケート

2017年5月と2018年1月、SGH活動に対するアンケートを全校生徒対象に行ったところ、以下のような結果が得られました。

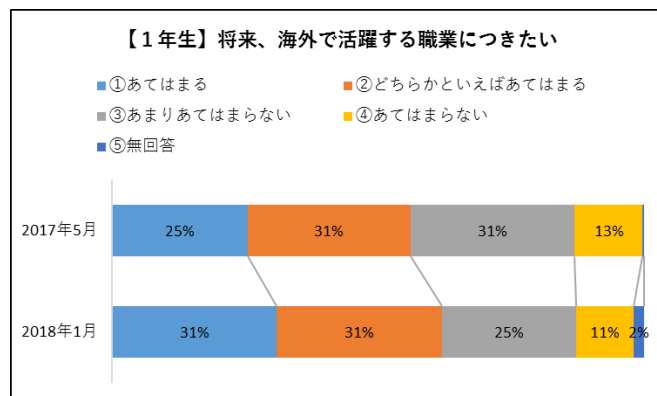
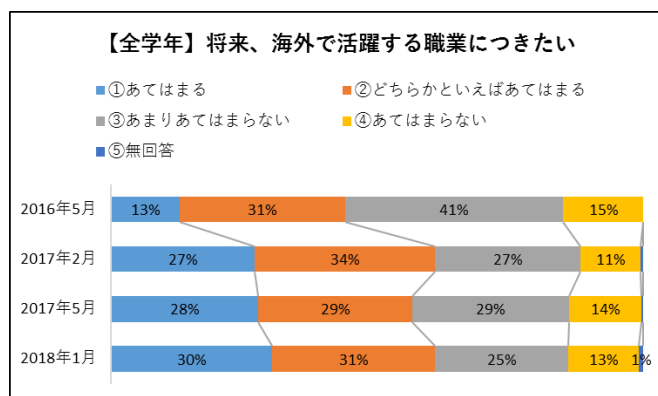
海外への志向性、語学への意欲の変化を問う質問については、過去2回行ったアンケートの結果との比較を行っています。

● 海外への志向性、語学への意欲の変化

SGH1年次から2年次にかけて、留学を希望する生徒が高い割合で推移するようになっていきます。初めてSGHを体験した1年生も、留学がより身近に、現実的に感じられるようになったことがわかります。



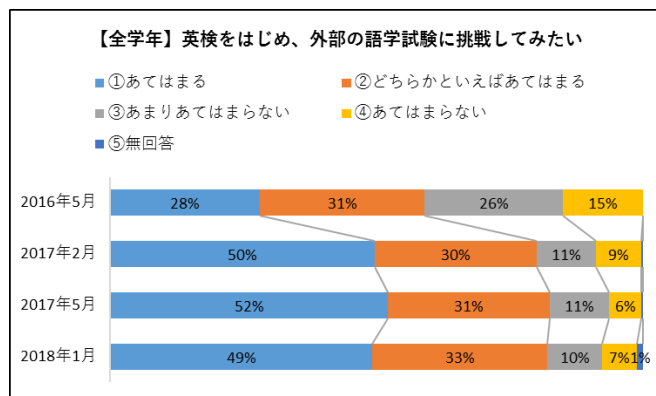
将来、海外で働く自分をイメージする生徒も、SGHの活動を始めてから高くなっています。校内で世界をより身近に感じる機運の高まりとともに、今後この割合はさらに高くなることが予想されます。1年生でも1年間の活動の結果、グローバルに活躍する夢を描き始める生徒が増えています。



語学試験に積極的な生徒が、全体の8割を超えるようになっていきます。2015年度にSGH校に指定され、英検の受験料の助成が行われるようになったことも、増加の一因のようです。

ここ4年間の英検1級、準1級の受験者数の伸びが、明確に生徒たちの積極性をあらわしています。SGHアソシエイトになったのが2015年ですので、SGH校になったことで、生徒たち

が世界に羽ばたく力をつけたいと意欲的に取り組んでいることがよくわかります。



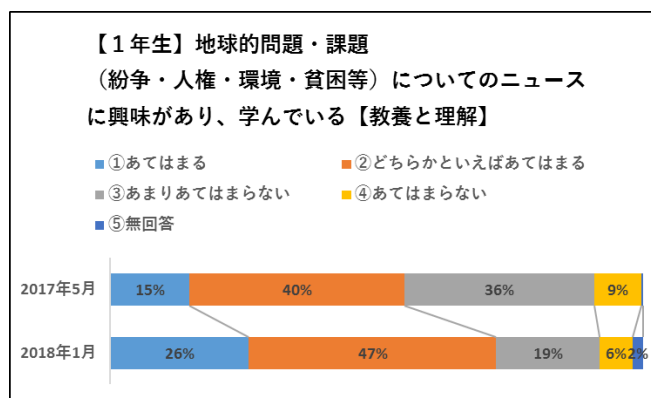
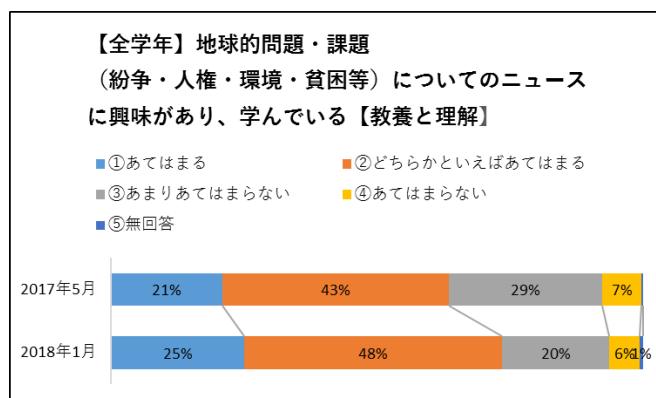
	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
準1級	67 (6)	127 (13)	204 (23)	272 (32)
1級	1 (0)	6 (1)	18 (4)	16 (1)

※カッコ内は合格者

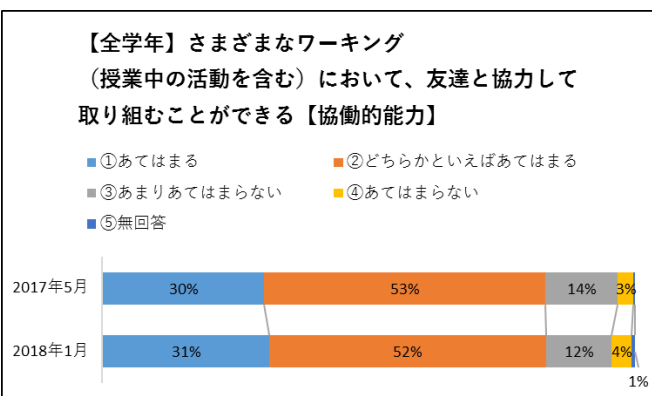
以上の結果から、今年もSGHとしての活動を通し、生徒たちが世界をより身近に感じ、世界を舞台に活躍する意欲を高めているとわかります。また、高校生として、今は語学を身につけようと強く動機付けされていると言えます。

● 身につけてほしい能力や資質の定着

学校全体で地球的問題・課題への興味や理解は確実に浸透しています。すべての学年で70%を超える生徒が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えており、3年生では80%に達しました。1年生では、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が1年間で18ポイント増加しました。SGHでの活動が生徒たちの興味や関心を引き出し、具体的な学びにつながっていることがわかります。



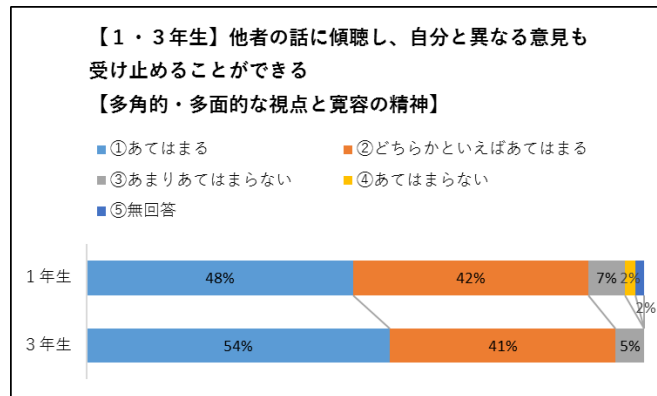
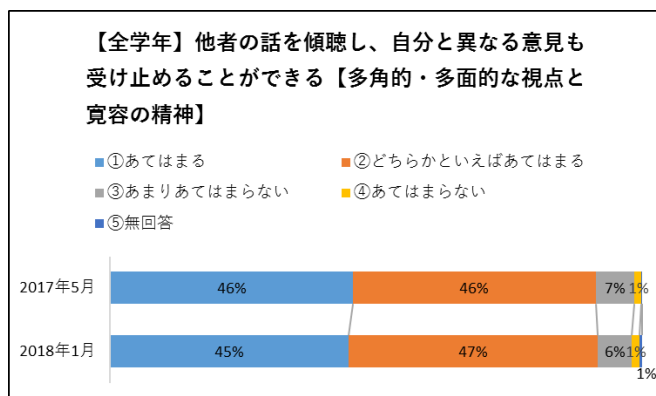
協働的能力は、もともと「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が8割を超え、高い傾向にあります。創価高校生はこの能力を用いてSGHの活動を行っていると考えられることもできます。



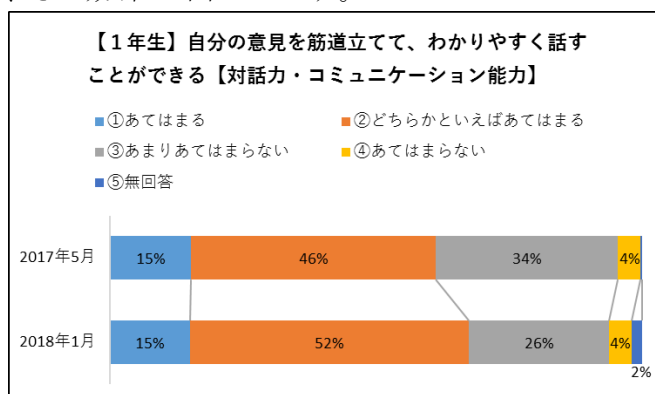
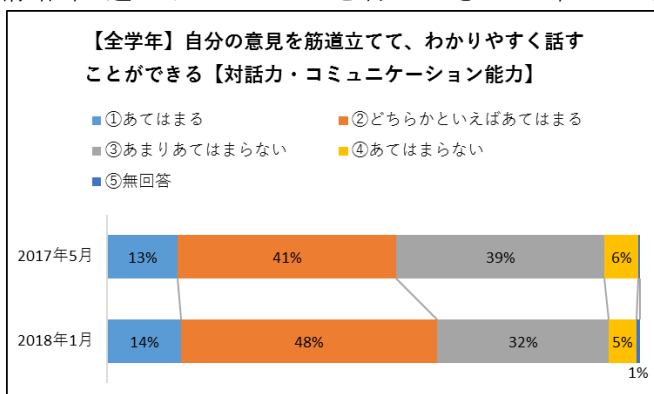
1年生は、協働的能力に自信をつけた生徒とそうでない生徒、双方が増えています。対話やディスカッションを初めて体験する生徒もいるので、自信を失ってしまうこともあるのかもしれませんが。しかし3年生を見ると、85%を超える生徒が協働的能力に自信をつけています。仲間との協力無くしては成り立たない、2年間にわたるSGHの活動の中で伸ばした力です。

以下の質問も、「協働的能力」と同様に、創価高校生らしい親和性を表して、もともと高い傾向にあります。

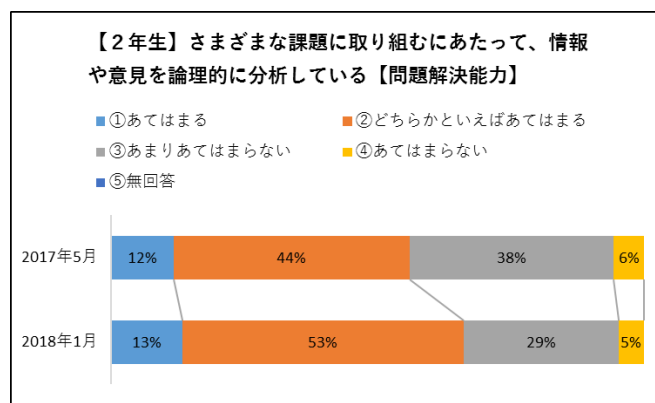
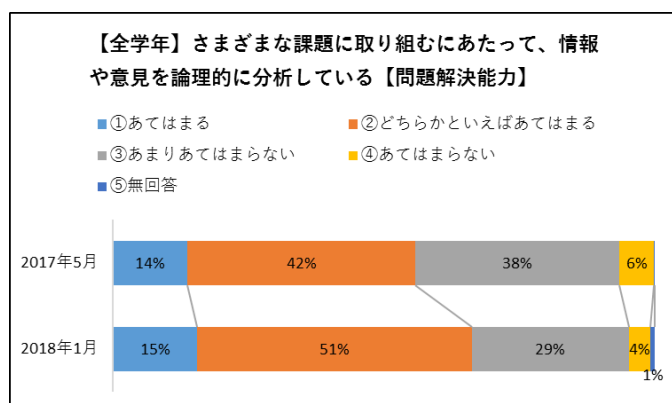
1年生のうち傾聴や他者への理解に難しさを感じる生徒もいますが、3年生になると95%の生徒が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えており、「あてはまらない」と答える生徒がいなくなっています。異なる多様な意見に触れる2年間のSGHプログラムと、高校3年生の成長が相まったの結果です。



対話力・コミュニケーション能力の、全学年と1年生での推移です。今年はいじめて言語技術の授業を受け、「問答ゲーム」のような対話のトレーニング、効果的に説明するスキルを学ぶ情報伝達のトレーニングを行ってきた1年生にも、その効果が出ています。



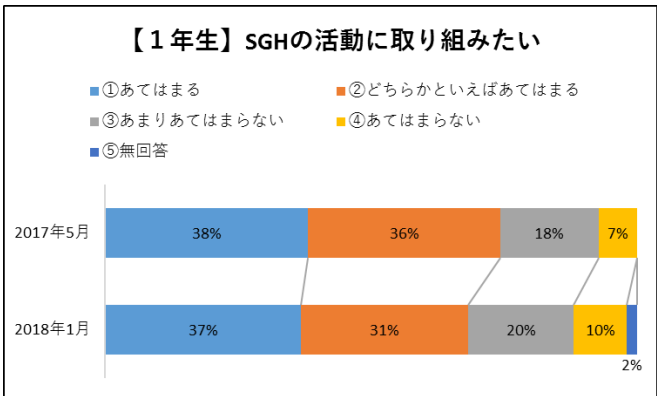
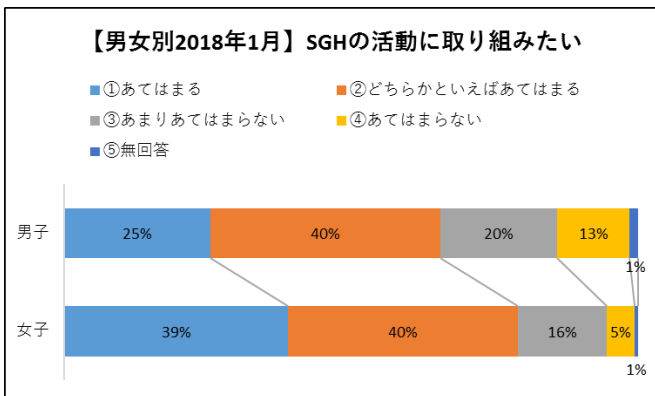
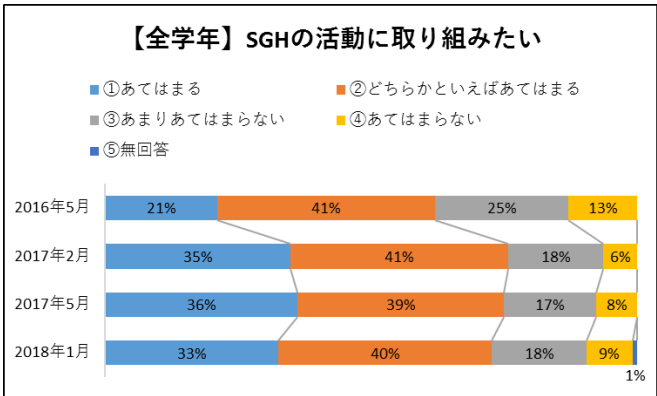
問題解決能力の、全学年と2年生での推移です。2年生は今年、言語技術の授業で、情報分析や議論のトレーニング、認知のトレーニングをしてきました。論理的な分析能力が身についたと実感する生徒が10ポイント増えています。



以上の結果から、「言語技術を磨き、地球規模課題の解決に取り組む能力を育成する」という本校のSGHプログラムの目的に対し、生徒たちの実感の中で結果を出すことができていると言えます。

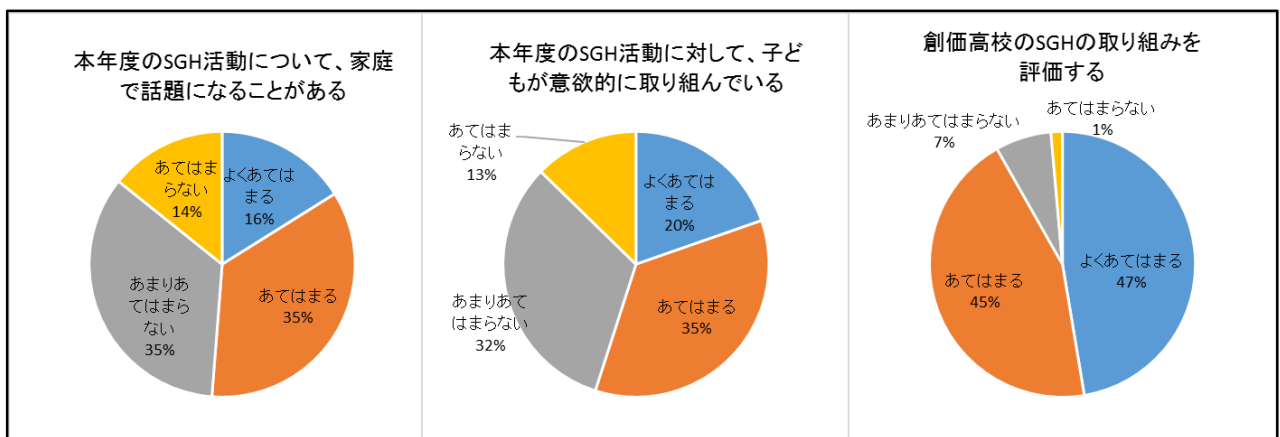
最後に、アンケートの結果から見えた、今後取り組むべき課題を挙げておきます。

活動による視野の広がりや、能力の高まりに効果がありつつも、SGHの活動への積極性については、必ずしも取り組みに意欲的でない生徒が1年間で増えていることがわかりました。とくに男子生徒の中には、女子生徒と比べてSGHの活動に消極的な生徒が多くいるようです。また、2018年1月のアンケートでは、それまであまり見られなかった「無回答」の生徒が一定数いることも気になりました。多彩な生徒たちがいる中で、どのように多くの生徒たちを活動に引き込んでいくのか、裾野を広げる取り組みが求められます。

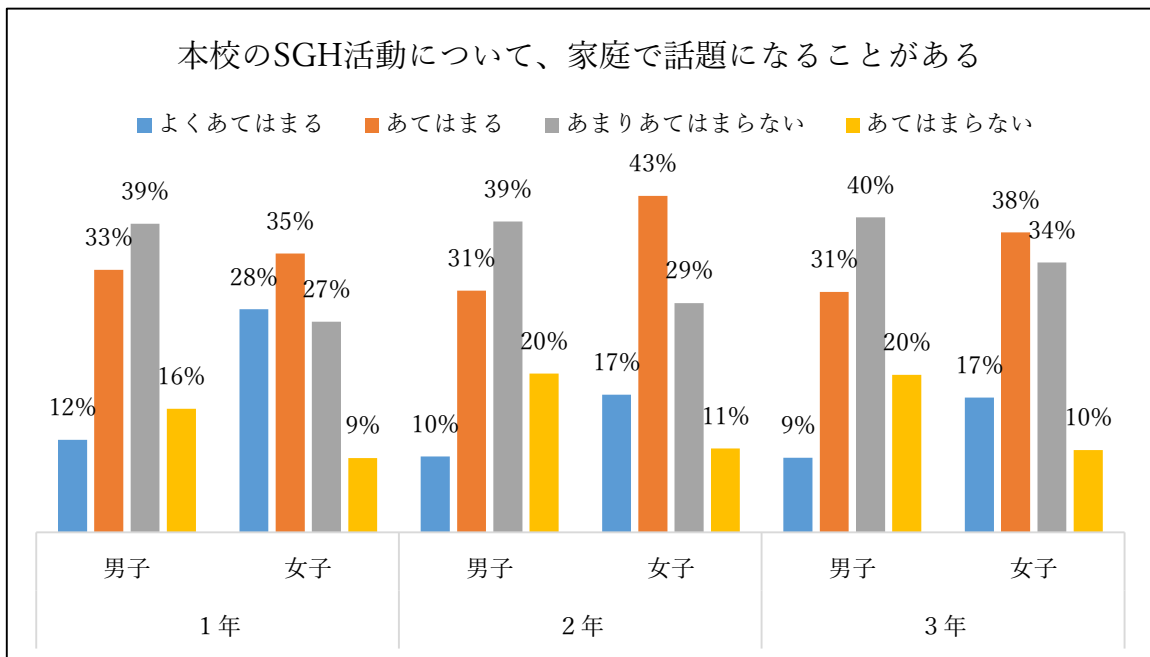


■ 保護者対象アンケート

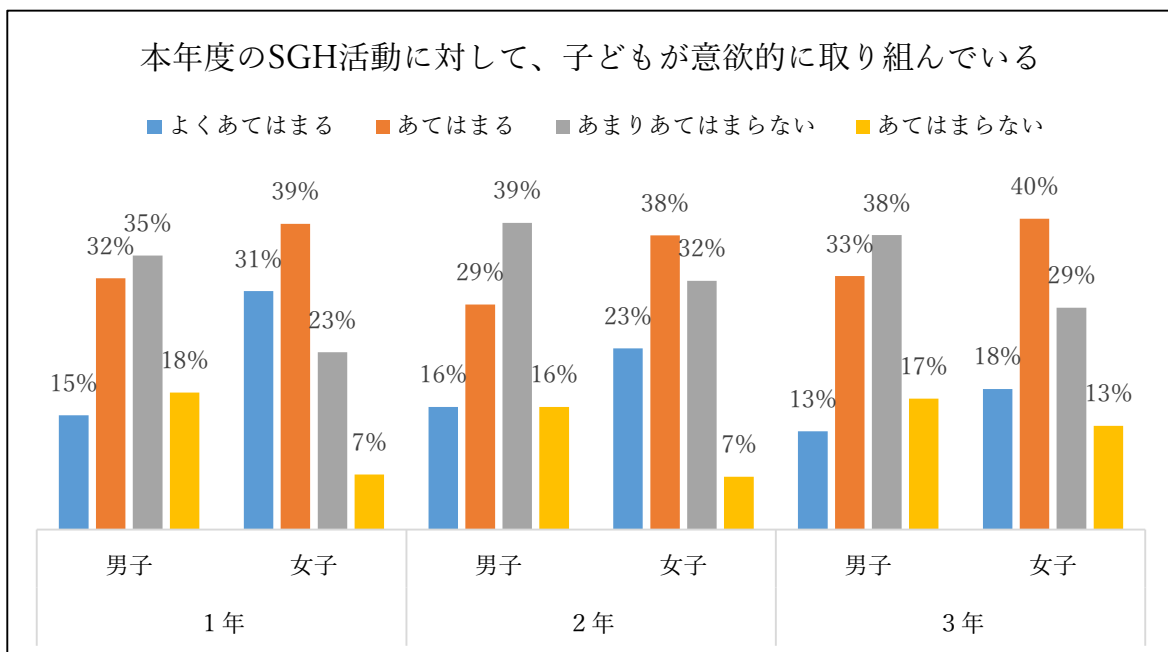
2018年2月に、665名の保護者から得られたアンケートの回答をまとめ、以下のような結果が得られました。



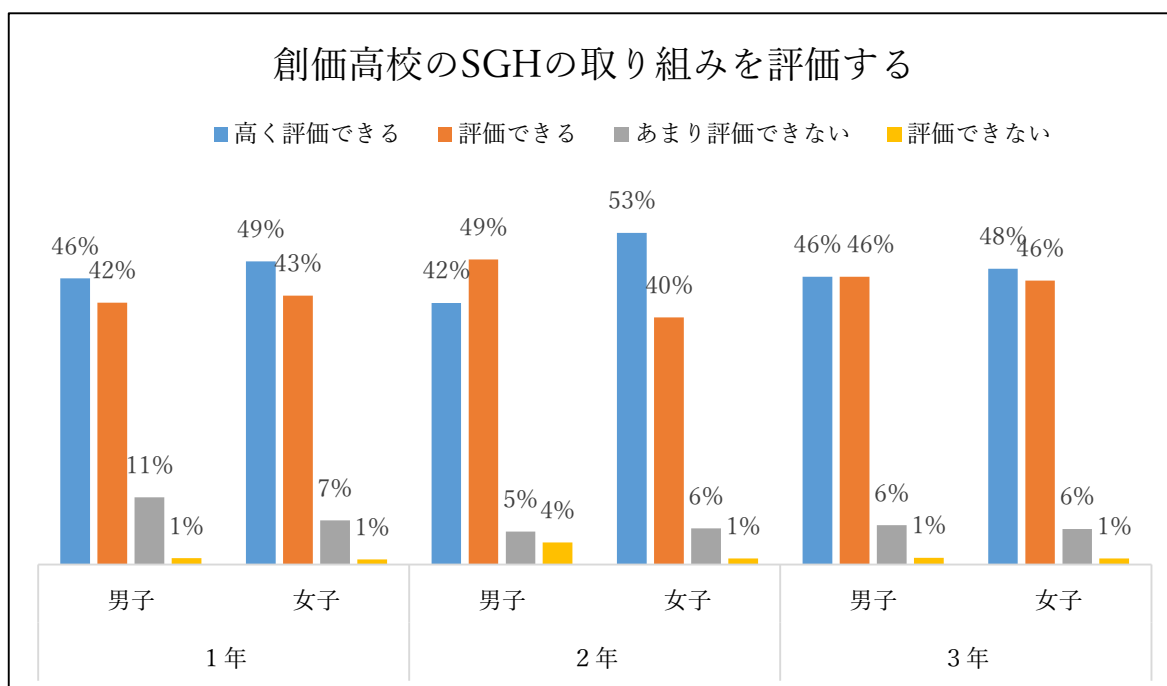
● 回答の詳細と分析



学校生活についてあまり家で話さなくなる年齢ということもあり、男子は1～3年でほとんど割合に変動がありません。一方で女子生徒は、学年を追って割合こそ少なくなってくるものの、半数を超える生徒が家庭でSGHのことを話題にしています。



特に1年生の女子生徒においては、70%の保護者が意欲的な取り組みを実感しています。また、男女での意欲の差が大きく、SGH活動を全校としてより活発にするカギが、男子生徒の取り組みにあることを感じさせます。



保護者から見て、SGHの取り組みは総じて高く評価されています。1年男子で否定的な割合が若干高くなっているのは、活動が生徒に合っていないとの保護者の心配が反映されているのではないかと考えられます。SGH2年目の2、3年生ではこの割合は低く抑えられていることから、活動を重ねていくことで、保護者の理解が得られていくことも予想されます。

B) 中間報告会・活動報告会・評価(声)

SGH 中間報告会

■ 11月25日(土)14時00分

会場:創価高校 CALL 教室

■ 【式次第】

一、校長挨拶

木下校長

一、言語技術報告

恒岡教諭・永嶋教諭

一、GCP 報告

生徒代表

一、GLP 活動報告

生徒代表

一、ポスターセッション

生徒代表

※English キャンプ、FW 実施報告

一、高大接続と高3Final Project 報告

卒業生代表

一、講評

村上清 岩手大学学長特別補佐

◆ 【講評】 村上清 岩手大学学長特別補佐

GCPの取り組みについて

活発に生徒が取り組んでいる姿を見て、大変嬉しく思った。わたしが高校生の頃にこういったものがあればどれだけ道が開けたら良かったか考えた。これらの活動を、言語技術を学びながらやっているのが素晴らしいと思った。

特に、3年生の模擬国連を参観して、核保有国に対して決議案を出すという、現実問題に即した

状況を提供していて大変面白かった。先週まで国連に交渉を受ける立場として行ってきた。これを模擬としてやることは、国同士の話し合いのみならず、企業同士のやりとりといった場面でも活用される。本音と建前を使い分けることの重要性を模擬国連の場を借りて学ぶことは、今後一般社会を生きていく上で重要だと感じた。

言語技術の取り組みについて

大学においても、様々な形で言語能力を高めようと取り組んでいる。その中でも、創価高校で行っている言語能力を伸ばそうとの言語技術の取り組みは大変重要。特に、読む、聞く、話すに加え、思考する（どのように物事を見るか）という部分を伸ばそうとの取り組みはなかなかない。今後、どのように変わっていくか、大変楽しみに思った。

GLP の発表について

沖縄、カリフォルニア FW いずれも、課題を設定し、よく学べていた。今回の発表では、現地に行っ
て経験したこと、学んだことがよくまとまっていた。問題意識をもって研究に取り組むことが大事だと感じた。地球規模課題というと、自分に関係の無い世界の問題ととらえがちだが、日本の問題、そして私たちの身の周りの問題でもあることが多くある。次は、世界の問題をどのように身近な問題ととらえていくか、考えられると良いのでは。

ポスターセッション

FW 報告、研究発表、それぞれが明確な目的をもってポスターを作られていて、一生懸命発表されており、良いと思った。こういったポスターセッションの取り組みは世界中で行われている。ぜひ将来、学生として、実務者として、実際の国際会議の場に出て行って、ポスターセッションに積極的に参加してほしい。

高大接続

創価高校から SGU である創価大学に進学したお二人の話で、高校での学びがいかに活かされているかがよく分かった。人生は大学生活で終わらない。ゆえに、高校生のうちから、長い人生の尺度で物事を考えていけると良いと思う。急に 20 年先を考えるのは難しいが、最低でも、5 年先、10 年先の自身の人生を見据えて行動して行ってほしい。全員が、地球規模課題に直接関わる仕事に就くわけではない。だからこそ、自分が社会に出たときに、「世界で起きていることは自分の目の前にある課題と関わっている」と感じながら、自分の立場で行動していくことのできる人材になって行ってほしい。SGH の取り組みは、そのための基盤作りとなる考え方を養っていることだと自覚して取り組んで行ってほしい。

◆ アンケートより

1 , 言語技術の取組みについて

- ・ 往還学習トレーニングが理にかなっていると感じた。勤務校でも取り組めることを考えたい
- ・ 活動の中でピアレビューを取り入れられてるなど、大学での活動を高校時代から経験することは大学での学びを深めるきっかけとなると感じた

2 , GCP の取組み、生徒発表について

- ・ ディスカッションの機会が多くつくられており、社会に出てからも役立つことだと感じた

3 , GLP の取組み、生徒発表について

- ・ 全文英語のスピーチに感動した。話す力、伝える力を高校生のうちに磨くことは重要

- ・テーマが今の社会に問題提起する内容で大変良かった
- 4 , ポスターセッションについて
- ・ポスターが大変見やすく、発表の姿勢も素晴らしかった
 - ・質問に対する返答が誠実で、よく熟考していることがわかった
- 5 , ファイナルプロジェクトと高大接続
- ・高校での学びが大学につながっているという、本人たちのメタ認知があることがすばらしい
 - ・卒業生の多くが系列の大学に進むという環境が、とてもよい教育効果を生んでいると感じた

SGH(最終)活動報告会

■ 2月17日(土)13時00分 会場:創価高校 栄冠ホール

■【式次第】

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 一、「GCP 企画人権ディベート」模擬授業 | 辻教諭・恒岡教諭 |
| 一、校長挨拶 | 木下校長 |
| 一、タイムマネジメント報告 | 生徒代表(1年生) |
| 一、GCP 報告 | 生徒代表・江添教諭 |
| ※1年間の振り返り、FW 実施報告、FP 報告 | |
| 一、言語技術の取り組みについて | 恒岡教諭・石野教諭 |
| 一、GLP 活動報告 | 生徒代表(3年生) |
| ※1年間の振り返り、映像制作、核廃絶プレゼンテーション | |
| 一、講評ならびに挨拶 | 遠藤誠治成蹊大学法学部長
無藤隆白梅学園大学教授 |

◆【講評】 遠藤誠治成蹊大学法学部長

本日は SGH の充実した活動報告会にお呼びいただき、感動している。まず、全体として生徒の自発性を引き出しながら教育成果を上げていると理解した。とりわけ、教材がないなかで先生方が工夫をされ、試行錯誤され成果を生み出し得る努力をされていることをとても感じた。また、努力が実っていること、先生方がやりがいをもって取り組まれていることに強く感銘を受けた。

教科横断型の授業を実際に行っていくのは難しいことである。教科教育法はあるが、教科横断型の教育法はない。そのなかで先生方が工夫をされていることは素晴らしいことだと思う。また、このような取り組みが広く知られるようになることが重要だと感じた。

今回の報告会を通して、生徒がイヤイヤやられているのではなく、多くの生徒が楽しく勉強をしているのだと感じた。また、自分とは異なる視点があることに気づき、世界の多様性を知る、ということが実現しつつあることを感じている。

褒めるだけでは指導員の役割を果たしていないと感じるので、ここで、振り返って考えておく必要があることをお話しした。

まず、SGH を文科省が進めたい理由、また各学校が進めたい理由は別個にいろいろあると思うが、違和感をもってしているのは「グローバル人材」という言葉である。そのような言葉はないというのが私の感覚だが、では一体、どのような人材がグローバル人材なのだろうか。英語が喋れる、プレゼン能力が高い、どこに行っても物怖じしない、という人が世間的にはグローバル人材といわれるだろう。本校では中身のあるプログラムは行われているが、それにとどまらずやっ払いという社会の価値観は育っていないと感じる。

生徒たちの能力を高めたり、競争が厳しい社会で生き抜いていく力をつけるためにプログラムを行うのは重要なことだが、その背景にある「価値」の問題を避けて通らない方が良いと感じる。

生徒たちの自由を高めること、つまり、生徒が自由に考え、行動する力を高めていくのが本来の創価高校のSGHとしての教育の目的であると思う。自由になるのはなかなか難しいことである。例えば自分自身が考えていることを外に向かって表現をすることは非常に難しく、自分の頭のなかにあることを発信するのも難しいことだ。

通常、人は言葉を通して自分の考えを発信する。その発信について「本当に自分が伝えたいことなのか」と自己反省的に考える力、つまりクリティカルシンキングの力を高めているのは素晴らしいことだと思う。そのなかで、自分を知る、世界の中で自分の置かれている立場を知る、自分がこの世のなかで「どのような場」で「どのような能力」を発揮したいと思っているか、また、そのためには途中でどのような能力をつけるのかを生徒自身が自覚できると、生徒たちはもっと自発的になっていくと思う。本校のSGHの活動は、選択の幅を広げる活動、つまり自由をおおきくするためにやっている活動なのではないだろうか。

そのような意味で言えば、グローバル人材にならなくてもかまわないとかがえている。グローバル人材とは日本の社会の中で活躍することかもしれない。自由をもって社会をつくっていくことが本来の目的だということを自覚したとき、活動に意味が生まれていくのではないかと感じる。

私は国際政治を勉強しているが、国際問題を考えるうえでは、この「自由の問題」と「価値の問題」「クリティカルシンキングの問題」が深く関わってくる。そのなかで、高校生のみなさんは、大人たちの議論の問題や矛盾に気づいていくことが大切である。

たとえば、今の日本には、核兵器は廃棄すべきと訴えながらも、日米の安全はアメリカの核兵器によって守られていると言う人がいるが、ここには矛盾が生じる。

このように、高校生のみなさんは、大人たちがあまり「考えて欲しくないこと」も考えていかななくてはならない、つまり、大人にとって「不都合なこと」も考えていかななくてはいけない。ただし、このようなことを考えることはとても勇気がいること、そして怖いことだろう。

大人たちが規律などに縛られ自由に考えられていない時代には、子供たちもなかなか自由になれないのではないか。

子供たちがさらに自分たちの価値観を鍛えて、自由な選択ができるようにしていく—御校では、このようなことを目的にしてSGHの活動を行っていくと良いのではないか。

◆【講評】 無藤隆白梅学園大学教授

まず始めに、1年前と比べて生徒の発表のレベルが高くなっていることに非常に驚いている。

遠藤先生がグローバルという視点の話をしてくださったが、私自身が最近感じるのは、日本のなかでどこの国の言葉かわからないものが多く聞こえる例にも挙げられるように、社会が多国籍化、また多文化化しているということだ。

日本のなかで生活していても海外を意識せざるをえない、またその逆もあり得るというように、地球上全体との問題とローカルな地域的な問題をかんがえることは密接に関わりあっていると感じる。また、世界的問題と地域的問題の「どちらが先」や「どちらが重要」といったことは問題ではなくなっていると思われる。

将来、創価高校の生徒たちが様々な専門をもって将来の問題解決に関わってもらえると嬉しい。

プログラムの中で、「地球規模課題の解決」がテーマにあった。このテーマへのアプローチとしては、従来でしたら様々な課題を順番に学んでいこう。もちろん、知識を獲得することはとても重要である。しかし創価高校では「学ぶ」ということに加えて、生徒が「自らの意欲の中で学んでいく」という角度でSGHの活動をやっており、アクティブに踏み込んでいるなど感じる。

生徒が、高校生の自分の力ではすぐ解決できるとはいかない課題でも、解決すべき課題として極めて強くとらえているなど思う。持続可能な地球社会実現のための様々な課題を、自分自身の問題として考えることが大切である。また、「課題」として捉えるということは、「解決」しなければならない責任も伴う。そのようなところから見直して、解決のために必要な知識を学んでいかななくてはならないと思う。

日常生活の中で様々なことを吸収し、「地球上の問題解決に自分が役に立ち得るかもしれない」という気持ちを胸に頑張る姿勢を、高校生のときから身につけていることが素晴らしいと思った。

創価高校の取り組み自体の賢い方針として、日本語や英語のスキル、またディベートのスキルなど、即ち言語技術のスキルを学ぶことがあげられる。スキルという道具を持たなければ、解決したい課題に直面しても空回りしてしまう。こちら側（学校側）がそのスキルを提供することが大切である。また、生徒の皆さんは、自分たちが解決したいと思う問題に向かっていく時にそのスキルを使うことができる。自分たちの未来をより良くしたいと思った時に、そのスキルを使えば社会のさまざまな方々や組織と協力することもできる。

心で真正面から物事を受け止めることができ、考えることができる高校生の時期に、本当に力がついてトップに行くことができる。つまり、大学からのゼロスタートでは遅い。決定的なのは高校時代です。

今までの高校教育は「良い大学に入る」という特定の目的に特化しすぎていた。今後は、それだけでなくその先を見通し、世界や社会に対して自分たちには何ができるかを考えて欲しい。今高校生の自分にできることは少ないかもしれない。だが、その悔しさを糧に頑張ってもらいた。

アンケートより

1 , 言語技術の取組みについて

・ 15分という短い時間に大部分の生徒が200～300字のパラグラフライティングができていたことに感銘を受けた

・ 文章に主語を入れるといったことを、英語を意識することで定着できることを学んだ

2 , GCPの取組み、生徒発表について

・ 全員参加のポスターセッションが見事だった

・ 様々な生徒がいる中でどのようにモチベーションを高める工夫をされているのかぜひ聞きたい

3 , GLPの取組み、生徒発表について

・ テーマが今の社会に問題提起する内容で大変良かった

・ 英語以外の先生方も関わっていることに驚いた

C) 運営指導委員会

第一回運営指導委員会

■ 日時:2017年11月25日

■ 参加者:村上 清 岩手大学学長特別補佐 / 飯田 順三 創価大学法学部教授

■ 太田、狩野、木下、江間、谷、(記録:吉澤)

――朝から長時間ありがとうございました。ご意見アドバイスをお願い致します。GCP についてはいかがでしたか。

(運営指導委員) GCP 企画は GCP リーダーになりたい人たちが 100 人を超えているうえに、リーダー中心にクラスがまとまっていく、その様子がとても素晴らしいと思う。リーダーが生き生きと活動していた。主導役をやることは成功体験につながる。また、先生と生徒という関係ではなく友達同士という関係でフランクに学びあうことができるのはとても貴重な経験だと思う。リーダーもクラスの生徒も相互の学びになる。各班にもサブリーダー的存在が出てきていた。実施回数については、1 学期に 3 回くらい回数があっても良いのではないか。回数をどう増やすか、教科の学習とどのように結びつけるのかを検討する必要がある。普段の地道な教科学習と GCP をリンクさせるようなメッセージを子供達に発信すると普段の学びに深みができる。今学んでいる教科が GCP の中で紹介されている課題を解決することにつながることを生徒にわかってもらうことが大切。そのためには教員の勉強が大切、教える側が知っておかなければいけない部分が多い。教員の力量・研修・開発が必要だと感じる。

――力量の開発についてはアクティブラーニングなどでも問われることだが、今後も教員の読書力や見識を磨いていく重要性を実感している。

――GCP のプログラムで取り組むテーマがいつの時期に来るのかはだいたい決まってきた。それを見越して通常の教科で、教科書のテーマを取り上げる順番を工夫している人もいる。

(運営指導委員) 現実問題として教科書をどこまで進めるかなどと GCP との関連の問題もあり、教員にジレンマがあるのではないか。生徒の興味をそそるような部分、もっと学びたいと思うような部分は GCP の中にヒントがあるのだと思う。現実問題なかなか難しいが、相応の工夫が必要。ただ言うのはたやすく悩ましいところではあるが、実際にこの課題をうまく考えられるような場を設け何人かで研究してみるのもどうか。

――文科省の方向性も知識ベースから探求型ベースになっている。そう意味でも今が新しいことに取り組むチャンスかと思う。ただ、議論中心型の教育をうけてきた教員にとっては、大きな挑戦になる。

――教科横断型の取り組みもいわれており、取り組んでいきたいと思う。

(運営指導委員) 今後 GCP を教科として取り入れていく可能性もあるのではないか。

――話題は変わるが、すべての課題の解決方法が「対話だよね」で結論付いてしまうところがある。創価の思想性も影響しているのかもしれないが、このことに関してはどのように考えるか。

(運営指導委員) 対話を重視しなくてはいけないという結論の上に、もっと複雑な問題があることを認識する必要がある。対話をするには、現実における経済の不公平感や宗教観の対立などをどう見直していくのか、その背景にある現実問題を考えるべきだ。対話だけでは、複雑な問題はなかなか解決できない。裏付けをして代価を払っていくことに対する理解も必要。大切なのは、対話プラス「協働」で作業をさせることではないか。例として、イスラエルとパレスチナの役人が陸前高田の市長の話をして「共に」聞き、涙を流す場面があった。自然災害ではあるが、問題の責任を誰かに求めたりしないのかとの疑問があがったが、市長の話と共に学ぶことで誰を非難してもしようがない、自分たちが立ち上がらないとい

けないという結論にいたっていた。「協働」でという意識が紛争解決などにもつながるのではないかと思う。ひとえに「対話」で終わってしまうのでは無く、もう少し現実的なところを見ていかなければいけないのではないかと感じる。

――現実の難しさを実感することへの必要性を強く感じる。

（運営指導委員）タリバンとの交渉の例などをみると、力で対等にならないと交渉が進まない部分がある。自衛隊が違法だと言っている国と実際に弾が飛び交っている国との交渉は状況がまったく違うことを認識する必要もある。

（運営指導委員）「対話」で終わる結論が創価大学でも大いに見られる。「対話」というのは相違点をはっきりさせることであり、それをしないと「会話」になってしまう。相手にあわせていたら対話にならない。違いをはっきりさせるのが対話であり、その後の交渉を通して共通点を見出していくことから解決の糸口を見つけていくことが大切。相手にあわせるのみでその場の雰囲気をよくしていくのは国際社会では通用しない。対話を殺し文句にしない結論の導き方が重要であると思う。

（運営指導委員）現代社会の雰囲気もどことなく「ふわっと」しているなど感じる時がある。少なからず生徒の考えにも影響しているのではないか。

（運営指導委員）お互いの利害を天秤に図りながら共通点を見出す姿勢や前向きに結論を導き出したいという共通の姿勢が対話では大切である。パレスチナの例のように、感情の共有から出発して現実の利害を調整していく能力が求められていくのではないか。

――生徒を取り巻く現実社会のなかで「課題」を認識しながら克服していく機会が少ない。世界の課題に目を向けなくても生きていける現代の中で、創価高校としては、現実の課題を感じられる・知れる場面をSGHのプログラムとしてつくれたのは画期的だったと思う。「対話が大事だ」「教育が大事だ」という結論にいたるのは、生徒の置かれている状況が、恵まれた状況だからこそその課題ではないか。

（運営指導委員）昔は思想・信条の面でも乗り越えなければならない課題があった。そこで社会の実証を示していったが、生徒にはなかなかその実感がないのではないか。国際社会のなかでは課題があるのはあたりまえ。利害関係の交渉や調整、ネゴシエーションを通して妥協点を引き出さなければいけない。

――その交渉の模擬体験ができる場をGCPでつくれたのはよかったと思う。

（運営指導委員）発展途上の国の現状を見て大学生は変わっていく。カンボジアやベトナム、フィリピンでのボランティアに参加してほしい。だが、創価大学でも危険なところに足を踏み込んでいかない傾向はある。

――国内でも貧困地域がある、そこでのボランティアの活動などもある。そこで国際課題を身近に感じることも必要。

(運営指導委員) 国内でも実際は経済格差で厳しい人もいる、先代の世代では実際に経験をしている、など、本来の経験として生徒全員が実感できる場を作ることが大事では。まだ苦しんでいる人がいる社会があり、自分たちは実は恵まれているという感覚がない生徒も多いのではないかと思う。

(運営指導委員) ボランティアの単位化やインターンの単位化は高校ではあるか。大学では単位化できる取り組みがあるが。

――12月発表予定の新学習指導要領での今回の改定は、高校教育が肝だといわれている。どこまで現時点で変革していかれるか現場は悩んでいる。

(運営指導委員) 保守的な側面もあるが、政府は社会に開かれた教育をしていこうという姿勢を大きく持っている。国際課題を解決するためには自分の足元をみないと進まないことを認識するべき。

(運営指導委員) 大学入試の改革について、英語では外部試験のスコア参入がいられているなど、ドミノ倒しで日本の入試体制が変わっていく。その中で現実を見させようというカリキュラムになっていくのではないか。創価の教育プログラムがその先駆けとなるプログラムになってほしい。

――言語技術の取り組みは先進的だと思う。更に、学校設定科目などで可能性を広げられるのではないか。だがそこには教員確保の問題が関わってくる。人材の確保が急務である。

(運営指導委員) 世の中堅校でも、いろんな教育改革を文科省の縛りがある中で行っている。「人材」という概念を越えて「教育プログラム」の良いものを必死で探し導入している。創価学園も負けてはいられない。

(運営指導委員) 例えば、創価大学が行っているように一般の企業にいらっしゃる方を講師として招くことがあってもいいのではないか。

――最後に全体へのアドバイスがあればお願いします

(運営指導委員) 次回は場所を大きなところをとっていただきたい。毎年、進化している状況を見ることができ楽しみにしています。

――次回は体育館でのファイナルプロジェクトの公開も考えています。

(運営指導委員) 報告会の中で言語技術を使える場所を作っていかなければいけないとあったが、具体的にはどう考えているのか。話す書くなどのせつかく学んだ技術をどう使っていくか。普段からのトレーニングが大切である。意識していないとそういう「環境」はできないという意味では、意識し続けることが大切である。

――担任の教員が自分のクラスの言語技術の授業にでる、それはかなりの効果がある。他の教員も同じように意識をしていくことが確かな土壌づくりになる。

(運営指導委員)先生方全員が言語技術を学んでいくことを提案する。言語技術は人生に使える、自分の人生をどう捉えていくかに関わる技術である。ひとりひとりの思考回路にどう使っていくか、それを考えていかれたら良い。教員自身がどう言語技術を分析していくかが大切。教員の研修にも言語技術を取り入れていくべきでは。徹底してやる姿勢が大切ではないか。

――現在小学校まで規模を広げて研修を重ねている段階。職員室でも言語技術が浸透している雰囲気を感じる。

第二回運営指導委員会

■ 日時:2018年2月17日

■ 参加者:無藤 隆 白梅学園大学教授 / 遠藤 誠治 成蹊大学法学部教授
/ 村上 清 岩手大学学長特別補佐

■ 中川、太田、狩野、木下、江間、久保、石野、永嶋、金澤、江添(記録:今野)

(運営指導委員) 2年生のディベートを拝見したが、生徒同士なので、どうしても早口でがらがらやってしまいがちだった。相手に話した内容が理解されないと、ディベートの意味がない。相手が理解できているか、確認しながら話すことが大切である。たとえばあの場に高校生だけでなく、高齢者の方がいたら、もしくは外国人がいたら、あのような話し方はしないだろう。今後は環境、文化の違う相手が出た時にどのようにアプローチするか柔軟に対応するスキルが重要になる。

世界のことに限らず、身近にも様々なバックグラウンドや課題をもった人たちがいる。学校内にもいるはず。そういった人たちに私たちがどう手を差し伸べられるかをよく考えないといけない。上から目線のように聞こえるが、課題を抱えた人たちとどのように真摯にコミュニケーションをとり、気持ちを理解し、共に課題と向き合い、対処することが重要。

世界的な問題を、地球規模の視点で問題を考えることも大切だが、身近なところで何か起こっているか、ローカルな視点と両方を持つ人材がグローバル人材なのではないか。

特異的な環境にぽんと放り込まれることもある。そのときに、環境の変化にいかに対応するか、柔軟に考え、対処できるスキル、能力が大切。たとえば日本に大量に難民が入ってくる可能性もある。こうなったときに私たちはどのように対応するか。大きな環境変化が起こったときに自分はどうに対応できるか。そういった大きな環境の変化に柔軟に対応できるスキルを身につけることが今後重要だろう。

そういった意味で今後のSGHの一つの取り組みとして、環境の多様性、人間的多様性、経済的多様性にいかに対応できる人材を輩出する取り組みを考えていくべきだと思う。

――ご指摘の通り、ローカルな視点はスタート当初抜けていた。この部分にどのように取り組んでいくか、今後しっかり検討していきたい。

――FWとして、東村山のハンセン病資料館見学を実施。身近なところにこのような課題があることに気づき、生徒が衝撃を受ける良い機会となった。その事後学習として、再来週グローバルセミナーとして、ハンセン病治療の最前線で戦ってこられた医師の方を招いての講演会を開催予定。身近な課題に対するアプローチは生徒の記憶にも残り、大変重要だと感じた。

(運営指導委員) 先ほど話のあった「異文化体験」は、よその国に行かなくてもできる。

たとえば、日本国内の貧困問題はかなり深刻。単に「お金がない」というだけでなく、それぞれの抱える状況・事態も多様なので、簡単な問題ではない。そういった状況が身近にあるような環境で育てば、

自分がどのように振る舞えば良いのか体験的に学ぶことができるが、東京だとなかなかそういった経験ができない。日本全体で均質化が進みすぎているように思う。本来なら、日本の中にも異文化はある。そういった環境にふれる機会を作ることが重要。

高校教育の中で達成することは難しいかもしれないが、大学初年度ではあえて、悲惨なニュース映像等を通して「心に傷をつけたほうがよい」と考えている。その傷が糧になって育っていくこともある。これまで日本社会は「心に傷をつけること」を恐れて、「無菌室的グローバル」を目指してきたように感じる。F Wなどを通し、身近にも様々な状況を抱えた人たちがいるということ、そこで自分がどのようにやっているのかを、感覚的にわかってきていることが素晴らしい。その上で、他の課題に目を向けても良いのではないか。たとえば、今日発表のあった人間の安全保障というのは大事な観点。先進国であっても、被災地では水問題が発生し、人間の安全保障が脅かされる。地震の多い日本においては、人間の安全保障が欠けうるということを学び、実感させることも一つのアプローチでは。一つ一つの課題が他人事ではないことを感じさせることが重要。自身からは遠い紛争の問題だけでなく、身近な被災地にも同じような問題があることに目をむけることも重要では。高校生での様々な経験が、後になって花開くことも多い。今は様々な体験を通して、心の柔軟さと、タフさが育っていくとなお良い。

(運営指導委員) 先日の防災会議でもそのような話になった。東日本大震災では、人間の安全保障が守られなかったのではとって議論になった。新しい指摘だと思う。

(運営指導委員) 一度、生の環境に触れる機会を持てるとより良いと思う。ポスターも、どうしてもインターネット情報が多くなってしまふ。

例えば、水問題について調べるときに、東南アジアにいけば体感できる。

先日、バンコクを訪問した際、現地の人に「水道を飲んでみて」と言われた。30年前には考えられなかった。今、国で水道事業に力をいれているのでこのように変わってきた。

一方で、先ほどの格差の話にもつながるが、トイレ問題はまだ存在する。少し観光地から離れると、汚いトイレがたくさんある。わたしたちの世代はこういったトイレを知っているが、今の生徒はそういった環境に心が耐えられない。それほどナイーブな生徒たちである。

(運営指導委員) 先日、陸前高田市で避難所運営訓練を行った際、皆でポットン便所を初めて掘った。児童生徒は、もし災害に見舞われたらこういったこともしなければならぬということを始めて体験し、とても驚いていた。カルチャーショックをうけ、それをどう乗り越え、自身のサバイバルスキルとしていくかが今後重要になってくるだろう。そういった体験は大人にとっても貴重。

(運営指導委員) かといってこういったことが学校でどこまでできるだろうか。

ただ、保存食は活用できるのでは。保存食を返すとき、もし震災があったとしたらこの保存食がどのように使われるはずなのか、意識させてみてはどうか。

――ファイナルプロジェクトについてもご指摘のあったとおり、インターネットや文献に頼るようになる。もっと、外に出て体験する、リサーチできるようなものがでてくればより深いものになるだろう

(運営指導委員) 難しいのは、発表しようまとめる際、リアルな生活などわかっていないこともまだあるのに、「全てをわかった」ことにしてしまう。本来ならば、学べば学ぶほどわからないことは増えていく。「わからないことがこれだけ増えた」ということを大切にすることはどうか。答えを見つけることができるこ

とより、問いを発することができる能力が重要。日常的に疑問を持っていることが大切。

――言語技術を今後どのように発展させていくか。現在、小中に広げていくことを進めているが、更に次の段階に進むため、他の展開がないか考えている。

(運営指導委員) レポート等のネット公開はどうだろうか。そこに対するレスポンスをもらう。

レスポンスの中に、きっと考えたこととずれたものがあるだろう。その「ずれ」に気づくことで、多様な文化的背景に気づききっかけとなる。文章をまとめあげていくスキルは、対話の中で鍛えていくしかない。

(運営指導委員) 言語技術の次年度の取り組みはどのようなことを考えているか。

――2年間だけのカリキュラムで、いかに昇華していくかが課題。今回のファイナルプロジェクトは言語技術をやっていない3年生がやったため、今年の3年は、合科的にやるしかなかった。

(運営指導委員) それは逆に面白いのでは。言語技術でならったことを、様々な科目の中でどう取り組み、生かしていくかが次の段階ではないか。言語技術は、実践の中で学べるものである。1、2年次は基礎作りであるならば、3年次は応用の段階として、実践の場をより多く作ってはどうか。ここから一生続くスキルと考え、より身につく場を提供する。

(運営指導委員) エッセイを書く力は大変重要である。今の大学生にも今欠けていて、ゼミ生にも毎週書かせている。日々積み重ねないと衰えていく力である。1、2年次の言語技術での取り組みを見ると、詩、文章の分析、パラグラフライティングなど、相当深いところまでやっていると想像する。また、教材としてどのようなものを使うかも重要な観点。現代は小説と言っても、わかりやすく消化しやすい、おやつのような読み物ばかりを読んでいる。消化が大変だけれど溜まるもの、人生の中で考えるに値する文章と組み合わせることが一つの方法では。もう一つのアプローチとしては、新聞は使っていないか。

――昨年の1年生には、数週間新聞を読ませ、その中から興味ある記事をピックアップさせ、自分は何に関心があるか分析させ、発表させた。今年は行っていない。

(運営指導委員) 高校生には難しいが、自分の学生にはフィナンシャルタイムズを薦めている。

5W1Hがしっかりしていて、解説もついている。事実を知るための情報が入っており、端的な文章であるのがメリット。ただ、用語が難しいのが難点。日本語記事と組み合わせて活用してみてもどうか。

――現状、英字新聞制作をGLPと一部生徒対象に行っている。この中で、実際の英字新聞を分析して英語の文章構造について学んでいるが、どのように全校展開していくかが課題。

今回GLP生が制作した英字新聞の中で、沖縄の貧困問題とSDGsについて書いた記事は、エコノミストの記者に「面白い」と評価された。社会に潜む「悲惨さ」を現実のものとして捉え、考える一歩と考えている。

(運営指導委員) 現実の日本においても、どのようにSDGsを達成するかが大きな課題となっている。リバブルシティに向けて各都市がどのようにすべきか、貧困をどのように無くしていくか、高齢化の中でどのようによりよい社会を作るか、など、様々な課題がある。こういったものと今自分のいる場所とを繋

げて深められると良いのでは。それを英語で表現するやり方も一つでは。

――ファイナルプロジェクトをやっていく中で、「問題を探究した上で自分なりの解決策を提案しなさい」と指導している。が、「募金をしよう」「学ぼう」など、浅い提案に止まってしまう。いかにオリジナリティある、深い提案にもっていかせるかが大きな課題。

（運営指導委員） ある市の中学生の取り組みでは、課題に対して市長に提案し、「本当にできるものなら実現する」という場を用意している。これに対しては、中学生が本気で調べ、取り組んでいる。社会、たとえば東京都等にもっていく場を提供すれば、本気で取り組むのでは。

（運営指導委員） 陸前高田市で先日、「難民」をテーマに地元高校生によるパネルディスカッションを行った。事前学習として、難民について学び、自分たちの高校でなにができるかを考えた。本番のディスカッションでは、市長などを呼び、最終的に行政に対する提案を行った。具体的に自分の地域に何が起きているのか、何が大事か、中学生、高校生なりに考え、提案をもっていくことは大変良い経験。特に被災地においてはゼロからの町作りだったので、中高生の提案したことが目に見える形になっていった。毎年これをおこなっている。身につまされるようなことがあれば、子ども達はよく考える。子ども達なりの大人に対する批判もある。世界のどこかで起きている関係ないことだと、結局人ごとになってしまう実感湧かない。今、自分たちが困っていることに対する課題のほうが実感がわき、提案しやすいのでは

10. 関係資料

① 2017年度カリキュラム表

教科	科目	標準単位	1年 (50期)	2年(49期)			3年(48期)		
				総合	文系	理系	総合	文系	理系
国語	国語総合	4	4						
	国語表現	3							
	現代文A	2							
	現代文B	4		3	2	2	3	2	2
	古典A	2							
地理歴史	古典B	4		2	3	3	2	3	2
	世界史A	2				2			
	世界史B	4		5	4				
	日本史A	2							
	日本史B	4			3		4	3	■
公民	地理A	2							
	地理B	4	3					3	■
数学	現代社会	2					2		
	倫理	2						2	2
	政治・経済	2						2	2
	数学Ⅰ	3	3						
	数学Ⅱ	4		4	4	4		2	
	数学Ⅲ	5							7
理科	数学A	2	2						
	数学B	2			3	3	3		
	数学活用	2							
	科学と人間生活	2							
	物理基礎	2				2	2		
	物理	4				3	▲		3
	化学基礎	2	2						
	化学	4				2			4
	生物基礎	2	2						
生物	4				3	▲		3	
保健	地学基礎	2		2	2				
	地学	4							
芸術	理科課題研究	1							
	体育	7~8	2	2	2	2	3	3	3
	保健	2	1	1	1	1			
	音楽Ⅰ	2	2	●					
	音楽Ⅱ	2							
	音楽Ⅲ	2							
	美術Ⅰ	2	2	●					
	美術Ⅱ	2							
	美術Ⅲ	2							
	工芸Ⅰ	2							
外国語	工芸Ⅱ	2							
	工芸Ⅲ	2							
	書道Ⅰ	2	2	●					
	書道Ⅱ	2							
	書道Ⅲ	2							
	コミュニケーション基礎	2							
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						
コミュニケーション英語Ⅱ	4		4	4	4				
コミュニケーション英語Ⅲ	4					4	4	4	
英語表現Ⅰ	2	2							
英語表現Ⅱ	4		2	2	2	2	2	2	
英語会話	2								
家庭	家庭基礎	2		2	2	2			
家庭生活総合	4								
情報	生活デザイン	4							
総合	社会と情報	2	2						
学校設定	情報の科学	2							
計	総合的な学習	3-6	1	1	1	1	1	1	
LHR	学校設定科目		1~5	2~6	0~4	0~4	4~8	8~10	0~4
	計		30~34	30~34	33~37	33~37	30~34	32~36	32~36
LHR	LHR	3	1	1	1	1	1	1	

(注) ※●、▲、△、■は各々から1科目を選択することを示す。
 学校設定科目(48期) 国語基礎演習、国語表現、国語演習、日本文学、外国文学、中国文学、世界史演習
 ※入学年度によって 国際理解、環境と開発、平和と人権、宇宙と生命、総合数学、基礎数学、文系数学、総合解析
 開講される科目が 総合代数、総合幾何、情報基礎、教養数学、現代物理、現代生物、現代地学、理科実習
 異なります 総合英語、リーディング応用、英語演習、中級英語、上級英語、リスニング中級、リスニング上級
 スピーキング中級、スピーキング上級、総合体育、生活と文化
 総合音楽、総合書道、総合美術、上級音楽、上級書道、上級美術
 公民演習、地歴演習、理科基礎演習
 世界市民探求Ⅰ、世界市民探求Ⅱ、世界市民探求Ⅲ
 ※3年文系の世界市民探究Ⅲは2単位までとする。

② 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	目標値(32年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		296人	322人	人	人	人	700人
	SGH対象生徒以外:		250人	250人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 本校においては、他者への貢献に喜びを見いだすという価値観がある。このため自主的な地域清掃や、ボランティア活動への意識は高い。そこで自主的な社会奉仕ができる生徒を6年間で一層拡大していきたい。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		28人	47人	人	人	人	70人
	SGH対象生徒以外:		25人	25人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在、学校が主催しているマレーシア公開大学への短期研修をはじめ、SGHA事業への取り組みによって海外への意識が向上している。さらに、グローバルな視野を広げるために自らすすんで海外での研修体験を希望する生徒が増加することが十分期待できる。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		61%	61%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		25%	30%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 元来海外志向の強い生徒が多いが、SGHAのプログラムを通じ、より具体的な進路設計が行われ、将来海外に進出したいと考える生徒が増加している。また70%の生徒が進学する創価大学はスーパーグローバルユニバーシティであり、大学在学中の留学経験者が増加し、その後の海外進出者数も増加すると見込まれる。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		40人	54人	人	人	人	40人
	SGH対象生徒以外:		15人	15人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在は日本語ディベート、英語ディベートが中心であるが、今後文系・理系の各種オリンピック、さらには各種言語のスピーチコンテスト・国連などで公募されている論文に積極的に参加することを奨励して拡大を図る。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		45%	47%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		25%	25%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 3年生355人に対して、現在100名程度の該当生徒がおり、今後英検に加えてTOEIC、TOEFL、SATを受験することを積極的に推進し、英語力の向上を目指す。								
英語以外の外国語に取り組む生徒数								
f	SGH対象生徒:		87人	89人	人	人	人	100人
	SGH対象生徒以外:		80人	80人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在3年生対象にスペイン語、ドイツ語、ハンガール語、中国語、フランス語、ロシア語の授業を選択科目として提供している。世界への興味が具体化するにつれて、英語以外の言語に対する関心がさらに高まると考えられる。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	目標値(32年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	6人	8人	18人	32人	人	人	人	40人
目標設定の考え方:SGHプログラムの効果により、国外の研修に参加する生徒数は増加と思われる。学校責任の下で行われるプログラムとして現在マレーシア公開大学への研修があるが、今後もアメリカ・カリフォルニア研修をはじめ、さらに拡大していく予定である。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	100人	100人	110人	130人	人	人	人	500人
目標設定の考え方:SGHAで今年度実施したフィールドワークを更に拡大・増強し、創価大学をはじめ近隣大学や博物館等の研究機関との連携をすすめ、研修にも参加することを推奨していく。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	2校	3校	5校	6校	校	校	校	8校
目標設定の考え方:現在、本校と連携を行っている海外大学は、アメリカ創価大学とマレーシア公開大学の2大学であるが、今年度インド・ブルーベルインターナショナル高校と連携を開始した。今後は、これまでも交流実績のある中国、韓国等の国際交流連携校を増やしていく予定である。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	100人	125人	142人	140人	人	人	人	300人
目標設定の考え方:学校設定科目「平和と人権」等で大学教員による講義が提供されている。また、イングリッシュキャンプでは多くの留学生と交流している。今後はスカイプを活用しての英語による連続講座等、外部人材参画の機会を増やす。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	50人	60人	76人	89人	人	人	人	100人
目標設定の考え方:年に1度のキャリアガイダンスおよび不定期に開催されるOBOG懇談会により現在50名程度の参加がある。今年はSGHAの取り組みの一つとして映像制作のために外部講師を招聘した。今後は、企業で活躍する卒業生などによるガイダンスおよび講演を定期的に行うなど、拡大・拡充を進める。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	150人	150人	155人	196人	人	人	人	200人
目標設定の考え方:現在は日本語ディベート、英語ディベートが中心に、今後文系・理系の各種オリンピック、さらには各種言語のスピーチコンテスト・国連などに公募されている論文に積極的に参加していく。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	2人	3人	7人	4人	人	人	人	12人
目標設定の考え方:本校として、帰国・外国人生徒の受け入れを昨年より募集要項に明記した。これにより毎年数名程度の海外現地校出身者が入学している。SGHプログラムの導入に伴い、現地校に滞在経験のある子女の受験者数がさらに増加することが期待できる。								
先進校としての研究発表回数								
h	回	1回	3回	4回	回	回	回	3回
目標設定の考え方:年2回を基本として、SGHプログラムの研究成果を順次発表していく。								
外国語によるホームページの整備状況								
i	○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
		○	△	△				○
目標設定の考え方:外国語によるホームページは、英語・韓国語・中国語で整備されており、日本語版と共に随時更新している。								
CEFRのB1～B2レベルの教職員の割合								
j	25%	25%	42%	42%	%	%	%	70%
目標設定の考え方:自己研鑽の意識の高い教員が多く、グローバル人材育成のための環境整備を目指し、学校として語学検定の受検を強く推進し資金面でも補助する制度を開始した。								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
全校生徒数(人)	1,077	1,063	1,056	1,047			
SGH対象生徒数			1,056	1,047			
SGH対象外生徒数			0	0	0	0	0



THE SOKA TIMES

PROFESSIONAL EDITION, FEBRUARY 2018

Students Inspired by UNU Lectures

On May 9, 2017, members of the Global Leaders Program (GLP) visited United Nations University (UNU) in Tokyo. UNU is a graduate school that was built in 1975 for the purpose of contributing to the realization of world peace. It has a massive research network connected with 13 research laboratories all over the world. The network transfers necessary information, such as data only available at UNU, to other institutes. UNU has contributed to solving various global issues that are of great importance to the United Nations.

GLP members listened to two presentations mainly on the topic of general information about and the system of the United Nations, as well as possible solutions to complex current global issues.

The first presentation was given by Natsuko Imai, a member of the UNU Institute for the Advanced Study of



MASAYOSHI ISHINO

GLP students in front of UNU

Sustainability. She explained the system of human security, offering the conclusion that in order to maintain the security of human beings, reliance on protection provided by nations is sufficient, but each of us as individuals also must strengthen our own ability to protect ourselves in the future.

Kiyoshi Chiba, who works at

the United Nations Information Center, gave the second presentation, which focused on current global issues and how to deal with them. He pointed out that the fundamental role of the UN is to unite member states to solve global issues as one. The UN's activities are based on 17 Sustainable Development Goals (SDGs), which were adopted in

September 2015.

Following the lectures, one of the GLP members commented, "We should understand the spirit of the basis of SDGs and the UN Charter. What we can do is become interested in global issues more as individual problems."

By Naoki Kato and Yukari Hashimoto

For Sustainable Living with Tamagawa Aqueduct

Four members of the Global Leaders Program (GLP) interviewed Toshihiro Suzuki, the chairperson of the Manabiya Edo-Tokyo UNESCO CLUB. The main topic was the preservation of the scenery and ecosystem of Tamagawa Aqueduct in a favorable condition. Tamagawa Aqueduct, or Tamagawa Josui in Japanese, is an irrigation canal that flows from the west to the east of Tokyo.

In the interview, Suzuki introduced the important aspect of protecting the natural environment, which involves understanding the history of Tamagawa Aqueduct in a new light; to visit the site and perceive

the reality. He also expressed an idea to show appreciation and deference to farmers in the past who made great efforts to preserve the Tamagawa Aqueduct. Moreover, he claims that the key to protecting the natural diversity of the forests is our own consciousness and how we act as citizens. We can convey our ideas by proposing plans and requests to city councils, which can then be communicated to the Tokyo Metropolitan Government, enabling citizens and administrative bodies to work together. As for us, it is necessary to recognize that our present lives are based on the benefit of limited water resources. "Thinking

about future waterways and environmental conservation in 50 years is essential to maintain the beautiful natural environment and our daily lives," Suzuki emphasized.

In the interview, Suzuki also touched on the Environmental Development Summit in South Africa, highlighting the importance of preserving the natural environment in an era of worldwide recognition of the need to protect it. In the summit, a proposal to tackle and overcome environmental issues was made. It comprised three main parts: to know the present situation of world environmental problems; to reflect on our

lifestyles with a sustainable future in mind; and to seek concrete actions for solutions. Suzuki conveyed his idea by referring to the international proposal that we try our best to protect our local surroundings, as each of us is responsible for sustaining our mother earth as individuals from a more local viewpoint. He finished by saying, "By caring for the environment around us based on this proposal, we can contribute to creating a sustainable community, starting with modest progress."

By Takaaki Yasue, Ryota Kawasaki, Chiharu Nagai and Mayumi Kurata

Peacebuilding Requires Compromise, Says U.S. Prof.

Soka Senior High School students attended a lecture on peacebuilding in polarized cities where ethnic groups are divided by religion, language, and/or culture, by Professor Scott A. Bollens, a professor at the University of California, Irvine. He specializes in urban planning and public policies. The students learned about the historical backgrounds of the ethnic conflict and management as a path to peace in cases such as Syria, Sarajevo, Lebanon, Ireland, Cyprus and Jerusalem. Unlike other scholars, who tend to stick with scientific and objective points of view, Bollens' approach is based more on a personal and subjective view. His lecture for GLP students thus consisted mainly of describing his interactions with the local people that

he had met. As Professor Bollens stated, the cause of conflict is inequity based on differences in region, custom, and/or ethnicity. Concluding his talk, he emphasized that peace cannot mean victory for one side, and that peace is all about compromise in reconciliation for both sides. After the lecture, some students asked him questions about his vision of peacebuilding. The following interview may help to understand his perspective.

Q: How can people who are hostile to each other build a fair relationship in divided cities?

A: It could be created through attempts to understand and accept others because this becomes an incentive to compromise with one another. Efforts should be carried out wherever people of varying identities are gathered. In policymaking, for example,



HARAGUCHI EIKO TIFFANY

Prof. Scott A. Bollens delivers a lecture to California fieldwork members.

politicians should make sure to consider the benefit for everyone.

Q: What can we do now to prevent conflict in the future?

A: Education plays a significant role in preventing conflict. Children need to know the history of not only their own identity, but also that of the identity of others, and

respect differences and dispel stereotypes through interacting with other students. Fostering a new generation without prejudice is important to create a peaceful and sustainable society for our future.

By Sachi Nishida, Ryohei Ishimura, Daichi Takagi and Noriko Ogita

Tokyo and Okinawa Students Interact for Peace

Global Leaders Program (GLP) members from Tokyo and from Nahakokusai Senior High School in Okinawa, known as Nahakoku, shared their opinions on the theme of poverty and environmental problems with regard to coral reefs in Okinawa. The meeting was held at the Okinawa Peace Memorial Museum as a second Peace Forum following that of the previous year. The Peace Forum is aimed at deepening ideas of world peace and promoting friendship through discussion and presentations of each school's research. The students also talked about the differences in peace education between each school and Nahakoku students professed their frank ideas on what it is like to live in a prefecture that hosts U.S. military bases. They said that the noise from the base can be loud in the classroom, but at the same time they think it cannot be helped because there



TAEMI ISHIGURO

Tokyo and Okinawa students visit Okinawa Peace Memorial Park.

are people who benefit from the base. Surprisingly, they seemed not to view the base as a serious problem.

After this, GLP members and Nahakoku students visited Peace Memorial Park in Okinawa. The first stop was Heiwa no Ishiji, a memorial monument that bears the names of 240,000 people who died in the war, regardless of their nationality. The students then visited Himeyuri Peace

Museum, which features the history of schoolgirls mobilized for the war, referred to as Himeyuri Gakutotai.

A common wish to seek peace together was expressed in the conversation between Soka and Nahakoku students. However, there were differences in views and ideas.

GLP members from Soka shared their own ideas from a global perspective. However, they

had a basic understanding of how world peace might be achieved. In contrast, Nahakoku students have a more acute perspective and a deeper understanding of local peace particular to Okinawa and Japan. One of the Nahakoku students expressed her feeling that Okinawa is in a time of peace right now, considering the past Okinawa ground combat, and was optimistic and confident about peace in Japan.

At the end of the day, one of the GLP members said, "I keenly realized how cruel and tragic the Okinawa ground combat was and learned that there were differences in perspectives on peace." He expressed his desire to put greater effort into making his surroundings and the world a better place through discussion with Nahakoku students and learning about the history of war.

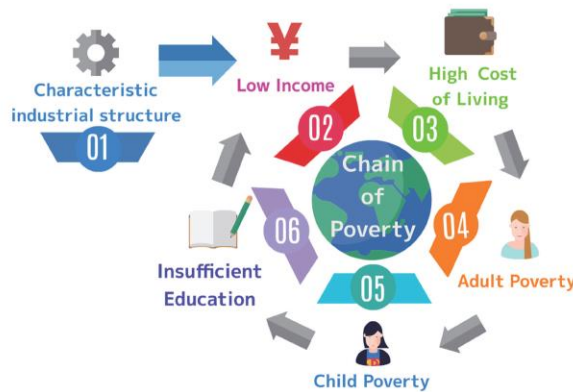
By Natsuha Kataoka, Masayo Nakama, Mayumi Kurata, Takaaki Yasue and Daiki Oishi

Poverty in Okinawa Affects 30% of Children

Child poverty is measured as the percentage of children in households with incomes below 50 percent of the national median income (relative poverty) based on the government's basic survey of people's living conditions.

An Okinawa newspaper introduced a concrete example of people who are in poverty. In some areas, the prefecture has no train service, and thus travel by bus to a school far away for a certain high school girl costs about 40,000 yen a month. The girl pays half with her part-time salary and her mother pays the other half. If she could buy a commuter pass, she would be able to get a discount. However, it's difficult for her to acquire enough sum of money to do this.

UNICEF's Innocenti Report Card 13, a report by the organization's Innocenti Research Institute that compares and analyzes the situation of children in developed countries shows that the poverty rate of Japanese children is 15.8 percent, the 14th highest among 41 high-income countries. In Japan, Okinawa Prefecture has the highest poverty



The chain of poverty in Okinawa.

rate, at 29.9 percent. This means that one-third of children in the prefecture live in relative poverty. A prefectural investigation shows that Okinawa also has the highest rate of people who do not decide on their career path after secondary school or high school. Among adults, Okinawa has the highest rate of unemployment and divorce in Japan.

One of the major factors behind the increase in the poverty rate in Okinawa is its industrial structure. The situation with respect to industries in Okinawa is unbalanced. The prefecture's tertiary industries,

such as tourism and IT, account for 80% of the industries. The reason is that manufacturing in Okinawa is costly, owing to transportation costs, as it is about 1,600 kilometers from Tokyo. This situation also makes it difficult for secondary industries such as manufacturing. However, unless secondary industries are developed, people will lose stable employment opportunities. Also, revenues tend to flow out of Okinawa easily, as there are few company headquarters in the prefecture. Satoru Shimamura, a professor of Okinawa University, suggested that "Promoting

processing trade would serve as a solution to poverty."

Processing trade is a trade whereby certain material and semifinished products are imported, processed and exported with added value. In Okinawa Prefecture, processing trade involves enhancing value by exporting products with added value for clothing items particular to Okinawa Prefecture and exporting chrysanthemums that were rapidly grown using electric power. Processing trade can also take advantage of the fact that Okinawa Prefecture is closer to Asian countries, such as Taiwan, than Honshu. Furthermore, this makes it possible to create considerable employment opportunities in the prefecture, contributing to solving poverty. In such a manner, a negative situation can be turned into a positive one.

GLP members conducted their research on child poverty rate issues in Okinawa, which was a strong connection with SDG's 2030 agenda designated by the United Nations.

By Natsuha Kataoka, Masayo Nakama, Kiyoshi Morita and Daiki Oishi

Experience is the First Step to Solving Global Issues

GLP members advocate that experience is invaluable. They annually conduct fieldworks as one of GLP's activities in Okinawa and California in the United States. Through two fieldwork sessions on different themes, they came to realize how important experience is.

Keiichi Inamine, former governor of Okinawa Prefecture, gave a presentation during the fieldwork in Okinawa. He shared his opinion that the importance of experience is overlooked these days in Japan. He offered the episode of Keizo Obuchi, the former prime minister of Japan, as an example. Obuchi was the first politician to grasp fully the situation of Okinawa being

governed by the U.S. Obuchi had experienced gathering the remains of people who died in the Okinawa War, and has strong faith in building peace with people in Okinawa. He therefore implemented policies reflecting the demands of people in Okinawa and succeeded in building a good relationship between Okinawa and the government.

Scott A. Bollens, a professor of Urban Planning and Public Policy, gave the GLP members a lecture during the fieldwork in California. He talked about polarized cities and religious and ethnic differences. He did his research in those cities by actually visiting them, meeting and interviewing more than

300 political leaders and urban planners, and communicating with residents. One of the cities he did his research in was Soweto in Johannesburg, South Africa, an area where black people had been forced to live under apartheid. When he visited, he was welcomed warmly by the black people living there, even though he was a white person. He would not have realized their kindness without this experience.

Before engaging in the fieldwork, the GLP members had been learning in passive way by doing research using the Internet or books. However, they realized that the fieldwork made them more active and think more deeply. Experiences enable

you to think about problems actively and change an attitude of passive learning into an engaged one. This is why they think that experience is the first step to solving global issues.

By Noriko Ogita, Daichi Takagi, Kiyoshi Morita, Ryota Kawasaki, Sachi Nishida and Chiharu Nagai

NOTICE TO READERS

The Soka Gakuen Times was created by 16 members of the Global Leaders Program (GLP) of Soka Senior High School in Kodaira, Tokyo, Japan. Through the publication, the members share the results of their research on global issues.

Survey

Taking Stock of Green Thinking

GLP members conducted a survey on environmental consciousness as a part of GLP fieldwork research. This survey covered 105 students from Soka High School in Tokyo, 75 students from Nahakokusai Senior High School in Okinawa and 88 students from the University of California, Irvine from August to September 2017. The reason they conducted this survey, the respondents of which live in the areas concerned, is that they wanted to know the differences in attitudes by area. The survey shows that although students in Tokyo are conscious of the environment, they are not taking action.



HARAGUCHI EIKO TIFFANY

GLP members conduct a survey at the University of California, Irvine.

Responses to the question, “Do you think global warming is an important issue?” (Chart 1) shows that nearly all students in Tokyo, Okinawa and California think global warming is an important issue. More than

90% of students from Okinawa and California, and all students from Tokyo, answered “The global warming issue is very or somewhat important.”

Next, in response to the

question, “If a vehicle’s engine was idling, would you feel bad?” (Chart 2), more than 70% of students in California said they would. The percentage of students in Tokyo and Okinawa who answered “I would feel bad.” was 64% and 58%, respectively. In addition, responses to the questions, “Which do you want to use, costly natural energy generation or inexpensive thermal power generation?” (Chart 3) show that more than half of the students from all areas want to use natural energy. As natural energy does not discharge carbon dioxide, it is eco-friendly. The environmental consciousness of the students was thus around the same level.

go shopping, do you try to avoid using plastic bags?” (Chart 4), the number of students who use plastic bags when shopping stood out. About 80% of students from California and Okinawa try to avoid using plastic bags, but the percentage among Tokyo students was much lower, at 60%.

Based on the survey, students from Tokyo, Okinawa and California can thus be said to have the same level of environmental consciousness. However, according to Chart 4, students from Tokyo are less likely to put their consciousness into action.

By Masahiro Shiono and Risa Torigai

Chart 1. Do you think global warming is an important issue?

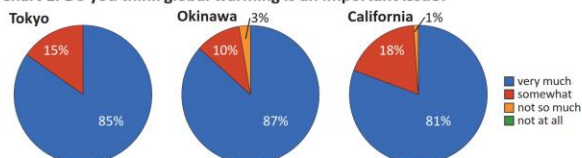


Chart 2. If a vehicle’s engine was idling, would you feel bad?

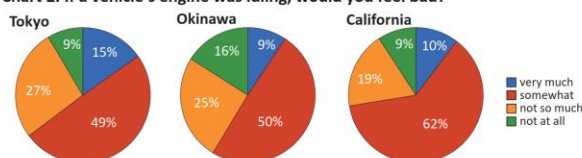


Chart 3. Which do you want to use, costly natural energy generation or inexpensive thermal power generation?

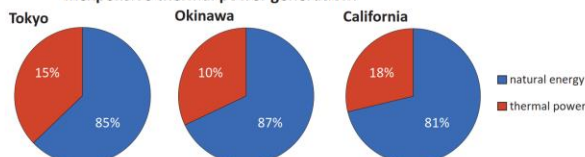
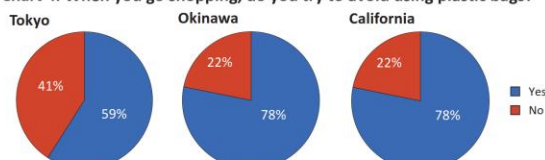


Chart 4. When you go shopping, do you try to avoid using plastic bags?



THE SOKA TIMES

Published by Soka Senior High School in Kodaira City, Tokyo, in cooperation with the not-for-profit Global Education Information Center (GEIC) and The Japan News.

Publisher: Seiichi Kinoshita, principal, Soka Senior High School

Project Supervisors: Masayoshi Ishino, Tsubasa Togawa, Fumie Konno, Kenichiro Ochiai and Eiko Tiffany Haraguchi (Soka Gakuen)

Project Coordinators: Junji Sakurai (GEIC)

Editor: Daiki Oishi

Assistant Editor: Takaaki Yasue

Contributing Editors: Ayano Usukura and Yumiko Mori (J-Proze Co.)

Staff Writers: Ryohei Ishimura, Natsuha Kataoka, Daichi Takagi, Sachi Nishida, Mayumi Kurata, Naoki Kato, Kiyoshi Morita, Chiharu Nagai, Yukari Hashimoto, Ryota Kawasaki, Masahiro Shiono, Noriko Ogita, Risa Torigai and Masayo Nakama

Contact: 2-1 Takanodai, Kodaira-shi, Tokyo 187-0024, Japan

Website: <http://www.soka.ed.jp>



SOKA GAKUEN TIMES

Special Edition

March 2018

The whole world is waiting for you

GCP creates students who will be global leaders of the next generation

Soka Senior High School carries out a big project called the Global Citizenship Project (GCP). All the students take GCP lessons for three years. The themes of the lessons are global problems such as hunger, illiteracy, civil war, global warming and more. Volunteer students called GCP leaders run these lessons.

One of the lessons is a “trade game.” Game players (classmates) are divided into eight groups. Each group is given an envelope that has some items such as papers, scissors, rulers or other things. Players make as much paper cutouts as they can from the items and sell specific shapes in “the market” to earn money.

Each envelope has different contents. Some teams get many or all items, while others get few items. Through this game, students learn about the disparity between developed and developing countries.



Thanks to Global Citizenship Project leaders, students enjoy learning during GCP lessons.

Hitomi Kanazawa, a social studies teacher and GCP project leader at the school, talked about the role of the leaders.

“GCP leaders counted six or seven students in each class. They hold meetings repeatedly before each lesson and discuss how to run it smoothly. They try to let all students learn about the given theme. The lessons are ob-

viously supported by leaders’ sense of responsibility,” Kanazawa said.

Many students learned leadership qualities by being GCP leaders. One of the leaders said that lessons they run sometimes don’t go well, but she found how important friends are again by overcoming such difficulties with classmates. Also, another leader

said that as a result of making efforts to tell her classmates more clearly about global problems, her comprehension deepened and she could feel a sense of achievement afterward.

Any students are eligible to become leaders. All you need is courage! Why don’t you become GCP leaders and have challenging, meaningful school lives?

Graduates encourage juniors by donating thousands of books

Hyakudoku-kai, which consists of Soka Gakuen graduates who used to be book committee members, donated books worth ¥1 million on Nov. 18, the day of the 50th anniversary of Soka Gakuen. In addition, Hoyu-kai, a group of graduates from Soka Senior High School donated 5,000 books, and a group of diplomats who were from Soka Senior High School gave books in foreign languages.

Toshiko Inoue, one of the members of the Hyakudoku-kai, spoke with the Soka Gakuen Times. She works at Keisetsu Library in Soka Senior High School. There are

more than 90,000 books in the library.

Hyakudoku-kai was established on March 16, 1982, which was the same day as the 12th graduation ceremony. About 700 to 800 people currently belong to this group. The group was established in order to encourage their juniors to read, and has supported the library in Soka Gakuen. Daisaku Ikeda, the founder of Soka Gakuen, gave the group the name Hyakudoku-kai, which is written as “read 100 times” in kanji.

In addition, a Hyakudoku-kai general meeting, in which any Hyakudoku-kai member can participate, is held approxi-

mately every year in autumn. To date, Hyakudoku-kai has donated 8,720 books to Soka Gakuen via the Hyakudoku-kai fund.

Ikeda often speaks about the importance of reading books, again and again. Inoue said the members of Hyakudoku-kai really try to meet his expectations and they return the favor to him by making contributions to the school. Their gratitude toward the founder has prompted the members to donate a great number of books to Soka Gakuen.

In addition, Inoue said it brings them happiness knowing that Soka Senior High School’s stu-



Toshiko Inoue, a member of Hyakudoku-kai, works at Keisetsu Library.

dents often use donated books to study. The great support of book donation by Hyakudoku-kai enriches students’ learning.

CAMPUS LIFE

Strong supporters of Gakuen students

Currently, there are six native English teachers at Soka Senior High School, and they support students in various aspects, not only in classes, but also outside classes. For example, in the cafeteria, they talk happily in English while eating lunch with students. Students can have lunch with them if students make reservations. Through these conversations over lunch, students have more opportunities to communicate in English. One of the students said, "There is no hesitation in talking with native English teachers now." Also, they help students practice for English interviews. Students can select the level they want. They conduct interviews in the same way the proctors would in actual exams and they give students a lot of advice. In recent years, the Eiken English test pass rate has been increasing for students of Soka Senior High School. Speaking with the teachers in English improves students' English abilities.

Eiko Tiffany Haraguchi, who is Japanese-Canadian, originally

aimed to be a school counselor because her college friend had depression and had thought about suicide. She feels it is very important to heal the wounds of the mind. She realized that school teachers can also realize what she intended to do, and decided to become a teacher to help develop children both intellectually and mentally. Clement Ong Jun Wen who is from Singapore, started studying Japanese because he was invited to attend Japanese classes in Singapore. He got interested in a program called the JET Program where people can work in Japan as an ALT (assistant language teacher) for one year, and he came to Japan as a JET Program participant.

What are the charms of Soka Gakuen for them? "I am interested in (the) students' passion and their commitment to study, club activities, school events and everything else. I am impressed because every student is motivated to act for 'the sake of world peace' with the influence of Soka education. This is

not seen in other schools," Haraguchi said.

"We can grow together because Soka students' values and my values are similar. I feel Soka Gakuen regards students, teachers, guardians, staff and volunteers as a big family. I strongly

feel everyone involved in Soka Gakuen makes it what it is now. I have not seen or heard this in any other school," Wen said. The passion of the native English teachers contributes to students' positive attitudes toward English.



Eiko Tiffany Haraguchi (left) and Clement Ong Jun Wen (right), native English teachers of Soka Gakuen, help students learn English.

SOKA GAKUEN PHOTO

Gakuen student wins first prize at annual Planner Koshien

Soka Senior High School first-year student Hanana Arai won the highest prize in a planner utilization section in the sixth Nolty

Schola Planner Koshien, held in Harajuku Quest Hall, on Dec. 16, 2017. "Schola" is the name of the personal planner made by Nolty

Planners Co., Ltd. and is distributed to every student in Soka junior and senior high schools. The Planner Koshien is annually held and Arai got the top prize for the first time in the school's history.

She enjoys using her planner with her favorite dolphin pictures. Looking at the planner and reflecting on how she spent her time during her first month at Soka Senior High School, she noticed that her dinner time changed day by day and found that it prevented her from having a good study rhythm. After deciding to have dinner at 7 p.m. every day, she succeeded in increasing her study time. She also set when to open her planner — five times a day.



Pages from Hanana Arai's award-winning notebook

Arai said, "The preparation period for the Planner Koshien presentation was hard. It was during a test period and just before an important match in my club activity. It was hard to manage (my) schedule, but I was able to overcome the difficulties by deciding what to prioritize with my Schola."

Why don't you open your planner and write down what time you will eat dinner tonight?

Hanana Arai introduces her Schola that won the Planner Koshien in December.

SOKA GAKUEN PHOTO



SOKA GAKUEN PHOTO

STUDENTS' ORGANIZATIONS

We students make our school by ourselves

The student organizations are one of the unique traditions of Soka Senior High School. They try to link the philosophy of Daisaku Ikeda, the founder of Soka Gakuen, with their own school lives in order to make them better. The founder has spread a circle of friendship all over the world to make the world a better place. Students learn this spirit and believe that this action will lead to world peace. Student organizations are a main part supporting this.

Soka Senior High School has five active organizations; Choryu-kai, male day students; Shinsei-kai, female day students; Eiko-ryo, male boarding students; Eiko-kai, female boarding students and Seikyu-ryo, male boarding baseball club members. Sometimes, they sing or dance to showcase their daily activities to big crowds at several anniversary events. Other times, they learn about the spirit of their school foundation in small groups.

The leaders of Choryu-kai and

Shinsei-kai are aiming to make their school a better one by learning from the founder. They also hope that each member enjoys the school life. To make this possible, they value the words from the founder, such as those in books, slogans or songs. They carry out many activities based on such words. In the morning, some of Choryu-kai members stand along streets and greet everyone walking there. At the same time, other members gather and sing *Aisho-ka*, songs made by students, with the theme of unity. Also, in the evening, they study *Aisho-ka* or other literature and think over *nan no tame*, which means significance of learning in this school. Shinsei-kai has several sections and each of them has a different role: managing ceremonies, singing *Aisho-ka* and creating chances for dialogue. Recently, they set a "Day of Shinsei-kai" once a month. On this day, they invite members to their activities and try to get to know their new friends.

Student organizations have mottos that were set nearly 50 years ago. Choryu-kai was established in 1969; Shinsei-kai



As one of the important Choryu-kai activities, students of Choryu-kai greet people with refreshing voices by a street near Soka Senior High School in the morning.

was established in 1982. At that time, they had many chances to meet the founder and receive a lot of guidance. Though such chances have become rarer lately, students try to actively focus on their study and club activities based on the same guidance from 50 years ago.

Each student has a different lifestyle and personality. Student organizations, however, believe that they can have good lives with same intention. This may be the most symbolic feature of Soka Senior High School. They keep working hard and this tradition continues forever.



At lunchtime on "Day of Shinsei-kai," students of Shinsei-kai have an active group dialogue to deepen their thoughts and inspire each other.

Strictly regulated daily life makes baseball team strong

"By enduring a strict schedule of practicing baseball, we were able to unite as a team and build a tight-knit bond," Mirai Fujisawa, the former captain of the baseball club, said. The National High School Baseball Championship of Japan, commonly known as Summer Koshien, is an annual nationwide high school baseball tournament. Only the representative schools that win in each block of Japan can stand on the stage of Koshien. All baseball clubs in Japan work hard for this competition.

Soka Senior High School's baseball club has its own dormitory called Seikyu-ryo and club members eat and sleep together in addition to practicing baseball.

Seikyu dormitory students get up at 6:15 a.m. They clean their rooms, participate in a

meeting, have breakfast and go to school. When they finish all classes, they run to their

training ground for practice right after the last class.

After practice, they go back

to the dormitory and have dinner. After a club meeting, they have free time. They usually take baths and spend the remaining time on personal training or studying; they go to bed at 11 p.m. They have some rules to make their lives better. The first rule is punctuality. If they are late, they are severely reprimanded. Secondly, they must eat everything on their big plate and bowl of rice. In addition, they have a tradition of greeting their manager, coach, and seniors in order. If there are more than three seniors, they have to greet them once making eye contact.

Their daily life, which is based on the motto "Become the person who can do every easy thing perfectly," helps their team grow stronger.



"Seikyu-ryo," built in 2010, houses 27 baseball team members.

SOKA EDUCATION

Spirit of Soka Gakuen present in dialogue

Having a dialogue is to talk with someone and understand different values. Soka Senior High School students call having a dialogue *taiwa* and love it. *Taiwa* meetings or one-on-one *taiwa* are done frequently in club activities and in class.

Daisaku Ikeda, the founder of Soka Gakuen, said “Having a dialogue isn’t saying one’s selfish opinions to each other. It isn’t a mere conversational ball, either. It’s a way to share and understand the meaning of each other’s words. It’s a process for value creation.” Ikeda has had over 7,000 dialogues with world figures. His topics range from peace, philosophy, international politics to environment.

Nanami Kato of the koto music club and Hanano Sawamura of the girls dance club shared their thoughts and experiences regarding *taiwa*. Both of their clubs of

ten do *taiwa* actively.

Why do you do *taiwa*?

Kato: Music is a tool to convey our feelings to other people. It is important for us to do taiwa to share a strong motivation to play koto in unity.

How did *taiwa* change you?

*Kato: As for me, my way of thinking was deepened with *taiwa*. Talking with club members enabled me to think that each of us has an important role. Through *taiwa*, I found a new sense of values that I had not noticed.*

*Sawamura: There are many benefits of doing *taiwa*. First, thanks to my *taiwa* partner, I came to be able to think logically. I think I used to see things only emotionally. Second, I gained a sense of gratitude. Lastly, *taiwa* made me think clearly.*

When you do *taiwa*, what are you most conscious of?

Kato: Listening is important for



Nanami Kato, a student in the koto music club and Hanano Sawamura, a student in the girls dance club, discuss the benefits of dialogue.

*me. I’m also conscious of working out a proper conclusion by doing *taiwa*.*

Sawamura: I try to absorb everything like a sponge. I always express my opinion after listening to other people’s opinions.

There are students who do *taiwa* seriously every day at school. Why do they strive to do *taiwa* with friends?

Achieving world peace starts with friendship. *Taiwa* is something students wish to do with many people around the world and make friends. The thing that connects humans and overcomes differences such as race, nationality, age, gender and social status is heart, and the thing that connects people heart-to-heart are words.

Soka education helps students to be global citizens

Soka education was formed by three educators who all share a mentor-disciple relationship: Tsunesaburo Makiguchi (1871-1944), Josei Toda (1900-1958) and Daisaku Ikeda (born in 1928). Toda was Makiguchi’s closest disciple, and Ikeda is Toda’s closest disciple. Ikeda established Soka Gakuen as a place to realize Soka education in 1967, and last year marked its 50th anniversary.

One of the important goals of Soka education is to nurture global citizens. This goal was first envisioned by Makiguchi, who expected each person to be equally a *sekaimin*, which literally means “a citizen of the world,” and a citizen of Japan. He emphasized the importance of regarding Japan as “our home,” and other nations as “our neighborhoods.” Through communicating, cooperating, competing, reconciling or sometimes conflicting with neighborhoods, citizens gradually accept people around the world as “neighbors.” Then, they finally realize each person or nation’s roles in society and are able to act properly. In Makiguchi’s life in the early 1900s, this was a very pioneer-



As a place that nurtures global citizens, Soka Gakuen celebrated its 50th anniversary in 2017.

ing concept.

The concept of global citizenship was next pursued by Josei Toda. He held up “Earth nationalism,” which means aiming toward peace without being restricted by identities such as race or nationality. Toda pushed to eliminate stereotypes and shift our ways of thinking to set the dignity of life as the first priority for respect.

As Toda’s successor, Ikeda proposed the concrete vision of a “Global citizen,” a person of wisdom, seeking the deep relationships of life; of courage, appreciating and cherishing differ-

ences in race, ethnicity and culture; of compassion, sharing the pain of others near and far while trying to relate with everyone.

Ikeda used these principles when establishing Soka Gakuen. Furthermore, he sent his messages for school events that include each year’s entrance or graduation ceremonies. Dialogues and other school activities such as the Global Citizenship Project, English classes and student organizations are good opportunities for students to think more deeply about and learn necessary skills for becoming global citizens.



The kanji for *kyoiku* (education) written by Tsunesaburo Makiguchi is engraved on a stone monument at Soka Gakuen.

SOKA GAKUEN TIMES

The Soka Gakuen Times was created by a group of 26 volunteer first, second and third grade senior high school students of, and published by, Soka Senior High School in Kodaira, Tokyo, in cooperation with The Japan Times, Ltd.

Publisher: Seichi Kinoshita,
Principal, Soka Senior High School
Project Supervisors: Takanobu Tsuji and Masayoshi Ishino (Soka Gakuen)
Project Coordinator: Hiroshi Mishima (The Japan Times)
Contributing Editors: Yosuke Naito, Tomoko Otake, Minoru Matsutani, Toshiyuki Takahashi, Sayuri Daimon, James Souilliere and Dana Macalanda (The Japan Times)
Editor: Chiharu Nagai
Staff Writers: Yukako Abe, Hidenobu Okuyama, Mino Kobatake, Hina Endo, Anri Toyota, Taeka Ebara, Sachie Ueda, Kazuyo Sasaki, Ryota Iida, Nozomi Sakurai, Misuzu Kawai, Yayami Murakami, Yuka Oshiyama, Honoka Ishii, Satoshi Nishizaka, Mizuki Ishida, Yurika Kawamura, Hiromi Ito, Yuma Yamamoto, Satoshi Uchiyama, Riko Ichikawa, Sohei Endo, Miu Tomioka, Yuko Kishimoto and Yui Kobayashi

Contact:
2-1 Takanodai, Kodaira-Shi, Tokyo
〒 187-0024 Japan
Web site: <http://www.soka.ed.jp>

平成 29 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 2 年次

研究報告書

平成 30 年 3 月 30 日

発行 学校法人 創価学園 創価高等学校

〒187-0024 東京都小平市たかの台 2-1

電話 : 042-342-2611(代表)

印刷 株式会社 コモダ印刷

〒185-0002 東京都国分寺市東戸倉 2-36-12

電話 : 042-321-0721

